
天井裏のウロボロス

夙多史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天井裏のウロボロス

【Nコード】

N7279U

【作者名】

夙多史

【あらすじ】

世界魔術師連盟の魔術実験が失敗し、世界中に多くの幻獣が召喚されてしまった。実験の責任者だった秋幡辰久は、人を襲う幻獣から息子を守るため、自分の契約幻獣を派遣することにした。一方で、友人たちと肝試しを行っていた秋幡紘也は幻獣に襲われていた。魔術師の息子ながら魔術を使えない紘也は簡単に取り囲まれてしまう。そんな紘也を一人の少女が助けた。圧倒的な強さを見せる彼女の正体は、なんと幻獣ウロボロスだった。戦う力はないけれど、仲間のために立ち上がる主人公。お調子者ゆえに扱いは残念だが、

可愛らしく芯が強いヒロイン。そんな彼らが織り成すハイテンション現代ファンタジー。縦書きPDFだと文字化けする文字を使用しております。

登場人物紹介（最終更新日：8月1日）（前書き）

キャラが増える度にネタバレ度が上がっていきますね。

キャラ説明には極力致命的にネタバレになるようなことは書きませんが、キャラ的にどうしても書かないといけない場合もあるのでご了承ください。

紘也の幼馴染の少年。親友兼クラスメイト。紘也が魔術師の息子だということや、ウロの正体を知る数少ない一般人の一人。冷静沈着で成績優秀だが、頭の中は子供のように馬鹿なことばかり考えている。訳あって寮暮らしをしており、部屋にTVがないため紘也の家にゲームソフトを置いては休日に遊び倒している。

たぎしまめい沙
鷺嶋愛沙

> i27542—2717<

紘也の幼馴染の少女。親友兼クラスメイト。紘也が魔術師の息子だということや、ウロの正体を知る数少ない一般人の一人。綺麗な黒髪と赤いリボンが特徴で、おっとりとしたマイペースな性格。鷺嶋神社の巫女をしているが、霊力はおるか靈感すらない。けっこうな読書家。

かじらぎかがり
葛木香雅里

> i27817—2717<

陰陽師の一族である葛木家の長女。17歳。幼い時から陰陽師として育てられ、その実力は本家の中でもトップクラス。護符による式神も使うが、主に宝剣あまのひつるぎ・天之秘剣・冰迦理ひかりによる近接戦闘が得意な陰陽剣士である。学校では悪魔の風紀委員長として恐れられており、陰陽師としてのプライドも高いため一般人の友達が少ない。個人的なところある事情から妖魔（＝幻獣）を敵視している。

ウエルシュ

> i28486—2717<

幻獣ウエルシュ・ドラゴン。またの名をア・ドライグ・ゴツホ。世界魔術師連盟が誇る大魔術師。秋幡辰久の契約幻獣の一体であり、強力な力を持った真紅の炎竜。二股の尻尾のようなバックツインテールをした少女の姿に人化する。感情は顔や声よりも、頭の上にあるアホ毛に出す。他のドラゴン族が大嫌い。

登場人物紹介（最終更新日：8月1日）（後書き）

自分の作品に自分で絵をつけることは陶醉しているみたいで好きではないのですが、イラストは自作です。下手糞ですみません；

公式絵を誰かに依頼しようと思ったらいつになるのかわからないので、とりあえず（仮）として自分のイラストを晒すことにした次第です。

見ての通り下手下手なので、イラストにはツッコミなしでお願いします。これが私の限界です。

誰か「俺（私）の方が上手く描けるよ」という方がいらっしやるならば、是非よろしくお願いいたします^^；

イラストコーナー（最終更新日：11月14日）

> i 3 4 9 5 7 — 3 8 3 7 <

『天井裏のウロボロス表紙イラスト（絵師様：山大）』

天井裏のウロボロス10000ユニーク突破記念により増設したコーナーです。当初は非公開のイラストがなかったのですが、記念に貰ったりなんかして無事コーナーを作ることができました。

こんなにも素敵なイラストを描いてくださった絵師様、誠にありがとうございます！

これからも増え次第、コーナーを更新していきたいと思います^^

それではご覧ください。

山様から頂いたイラスト

> i 3 4 3 3 9 — 3 8 3 7 <

『天井裏のウロボロス10000ユニーク記念』

> i 3 4 9 5 7 — 3 8 3 7 <

『ウロボロスビイイイイイイイイイイイイム！！』

発動1秒前』

『絵師様紹介』
『妖怪、幽霊、陰陽師、魔術師、霊媒体質者、たまーに神様。そんな』

山様は『ひやくものがたり』というファンタジー小説を書かれています。

妖怪、幽霊、陰陽師、魔術師、霊媒体質者、たまーに神様。そんな

な個性豊かなキャラクターたちが集う月波市を舞台に、非日常な日常からちよつとした事件までを描くほのぼのとした伝奇小説です。一話完結のため読み易く、そして読み応えも充分過ぎるほどあります。一話ごとに語り部も異なり、それぞれの構成力が半端ないです。思わずクスリとしてしまうテンポよい掛け合いや、のほほんとした和風の雰囲気にも時間も忘れてハマってしまいますよ。妖怪や陰陽師などが登場しますので、ただの日常系ではなくちよつとした異能バトルもあつたり……。

とにかく、オススメです。是非とも読んでみてください^^

「ひやくものがたり」

> <http://ncode.syosetu.com/n1168u/><

|||||

なーこ様から頂いたイラスト

> i34385—3708<

『鷺嶋愛沙』

||||| 絵師様紹介 |||||

なーこ様は『超常科学研究会 - 未来少女エビアン -』というファンタジー小説を書かれています。

俺は1年前の春、新入生のエビちゃんの発明品『タイムマシンのなもの』によって意識不明の重症となった。目が覚めると同級生だった憧れのタミちゃんが上級生となり、下級生だったエビちゃんと同級生になっていた。確かに、意識のなかった俺は、みんなの1年間を一瞬にして飛び越えて未来の世界に来たわけだが……。 (あらすじ参照)

星歎高校超常科学研究会を舞台に繰り広げられる空想科学ファンタジーです。

また、悠久剣士 という作者名で『へっぽこ剣士の俺が、チートな彼女を装備する』というファンタジー小説を完結されました。

幼馴染のフェルミは「私と契約してください」と、剣士アルの『鎧』として冒険に旅立つことを望んでいた。異世界『ウエディング』では、未婚の女性たちが、契約者と呼ばれる刻印を持つ者の武器や鎧となつて、モンスターと戦っている。騎士の血統を継ぐフェルミは、剣士アルに勿体ない凄い『鎧』だった。軽防具での戦闘を得意とする剣士アルは、幼馴染の願いを聞きいれて契約を交してしまつた……。 (あらすじ参照)

なるうに跋扈するチート・異世界・ハーレム物ですが、設定や構成がよく考えられており、キャラクターにも魅力があるようです (まだ読んでない)。そしてなんとというか、いい意味でえっちなム物が好きな方もアンチな方も、一度ご覧になつてはいかがでしょうか？

「超常科学研究会・未来少女エビアン」

> <http://ncode.syosetu.com/n2216x/> <

「へっぽこ剣士の俺が、チートな彼女を装備する」

> <http://ncode.syosetu.com/n9141x/> <

イラストコーナー（最終更新日：11月14日）（後書き）

イラストは随時募集中です。下手糞でも全然構いません。というか、描いてくださったイラストが下手糞なわけがない！

Section-00 プロローグ(前書き)

M F文庫Jライトノベル新人賞で二次選考を通過し、えんため大賞小説部門で一次選考落ちをしたという謎の成績を残している作品です。

更新日は木曜日と日曜日です。

(都合により更新できない場合もあります)

Section - 00 プロローグ

燐光のような青白い輝きが、暗闇の中に円環を描いた。

円の内部に、同じ輝きの絵とも文字ともつかない幾何学的な紋様が浮かび上がる。光は遮られることなく拡散し、周囲の様子を照らしていく。

ひたすらに広い空間がそこにあった。一定間隔に誘導灯が埋められている長大な道路は、空港の滑走路である。それも長い間使用されていらない寂れた雰囲気の廃空港だ。

光の円は地面に描かれており、その四方を四つの尖塔らしき構造物が囲んでいる。

滑走路には十人ほどの人間が円を中心に散らばっていた。彼らは一様に夜色のロープを纏い、フードを深く被っているため老若男女のどれにあたるのか判然としない。

魔術師。ここにいる者たちは、全員がそう呼ばれる存在である。

光の円 魔法陣の輝きが強さを増す。

魔術師の一人がフードを外した。男性だ。

「前回の失敗から半年。ようやくだ。次こそ、この実験が成功するといいな」

渋くも穏やかな声音。それとは裏腹に男の顔立ちは随分と若い。

四十には達していないと思われる。鋭い輪郭に無精髭、厳しさと優しさの両方が窺える双眸を周囲の魔術師たちに向けている。

「我々はこれから一時的に次元の扉を開くことになる。いや、世界と世界を繋ぐ穴を穿つ、と言った方がいいか。とにかく召喚術などとは違い、なにが起こるかわからない。皆、注意を怠らないように」

男は大げさな身振り手振りを加えて周りの者たちに言い聞かせる。「諸君らも知っている者は多いだろうが、我々がこれから次元の壁を越えて触れようとしている異世界 幻獣界には、『マナ』というエネルギーが存在する。それは幻獣界では万物の源だと聞く。も

ちろん、我々の世界にはない。たとえなんらかの手段で持ち込んだとしても、元々こちらには存在し得ない物だから、世界が拒絶し、消滅していた」

周りの魔術師たちは黙って男の話に耳を傾けている。

「だが、もしもだ。この世界に『マナ』を満たすことができればどうなると思う？ 新たなエネルギーとして人々の役に立つのか、それとも我々魔術師だけが利用でき、発展していくのか。どちらにせよ得られるものは大きい。つまり、この実験は『マナ』を世界に満たすためのものだ。皆、全力を尽くし、必ず成功させよう」

演説じみた話はそこで終了し、男は子供のように無邪気な笑顔ではにかんだ。

「さあ、始めようか」

その言葉を合図に、魔術師たちは魔法陣を囲む形に展開した。瞬間、青白い輝きが思わず目を庇いたくなるほど強烈になる。

光が四つの塔に均等に吸収されていく。それぞれの塔の先端が淡く輝き、そこから光線が内側に向かって照射された。各光線は中央で衝突して交わり、満月にも似た光球が生まれる。それでも照射は終わらず、光球は目に見える速度で膨張していく。

「四大属性の魔力、充填完了。 四の蘊奥うんおくに異常なし。魔力の流れに乱れなし。いいぞ、順調だ」

数多の失敗を重ねてきた実験が初めて成功の兆しを見せている。男が嬉しさのあまりはしゃいだ声を出した、その時だった。

ガタン、となにかが外れる音。続けて四つの塔 四の蘊奥に亀裂が走った。

「おいおい」

後は自然な流れだった。亀裂が全体に広がる前に塔は崩れ落ち、付近にいた魔術師たちは逃げ惑い、あれだけ輝いていた魔法陣も瓦礫に埋もれて光を失った。

.....。

皆が沈黙し、呆然と惨状を眺める。そんな中、男は頭をボリボリと掻いて溜息をついた。

「あーあー、やだねもつ。次空を切り開いてトンネル掘って、さらにそこから未知エネルギーを取り出して世界に定着させようなんて無茶苦茶な魔術、失敗するに決まってるでしょうが。俺もこの実験降りていいかな？」

先程までの口調とは一変し、これ以上ないくらい億劫そうに男は愚痴た。引き締まった表情に窺えた威厳も、今ではどこかにすっ飛んでいる。

「な、なにを仰っているのですか主任！ あなたはこの実験の責任者なんですよ！」

魔術師の一人 声からして若い女性 が慌てたように駆け寄ってきた。男はかつたるそうに彼女を見やる。

「いやほら、俺って別にエネルギー革命にはそれほど興味ないし。そもそも上からの御命令だし。ぶっちゃけもう飽きたし」

「あなたは世界魔術師連盟の誇る大魔術師が一人、秋幡辰久様ですよ。周りが幻滅するような言葉をおいそれと口にしないでください」
「なにそれ？ 世間体を気にする貴族なんか？」

男 秋幡辰久あきはたつひさが茶化すように言うと、部下である女魔術師から更にガミガミと説教が返ってきた。素直に聞くわけもなく、辰久は指で耳栓をする。

「うわっ、なんだこれは!？」

と、部下の魔術師の一人が悲鳴を上げた。

「瓦礫の隙間から光が!？」 「なんだこの凄まじい魔力は!？」 「実験は失敗したのではないのか!？」 「まさか成功?」 「いや、『四の蘊奥』は崩れたのだ。もう術式は機能していない」

騒ぎは他の魔術師たちにも伝播していく。辰久も実験の残骸に目を向けると、確かに異様な光が瓦礫の中から漏れていた。

「これは……」

に魔力の高い人間とか大好物だよな？」

わしゃわしゃと自分の頭を掻き乱す辰久に、部下の女魔術師は反射神経を全開にした動きで顔を上げた。フードの中から人を殺せそうな視線を発信している。

「そうですね！ だから大変だと申し込んでいるのです！」

彼女だけではなく、周囲のほとんどの魔術師たちが取り乱している。その中で、大魔術師・秋幡辰久だけは他人事のように落ち着き払って口を開いた。

「俺、息子がいるんだよね」

「はい？」

意味のわからない言動に、女魔術師はきょとんとした声を漏らした。

「なんの死亡フラグですか？」

「違う違う。俺死なねえし。いやね、秘められた魔力量は半端なくせに、なに一つ魔術を使えない愚息が日本にいんのよ。で、襲われてなきゃいいなあってだけの話」

「……世界よりも息子さんのことを心配なさるのですね」

幻滅の眼差しを浴びせかけられたが、辰久は動じない。

「そりゃあ、俺だって人の親だしさ。心配くらいしてもいいだろう？ こつちにいる娘は俺が守るとしても、日本の息子までは流石に面倒見切れないのよ。というわけで、この件が片づくまであいつを守ってくんないかな？」

「え？」

その言葉は女魔術師にかけられたものではなかった。その背後、塔の残骸の上に立っている小柄な人影に向けられていた。魔法陣の輝きも失い、月明かりと星明かりだけでは何者なのか判別できない。「あいつに近づく幻獣からあいつを守ってやってくれ。俺の代わりにな」

人影は小さく首肯すると、残骸から飛び降りてあつという間に消え去った。

「主任、あれは、人間ではありませんね」

「ああ、俺の契約幻獣さ」

辰久は輝くようなはにかんだ笑みを見せ、強い信頼を滲ませた声で一言。

「これがまた強いんだ」

Section-00 プロローグ（後書き）

どうも、『シャッフルワールド!』でおなじみ(?)の夙多史です。この作品はシャッフルと魔導書の間を書いたものです。

選考落ちたので晒しました。

たぶん、一人称に近い感じの三人称ってことになってます。なので地の文が時々口語的になっているのはわざとと思ってください。

感想や評価、お待ちしております。

S e c t i o n - 0 1 邂逅 (前書き)

第一章

Section - 01 邂逅

「あーくそつ！ なんなんだよ!？」

静まり返った夜の空気を打ち砕くように、秋幡紘也あきはたひろやは全力で走っていた。

時刻は二十二時を回った頃だろうか。いちいち確認している余裕はない。そんなことをして走速を落とすわけにはいかないのだ。

チラリ、と少しだけ後ろを振り向く。暗闇の向こうに、ポウ、とした発光体がいくつも浮遊しているのが見えた。鬼火だ。もう夏入りしているのに不気味な肌寒さを感じることから、たぶん本物だろう。

紘也は顔を前に戻し、さらに走る速度を上げる。

この辺りには街灯がなく、月も雲に隠れて仕事を放棄しているため非常に暗い。頼れるのは右手の懐中電灯のみ。その明りが暗闇を引き裂いて夜道を照らすと、道の両脇にずらりと墓石が林立していた。

つまるところ、ここはこの街 蒼谷市の共同墓地である。だが、紘也はわざわざこんな夜中に墓参りに来ているわけではない。

「ヒロくんこつちだよ!」

「早く来い、紘也！ 追いつかれるぞ!」

前方、十字路になっているところで一組の男女が大きく手を振っていた。男の名は諫早孝一いさはやこういち、女は鷺嶋愛沙ささしまあいさ。二人とも紘也の知り合い というより幼馴染で高校のクラスメイトである。

二人とも肩で息をしている。どうやらこちらと同じ状況のようだ。紘也が二人と合流すると、今度は三人揃って墓地の出口に向かって駆け出した。

「どんな仕掛けをすればあんなのが出て来るんだよ、孝一!」

「いや、流石のオレでも本物の鬼火を呼び出すことはできないぜ」
孝一は均整の取れた細面の顔に冷や汗を垂らしていた。心なしか

顔色も悪い。

紘也たちが夜の墓地にいる理由、それはこの孝一が唐突に言い出した『夏休みまで二週間、期末試験前の肝試し大会』という意味不明な企画のためだ。きつと昨日テレビでやっていたホラー映画に感化されたに違いない。企画はクラス中に発表したものの、試験前ということで結局集まったのは幼馴染三人だけだった。

それでも中止にすることなく企画は実行され、三人別々のルートで到達地点へ向かっていたところで、『本物』と遭遇したのだった。「ヒロくん、コウくんを責めちゃダメ」

愛沙が横から間延びした声で割り込んでくる。腰まで届く艶やかな黒髪に赤いリボン、幼さを残した顔には困った表情を浮かべている。

「幽霊さんが出てきたのは、きつとわたしがこけてお墓に頭ぶつけたから　ってあああああああ！？　これ秘密にしとくつもりだったのにい〜」

勝手に自爆して落涙する愛沙。よく見ると額が赤くなっていた。その程度で済んで安堵する紘也だったが、彼女のマイペースぶりに鬼火に追われている緊迫感を忘れそうになった。

紘也は昔からこの二人とよく行動を共にしている。その関係は今も変わらないし、変えたくない。試験前という忙しい時期に孝一の提案に乗ったのはそのためだ。仲間と馬鹿をやれる日常ほど充実したものはないと思っている。

だが、後から追ってくるアレはその日常に組み込まれてはいけな
い存在だ。なんとしてでも逃げ切らないと

「はわわわあ！　お、追いつかれるよう！」

そう思っ
ていても、鬼火群という非日常はすぐそこまで迫っ
てきた。

「やばい、足が重い」

紘也は舌打ちする。追いつかれたのは全力疾走を続けて体力が限界に近づいたせいだ。

「待て、前から来るぞ！」

孝一が前方を指差した。そこにも浮遊する発光体がひしめいている。三人は立ち止まって別の道を探すが、左右どちらにも墓石に囲まれていて逃げ場などない。

「くそつ、挟まれた」

鬼火群が紘也たちを取り囲む。まだ襲ってくる気配はないが、夕イミングを見計らっているのだろうことはわかる。

「孝一、どうする？」

「大丈夫だ。よく考えてみる、この面子ならなんとかなる」

孝一は息を切らしながらも、どこか自信満々な表情で言い切った。頭脳明晰な孝一のことだ。なにか作戦を思いついたのだろう。紘也と愛沙はそんな孝一の考えに期待を抱き、次の言葉を待った。

「まず紘也、お前は魔術師の息子だ」

「俺は魔術なんて使えないぞ」

「愛沙は鷺嶋神社の巫女だ」

「靈感すらないけどな」

「そしてオレは……………オレもいる！」

特殊スキルを思いつかなかっただけらしい。

「ほらみる完璧じゃないか」

「どこが？」

サムズアップしてみせる孝一に紘也は呆れの視線を送った。やっぱり馬鹿かもしれない。

幼馴染二人は紘也が魔術師の息子だということを知っている。口の軽かった幼い頃にバラしてしまったからだ。当然、紘也が魔術を使えないことも知っているため、こんな時でも一人に任せるようなマネはしない（鬼火に行くわすような経験は初めてだが）。

「どごどごどうしよう！ わたしたち幽霊さんに食べられちゃうのかな？ わ、わたしおいしくないよう〜」

愛沙は恐怖に目を回している。失神しないだけマシだろうが、精神的状況は危なそうだ。

「ひ、ヒロくうん……」

怯えた声を出して服の裾を掴んでくる愛沙を安心させるように、
紘也は努めて冷静に言葉を紡ぐ。

「大丈夫だ、愛沙。今思い出したんだが、この鬼火　ウイル・オ・
ウイスプは確か、人を騙して危険な道に追い込むことしかできない
はずだ。直接襲ってくることはない。たぶん」

「お、それは魔術師としての知識か？　対処法も教えてくれ」

「こいつらを信じないこと、誘導されないこと、ぶっちゃけると無
視すればいい」

「……ウイル・オ・ウイスプって言えば、よくRPGとかに出てく
るよな」

既に遅いことを悟ったのか、孝一がついに現実逃避的なことを言
い始めた。

「はいはい邪魔邪魔あ！　どいたどいたあ！」

その時、発光体の向こうからやけに騒がしい声が響いてきた。

瞬間、ブオン！　と旋風が巻き起こり、前方を塞いでいたウイル・
オ・ウイスプたちが蠟燭の火のように吹き消された。

「な、なんだ？」

発光体の包囲網に穴ができる。そこから、物凄いスピードで人影
が飛び込んできた。

その人影が通過するだけでウイル・オ・ウイスプが数を減らして
いく。実際はなにかしているのだろうが、少なくとも紘也の目には
ただ走っているようにしか見えなかった。

たったの数秒で、あれだけいた鬼火たちは両手で数えられるほど
少なくなった。

人影は失礼にも墓石の上に飛び乗ったところで動きを止めた。僅
かに残った鬼火の青い光が、そいつの姿を露にする。

「いやはや、こんなザコ幻獣に食われたとあっちゃあ、たまったも

んじゃあないですよ」

少女だった。小柄な体躯に薄手のカーディガンとチェックのスカートを纏い、覗いている肌は白磁のように白い。愛嬌のある整った顔にはブルーの瞳が宝石のように煌めいている。パールブロンドの長髪は一見ストレートに流しているようだが、よく見ると緩やかに波打っていることがわかった。

年の頃は自分たちと同じくらいだろうか。綺麗と可愛いの両方を兼ね備えた美少女である。

そしてどういうわけか右手には一体のウィル・オ・ウィスプが鷲掴みにされていた。必死にもがくように明滅を繰り返しているが、少女の手から逃れることはできそうにない。

呆然としていた紘也は三回ほど瞬きして現実を脳内で確認する。

普通の少女が全く恐れることなく鬼火に立ち向かえるだろうか。そもそも、あんな動きをただの人間にできるとは思えない。

とりあえず、話をしてみよう。

「あなた、俺たちを助けてくれるのか？」

「あーうん、そうだよ。あたしは君に用があるんだ」

そう言っただけ少女は紘也を指差した。肯定してくれたし、嘘はついてないと思う。だけど、用があるとはどういうことだ？ そう紘也が困惑していると、少女は捕えてあるウィル・オ・ウィスプを検分するように凝視した。

「ん〜、ところでこれっておいしいと思う？」

「は？」

少女の言葉が理解できなかった。

彼女はこちらの様子などお構いなしに、ハンバーガーを持つようにウィル・オ・ウィスプを両手で握り締め

「ッ！？」

食べた。

「うっ！ クソまずっ！ うう、やっぱり霊体なんて食べるもんじゃあないね」

涙目で少女は呻く。味見程度にかじっただけだったが、それでも紘也たちにとつては充分に目を剥く光景だった。信じられない。かじられたウィル・オ・ウィスプは光を失って空気に溶けるように消滅する。

なんなんだこいつは？

魔術師？ 異能力者？ それとも……

「いろいろ聞きたいんだけど、あんたは」

「あー、ちよい待ってね。残り片づけるから」

少女は紘也の言葉を遮ると墓石から飛び降り、白みがかった金髪を躍らせながら宙をたゆたう鬼火たちを小バエでも払うような仕草で消し去っていく。まるで一つ一つの発光体が幻かなにかのようだ。なんか自分たちでもできるんじゃないかと錯覚しそうになるが、恐らくそうはいくまい。

「紘也、あれはなんだ？」

「あの子とヒロくん、お知り合い？」

今まで沈黙していた孝一と愛沙がようやく口を開いた。謎少女の奇怪な行動が逆に彼らを落ち着かせたようだ。紘也は首を横に振る。

「いや、あんな変質者と知り合いになつた覚えはない」

「変質者とは失敬な！」

声に振り向くと、少女はウィル・オ・ウィスプを殲滅し終えていた。ぶんすかと子供みたいに頬を膨らませてこっちに歩み寄って来る。

紘也は思わず半歩下がった。あの少女は自分に用があると言った。そこに悪意は感じられないが、アレは自分たちの日常を破壊してしまう。そんな確信にも似た予感があった。

視線だけ動かし、親友二人の様子を窺う。二人とも助かったという安堵の表情をし、間違つてもただの一般人とは言えない少女に礼を言うつもりですらある。紘也が魔術師の息子だと話した時もそうだったが、この二人は非日常な存在をすんなり受け入れ過ぎである。どうする？ 逃げるか？

そもそも、あんなのから逃げられるのか？

「えっと、紘也くん……だっけ？ ちょこつと君とお話したいんだけど、いいかな？」

「あんだ、何者だ？」

「あたし？ ふぶん、聞いて驚け！ あたしは天下のウロボロスであーる！」

意味不明なことをほざいて少女はふんぞり返った。その時

「あなたたち、そこでなにをしているの！」

遠くから若い女性の怒鳴り声が聞こえた。見ると、三人の怪しげな黒装束を纏った者たちがこちらに向かって駆けていた。

「げっ」

孝一があからさまに嫌な顔をする。それから唐突に紘也と愛沙の背中を押した。

「二人とも走れ！ 逃げるぞ！」

「え？ あ、ああ」

「ふええ！？ な、なに？ なに？」

紘也と愛沙はよくわからないまま促された。「待ちなさい」と黒装束の一人が追いかけてくる。謎の少女のことも気になるが、それは一旦置いて紘也は孝一に訊ねる。

「孝一、あいつらは、その、警察……じゃないよな」

「ああ、違う。葛木の陰陽師だ。たぶんさっきの鬼火を退治しに来たんだろうが、捕まると警察に補導されるより厄介だぞ。記憶とか弄られるかもしれん」

葛木家は蒼谷市の有力者にして陰陽師の名門だ。一度だけ紘也は幼い頃に父に連れられて宗主なる人物と会っているが、それっきり関わりはない。

「って、なんで孝一が葛木家のことを知ってるんだよ！？」

「魔術師の息子とつるんでるんだぜ？ オレはオレなりに勉強してるのさ。オカルトを」

そんなマニア的方向には走らないでほしい。

「そ、それよりあの子置いてきちやっただけど大丈夫？」

愛沙が不安げに言ってくる。大丈夫だろ、と紘也は適当に返した。あの少女は間違いなくあちら側だから、捕まっただろうことでもないだろう。

寧ろ、今はこうやって逃げるチャンスくれた陰陽師連中に感謝している。正体がわからない分、紘也は陰陽師よりもあの少女の方が不気味でならなかった。

「……………」

少し気になって振り返ってみると、さっきの少女はもうそこにはいなかった。

Section - 02 無限なる大蛇

幸い、陰陽師たちは深追いしてこなかった。

「じゃあな、紘也。また明日だ」

「今日はビックリしたよう。えっと、ヒロくん、また学校でね」

「ああ、二人とも気をつけて帰れよ」

なんの変哲もない言葉を交わして紘也は親友たちと別れた。あんなことがあったにも関わらず平然としているとは、なんとも肝の据わった親友たちだと感嘆する紘也である。

蒼谷市の共同墓地から自宅まで徒歩で約二十分。すぐそこに市民公園が見えることから、既に半分ほど走破していたようだ。

「コンビニでも寄ってから帰るとするか」

リアル鬼火に追われ、陰陽師に追われ、明日筋肉痛になったら孝一を恨んでやるくらい走った。夜は涼しいとはいえ、夏場にこれほど運動させられると喉の渇きが尋常じゃない。

「そこゆく少年、夜の一人歩きは危険ですよ」

声は上から降ってきた。最近聞いたことのある声、それもついさっきだ。

「そんなあなたには幻獣ウロボロスの護衛がピッタリ！ 今ならなんと無料キャンペーン中でございますよ！」

胡散臭い通販みたいなことをほざくは、ペールブロンドの美少女。どういうつもりなのか街灯の上で仁王立ちしてふんぞり返っている。きつと馬鹿だからだ。どうでもいいけどスカートなのにそんなところに登らないでほしい。白いのが丸見えだ。

「さあさあ、お買い求めは天に向かって『助けてウーロボーロスー！』と純真無垢な少年ボイスで叫んでくれるだけでオーケー！ 目に若干の涙を浮かべていればなお　　って待って待って！ 無視して通り過ぎようとするなあッ！？」

「……チッ」

「オウ!? 史上最高級の舌打ちで返されたっ!？」

現れていきなりテンションの高過ぎる少女に三時間ほどみっちり近所迷惑について説教したいところだが、生憎と関わり合いになりたくない。

「無関係無関係。俺はなにも見てない聞こえてない、と」

「ああちよつと待つて待つてつてば! あたしは紘也くん用があるんだよ!」

「俺にはない。以上。さようならもう二度と合わないだろう」

スタスタと速足で辞去する紘也。少女は街灯から飛び降りると、猫よりも軽やかに着地して紘也に抱きついてきた。温かく柔らかな弾力ある感触が二つ背中から伝わってくるが、紘也は立ち止まらない。寧ろブースト。

「あうう、お願い、話を聞いてえ〜! はなし聞いてえ〜!」

ズルズルと引きずられながら涙目で懇願する少女に、すれ違った酔っ払いのサラリーマンがぎょつとしていた。この状況、傍から見たらなんと思われるのだろうか?

「むう、ちゃんとあたし話を聞いてくれないと、紘也くんはおるか周りの人たちの日常も破壊されることになるんだよ。具体的には『死』という形で」

ピクリ、と紘也は反応してしまった。今の言葉だけは聞き逃すわけにはいかなかった。

「こつなつたら強硬手段だね。丁度あそこに交番があることだし、半裸で駆け込んで『あそこの人が強引に……ヨヨヨ』とでも言えば」

「ま、待て! 落ち着け!」

喋りながら上着を脱ぎ始める少女を紘也は慌てて止めた。交番に駆け込まれることも嫌だが、先程の『日常の破壊』や『死』という言葉について詳しく追及する必要が出てきたからだ。

あまりにもわざとらし過ぎて引き止めてもらうための罠かもしれ

ないが、墓地で襲って来たウィル・オ・ウィスプの件もある。全部が芝居ではないような気がした。

「うんうん、やっとお話しする気になったみたいだね」

少女は満面の笑みだった。なんだろう、殺意が……。

「わかった、話は聞いてやる。だがその前に、お前は一体なんなんだ？ 普通の人間じゃないんだろ」

「おやや、その質問にはとつくに答えた気がするよ？ ……よく聞き取れなかったのかな。あの時は邪魔入ったし。最悪のタイミングで現れやがってあの和風魔術師どもめ」

不満そうな表情でぶつぶつと呟きながら、少女は服の乱れを直す。「まあいいや、挨拶は大事だからね。改めてきちんと名乗りましよう。耳の穴かっぽじってよく聞けい！ 吾輩はウロボロスである！」

腕を組んで仰け反るように形のよい胸を張る少女。なんでアホみたいに尊大になるのか謎だった。

「ウロボロスって言えば、？無限？を象徴とする自分の尻尾を啜えた蛇のことだろ」

「イエス！ そのウロボロスさんです！」

ウロボロスは、自らの尾を食んだ長大な蛇として描かれる幻獣だ。蛇が脱皮を繰り返して新たな体に生まれ変わることから、？無限？？永遠？？循環？？再生？？連続？？などの象徴とされている。その他にも自分の身を食い続けるとなにも残らなくなるため、？貪欲？？無？？消滅？などを意味することもある。国や宗教で意味は異なるシンボルとなっているらしい。

そんな昔に読んだ父親の魔術書の知識と、眼前の少女とを照らし合わせてみる。

「ただし、一つだけ間違いがあります。あたしは蛇じゃあないんだよ。ドラゴンなのです！ ザ・ドラゴン！」

まあ、象徴なんてものは正直どうだっていい。問題は、この外見

はどう見たって人間でしかない少女が、その無限の大蛇だと名乗っているところにある。

馬鹿げている。

「あんたがウロボロスなわけないだろ。さっさと本当のことを話せよ」

「オウ!? 全然信じてもらえてない!？」

オーバーリアクションで驚きを表現する少女に、紘也は怒りのボルトージが上昇するのをどうしても抑えられなかった。

「今は『人化』してるからこんな姿なんだよ。本当の姿はそれはもうズバババシャキーン! って感じですよ。すごいんだよ。というわけで、はい信じたあ!」

「信じねえよ! なにそんな催眠術に失敗したような顔してるんだよ! 信じてほしかったら、まずはその本当の姿とやらを見せてみる!」

「ふむ、それはできない相談だね。あたしが真の姿を解放した日には、この街なんてそれだけで壊滅しちゃいますもん」

紘也は押し黙った。もしかして、この子はアレなのかもしれない。アレ、そうデンプア。だとすれば、彼女の中ではそれが真実であり、紘也がなにを言っても無駄でしかない。非常に面倒臭い相手だ。

「なあ、デンプアさん」

「誰がデンプアさんだあツ!？」

怒られた。

「ふ、ふん、『人化』を解かなくても信じてもらえる方法くらいあるんだよ!」

「そうか。じゃあ、やってみるよ」

「言われなくても」

少女がやけくそ気味に言った次の瞬間 紘也は驚愕した。少女がおもむろに自分の左手を口元に持っていくと、その手首に思いつき噛みついたのだ。

手首から先が脱力したように垂れ下がる。つー、と赤い液体が白

い肌の上を滑る。立てた歯が深々と刺さっている証拠だ。もし今、あの口を離れたら、大量の血液が噴き出して明朝のニュース番組を飾ることだろう。

「お、おい……！？」

自殺するつもりか、と狼狽していた紘也だったが、ようやくその異変に気がついた。

食い千切らんばかりに自分の手に噛みついている少女の周囲が、まるで陽炎のように揺らめいていた。パールブロンドのウェーブヘアが生き物みたくうねっている。俯いているため表情は窺い知れないが、彼女の中でのなにかが起こっていることだけは確かだ。

ビリビリとした静電気とも違う感覚が全身を打つ。やがてそれは見えない力となり、道路を、塀を、電柱を、周囲の家々までも地震が起こったようにガタガタと振動させた。

魔力だ。彼女の魔力がありえないくらい膨れ上がっている。

魔術師の血のおかげか、ほとんど直感的に紘也は看破した。彼女の魔力の膨張は止まることを知らない。激しい揺れに驚いた付近の住民たちの悲鳴が聞こえる。紘也は魔力の圧力にぐらつきながらも、どうにか少女に近づき、その小柄な両肩を力強く押さえつけた。

「わ、わかった、もういいやめろ！ 信じる！ 信じるから！」

すると、少女の魔力が急激に小さくなっていくのを感じた。放出されていた圧力が消え、揺れが収まり、少女に纏うようにして揺らめいていた空気も正常に戻っていく。

フフフ、と地の底から沸き起こるような笑いが漏れた。

「フフ、フハハハハハハイエイ！ 信じたってことはあたしの勝ちだね、紘也くん！ 罰ゲームとしてあたしにキスしなさいッ！ さあしなさい！ それしなさい！」

「今のはウロボロスの？貪欲？か？」

「オウ！？ 華麗にスルーされた！？」

と、揺れの被害に遭った住民たちがわらわらと外に出てくる。自

分たちの　　ていうか少女のせいだとバレル心配はないだろうが、これ以上ここで話はできそうにない。

「あや？　結界張るの忘れてましたね。　　って、お？」

紘也は少女の細い手首を掴み、くたびれた足に鞭打って全力で疾走した。

「はあ、はあ……で、どうなんだ？」

二分ほど走ったところで息が上がった。体力には自信のある紘也だったが、数分程度では疲労は回復しない。それにしても少女がケロっとしているのが腹立つ。

「ん？　どうしたの？　そんな息を荒げて……ハッ！　これからあたし襲われる！？　ま、待ってまだ心の準備が　　」

「さっきのは、ウロボロスの？　貪欲？　なんだろ？」

「再びのスルー！？　これで合計四スルーだよ、うう……。ええ、そうですね。我が身が続く限り？　無限？　にね！」

どうして逆切れ気味なのかはわからないが、彼女の左手の甲を見ている。真っ赤な液体が付着しているものの、傷口は完全に塞がっていた。ウロボロスの？　再生？　だ。食った傍から治り、魔力が高まる、なんてチートなドーピングだろう。

「でも、これは寿命が縮まるからあんまり使いたくないんだよ」

「は？　ウロボロスは不死身じゃないのかよ？」

「イエス、もちろん？　永遠？　のウロボロスさんは不老不死ですよ。　　」

そうだ、自分を喰らうウロボロスは一方で？　消滅？　の意味も持っているのだった。死ぬのではなく、存在ごと消え去るということだ。まだ完全に信じたわけではないが、この少女がウロボロスっぽいことは認めざるを得ない。

「んで、その？　永遠？　のウロボロス様が一体俺になんの用だ？」

「まあまあまあ、そんなに早くことなかれ。長くなると思うから、どっか落ち着けるところで話そうよ。例えば、紘也くんのお家とか」
確かにこんな道の真ん中で長話はしたくない。先程みたいなことがまた起こらないとも限らないし、この辺りだと、やはり紘也の自宅が妥当だろう。

「わかったよ。話は俺の家で聞く」

「あ、その前にコンビニ寄ってもいいかな？」

自分もそうするつもりだったことを思い出し、急激に疲労と喉の渇きがぶり返してきた紘也だった。

Section - 03 語られる世界の現状

蒼谷市の西区にある住宅街。そこに建つ庭つき一戸建て住宅が紘也の自宅だ。

近所の家々と見比べてもそれなりに自慢できる大きさであるのだが、ここには紘也一人しか住んでいない。家族と呼べる者は父と母、妹が一人。世界魔術師連盟の大魔術師である父は一年のほとんどを海外で過ごしているし、どうもファザコンの気が強い妹もそれについて行ってしまうている。母もいない。紘也がまだ小学生の頃、とある事故のせいで海外での病院暮らしが続いている。

「ほうほう、なかなか立派なお屋敷に住んでらっしゃるようで」
ウロボロスはリビングに入るや否や、はち切れんばかりに大量の菓子類が詰め込まれたレジ袋二つをテーブルの上に置いた。

「パーティーでもするつもりかよ。それともお菓子が主食の家出少女かお前は」

遠慮の欠片も見せずソファーに身投げした少女に呆れつつ、紘也はコンビニで買ったスポーツドリンクを一気に飲み干す。

「紘也くん紘也くん、テレビのリモコンを知らんかね？」

「なにいきなり全力で寛いでんだよ！ あんたの用件とやらをさっさと話せよ！」

「んなことは後だあ！ 早くリモコンを！ 早く！ でないと間に合わないよ！」

「……クッションの下だと思う」

なんかすごく切羽詰まった状態だったので紘也は仕方なく教えることにした。

「おー、あつたあつたありやした！ それでは早速ポチツとな！」
妙な掛け声と共に少女はテレビをつけて目まぐるしくチャンネルを変えていく。もしかすると、彼女の言う『用事』に関係があるのかもしれない。どっかの組織が魔術的に電波ジャックしてこの家に

だけ映像を送ることになっている、とか。

だが、止まったところでタイミングよくアニメのオープニングが始まった。『殲滅魔天使リリン カタラ』とかいう物騒なタイトルの魔法少女物だった。

「ふひい、危ない危ない。この作品は毎回オープニングが微妙に違うから見逃すわけにはいかないんだよね」

「おい」

紘也は真つ白な視線を少女に向ける。変に緊張してしまった自分が馬鹿らしく思えてきた。どうしてくれよう、この変質者。

「あんた、ふざけてんならなにも言わず出て行ってくれないか」

「変身シーンキタアツ！ 毎回使い回しをしないところはすごく力入れてると思うわけですよ、ここのスタッフ」

「……」

紘也は黙ってテレビのコンセントを引き抜いた。

「ふぎやあああああああああッ！？ な、なんてことすんのあんた鬼かアツ！？」

「うっさい黙れ用件済ませてとつとと退場しろよ日本から」

「国外追放！？ そんな、それだけは堪忍してやお代官様あゝ」

「言うべきことはそうじゃないだろう？」

キツ、と紘也は威圧全開で睥睨した。人を殺せそうな視線を初めて使った瞬間だった。

「うくう、わかりましたわかりましたよう。ふむ、まったく紘也くんはせつかちなところがいい ああああああッ！？」

「な、なんだ！？」

なにやら本気で驚いた叫びを上げる少女に紘也の肩がビクウと跳ねた。彼女は不自然なまでに瞠目し、口をわなわなと震わせている。なにごとか、と思っていると、彼女はカエルのような跳躍で本棚の横にある籠へと飛びついた。籠には大量のゲームソフト 三分の二ほどが寮暮らしの孝一が置いているものだ が山積みになっている。彼女はその一番上のソフトを引っ手繰ると、秘宝を発見し

た勇者のように天に翳した。

「こ、こ、コレは巷で人気の格ゲー『大乱戦・モンスターバトルロイヤル』じゃあないですかあ！ 略してモンバロ。やりましょう！是非にとも今すぐにやりましょう！」

そのおぞましい地獄絵図を想像してしまいそうなタイトルは、登場キャラがモンスターもしくはエルフなどの亜人種のみという斬新な格闘ゲームとして話題を呼んでいる。紘也も先週の休日には孝一と一日中盛り上がっていた。

青い目をキラツキラと輝かせる少女に、紘也は怒りを通り越して溜息をつきたくなった。

「おいこら、用事はどうなった？」

「ふっふっふ、話が聞きたければこれでこの百戦錬磨のウロボロスさんを打ち負かすことだね。あ、もちろんあたしの使用キャラは『ウロボロス』です！」

五分後。

「初心者相手にそんなハメ技ばっか使うなアホンだらあああああああああああッ！！」

なんかすごい勢いで逆切れされた。それにしても自信の割にはすこぶる弱かった。片手でコントローラーを握っても勝てそうだ。

「話せ」

コントローラーを置き、紘也は短く凄みを利かせて言い放った。もう何度促したことだろう、次に話を逸らしやがったらチヨキで両目を突いてやる。

「うう、わかったよう。約束はしっかり守るのがウロボロスさんです」

ウロボロスは一拍置いて、表情に真摯さを滲ませて口を開く。

「単刀直入に言います。紘也くん、あたしと契約してください」

「却下」

「打てば響くようにフラれたっ！？」

失恋した女子高生みたいな反応でソフアーに顔を埋めるウロボロス。契約というのはつまりアレだろう。彼女が紘也の契約幻獣となること。そんな非日常に引き込まれるようなことはごめんである。

「俺、魔術師じゃないし。あんたと契約なんかできねえよ。する気もない」

「え？ でも紘也くん、ものすごい魔力持ってるよね？」

……こいつ、見破ってやがる。

世界魔術師連盟指折りの大魔術師 秋幡辰久の息子である紘也には、並外れた魔力が秘められている。そのことは紘也自身も認めている事実だ。しかし

「俺は魔術なんて一切使えない。そもそも、あんたと契約することになんの意味がある？」

紘也は魔力が有り余っているだけの、ただの一般人でしかないのだ。

「えーと、紘也くん。紘也くんはこの世界が今どんな状況か理解してる？」

「環境問題がやばい」

「ああうん、知らないんだね。えつとですね、今この世界には幻獣がドバァーッ！ て溢れてんですよ。そんでもって、世界中でその幻獣たちが人間を襲っているのです」

「そりゃまたどうして？」

これまで魔術とはほとんど無縁に過ごしてきただけに、紘也には遠い世界の話のように聞こえていた。

「世界魔術師連盟がヘンテコな実験を行っててさ、それがもう盛大に失敗しちゃって。無理に穿った次元の穴からドドドバズシャーッ！ って逆流してきた幻獣が世界中に召喚されたのですよ。あ、あたしは違うよ。以前からこっちにいたウロボロスさんなのです」

けっこつ、いや、かなり深刻な内容だと思う。でも、深刻だという実感を全く覚えなないことはウロボロスの緊張感のない下手糞な説明が原因に違いない。

「それでね、この前の流星群は知ってる？」

「ああ」

三日前だったか、予測されていなかった謎の流星群が世界中で観測されている。日本では今朝方だったためニュースでしか見られなかったが、空一面を覆う星の群れは画面越しでも凄まじい光景だった。天変地異の前触れではないか、とも噂されている。

「アレ、全部幻獣なんだよ」

「なっ!？」

紘也は絶句した。なんでそこはニュースになってないんだと疑問を覚えたが、現代最高規模の魔術組織である連盟が関わっているのなら、もみ消しや隠蔽や情報操作くらいできて当然だ。

「その幻獣がなんで人を襲うんだ？ 腹が減るからか？」

「えっと、幻獣の体は『マナ』っていうエネルギー体で構成されているんですよ。マナ、ゲームとかでよく聞くよね。まあその語源だと思ってくれていいよ。んでもって、マナはこつちの世界には存在しない。だから我々幻獣はこつちにいると体の構成マナが乖離して消滅しちゃうんだよ。これ、世界の拒絶ね。んで、マナの乖離を防ぐために幻獣たちは魔力を用いる。『人化』もそれを緩和する手段の一つなんだ。誰でも消滅は嫌だからね。だけど自分で生成できる魔力よりも消費していく量の方が僅かに多くって、普通は魔術師の契約者から供給して補ってもらうんだよ」

彼女の微妙に長い話を脳内でまとめつつ、紘也は魔術書で得た知識を思い出していた。

「つまり、その契約者を持たない野良幻獣が人を食らって生命を維持している、と？」

「オウ！ 意外と物わかりがよろしいですね。その通り。人間は地球上の生物で唯一魔力を持つてるんだよ」

それもなんかの魔術書で読んだことがある。魔術師でもない限り魔力なんて意識することはないから、大半の一般人は気づくことなく人生を終えているのだ。

「そんなわけで、人間の中でも飛び抜けた魔力を持つてる紘也くんは幻獣にとつっても狙われ易いのですよ。現に先程ウィル・オ・ウィスプに襲われてたしね」

彼女の言った『日常の破壊』と『死』の意味を紘也はやつと理解できた。自分を狙っていつ幻獣が襲ってくるのかわからないのだから、孝一や愛沙、周りの人たちも巻き込んでしまう恐れがある。最悪だ。

守らなくては。自分の身もそうだが、友人たちや、彼らと過ごす平和な日常を。

そして、最も警戒しなければいけないのは今だろう。

「あんたも幻獣ってことは、俺を食らいに来たってことか？」

紘也は僅かに身を引く。ウロボロスは？永遠？や？消滅？などとは別に、自身すら呑み込む？貪欲？があるのだ。

いつでも動ける姿勢でいると、彼女はとても心外そうな顔をした。「いやいや、だから契約してって言ってるじゃない。あなたを守ってあげるのですよ」

「そうか、俺を非常食として管理下に置くつもりだな」

「言葉の通りに受け取ってくれないかなあ！ あたしは人間を天然記念物ばりに保護したいと考えてるのにさ！」

人間としてはウロボロスなんて生物の方が天然記念物だ。

「そもそも、？無限？のウロボロスさんは魔力がデフォルトで？循環？してるから底を尽きることはないのですよ！」

その設定も大概にチートだ。

「まあ、襲うつつもりなら最初からそうしてるだろうけど、あんたのその能力が本当なら契約なんてする意味はないんじゃないのか？」

「いえいえ、建前上いろいろとあるんですよ」

なぜかウロボロスは言葉を濁したが、紘也はひとまずそれで納得することにした。そこを深く突っ込むと長くなりそうだからだ。しかし、疑問点はまだまだ沢山ある。

「でも、なんで俺なんかと契約したいんだ？俺はちよつと魔力量

が多いのかもしれないが、どこにでもいる高校生に過ぎないんだぞ」
言うと、ウロボロスは微かに目を細め、感慨に耽るように窓の外を見た。

「紘也くんは覚えてるかな、十年前のこと」

「十年前？ ……まさか」

紘也の母親が事故に巻き込まれたのが十年前。あれは紘也が原因と言っても過言ではない魔術的な事故だった。それがきっかけで紘也は魔術を習うことをやめてしまったのだが、もしかしてその事故になにか関係が

「そう！ あたしは十年前にあなたに助けをいただいた蛇なのですよ！」

「俺にそんな過去はないしあつたとしても蛇の恩返しなど誰が受けるかっ！」

「むむむ、蛇じゃなくってドラゴンだつてば！」

「たつた今自分で蛇つて言つたよなっ！」

幻獣つて殴つたら動物虐待にカウントされるのだろうか。

「わあ！？ なんか鬼みたいな形相で拳をチョコキに構えてるのは一体どゆこと！？」

「貴様がありもしない過去を捏造するからだ」

「ジョークだよイツツアジョーク！ ところで『貴様』って言葉を使う人珍しいよね」

グサツ！

紘也の叩き込んだV字型の拳が青い瞳を遺憾なく貫いた。

「ぬわあああああ目があああああああああああッ！？」

両目を押さえてカーペットの上を転がるウロボロス。いい加減、彼女のハイテンションにも慣れてきた紘也である。

「いきなりなにすんだあッ！？ あたしじゃなかったら失明してるよこだったよッ！？」

「安心しろ、俺もあんたじゃなかったらやってない」

すごい。もう既に？ 再生？ が完了しているとは流石ウロボロスだ。

「うっう、あたしだって人並みに痛みは感じるんだよう。目潰しは肉体的にも精神的にも痛いんだよう……うっう……」

ウロボロスはマジ泣き一歩寸前の状態だった。そうしていると普通の女の子に見えてしまい、紘也はちょっとやり過ぎたかと思ってしまう。

だから、次は幾分か優しくあやすように話しかけることにした。

「ほら、俺と契約する本当の理由を教えてくれれば、もう目潰ししないから」

「実はあたし、悪の組織に追われてるんだ。だから力を貸してほしいですよ。テヘ」

グサツ！

「によわああああああああああッ!？」

紘也は無慈悲だった。

「次は目にストローぶつ刺して炭酸飲料流し込んでやる」

「なんでそんなピンポイントで目ばかり狙おうとするんだあんたはあッ!？」

「いや、なんとなく一番効果的かなと思って。人体急所だし。

そうだ、チャツカマンで眼球炙つてみるのも面白いかも」

「爽やか青少年な顔して発想が恐ろしいんだよ!？」

喚き散らすウロボロスは黙殺し、紘也はテーブルの上のいろんな物が挿してある筆立てから本当にチャツカマンを掴み上げた。それを掌で弄びながら、脅すように言う。

「さあ、三度目の正直だ」

「い、いやね、それが、そのね、海よりも高く山よりも深い理由があつてですね」

とんでもなく平坦だった。だからだと滝のように冷や汗を流すウロボロスは本当の理由を言いたくないのか、紘也と視線を合わせようとしない。

普段の紘也なら言いたくないことを無理に聞き出すことはしない。だが、今回ばかりは事情が違う。納得と安心ができる理由を聞かな

い限り、幻獣などという危険な存在を信用するわけにはいかないのだ。

「お前、ホントいい加減にしるよ」

「えつとね、魔術師連盟が関わっていると云いますか、個人的な問題と云いますか……」

「は？ 魔術師連盟が？」

Trrrrn! Trrrrn! Trrrrn!

その時、テーブルに置いてあった携帯が機械的な音を奏でた。着メロを使用していないベル音は友人以外からの電話であることを示している。

「ほら、ケータイ鳴ってるよ」

こんな時間に誰から？ と訝しみながら紘也は携帯を開く。画面には『父』と表示されていた。嫌な予感がした。

「ちよつと席外すが、大人しくしとけよ」

「じゃあさ、モンバロやつててもいい？ いいよね？ ね？」

上目遣いで瞳を輝かせるウロボロスは、紘也の返事も待たずゲーム機の電源をONにしていた。好きにしる、とだけ言い残し、紘也は断続的に鳴り続ける携帯を持ってリビングを後にした。

S e c t i o n - 0 3 語られる世界の現状（後書き）

日間ランキングに載ったので更新しました！
全体で81位。

ファンタジーで63位だそうです。

読んでくれた方ありがとうございます

ちなみに『カタラ』は呪いって意味ですw

Section - 04 黒き地獄の獵犬

『よう、紘也少年。俺だよ、俺。わかる？』

「実の息子にオレオレ詐欺とはどういうつもりだよ、親父？」

開口一番の軽薄な声に紘也は早速げんなりするところだった。父秋幡辰久は確かロンドンにいるから、時差九時間、向こうは夕方前だろう。この人はそういうことを計算に入れないので、たまに深夜に電話がかかって迷惑しているのだった。

『そうそう実は魔道具の取引に失敗してすごい赤字が　　って違うわいっ！』

紘也は大魔術師である父を受け入れ難く思っているものの、嫌ってはいない。実の父だし、親馬鹿なほど子供のことを考えてくれているのだから嫌う理由がない。寧ろ、母が海外の病院に移送された後も、こうして日本で生活させてくれていることに感謝している。

「で、こんな時間になんの用だ」

『お父様の渾身のノリツツコミはスルーかい。……まあいいけど』

電話の向こうの悲しげな声色も無視だ。国際電話なのだから手短かにしてほしい。

『紘也は知らんだろうけど、実は父さんの実験が最悪の失敗を招いちやっつてね。今ちよこつと世界がやばいことになってんのよ。だから当分の間は帰れそうにないから』

「それって幻獣が世界中に召喚されたつてやつか？」

『ありゃ？　なんで知ってるの？　葛木さんちのゲンちゃんにでも聞いた？』

ウロボロスの話が本当だったことよりも、その諸悪の根源が父親だったことになんとも言えない気分になる紘也だった。

「いきなり押しかけて来たエセ幻獣から聞いたんだよ。なんか俺を守るとか言ってるめんどくさくて鬱陶しい奴」

リビングにいる少女の腹の立つ笑みを思い出す。情報を得るなら

まだ葛木さんちのゲンちゃんやら たぶん宗主だと思っ か
ら聞いた方が何倍もマシだった。

『あー、なんだ。もう着いちゃったのか』

「？ もう着いたって、どういうことだ？」

『いやね、紘也少年が野良幻獣に襲われて難儀するかなあ、と思っ
て俺の懐刀を護衛として送ったのよ。連盟の方も総力挙げて幻獣狩
りをやってるけどさ、それでも世界全体をカバーすることは難しい
んだ。で、明日くらいに着くはずだったから電話したんだけど、必
要なかったな』

……彼女は父親の契約幻獣だったのか。

紘也はドアの隙間から明かりが零れている居間の方を見る。連盟
指折りの大魔術師が懐刀と言っくらいだ。彼女は嘘偽りなく強い。
余裕ぶつた態度も頷ける。『ドラゴン』に固執しているところを見
るに、それなりのプライドも持っていると思う。だから、父の親馬
鹿に付き合わされているなど自分の口から言い難かったのだろう。
魔術師連盟が関わっているが個人的な問題 その意味がよくわ
かった。

「まあ、実際に助けてもらっただけど、あんた本当に親馬鹿だな」

『ははは、部下にもそう言われたよ。彼女がいる……なら、紘……ガ

……安……ガガ……お父様……張っ……ガガガ……』

「悪い、親父、よく聞こえない」

なにやら音声に雑音が混じって聞き取りづらくなった。移動中、
それも電波状況の怪しい場所にもいるのだろうか。

『て……幻獣狩り……彼女……と……ガ、ガガガガガガガガガ
ガ
ガ
』

「ッ！？」

おかしい。いくら電波が悪くてもここまで雑音が酷くなることは
ない。国際電話だからか？ それとも、あまり考えたくないが、父
の身になにか起こったのか……。

……いや違う。

携帯の画面には『圏外』と表示されていた。それは明確な異常を示している。向こうが電波の悪い場所にいるのではない。こちらの環境が変化したのだ。

プツリ、と通話が途切れる。直後、背後から殺気にも似た重たい気配を感じた。

弾かれたように振り向くが、玄関へと続く廊下には誰もいない。

ごくりと生唾を飲み、紘也は殺気の正体を確かめるために薄暗い廊下を歩いていく。

恐る恐る玄関へと近づいた時、玄関ドアのガラスの向こうに赤い光が二つ灯った。

刃物のように鋭い光。その正体が『眼』だと気づいた時には既に遅く、そいつは遠雷のような唸りを上げてドアを突き破ってきた。格子を取りつけた防犯ガラスは呆気なく砕け散り、四足獣の影が赤い残光を引いて紘也に襲いかかる。

「なあっ!?!」

携帯を落として硬直する紘也。赤眼の怪物が大口を開く。白く太い牙が剥き出しになり、紘也は悲鳴を上げる暇もなく首から上をもぎ取られる。寸前、赤眼の怪物は横から突風に煽られたように弾かれた。

家の壁を破壊し、怪物はその先の部屋を貫通して庭の方まで吹っ飛ばす。

「紘也くん、こっち!」

恐らく素手で怪物を殴り飛ばした少女が紘也の手首を掴んで外へと連れ出す。

住宅街の路地にまで出たところで、彼女　ウロボロスは不満そうに呟いた。

「まったく、紘也くんを襲うんならもつと空気読んでほしいよ。もうちょっとでレベル1のCPUに勝てるってこだったのに!」

「お前実はゲーム音痴だろ!」

危機感の欠片もない台詞に、紘也は先程の恐怖も忘れて思わず突

怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い
怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い
怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い
怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い
怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い
怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い

「絃也くん、あいつを見ないで！」
「！」

ウロボロスの声に絃也はハツとした。彼女の背中と、金細工のように細い金髪を見て、今の自分がどうなっていたのかを思い出す。黒い幻獣を見ているだけで、心臓を鷲掴みにされているような恐怖を覚えていた。精神崩壊の寸前だった。

ありえない。絃也は魔術側をなにも知らない一般人ではないのだ。異形とはいえ、たかだか黒くて赤眼の犬を見ただけでここまで怯えるほど臆病ではない……はずだ。

「絃也くんはあいつの特性にやられたんだよ」

絃也の疑問に答えるように、ウロボロスが言った。

「あいつは、自分の姿を見たり声を聞いた相手に？恐怖？を植えつけるんだよ。そしてその？恐怖？を一気に増幅させ、動けなくなつたところで捕食する。心臓の弱い人間なら食われる前にポツクリ逝つちゃうほです」

見たり聞いたりした人間に死ぬほどの恐怖を与える　そういう幻獣を、絃也は知っている。

「あいつ、ヘルハウンドか」

「イエス！ 正解！」

ヘルハウンドとは人々に死を運ぶとされる地獄の猟犬だ。『ブラツクドック』や『バーゲスト』とも呼ばれ、主にイギリス辺りで様々な逸話が残されている。なぜそんなのが日本にいるのか？ その

答えは既に得ている。要は魔術師連盟の事故で幻獣界から吹っ飛ばされ、彷徨っていたところで紘也を見つけたというわけだ。

ウロボロスを警戒しているのか、ヘルハウンドはその場で右往左往している。それをなるべく視界に入れないようにしつつ、紘也は彼女に訊ねた。

「あんたは大丈夫なのか？」

もし彼女まで恐怖に支配されるようなことになれば、二人とも確実に命はない。

「ふふん、この天下無双のウロボロスさんが、ヘルハウンドごときに戦々恐々するわけないよ。あんなのはザコです。世界の幻獣トレーディングカードゲーム 略して世界の幻獣TCGで例えると、使えるのはせいぜい序盤だけのコモンです」

「悪い、強さの基準がさっぱりわからん」

彼女にあいつの特性とやらが効かないことだけは充分にわかったけれど。

「ちなみにウィル・オ・ウィスはどんなデッキにも入らないザコの代表カードです」

「そんな謎解説はいらんから早くあいつをどうにかしてくれ」

「むう、面白いんだけどなあ」

ウロボロスがぷすんと仏頂面になったその時、視界の端でオレンジ色の光が弾けた。

「危ない紘也くん！」

ウロボロスが紘也を突き飛ばす。ヘルハウンドが大口を開き、その奥から火炎を吐き出したのだ。地獄で生まれたヘルハウンドは火を吹くと言われているが、本当だった。

灼熱の火炎放射が紘也を庇ったウロボロスに直撃する。煌々としたオレンジ色の光が夜闇を引き裂き、熱風が吹き荒ぶ。離れた位置に転がされた紘也にまで熱が伝わってくるのだから大変な温度だ。

「お、おい」

ウロボロスが炎に吞まれたと思いい紘也はヒヤリとした。が、彼女

は何事もなかったかのように屹立していた。火炎を受け止めたと思われる手をグーパーさせている。

「まあ、ヘルハウンドの炎なんてこんなもんだね」

つまらなそうに言うと、彼女は首だけ紘也に振り返って愉快げに手を振った。

「紘くんはそこで見ててね。一瞬で決めちゃうから」

グルルウ。

炎は効かないと悟ったのか、ヘルハウンドは姿勢を低くした。そこから体のバネを全開にして跳躍し、鋭い牙を剥き出しにして突っ込んでくる。

「おっと」

疾風と化して特攻してくるヘルハウンドを、ウロボロスは体を左に開いてかわした。そして続け様に放ってきた火炎の軌道を腕の一振りで見逃し曲げる。明後日の方向に曲がった火炎は、そこにあつた道路標識を激しく炎上させた。

ドロドロと溶けていく道路標識を見て、紘也はゾツとする。

なんて熱量だ。彼女はあんなの受けても平気なのだろうか？

火炎を弾かれたヘルハウンドは素早くターンをして再び飛びかかる。対するウロボロスは、今度は避けようとはせず、その横面に捻りを加えた裏拳を減り込ませた。

バキッ！ という頭蓋の碎ける音。砲弾のような勢いで吹っ飛んだヘルハウンドは、何十メートルも道路を転がり滑った後、断末魔さえ上げられずに動かなくなった。

一撃。

単体で熊をも殺せそうなヘルハウンドを、彼女は素手で殴り倒してみせたのだ。

「すげえ……」

思わず紘也は感嘆の声を洩らしていた。

「このくらい当然ですよ」ウロボロスは誇らしげに胸を張り、「さあさあ、紘也くん、遠慮せずにもっとあたしを誉めて誉めて」

「あいつ、もう起き上がって来ないだろうな」

「オウ！？ 撫でてもらおうと頭まで差し出したのにスルーされた！？」

ウロボロスに多大なる鬱陶しさを感じながら、紘也は慎重にヘルハウンドの死骸へと近寄った。あんなのが道の真ん中に転がっていたら新聞の一面を彩ってしまう。今のうちに処理しなければならぬ。

とりあえず庭に埋めるしかないか。そう考えていると 紘也の目の前で信じられないことが起こった。

ヘルハウンドの死骸は光の粒子となって霧散、跡形もなく消滅してしまっただ。そこには血の一滴すら残っていない。

「は？ え？ ど、どうなったんだ？」

「これがマナの乖離だよ」

わけがわからず狼狽する紘也に、後ろからウロボロスが現象を説明する。

「言ったよね、幻獣はマナで構成されてるって。死んだ幻獣はマナの乖離を抑制できなくなるから、こっちの世界ではこの通り綺麗さっぱり消えるのです」

「へえ」

どうりで幻獣の死骸が発見されたというニュースを見ないわけだ。と、そこで紘也は気づく。

「うわ、大丈夫なのかよ、これ」

周囲には、先の戦闘の爪痕がすっかりと残されていた。紘也の家にはトラックでも突っ込んだのかという大穴が穿たれ、火炎を受けた道路標識は完全に溶解している。

「大丈夫、問題ないよ。たぶんそろそろだと思っからよく見てて」
気楽そうに、ウロボロス。次の瞬間、紘也は何度目かの驚愕に目を疑った。

破壊された玄関や家の壁、溶解した道路標識などが、まるでビデオを逆再生するかのように元に戻っていく。不可思議で幻想的な光景に、紘也はしばらくにも言えないでいた。

「これは……？」

そういえば、全く騒ぎになっていないのもおかしい。隣や向かいが留守だったとしても、近所の住民が物音を聞きつけて飛び出してきたもいいのに……。

「ふっふっふ、これはですね。あたしの個種結界が働いたからなのです！」

「なんだ、それ？」

「むう、ノリ悪いなあ。ここは『なににい！？』って驚かな　ごめんなさい。説明します」

拳をチヨキに構えて一睨みしてやると、ウロボロスはすっかり萎縮してしまった。

「結界は結界だよ。デフォの能力は人払いと認識阻害　つまり、あたしたちが中でなによっても一般人にはバレないってことだね。ただ普通の結界と違うところは幻獣の特性を付与できること。幻獣が戦う時は、まず個種結界を張って自分に有利な戦闘フィールドを形成するんだよ。紘也くんが怯え死にそうだったのも、ヘルハウンドが？恐怖？を付与させた結界を張ってたからだね」

となると、破壊された箇所が元通りになるのは、ウロボロスの？再生？が付与されているのだろう。ヘルハウンドが再生しなかったり、紘也を守っていたところを鑑みるに、どうも生物には効果が適用されないようだ……。？」

「ところで紘也くん、これで自分が狙われてるって自覚できたかな？」

改めてウロボロスが訊いてくる。自覚もなにも、ウィル・オ・ウイスプから始まって夜も明けないうちにまた襲われているのだ。危機感を覚えない方がどうかしている。

紘也は頷き、次にウロボロスが言わんとしていることを先に口にする。

「契約、だったな」

「おっとこいつは話が早い。そうです。紘也くんの安全のためにも契約してもらいたいですよ」

確かにヘルハウンドみたいな幻獣に襲われて死ぬのはまっぴらごめんだ。非日常な存在が身近にいても、日常を過ごすことはきつとできる。だが

「あんた既に契約してるだろ。いいのか？」

「……はて、なんのことやら。あんなのは昔の話だよ」

父親はなかったことにされていた。

もしかしたら、彼女は紘也の父親　大魔術師・秋幡辰久のことが嫌いなのではなからうか。一体自分の契約幻獣になにをやらかしたんだ、あの人は。なんか帰れとも言いつぶらくなってきた。

「契約したら、俺はもちろん、周りのことも守ってくれるんだろうな？」

「そこは豪華客船に乗ったつもりでどんと任せてくださいな。処女航海だけ」

氷山にぶつからないか心配になった。

「わかった、契約してやる」

溜息をつきながら仕方なく了承すると、ウロボロスは満面の笑み

を咲かせ、

「イヤッホーツ！！ いやはや紘也くんには物わかりのよろしくない堅物人間の可能性を危惧していたけど、いやあ、見直しました」「うっさいはしゃぐな！ まだ契約の方法を聞いてないぞ」

すると彼女は上目遣いで紘也を見、少しばかり恥ずかしそうにモジモジしながら口を開いた。

「あたしとディーブなキスをしてください」

「やっぱなしの方向で」

「嘘ですすいません調子こきました！ ホントはこれにサインしてくださいくれればオツケーです」

ウロボロスはどこからか一枚の用紙を取り出した。紘也は渡されたそれに視線を落とす。

婚姻届。

問答無用で破り捨てた。

「オウ！？ せつかくの渾身のネタが一瞬で撃沈！？」

「ふざけんのも大概にしる目え刺すぞコラ！」

「ごめんなさい。真面目にやります」

涙目で平謝りしたウロボロスは、今度は両腕を前に軽く広げた。まるで『私の胸に飛び込んでおいで』的なポーズである。

「あーそうかそうか、このままチヨキで殴ればいいんだな」

「違うよ！ ふざけてないよ！ あたしと手を繋いで環を作ってくればいいんだよ！」

「環を？ …… こんな感じでいいのか？」

怪訝に思いながらも紘也は彼女の手を取った。決して綺麗とは言えない環ができあがるが、特にこれといって変わった様子はない。見在目美少女の手の温もりに少しドキツとしたのは内緒だ。

「ふう、契約完了」

ウロボロスが手を離す。本当に終わったのだろうか？ なんか随分と呆気なかった。もっとこう、光とかがパアツと出る派手なものだと思っていた。

「ホントにこんなのでいいのか？」

「うん。まあ、こんなのは言うけど、契約は幻獣によって行い方が様々なんだよ。あたしは？無限？や？循環？を示す環を作ればいいのか、特に準備はいららないんだ」

へえ、と紘也は感心薄に呟いた。最初のデーパーキスが一番契約らしいと思ったのはマンガの読み過ぎかもしれない。

「あ、そうそう、携帯のメルアドとか交換してくださいな」

スカートのポケットからファンシーなデザインの携帯電話を取り出すウロボロス。なにか裏がありそうで紘也は少し躊躇ったが、いざという時の連絡手段はあった方がいいに決まっている。二人は赤外線通信で互いのプロフィールを交換した。

「はい、というわけで、これよりつきつきりで紘也くんの護衛をさせていただきます。改めてよろしくね」

ニツコリと笑いながら軍人みtainな敬礼をする少女に、紘也は一つの懸念を抱いた。

「そついや、あんたマンションとか借りて……ないよな。やっぱうちで寝泊まりするの？」

「不束者ですがよろしくお願いします」

ペコリと丁寧に頭を下げるウロボロス。紘也は本日最大の溜息を吐いた。

これからこいつと暮らすことになるのか。ダメだと言っても無駄そうさ。

幻獣とはいえ、見た目は可愛い美少女である。孝一や愛沙になら事情を話せるとしても、他の知り合いには絶対知られたくない事実だ。

かといって彼女がいない時に幻獣に襲われたら死ぬ。認めたくないが、断じて認めたくないが、同居することが一番いい方法なのだろう。

「うちで暮らすとなると、部屋はどうする？一階にも二階にも余ってるけど」

「紘也くんと相部屋でめひゃあああつ!？」

「おつと悪い、手が勝手に」

「あうう、こんな美少女の顔に攻撃するとかありえないよ……」

本当にウロボロスの再生能力には驚嘆する。指で目を突いたくらいじゃ血も流れない。

「二階の妹の部屋でいいよな」

「いや待った! あたしは天井裏を希望する! 屋根裏部屋ですよ
屋根裏部屋! あるよね? こんなに広い家なんだから」

「まあ、あるし別に構わないけど、なんでまたわざわざそんなところを? 遠慮なんかしないでいいんだぞ? どうせ誰も使っていない部屋なんだから」

紘也としては屋根裏に追いやったみたいでいい気分ではないのだが、当の本人はそうでもないようだ。恍惚と目を輝かせて、祈るように手を胸の前で組む。まるで夢見る少女だ。

「前々から天井裏の生活つてのを体験してみたかったんだあ。それにあたしって薄暗いとこの方が落ち着くし。ちよっと湿ってるとなおいいんだけど」

「やっぱ蛇だな」

「だからドラゴンだってばあーっ!」

その主張はどうあっても曲げるつもりはないらしい。ドラゴンなら火山にでも住んでいればいいのだ。

「それはそれとして、あたしは紘也くんにモンバロのリベンジを申し込む!」

「それはもう明日にしろよ」

魔術師の道に戻るつもりはさらさらないが、今後のためにも幻獣や魔術について少しでも知識を取り戻した方がいいかもしれない。

そんなことを割りときれいに考える紘也だった。

S e c t i o n - 0 5 幻獣契約（後書き）

第一章終了

S e c t i o n - 0 6 秋幡紘也(前書き)

第二章

燃えていた。

真っ赤に、熱く、豪快に、燃えていた。

自分の家が。

「母さんが！ 母さんがまだ中にいるんだ！」

幼い紘也は大人たちに叫んでいた。季節は冬。温暖な蒼谷市では非常に稀である積雪のせいで、消防車の到着が遅れていた。地区の消防団だけではとてもじゃないが間に合いそうにない。それを、紘也は幼いながらに悟っていた。

「……俺のせいだ」

実はこの日、紘也は学校で魔術を披露していた。親からは一般人に見せてはならないと言われていたが、ライター程度の火を出すしよばい魔術にすれば大丈夫だろう、そう考えていた。

魔術は成功した。だけど、二人の親友を除いた全員から手品だと言われて馬鹿にされた。タネも仕掛けも看破できないような奴らだ。

腹が立った。悔しかった。

この頃の紘也は、父親やその周囲の魔術師たちに「稀に見る天才」と将来を期待されていた。そのプライドがあつたためかもしれない。

自分が扱える範囲を大幅に越える魔術を行おうとしたのだ。

父親の書齋に忍び込み、こっそり見つけておいた隠し本棚から魔術書を持ち出した。そこに記されていた、普通なら魔術師数人で行わなければならない魔術を選択してしまった。理由は、派手そうだったから。誰もが魔術だと認めそうだったから。

自分の部屋の床に、学校からくすねておいたチヨークで大きく陣を描く。火の精霊の力を借りる魔術で、陣に描かれる紋様も？火？

を意味するのだと理解していた。父親譲りの甚大な魔力があれば、魔術師数人分を賄える自信もあった。

ただ、屋内でやるとどうなるかを考えていなかった。

また、それほどの魔力を制御する力がまだ自分にならないこともわかっていなかった。

結果、紘也の魔力は暴走した。

困ったことに術も中途半端に発動してしまい、炎の奔流が部屋の中で暴れ狂った。

駆けつけた母親に窓から突き飛ばされなければ、紘也は確実に焼死していただろう。その後すぐに天井が崩れて母親は生き埋めとなったのだ。

「母さんが俺の部屋にいるんだよ！」

泣いて叫ぶ紘也。その肩に、大きな手が置かれた。

「なるほどね、鈴理は紘也の部屋か。大丈夫、お父様に任せときな」
洪い声でそう言われた数分後、大魔術師の父 秋幡辰久は、一体どうやったのか焼け崩れた家屋から見事母親を救出した。

母親は奇跡的に命を取り留めたものの、意識不明の重体だった。

「俺のせいだ。俺のせいで……母さんを傷つけた……俺のせいで……」

……

思い詰めた紘也は、ある決心をした。

「本当に、今まで覚えてきたことを忘れていいのか？」

父親は名残惜しそうに眉を顰めた。紘也はコクリと頷いた。術を忘れること、もう魔術を習わないことは、幼い紘也が自分に課した罰だった。

「じゃあ、やるぞ」

父親の大きな手が幼い紘也の頭に被さり、そして

早朝にかかってきた電話の無機質な着信音が、紘也を眠りから覚

醒させた。

二階にある自室のベッド　枕元に置いた携帯をスリーコールで取る。

『やあ、我が息子よ。おはよう?』

開口一番の軽薄な声に、紘也は自分の寝起きがよ過ぎる性質を恨みたくなった。天井の染みを数えながら心を落ち着かせ、疑問形の挨拶をスルーしてこれでもかというほどの不機嫌さで応答する。

「朝の五時にモーニングコールを頼んだ覚えはないんだが、クソ親父」

おかげで嫌な夢からは覚めたが、嫌な部分はほとんど見てしまった。

『クソつて……お父様はショックによるダメージが深刻になりそうよ?』

「知るか。用件はなんだ?」

『ふむ、最近の若者はキレやすくていかんな。いやなに、ただの安否の確認さ。昨日、突然電話が切れただろう?　もしかして野良幻獣に襲われてた?』

携帯が通じなくなったのは個種結界の影響だとウロボロスから聞いている。

「おかげさまで死ぬとこだったよ。でもま、親父の幻獣のおかげで助かった。ところであいつ、俺と契約しちまったけどいいのか?」

『え?　マジで?　父さんフラレたの?　く、紘也の方が母さん似で顔がいいからか』

なんか恨めしげな声が聞こえるけど、黙殺する。

『まあ、それが彼女の選択なら、俺は涙を飲んで受け入れよう。その代わり、幻獣狩りが終わったら返してもらおうぞ。アレは父さんのだ!』

「悪い、変態にしか聞こえない」

傍に妹がいたらきつと蹴りの一つでも入れていたに違いない。

『とにかく紘也が無事で父さんは一安心だ。彼女はあれでもいい子

だから仲良くするんだぞ。 あっ、惚れるなよ?」

「異形にときめくほど俺はフリーダムじゃねえよっ!」

全力で叫ぶと電話の向こうから軽快な笑い声が聞こえてきた。かわれたのかと思うと、なんだか非常に腹が立つ。

「そうだ親父、母さんは……その、元気が?」

あの事故のせいで母親は海外の病院で寝たきりになっている。数年前に意識が戻ったらしいのだが、紘也はまだ一度も声を聞いていない。なにを言われても構わない。その覚悟はできているけれど、やっぱり怖いのだ。

『元気も元気さ。まだ自分で動き回ることばできんけど、「病人食おいしくない。外食したい」っていつも言ってる』

「そっか。なら、いいんだ」

安堵し、紘也は通話を切った。これ以上話すと間違いなく「母さんに会わないか?」と持ちかけられるからだ。会う覚悟までは、まだできていない。

紘也は上半身を起こし、窓のカーテンを開いた。まだ朝の五時過ぎながら、雲一つない青空から柔らかな陽光が降り注いでくる。窓を開けると朝の澄んだ空気が部屋に満たされ、実に清々しい気分になって自然と深呼吸をしてしまう。

これから二度寝は無理だろう。壁にかけてあるカレンダーを見て今日の日付を確認する。七月三日の金曜日。まことに気だるいことながら普通に学校のある日だ。

「んん、紘也くん、朝からヒステリーとはどしたの?」

おぼろげな声に部屋のドアの方を見ると、可愛らしいピンクのパジャマを着た少女が寝むい目を擦っていた。柔らかそうなパールブロンドの髪にも寝癖が目立つ。あのパジャマをどこから拾ってきたのかは謎だが、どうやらさっき電話に向かって怒鳴ったことで起こしてしまったようだ。

結局、ウロボロスには屋根裏部屋を貸し渡すこととなった。何年も掃除していないからホコリとかが大変なことになっていたにも関

わらず、彼女は布団を敷くとあつという間に寝息を立て始めたのだつた（一応軽く掃除はした。布団を汚したくなかつたし）。

「いや、なんでもない。気にするな」

「ふあ、そなの？　じゃ、あたし、おやす、み」

彼女がふらつき出したかと思うと、壁に凭れかかつてずりずりとなしく崩れ落ちた。すーすーとリズムカルな寝息が聞こえ、中型で形のよい胸が上下して妙に艶めかしい。パジャマの第二ボタンまで外されていて谷間が露になっていることも助長している。

「……」

異形にはときめかないと言ったばかりだが、紘也は自分の顔が赤らむことを自覚せずにはいられなかつた。早朝の澄んだ空気をもう一度肺に送り込み、上昇しつつある体温を冷却する。

「そんなところで寝るなよ。ただ低血圧なんだ。幻獣のくせに」
起きている時は常時テンションがトップギアなものだから、起動までに時間がかかるのかもしれない。

紘也はやれやれと肩を竦めてベッドから出ると、だらしく眠る少女の肩を掴んで軽く揺さぶった。

「ほら、起きろ。風邪引く……のか知らんけど風邪引くぞ」

「んや、異議ありれす。手榴弾はおやつに入ると思いまふ。三百円以内れふ」

「入らないよ！？　絶対それ以上するよ！？　そして寝言に突っ込むなよ俺！？」

急激にどうでもよくなつた紘也はとりあえず彼女を背中に担いだ。驚くほど軽かつたが、それでも天井裏まで連れて行くのは骨なので仕方なく自分のベッドに寝かせる。

幸せそうで可愛い寝顔を眺めながら、ふと、今幻獣が襲ってきたらと想像してみる。……紘也が死ねるのは自明の理だった。

朝メシにしよう。

嫌な考えは振り払い、紘也は高校の制服　夏服なのでカッターシャツに学ランのズボン　に着替えてから部屋を後にした。

S e c t i o n - 0 6 秋幡紘也(後書き)

サブタイトルの書き方を変更しました。
ちよこつとネタバレになりそうだったから^^ ;

Section - 07 呼び名

冷凍していた食パンにマヨネーズを満遍なく塗り、それをオーブントースターで焼いている間に目玉焼きを作る。よく熱せられたフライパンに油を敷き、卵を落とし、塩胡椒を振る。卵白がある程度固まったところで少量の水を加えて蒸し焼きにする。

こんがり焼き上がった食パンに目玉焼きを乗せて完成。これは手軽に作れて美味いため、紘也の朝の定番メニューとなっている。ちなみに、目玉焼きにはしっかりと火を通さないと食べる時に黄身が零れて悲惨な目に遭うので注意。

それをコーヒー牛乳が注がれたコップと一緒にリビングに運び、適当にテレビを見ながら食事する紘也。テレビでは朝のニュース番組をやっていた。

《 昨日午後七時頃、板嶋市中央区のオフィスビルの屋上で、女性の変死体が発見されました。女性は全身の血液を抜かれており、同じような事件が先日から続いているため警察では同一犯による連続殺人の 》

「板嶋市って、隣町じゃないか。物騒だな」

女性ニュースキャスターの話を適当に聞き流しつつ、紘也はコーヒー牛乳を啜った。近くで事件が起こっていても、いざ自分の身に降りかからなければ無関係。そう考えてしまうことは人間の悪いところだと思う。けれど、直してしまうと外に出ることも恐ろしくて生活なんてできやしない。ある意味、人間は逞しいのだ。

「あー、それ幻獣の仕業だね」

後ろからの一声で一気に無関係だとは思えなくなってしまった。

「おはよう、ウロ」

「おはよう、紘也くん。挨拶の時くらいこっち見てくれてもバチは

あたらないと思うよ？」

ウロボロスの要望になど答えず、紘也はテレビから視線を離さないまま、

「で、なんでこの事件が幻獣の仕業だと思うんだ？」

「……あうう、そのスルースキルは夜が明けても健在なんだね。くすん」

背後で噁り泣くウロボロスは朝から鬱陶しかった。彼女は完全に覚醒し切っていないのか、昨夜よりも低いテンションで言葉を紡ぐ。「幻獣にだっっているいろいろんだよ。肉体ごと食す奴もいれば、生命力だけを吸い取る奴もいる。昨日のヘルハウンドが前者で、サキユバスとかが後者だね。だからこの事件では血を吸うタイプの幻獣が絡んでるとみた。ウロボロスさんの勘は当たるんです」

「勘かよ！ つーか、血を抜いて殺すことなら人間でも頑張ればできると思うぞ？」

「ミステリー小説じゃないんだから頑張る理由がわからないよ」

そうは言っても殺人犯の考えが想像の斜め上に行くことだって少なくない。血にまつわる悲劇でもあったのかもしれない。これから起こる事件をなんでもかんでも幻獣のせいにするというのは些か早計

《 なお、事件との関連性は不明ですが、同時刻に巨大な蝙蝠の大群が確認されており、熱帯地方に生息するオオコウモリとも違う新種だという可能性が 》

「ほらほらほらほら！ これ絶対幻獣だってやっぱあたしの勘すげ

ー
「……」

紘也は無言でそのニュースを聞き続ける。本当は紘也にだってわかっていた。異様な殺し方を聞いて幻獣の可能性を考えないほど阿呆ではない。ただ、そうであってほしくなかっただけなのだ。

事件のあった板嶋市と蒼谷市は目と鼻の先。いつその災いが紘也に、紘也の周囲に降りかかってもおかしくない。一難去つてまた一難、それが去つてもまた一難……魔術師連盟の幻獣狩りが終わるまでずつとこんなペースなのだとしたら泣きたくなる。

《 次のニュースです。イギリスの新型旅客機『FLORA240便』がハイジャックされ墜落した事件ですが 》

「飛行機ジャックして墜落させるとか、まったく幻獣は酷い奴ばかりだな」

「紘也くん紘也くん、なんでもかんでも幻獣が悪いと思つたら大間違いだよ？」

「なんか今は全て幻獣の仕業にしてしまいたい気分だった。それはそれとして」

「時に、ウロ。なぜにお前はシートに包まってるんだ？ それ俺のベッドのだよな？」

「ようやく振り返ってみると、ウロボロスはパジャマの上から糞虫みたくシートでぐるぐる巻きになっていた。絡まったのだとしたら器用な奴だと誉めてやろう。」

「ムフフ、これは紘也くんの残り香を堪能しているのですよ。ハアハア、紘也くんの香り、魔力の残り火が感じられて実に心地よくじゅるり」

「変態かお前はっ！？ そして今語尾おかしかったよなっ！？」

「いやいや、キノセイダヨ。……クンカクンカ」

「嗅くなっ！！」

シートを鼻にあてて恍惚とするウロボロスを、可燃ゴミに出すか不燃ゴミに出すか一瞬本気で考えた紘也である。

「どうでもいいからシート返せよ、ウロ」

紘也がシートを強引に剥ぎ取ると、ウロボロスは「あーれー」とか言いながら自分でぐるぐる回っていた。朝から勝手に楽しそうだ。

「ところでさつきから気になってただけど、その『ウロ』ってなんなの？」

ひとしきり回ってから彼女は小首を傾げた。紘也はシーツを畳みながら億劫そうに答える。

「ああ、ウロボロスって呼びたくないから、俺はお前をそう呼ぶことにしたんだ」

「オウ！？ 実は全然信じてもらえてなかったのでは！？」

滝のごとく涙を流して肩を落とすウロボロス、もとい、ウロ。どうやらウザったいことにテンションが元に戻ってきたようだ。

「言っただけ、あたしにだって個人名はあるんだよ？ ウ

ロボロスは種族名」

「へえ」

「感心薄っ！？」

「なんて名前なんだ？」

「ふえ？ え、えーと……あー……えー」

特に興味もないが訊いてやると、ウロはなぜか言葉を詰まらせた。腕を組んで天井を仰いだり、こめかみの横で人差し指を回したりして、

「……うん、よし。フローラ・ウロボロシユタインです」

「今考えたよな、その偽名」

しかも縁起の悪いことに墜落した飛行機の名前だった。ファミリ―ネームは謎。

「うわん、即行バレた！？ ええそうですよ偽名ですがなにか？

こつちの世界ではこう名乗るようにしたんだよ人間っぽいからね！」

「本名は？」

「ごめんなさい。放送コードに引っかかるので言えません」

「どんな名前だよっ！？ すげえ気になるよっ！？」

紘也を守る理由を聞いた時と同じで彼女は口を割りそうにない。

だからきっぱりと諦めることにした。どの道、紘也が『ウロ』と呼ぶことには変わらないのだから。

「そういえば、紘也くんって自炊するんだね」

ウロは既に食べ終わった朝食の食器を見て意外そうに言った。

「まあ、朝だけな」

「朝だけ？」

「昼は学食もしくは購買のパン、夜はコンビニで済ませるのが俺のライフスタイルなんだ」

「なんと不健康な！ ふふ、わかりやした。今宵はこの『ロック鳥のたまごかけごはんを作らせたら幻獣界に並ぶ者なし』とまで言わしめたウロボロスさんが腕を振るっちゃうよ」

ニヤリと悪戯小僧のようにウロは笑った。今夜もコンビニ弁当で決まりそうだ。

「じゃ、俺、学校に行くから。メシはキッチンに置いてあるから勝手に食っとけ」

まだ始業には早いのだが、こいつと会話して疲れるくらいなら学校でテスト勉強でもした方が何倍もマシだ。紘也は自分の食器を片づけるためにキッチンへと向かい

その途中、そうだ、と思い出したように振り返った。

「俺を守るのはいいけど、意味もなく学校の中にまで入ってくんناよ頼むから」

Section - 08 HR前の一時

蒼谷市は県下でも比較的大きな城下町である。

中央に鎮座する蒼谷城を中心に市街地、それを囲むように住宅地や工業区などがドーナツ状に広がっていて、南北に走る穂手川が市を一刀両断する形になっている。東西の境目がはっきりしている、見た目わかりやすい街だ。

紘也が通う私立蒼洋高校は西区 紘也の家から穂手川の支流を挟んだ国道沿いにある。一応進学校であるのだが偏差値はそれほど高いわけではなく、紘也がこの高校を選んだ理由は単に自宅から徒歩二十分の近場というだけ。他意はない。

紘也のクラスは二年二組。四階建て校舎の三階中央に位置する。時刻は七時四十分。流石に少し早く着き過ぎてしまった。HR開始五十分前だけあって、まだ生徒は疎らだ。

と、その中によく知る顔が一人 長い黒髪に赤いリボンの女子生徒が真ん中辺りの席でハードカバーを熟読していた。

「おはよう、愛沙」

女子生徒 鷺嶋愛沙にウロボロスの時とは真逆のイントネーションで挨拶する。制服である夏用の半袖セーラー服を着た愛沙は、ハードカバーをそのままに顔だけをこちらへ向けると、いつものふんわりとした笑顔と口調で返してきた。

「あ、ヒロくん、おはよう。今日はなんだか早いね」

「いやなに、また親父が迷惑な時間に電話入れてきたっただけだよ」
愛沙は読書部なる部活に所属しており（確か部員は五人だったと記憶している）、朝の物静かな教室で本を読むことが好きでこんな時間から学校に来ているのだ。彼女曰く、運動部の朝練と同義らしい。

「ヒロくんのお父さんって、今、ロンドンだったけ？」

「移動してなければ、だけど」

「だったら仕方ないよう。イギリスと日本の時差は九時間もあるんだよ？」

それは知っているが、電話するならそこを考えた時間にしてほしいものである。

「なにを読んでるんだ？」

父親の話はあまりしたくないので紘也は話題を変えた。すると愛沙は背景にお花畑が幻視できそうな笑顔になり、

「えへへ、海外のミステリー小説です。そんなに有名な作品じゃないから、ヒロくんは知らないかな？」

愛沙はパタンと本を閉じて表紙を紘也に見せてくれた。ピカソが描いたようなよくわからない芸術性を感じるイラストに、『バナナの悲劇』というコメディ要素しか読み取れないタイトル。紘也が知っているわけがない。

「あつ」

なにかに気づいたように愛沙が口をぱっくりと開ける。

「どうかしたのか、愛沙？」

「はうう、栞挟むの忘れてたあ……」

しゅんと肩を落として読んでいたページを探し始める愛沙に苦笑し、紘也は自分の席である窓際最後列の一つ前の席に座る。

それから学生力バンをまさぐり、ブックカバーをした分厚い本を取り出す。父親の書斎から拝借してきた幻獣に関する魔術書だ。いろんな意味で命に関わってくるからだから、テスト勉強よりも大事だろう。それに紘也はテストを一夜漬けで受けるタイプの人間だ。

珍しく真剣に本を読んでいる紘也に興味を持ったのか、愛沙がてくてくと歩み寄ってきた。

「ヒロくんも、読書？」

「ああ、といっても普通の人には見せられないタイプの本だけだな」「えつと、魔術書つてやつだよな？ いいなあ、わたしも読んでみたいな」

「いやだから、普通の人には見せられないんだって」

「お願い、ヒロくん！ ちょっとだけ、ちょっとだけでいいから見せて」

どうにかして中身を見ようと紘也に密着してくる愛沙。即座に魔術書と理解してくれるのはありがたいが、読書家魂に火がつくと積極的になつてしまうから困りものだ。綺麗な黒髪からする優しい香りが鼻腔をくすぐり、意外とポリウームのある弾力が腕にあたつて紘也は思わず本を手離しそうになる。

「あ、愛沙、あたってるあたってる」

「え？ ふええええええええええっ！？」

ぼふんと耳まで紅潮して愛沙は紘也から離れると、背後の机と椅子をガシャンと派手に倒してしまった。ちなみにそこは孝一の席だ。愛沙がはわわわと慌てて机を元に戻している隙に、紘也は魔術書をカバンに仕舞う。

愛沙はキョロキョロと自分の痴態が周囲にバレていないか確認して安堵の息をつく。残念なことに思いつ切りバレている。けれど、二年二組のクラスメイトは空気の読めるいい奴らばかりなのだ。

「そういえばヒロくん、昨日の女の子はなんだったのかな？」

記憶を手繰るように人差し指で顎を持ち上げ、愛沙が訊いてきたいつか来るだろうその話題を想定していた紘也は自然な調子で、

「さあ？ 夢だったんじゃないか？」

「いや、夢にしてしまうには勿体ない経験だぞ、アレは」

受け答えた声は真横からあつた。

「おわっ！？ 孝一、いつの間に」

そこには男子の嫉妬と羨望を集める美麗な顔立ちをした男子生徒がいた。愛沙と話していたせいかわ塵も気配を感じなかった。というか、彼 諫早孝一はいつも始業時刻ギリギリに登校してくるのだ。こんな時間から現れると誰が思うだろうか。

「コウくん、おはよう。今日はコウくんも早いんだね」

紘也の疑問を愛沙が代弁してくれた。今日はなにかあっただろうか？ 日直ではなかったはずだが……。

「紘也の匂いがしたから」

「待て、お前はそんな変態キャラだったか？」

紘也はジト目で孝一を射る。変態は父親とその蛇幻獣だけで間に合っている。

「冗談だ。ただオレは、紘也が寮の前を通ったら登校することになっているのさ」

確かに紘也の登校ルートは学生寮の前を通る。それがだいたいHR開始の十五分前だから、それから準備しているのならば時間ギリギリにもなるだろう。納得した。

「あー、だからヒロくんがお休みの日は遅刻してるんだね」

「そこはちゃんと間に合うように行けよ！」

孝一は学校の試験では常に上位なのに、どういうわけかアホに見える時があるから不思議だ。これが馬鹿と天才は紙一重とかいうやつだろうか。

「それよりもだ、紘也。惚けるということは、あの後、件の少女と接触してみたんだな」

う、と凶星を衝かれた紘也の表情筋が固まる。やっぱり孝一は鋭い。横で「え？ そうなの？」と本気で夢にでもしてしまいかねなかった愛沙とは大違いである。

「凶星か。さて、オレたちに隠し事はなしだぜ。なにがあつた？」

「ヒロくん、ちゃんとお話してくれるよね？」

孝一も愛沙も顔がマジである。そんな二人に空恐ろしさを感じ、紘也は観念して魔術師連盟の事故、幻獣、そしてウロボロスの少女のことを漏らさずに説明した。この二人なら、紘也が魔術師の息子だと知っているこの二人なら、きつと話しても問題ない。

「うーん、これはわたしたちも気をつけないとダメかな？」

「幻獣か。昨日の鬼火もそうなのなら、その括りは広そうだな。一般人でも撃退できる方法があればいいんだが」

なんだろう、二人に話したらスッキリした。直接的な戦力にならなくとも、親友という存在はこれほどまでに心強い。それを、紘也

は改めて実感することができた。

「安心しろとは言わないけど、ウロボロスにはみんなも守るように言っている。いい加減な奴だけど、親父の幻獣なら信用できそうだしな」

現在の彼女がなにをしているか想像してみる。……どうしよう、ソファアに座ってひたすらモンバロに興じている姿しか思い描けない。

ちゃんと学校周辺を警備しているのか不安になると、孝一が「それだ！」と教室内に響き渡る声を出した。流石に人数が増えていて、みんなビツクリして孝一に注目するが、すぐにまた妙な思いつきでもしたのだらうと目を逸らしていく。

「な、なんだよ」

「ウロボロスと名乗った少女。うん、是非とも紹介してもらいたいものだ」

「どうやら孝一は変なスイッチが入ってしまったらしい。」

「わたしもその子とお友達になりたいなあ」

「思ったなら愛沙もだった。孝一はオカルト的興味からだらうが、愛沙は言葉通りだろう。」

「いつもと変わらない友人たちを感じながら、紘也は苦笑いする。」

「まあ、そのうちな」

だが、早くて放課後だらうという紘也の予想を裏切り、ウロボロスの紹介イベントは割とすぐに起こるのだった。

四時間目の授業は体育だった。

炎天下のうだるような暑さの中、男子は日影もないグラウンドで延々と野球。熱射病で死ねと言っている。プールで水泳という名の自由時間を過ごしている女子を何度羨ましく思ったことが。

そしてさらに不運なことに、野球の後片づけを出席番号の一番と二番 つまり紘也と孝一がする日であった。全員でやれば速いものを、なんでわざわざ出席順にローテーションさせるのか抗議したいところである。もっとも、素手で巨大イノシシを狩ると噂の強面筋肉教師に文句言える度胸のある奴はいない。

「ふう、ようやく終わったな」

使用した金属バットを体育倉庫に片づけた孝一が汗を拭う。

「四時間目にこれやらされると、購買も学食も完全に出遅れるよな。孝一はどうするつもりなんだ？」

こういう時に弁当持参だと助かるのだが、朝から作るほどの元気は紘也にはない。コンビニに寄っておくべきだったと後悔する。

「購買の余り物しかないな」孝一は不服そうに、「あとは愛沙に頼んでオカズを分けてもらうか、だな」

「やっぱそれしかないか」

愛沙はいつも妙に力の入った自作弁当なのである。朝の何時に学校へ来ているのか知らないが、恐らく相当早起きしているに違いない。

彼女は一度二人の分まで作ってくると言い出したことがあるのだが、そこは丁重にお断りした。あまり迷惑をかけたくなかったこともあるが、なんかこう、餌づけされているみたいで格好がつかないのだ。それが恋人とかなら話は違ってくるのだからうけれど。

「ま、メシのことはいいとして、オレはさっさと着替えたいぜ」

「そうだな、これもう体操着絞れそうなくらい汗吸ってん？」

ふと、紘也は遠くの青空に黒点が現れたことに気がついた。
なんだあれ？

鳥？

目を凝らすと翼らしきものが見えたのでそう思ったが、どうも違う。

まず、大きさがその辺の鳥とは桁違いだった。軽く一・五メートル以上はある。それだけでも異様であるが、決定的なところは翼の付け根がどう見ても人間の肩だということだ。

頭から胸までが人間、翼と下半身は猛禽の異形。それがとんでもない速度でこちらに向かって来ている。

「おい、紘也、どうした？」

「逃げる孝一！」

奴に気がついていない孝一を紘也は突き飛ばした。が、敵の狙いは端から紘也だった。

高速飛行する異形の鉤爪が紘也の肩を鷲掴みにする。ふんばるとすら許されず、紘也の足は地面から離れた。

「紘也！？」

孝一の叫びも虚しく、紘也はなんの抵抗もできぬまま空中散歩に付き合わされた。

何周か旋回した後、紘也は体育倉庫の屋根に投げ捨てられる。屋根の頂点が鳩尾にあたり、「がはっ」と呻き声が漏れた。昼食前であれば胃の中のもの逆流していたところだ。

起き上がるうとする紘也の背中に、ダン！ と衝撃と圧力が加えられる。物凄い力で踏みつけられ、紘也は無様にも体育倉庫の屋根に貼りつけられる形となった。

「キャハハハッ　まさかこれほど弱っちいとはねエ。こんなにおいしそうな魔力してるからもつと抵抗されると思ったのになア」

人を馬鹿にしたような奇声に紘也は顔を僅かに傾けてそいつを見上げる。灰赤色の短髪に少女とも言える若い女性の顔、人間の上半身は裸体であるが、髪と同色の羽毛がブラジャーのようになってい

て豊満な胸を隠している。

半人半鳥の怪物　幻獣ハルピユイアだ。

「ハーピーと呼んだ方が一般的かもしれない。元々は風の精だったらしいが、その美しい姿とは裏腹に性質は貪欲かつ下品。人間の食べ物を食べ散らかすだけに止まらず、排泄物まで撒き散らしていくとされる迷惑な幻獣だ。」

「人間はからかってこそ面白いんだけどよう、こっちの世界じゃ食わなきゃ生きていけないんだよなア。仕方ないと割り切ってアタシのごはんになつてくれやア」

涎らしき水滴が頬に落ちてくる。不潔な幻獣というのは本当のようだ。

だがヘルハウンドと違って人語を解せるのならば、交渉の余地はあると思う。

「お前、消滅したくないんなら魔術師と契約したらどうだ？　そしたら人だつて存分にかからかえる」

「キャハハハッ！　なに言ってるんだお前？　誰が人間なんかと組むかよ。んなことするくらいなら消えた方がマシだつての」

一蹴された。だがおかげで得心がいった。魔術師連盟が幻獣を『保護』するのではなく、『狩る』と言っているのは、こいつのような考え方をする奴がほとんどだからだろう。

「さアて、とつとアタシの魔力の糧になつてもらつぞ」

「く……」

ダメだ。抑えつける力が強過ぎて、とてもじゃないが抜け出せそうにない。

もがくだけでは意味はない。なにか、なにかこいつから逃げられる方法はないだろうか。

「ぎゃ！？」

と、ハルピユイアが汚い悲鳴を上げた。彼女の顔面に直撃した白い球体が、屋根の上でバウンドして下に落ちる。

そこに、野球の硬式ボールを握る孝一の姿があった。

「てめえ、クソ人間！！ てめえから先に食うぞコラア！！」
唾を飛ばして憤激するハルピュイア。それでも紘也から足をどけることはない。

「孝一！？ なんで逃げてないんだよ！？」

「アホか！ お前を見殺しにできるわけないだろ！ オレはそれができるほど人間できてないんだ」

涙ぐましい友情に感激しそうになる紘也だったが、状況がそれを許さない。野球部エースとタメを張れる孝一の剛速球でも、幻獣ハルピュイアにはまったくダメージを与えられない。簡単に翼で弾かれる。

「がークソツ！ うざいうざいうざいうざいうざい！ てめえは殺す。ぜってえ殺す！」

額に青筋を浮かべたハルピュイアがついに紘也から足を離れた、その時

「べぐらツ！？」

何者かの飛び蹴りがハルピュイアの後頭部を強打した。吹っ飛んだハルピュイアはグラウンドのサッカーゴールに後ろから突っ込む。「あんたみたいなザコ幻獣があたしの紘也くんやその御友人に触れるんじゃあないよ！」

紘也の眼前で、緩く波打つ白みがかった金髪が流れていた。

チエツクのスカートをふわりと靡かせてターンし、少女は華やかな笑顔で紘也に手を差し伸べてくる。紘也もその手を取るために手を伸ばす。

「大丈夫、紘也くん？」

「ウロ、遅いぞ」

「ごめん、コンビニで立ち読みしてたらつい」

紘也の伸ばした手はウロの両目刺突へと移行した。

「痛ひゃああああ！？ なんてそんな器用に手が動くのっ！？」

悶え泣くウロを放して紘也は自力で立ち上がる。

「あ、あんだてめえはッ！」

ウロの姿を認めたハルピユイアが喚く。蜘蛛の巣に引っかかった蝶よろしくサッカーゴールのネットに絡まっているため、ドスを利かせても迫力はまるでない。

「紘也くん、ちょこつと我慢してね」

痛みから復活したウロはハルピユイアを無視して紘也の背中に腕を回す。

「ウロ、なにを　！？」

膝の下に腕を差し入れられたかと思えば、紘也の体が宙に浮いた。両腕で体を支えられているこの格好は、いわゆるお姫様だっこ。

「な、な、な」

果てしなく屈辱的で恥ずかしい。紘也は顔を真っ赤にして口をパクパクさせた。その間に、紘也を抱えたウロは体育倉庫の屋根から飛び降りる。

やんわりとした衝撃の少ない着地。紘也は降ろされたと同時にとりあえず彼女にゲンコツをくわす。「きゅう、酷いよう」とか言っているが黙殺する。目を突かなかっただけありがたいと思え。

孝一が駆け寄ってきた。

「紘也、無事か？」

「孝一、俺はこの通り大丈夫だったんだから、逃げりゃよかったのに」

「いやいや、御友人が足止めしてくれなかったら危なかったかもよ？」

「お前が立ち読みで遅れなかったらもつと安全だったけどなっ！」

「てめえら！　アタシを無視すんじゃねえッ！」

ネットから解放されたらしいハルピユイアは翼を大きく羽ばたかせ、天に舞い上がる。逃げるわけではなく、まだこちらを攻撃するつもりでいるようだ。

「二人とも、少し離れてて」

「言われるまでもない。あと一応訊いておくが、倒せるのか？」

「余裕も余裕、大余裕。ハルピユイアなんて所詮ザコだよ。世界の幻獣TCGでいうと飛べるだけのコモンカードです。無駄にコスト重いからその手のデッキじゃないと使わないね」

またわけのわからない例えを持ち出してきた。ここはもう突っ込むと負けだろう。

「女！ まずはてめえから八つ裂きにしてやんよウ！」

十メートルほどの上空からハルピユイアが滑空してくる。鋭い鉤爪に緑色の液体が付着しているのを絃也は見た。ハルピユイアの毒だ。

「そんなもんでこのあたしを殺れると？ まったく、力量の差を計れない奴は愚かだね」

余裕綽々とウロはハルピユイアの突進を避け、片翼を掴んだ。そのまま見事なジャイアントスイングへと移行し、投げるのではなく思いつ切り地面に叩きつけた。

奇声を発するハルピユイアに、ウロは撓るような踵落として追撃する。ドゴツ、と普段は聞かないような生々しい音が響き、ハルピユイアはビクンと体を跳ねて吐血した。

しかし、それでお終いになるほどハルピユイアは脆くなかった。両翼で地面を叩いて跳ね起き、その勢いそのまま体を捻って毒爪の蹴りを放つ。

ウロはあれだけで倒せたと思っていただけのだろう、反撃してきたハルピユイアに目を丸くしつつ、毒爪を腕で受け止めてしまった。

「いやあ、今のはちょこつとビックリしたね」

「な、なんなんだ、てめえは」

ハルピユイアの声には明らかな怯えが含まれていた。毒爪が食い込んだと思われたウロの腕は、淡い金色の鱗らしきものでびっしりと覆われていたのだ。毒爪はその鱗に傷一つつけていない。

ハルピユイアの怯えを含んだ視線を浴びたウロは 嘲笑した。

「ウロボロスさんの鱗は硬度10000なのですよ」

「ウロボロス……だと……」

ハルピユアの顔がみるみる青くなっていく。そして勝てないと悟ったのか、ウロから飛び退くやいなや大空へと逃亡した。なんと
いう潔さだ。

「うちの亭主を襲っておいで逃げられると思ってるの？」

誰が亭主だ、というツツコミはどうか心の中だけに止めておいた。今彼女の気を散らすわけにはいかない。

ウロは顔の前で右掌を上に向け、ぐ、となにやら力を込めると、その掌の上にバスケットボールくらいの光球が出現した。ウロはニヤリと口元を歪め、その光球を、振り向くことなく逃走するハルピユアへと投擲した。

光球はまさに光速の勢いでハルピユアへと迫り

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああッ！？」

直撃し、破裂。光が雷光のように広がり、焼け焦げた塊が黒煙を引いて空の彼方へと飛んでいく。

「ふう、ギリギリ結界内でよかつたよ」

わざとらしく汗を拭く仕草をするウロボロス。その腕からは既に鱗が消えており、元の健康的な白い玉肌に戻っている。

もう安全だということを確認し、紘也は彼女に歩み寄る。

「ウロ、お前今なにをやったんだ？」

「ん？ ああ、具象化した魔力に攻撃性を持たせて投げつけただけだよ。気功弾ならぬ魔力弾。魔力さえ制御できれば紘也くんにもできるよ。あ、人間は媒体がいるんだっけ？ 杖とか」

紘也にできるできないはいいとして、聞きたいことはもう一つある。

「あの鱗みたいなのは？」

「真正正銘、あたしの鱗だよ。縮小して纏わせたの。人化時の防御壁。その名を スケイルス 竜鱗の鎧」

中学生がつけそうなネーミングだった。ていうか、超速再生もで

きるのにそれはあまりにもチート過ぎる。頼もしいかぎりであるが、なんか敵が可哀想に思えてきた。

「あー、コホン。紘也、その、なんだ」

「あつ」

後ろで孝一が呆然と突っ立っていた。それもそうだ、あんなマンガみたいなバトルを見せられて混乱しない方がどうかしている。

「どうも、オレ、紘也の親友の諫早孝一です。昨日今日と助けていただき感謝します」

紘也の横に並んで孝一は紳士然とお辞儀した。恥ずかしいことに、どうやら孝一は紘也より冷静だったようだ。

「いえいえ、どういたしまして。いやあ、それにしてもできた御友人だね、紘也くん。爪の垢を煎じて飲んでみてはどうかかな？」

「ジャンケンでパーに勝てるものはなんだ？」

「……ごめんなさい」

右手の中指と人差し指だけ立ててみせると、ウロは一瞬でしおらしくなった。余程目潰しが嫌いなようだ。

「なにをやっているんだ、紘也？」

紘也とウロの遣り取りを見て孝一が怪訝そうに眉を顰める。

「いや、ちよつと調子に乗りやすい蛇を大人しくさせただけだ」

「ウロボロスは蛇じゃなくてドラゴンだよ！ アラビア語でテンニーン！」

「うむ。どうやら、ウロボロスというのは本当らしいな」

孝一の目の色が変わった。「なんで人の姿なんだ？」「それは魔力の消費を抑えて」といった具合に質問会が開催される。我関せずを決め込んでいた紘也だったが、不意に腹の辺りが情けない音を奏でた。

「やば、孝一、早くしないと購買のパンがなくなっちゃうぞ」

「ん？ そうか、もうそんな時間か。愛沙も弁当食べ終わってなければいいが」

孝一はまだ質問し足りない様子だったが、健全たる男子高校生に

とつて昼食抜きは拷問と同義。二人揃って更衣室へと駆け出した。とそこで、ウロが紘也を呼び止める。

「紘也くん紘也くん、ちょっといいかな？」

「なんだよ、手短に話せ」

孝一に先に行くように促し、紘也はウロの下まで戻る。

「昼間でも幻獣は襲って来るんですよ」

「ああ、そうみたいだな」

「学校だろうがお構いなしなんですよ」

「うん、だから？」

制御の利がなくなつた腹が駄々っ子のごとく情けなく鳴いているため、紘也は若干の苛立ちを込めて訊き返した。

「あたしも生徒として学校に入れば今日みたいに出遅れることはないと思うんだ」

「だからそれはお前が立ち読みしてたせいだろうがっ！」

「むむう、それは仕方ないことなんだよ。コンビニの魔力はコタツの次に強いつて知らないの？」

初耳だ。だが、確かに生徒になればフラリと立ち読みに出かけることもできない。逆に近くで彼女の行動を監視できるのだから、悪い話ではないだろう。

「わかつた、好きにしろ」紘也は手を適当な感じに振り、「その代わり、手続きとかは全部一人でやれよ。俺は一切関与しないからな」

「やったイヤッホーツ！ これで憧れの学生生活つてものをエンジョイできますぜい！ ドンドンパフパフ！ 紘也様に感謝感謝」

どうしても紘也の警護がついでにしか聞こえないが、それよりも昼飯だ。午後の授業は非常に頭を使う物理と数学。食い損ねると高確率で死ぬる。

「ところで手続きってどうすんだろ？ ねえ紘也くん、そこだけ教えてくれない？」

「校長に『君カワイイね合格ぐっへっへ』と言わせたらオーケーだ」「オウ！ それはまた簡単ですな！」

勝手に盛り上がっているウロは放っておいて、紘也は着替えるために更衣室へ急いだ。

Section - 10 転入少女

で。

いかなる手段を用いたのか、ウロは同日の最終授業の初めに、蒼洋高校の制服を纏って教壇に立っていた。もちろん、紘也と同じ二年二組の教室である。

「えー、急遽海外からの留学生として本校へやってきた……えーと」「フローラ・ウロボロシユタインです！ イギリスから来ました。もう気軽に『フローラ』と呼ばび捨てちゃってくださいな」

六時間目 数学を受け持つ担任教師・笹本信明（二九歳）
新婚ほやほや（の前置きを引き継ぎ、パールブロンドの外国人美少女が流暢な日本語で自己紹介をした。生徒も先生も『なんでこんな時期に？』ではなく、『なんでこんな時間に？』といった困惑した顔で彼女を見ている。

どうでもいいけど、あの偽名は継続するようだ。

一発ネタだとばかり思っていた紘也であるが、学生として生活するのであれば『ウロボロス』と名乗るのもどうかと思うので文句はない。

そんなことよりも、紘也は時が進むにつれて深刻になる空腹の方が問題だった。

金髪美少女の留学生と騒がしくなるクラスメイトたちを意識の外に追いやり、紘也は机に突っ伏した。結局、購買のパンは入手できなかったのだ。愛沙が待っていてくれたので少しばかりカロリーを摂取することはできたが、余計に腹が減るだけだった。

紘也は恨みがましい視線を隣席の孝一に向ける。こいつだけ購買のラストあんぱんを入手しやがったのだ。もちろん分けてくれなかった。あの時の友情はなんだったんだ。

孝一と愛沙にはあらかじめウロボロスが転入してくることを伝えてあったので、二人はさほど驚いてはいない様子。が、やはりこの

タイミングで来るとは思わなかったようだ。

「じゃあ空いてる席に、と言いたいところだが、マンガみたいに都合よくそんな席はないんだ」

笹本先生が眉をへの字にして頭を掻いている。突然だったから仕方あるまい。

「いえいえ、あたしはあそこで充分ですよ」

花咲くような笑顔でそう言ったウロは 絃也と孝一の間挟まるように腰を下ろした。スカートのまま床に体育座りする。

「よろしく、フローラ」

孝一が臆することなく爽やかに挨拶する横で、

「……ああ、いい天気だ」

絃也は窓の外を眺めて気づかないフリをしていた。決して目を合わそうとしない絃也に、ウロは僅かに朱を差した頬に両手をあてて首を振る。

「んもう、絃也くんってば、こんな美少女が隣にいるからって恥ずかしがることな」

「写真でチーズと言った時に取るポーズは？」

「……コンニチハ、ヨロシク、今日ハイイオ天気デスネ。スシテンブラ」

急に震えた声で片言の日本語を喋り出すウロボロス。絃也の右手は彼女にだけ見えるように机の下でしつかりとV字を作っていた。

「なんだ、お前らの知り合いか？ だったら秋幡、諫早、お前ら空き教室に机と椅子を取りに行つてやれ」

笹本先生が面倒臭げに指名する。少しとはいえ授業をサボれるのはラッキーだ。問題は、戻った後でクラス中からなにを言われるかである。こればかりは空気を読んでくれない。そこは孝一と相談することにしよう。

絃也は溜息、孝一は苦笑して立ち上がり、二人して教室から出て行く。

「あ、わたしも手伝うよう」

愛沙も先生の許可を貰ってついてきてくれた。

「いやあ、皆さん陽気でいい人たちばかりだね」

授業が終わり、早々に教室から退場しようとしたところで、紘也はウロに捕まってしまった。知り合っている理由は、海外にいる紘也の父親関係だとか言って適当に誤魔化した。嘘はついていない。

「だったらその陽気でいい人たちともっと親睦を深めてこいよ」

カバンを肩に担いで紘也は気だるげに言った。廊下に出たところで捕まったため、他クラスの生徒たちが好奇の視線をこちらに向けている。皆、突然だったにも関わらずもう留学生のことを知っている御様子。こういう噂は音よりも速く広く伝播するようだ。

「それですそれですそれなんです！ もっと仲良くなるためにはどうすればいいのかを紘也くんにズバリ訊きたいのですよ」

「はあ？ 普通に話してりゃいいだろ」

「いやいや、このクラスの流行等を前もって知っておけば会話が弾むでしょ？ だからまず、どんな風に話しかければウケを狙えるか教えてくれないかなあ？」

大きな青い目をパッチリとさせ、上目遣いをお願いするウロ。顔が可愛いだけに破壊力抜群である。が、正体を知っている紘也はドキリとするよりも鬱陶しく感じる方が強かった。

「わかった、教えてやる」

「うんうん」

「お前はあの偽名で通すんだよな？ だったら自衛隊風に敬礼して『オッスおらフローラ。趣味は生きたミミズを釣り針にぶっ刺すことでありますげっへっへ』と言えば間違いはない」

「オウ！ 了解しやした！ 早速やってみるよ！」

やるなよ、と内心で呟き様子を見る。ウロは廊下に出てきた女子の一グループに近づくと、サツと右手を斜め四十五度の角度で額へ

持っていき

「オッスおらフローラ。趣味は生きたミミズを釣り針にぶっ刺すことでありますげっへっへ」

「……」

「……」

「……」

めっちゃ引かれていた。紘也は思わず吹き出しそうになるのを必死に堪える。どうしよう、すごく笑える。

「これ以上ないってくらい引かれたよっ!?!」

ウロが肩を怒らせて帰ってきた。ニヤつかないように紘也は表情を整え、ぐっとサムズアップしてみせる。

「心配するな。引かれたのはまだ不完全だからだ。次は流暢な英語で『レッツ・バトル』と連呼しながら匍匐前進ほふくで近づけば万事解決だ」

「オウ！ まさかそんな解決手段が!」

次に廊下に出てきた男女混合のグループに、ウロは言われた通り匍匐前進で床を這いながら近づいて行く。

「ふっ……ふっ……レッツ・バトル、レッツ・バトル……」

「うわああっ!?!」

「な、なにやってるのフローラさん!?!」

「めっさ怖え!?!」

全速力で逃げていくクラスメイトを見て、紘也は笑いを堪えるあまり壁に手をつけて小刻みに震えていた。腹筋が、腹筋がやばい。

「紘也くん！ 実はあたしをからかってるね!」

「いや、そんなことはないぞ。今度は超速回転しつつ」

「コラ！ ダメだよ、ヒロくん」

後ろからの咎めるような声に、紘也は顔の横で人差し指を立てた体勢で固まった。

声の主　鷺嶋愛沙が庇うようにウロの手を引き、自分の背中に隠す。愛沙は普段あまり見る事のない柳眉を吊り上げた顔で紘也を睨んだ。

「フローラちゃんをイジメちゃいけません」

「いや、つい面白くなって」

「なにい！？　やっぱりからかってたんだね紘也くん！？　あたしに友達ができなかったらどうしてくれるの！？」

「正直お前の交友関係がどうなるうと知ったことじゃない」

「ノウ！？　なんとという酷いお言葉！？」

シヨックで大げさに仰け反るウロ。紘也はまたも愛沙に睨まれたのでそれ以上なにも言えなくなった（一応、昼食時の恩があるので彼女には逆らえない状態）。

「大丈夫。わたしがフローラちゃんのお友達になってあげるよう」

「オウ！　天使が、天使がここにいた！」ウロは感涙し、「えーと、あたしがなにか知ってる人……だよな？」

「そうだよ。ウロボロスさんなんだよね？　わたしは鷺嶋愛沙です。よろしくね」

「よろしく、愛沙ちゃん。あ、『フローラ』は偽名なので紘也くんみたいに『ウロ』と呼んでほしいかな」

「わかったよう、ウロちゃん」

なんか女の子同士の友情みたいなものが芽生えていた。そして何気に『ウロ』という愛称も気に入っているようだ。と

「なんだ紘也、面白そうなことするならオレも混ぜろよ」

いつの間にか孝一が横に立っていた。

「そろそろ湧いて出る頃だと思ってたよ、孝一」

「人を黒光りするGみたいに言うな。それはそうと、フローラ、もつとウロボロスについて話を聞きたいんだが」

紘也の言葉に嘆息した孝一は、愛沙と話し込んでいるウロに呼び

かけるが、

「愛沙ちゃん小説が好きなんだね」

「うん。ミステリーとファンタジーが好物です」

呼ばれた本人はまったく聞いちゃいなかった。聞こえなかったと思っただのか、孝一は声のボリュームを上げて再度彼女を呼ぶ。

「おい、フローラ」

「あはは、それあたしも読んだことある」

「フローラさーん」

「でさ、あそこの犯人がさ」

「おーい」

「動機がアホらしくて笑っちゃったよね」

「ウロ」

「はいはい、なんだい紘也くん？」

紘也がそう呼ぶと返事はすぐに返ってきた。愛沙と楽しそうに会話していたので、自分が偽名を使ったことをすっかり忘れていたのではなからうか。

「いいんだ。どうせオレなんてトイレトペーパーみたいに流される存在なんだ。そうさ、よくあることさ、トイレトペーパー現象なんて。ははは」

「そこでグレてる孝一がなんかいろいろと聞きたいんだと」

紘也は廊下の隅で小さくなっている孝一を親指で示した。

「おや？ 彼はそんなに暗いキャラだったっけ？」

壁に指で『の』を書き続けている孝一を見て、ウロはきよとんと小首を傾げた。愛沙がよしよしとあやすように孝一の頭を撫でつつ、ほんわかした笑顔で言う。

「わたしもウロちゃんのこともつと教えてほしいな」

「それは私も知りたいわね」

知らない声に紘也たちは振り返る。ほとんどの生徒が部活やら帰

宅やらでいなくなった廊下を、一人の生徒が紘也たちに向かって歩いて来ていた。

セミロングヘアの前髪を、勾玉に似た白と黒の変わったヘアピ
ンで留めた女子生徒だった。双眸は猫のように大きくて吊り上がっ
ているが、顔立ちはアイドルが嫉妬しそうなほど整っている。左上
腕には『風紀』と刺繍された緑色の腕章を巻いていた。

「風紀委員がなんの用だ？ 別に通行の邪魔になんてなってないと思
うぞ」

「秋幡紘也、あなた、一体なんのつもりなの？」

「は？ いきなりなんのことだよ？」

目の前で立ち止まった彼女がなにについて問うているのかわから
ず、紘也は眉を曇らせる。すると、グレ状態から復活したらしい孝
一が口を開いた。

「五組の葛木香雅里だな。風紀委員長の仕事ご苦労様。でもオレた
ちはなにも悪さしてないぜ。なあ？」

孝一がウ口と愛沙に振ると、二人ともコクコクと頷いた。それよ
り『葛木』という苗字には非常に引かかるものがある。

「風紀委員は関係ないわよ。ていうか悪さしてないってよく言える
わね。昨日の夜中に墓地で騒いでいたのはあなたたちでしょ？」

その言葉で紘也はピンときた。

「あんた、もしかして陰陽師の？」

紘也が言くと、彼女 葛木香雅里は「知らなかったの？」と意
外そうな顔をした。反応からして、どうやらこちらの素生は知悉し
ているようだ。

「そうよ。私は葛木宗家の長女、次期宗主候補の葛木香雅里。これ
でもう、私かなにを言いたいのかわかってもらえたかしら？」

「いいや、さっぱり」

肩を竦めて首を振る紘也に、香雅里は片眉をピクつかせた。

「なんで妖魔 あなたたちでいう幻獣が生徒として学校にいるの
かって言いたいのよ！」

ビシッと犯人を示す名探偵のように香雅里はウロを指差した。なるほど、苛立っている原因はそれらしい。幻獣ウロボロスは陰陽師にとつて警戒すべき存在なのだろう。

「ウロちゃん、正体バレてるね」

「うんまあ、そうみたいだけど。別にいいよ。あたし野良じゃないし」

ウロは楽観的に様子を見ている。自分のことだというのに説明する気はないらしい。というより、香雅里は契約者である紘也に説明を求めている。面倒だが、さらなる面倒事を避けるためには仕方ない。

「ああ、こいつがここにいるのは」

「待って」

説明しようとした紘也を香雅里は制止した。彼女の視線の先には演劇部と思しき生徒たちが衣装を持って移動していた。

「場所を変えた方がいいわね。ここじゃ一般生徒にも聞かれてしまいわ」

そう言つて、香雅里は踵を返す。

「屋上に行きましょう。話はそこで聞くわ」

蒼洋高校の屋上は昼休みのみ生徒に開放される。だから放課後であるこの時間に他の生徒がいるということはない。

昼休み以外は鍵がかけられるのだが、その鍵の管理は風紀委員が行っているのか、香雅里がジャラリと取り出した鍵束の中の一つがそれだった。

「 というわけなんだ」

紘也はどういう経緯でウロボロスがここにいるのかを簡潔丁寧に説明した。まさか今日一日で二度同じ話をするとは思わなかった。当の本人は話に加わる気ゼロであり、最初から向こうで孝一や愛沙と楽しくメルアド交換なぞしてやがる。

「なるほど、あの秋幡辰久の契約幻獣か。それで、今はあなたと契約していると。確かに魔力供給のパイプラインが構築されてるよね」

香雅里はなにやらメモ帳に書き込んでいる。まるで警察の取り調べみたいで気分が悪い。

「昨夜に一回、今日の昼頃に一回、強力な個種結界が張られてたけど、それもあなたたちの仕業ね？」

紘也は無言で頷く。あらかた話したのにまだ解放される気配がない。

「この辺りは私たちの管轄なの。勝手に暴れられると迷惑なんだから」

「仕方ないだろ。こっちだって命かかってんだから」

「あのウロボロスが結界を張ってなければ、私が助けてあげたわよ。まったく、今日だって？無限？の特性のせいで結界内に入れても中心まで辿りつけなかったのよ。迷宮を攻略してる気分だったわ。おかげでお昼食べ損なっただし」

なんだろう、取り調べが一方的な愚痴に変わった気がする。そう

感じていると、彼女の腹部辺りが、きゅるる、と可愛らしく鳴いた。

「……」

「……」

「……聞こえた？」

「ばっちし」

かあああ、と羞恥で顔を真っ赤にした香雅里に紘也は蹴り倒された。

「そつよお腹減ってるのよ悪かったわね私だつて人間だもん空腹に勝てるわけないわよこの苛立ちはそのせいに決まってるわつまりはあなたたちのせいなのわかった？」

「わかった、わかったから蹴るのやめろよ！」

無呼吸で捲し立てながらげしげしと蹴り続ける香雅里から紘也は転がって脱出する。集中攻撃を受けていた横腹のダメージが深刻だ。

「ふん、実はけっこう嬉しいんじゃないの？ Mっぽい顔してるし」

「それは違うね」

不機嫌そうに鼻を鳴らす香雅里の前にウロが立ちはだかった。孝一と愛沙もいる。どうやら香雅里が暴力行為に出たため心配して来てくれたようだ。

「紘也くんがMだつて？ 和風魔術師の目は節穴なんじゃあないの？」

「？」

「な、なによ」

挑発的なウロに香雅里はたじろいだ。紘也は「大丈夫？」と訊いてくる愛沙に「問題ないよ」と答えながら二人の様子を見

「紘也くんはSです！ サドです！ サディストです！ それも隠れSなのです！ あたしがちよいとお茶目しただけでこんな風に両目をぶすつとぎゃあああああッ！？」

隠れSの辺りから紘也の手がオートで動いていた。瞬速の目潰し攻撃は孝一や愛沙はおるか、陰陽師の香雅里にすら捉えることができなかつたようだ。

「あうう、なんか一段とレベルアップしてるんだよ」

「まあ、なんとなくコツを掴んできたな」

それはそれとして紘也がSとは心外だ。目潰し攻撃をするのは、刺した時の悶える姿が痛快。ではなく、調子に乗った彼女を鎮めるために必要なだけだからだ。

「今のはヒロくんが悪いよ」

「そうだな。彼女に謝るべきだ」

「やかましいぞ、外野」

「ウロちゃん、ほら、痛い痛い飛んでけえ」

「ありがとう、愛沙ちゃん。愛沙ちゃんだけがあたしの味方だよ」

「あれ？ オレは？」

「トイレットペーパー現象だな」

「おふっ！ 紘也、大変だ、オレの心が壊滅的ダメージを」

「ちよつとあなたたち黙りなさいよっ！！」

声を荒げた香雅里がフシャーッ！ と猫みたく紘也たちを威嚇していた。

「あ、まだいたの、和風魔術師」

ウロが冷め切った視線を彼女に浴びせる。

「ふ、ふふふ、どうやら喧嘩売ってるみたいね！ いいわ。いいわよ。やってやるわよ！」

香雅里は懐から五枚の護符を取り出すと、聞き取りづらい呪文を唱えてそれらをばら撒いた。瞬間、宙に舞った全ての護符が等身大のサムライに変化した。

式神と呼ばれる陰陽師の使い魔だ。全身真っ白で顔は目鼻口の無いのつぺらぼう。どうも素材は紙のままらしいが、戦闘用の式神ならばその実力は計り知れない。それを一度に五体。香雅里は葛木家の次期宗主候補と言っていた。陰陽師としての実力はトップクラスなのだろう。

ちよつと無視する形になっただけなのに……彼女の堪忍袋の緒は非常に脆く繊細にできているらしい。

「落ち着けよ葛木！ なんてこうなるんだよ。争う必要はないだろ」

「私は落ち着いてるわよ」極めて冷静な声で、香雅里。「決闘よ、ウロボロス。私が勝ったらもう学校には来ないでちょうだい。妖魔が近くにいと目障りなの」

決闘の理由がすこぶる自己中だった。彼女は妖魔（＝幻獣）に嫌な思い出でもあるのだろうか。

「ウロ、お前とりあえず謝れよ」

「えー、そんなことするくらいなら戦って勝ちますよー」

唇を尖らせるウロにはもう一発目潰しをくらわしてやるうかと思つた。思つたところで、紘也はなにか見えない力に弾かれた。ウロと香雅里から遠く突き放されてしまう。

見ると、孝一と愛沙も同様に弾かれていた。二人は「うわっ」「きゃっ」と悲鳴を上げながら屋上の床を転がっている。

「く、一体なにが……!?!」

紘也は腹部に一枚の護符が貼りつけられていることに気がついた。式神のものとはまた違った護符。これが対象に衝撃を与えて吹き飛ばしたのだ。

「あなたたちはそこで見物してなさい」

紙のサムライに囲まれた香雅里が言う。彼女とウロの周囲には、さらに別の護符が辺で繋ぐと立方体になるように展開されていた。あれは恐らく結界。人払いや認識阻害ではなく、空間を遮断して内部を隔離するためのものだろう。

「ウロちゃん！ カガリちゃん！ 喧嘩はよくないよう！」

「紘也、どうにかならないのか！」

孝一たちも認識できているのが証拠だ。なんにしても容易に侵入できるものではない。

「ダメだ。結界が張られている。俺らはこれ以上近づくとさえできないようだ」

逆に考えれば、紘也たちの安全は保障されている。コロシウム気分で観戦していると言っているのだ。もしかしたら、向こうにはもう声も届かないのかもしれない。

既に戦闘は始まっている。紙のサムライが時代劇のようにウロを
取り囲み、複数体同時に交代しながら休みなく斬りかかっている。

「ウロちゃん！ カガリちゃん！ もうやめようよう！」

愛沙は泣きそうになりながら二人の名を叫んでいるが、ウロの心
配の方が強いだろう。この短時間で相当仲良くなっただけだから。
孝一はウロの心配をしつつ、どうにかして決闘をやめさせる方法
を考えている様子だ。面白いことには絶対賛成の彼だが、流石にこ
の決闘には面白さを感じないのだろう。

そして紘也は

「あいつ、やり過ぎて葛木殺さないよな？」

ウロボロスの心配なぞ微塵もしていなかった。

「うんうん、紘也くんのあの顔はあたしを心配してる顔だね」

盛大に勘違いしていることにも気づかず嬉しそうに笑うウロボロス。そこに、式神の一体が後ろから紙製の刃を振り下ろす。それをウロボロスは体を捻ってかわし、頭部に裏拳を叩き込んだ。パン！と風船が割れるような破裂音と同時に式神は消滅する。

それが、四体目だった。

「あのさ、こんな紙人形じゃあたしに掠り傷一つつけることもできないよ？」

表面上は飄々としているが、ウロボロスは紘也たちに戦闘から遠ざけるためとはいえ乱暴を働いた陰陽師に怒りを覚えていた。契約者である紘也はもちろん、あの一般人の二人も自分を受け入れてくれた特別な存在なのだ。故に、彼らを傷つけた彼女にはお仕置きが必要だ。

最後の式神に守られる葛木家の陰陽師は、素手で他の式神たちを殲滅した幻獣をしばらく観察するような視線で見据えていた。そして不意に、口元をフツと緩ませる。

「別に侮ってるわけじゃないわ。少しでもあなたの能力を見ておきたかったの。もっとも、ただの格闘戦でやられたから意味なかったけれど」

ポン！ と愉快的な音を立てて香雅里の盾となっていた式神が破裂する。

式神を消した？ もっとランク上のやつを出すのだろうか？

そう推測したウロボロスだが、違った。

弾けた式神の破片が消滅せず空中で静止、そのまま無数の刃となつてウロボロスに襲いかかった。素手じゃ捌き切れない。そう判断してウロボロスは横に飛んだ。

「はっ！」

しかし、香雅里が胸元で印を結ぶと全ての刃がほぼ直角に方向を変えた。予想外の動きに、ウロボロスは刃の雨に打たれてしまう。

「あぐっ……」

「フン、まさかその程度でお終いつてわけじゃないでしょうね？」
「まさか。それよりせつかく用意した制服がズタズタになっちゃったよ。どうしてくれんですか？」

ウロボロスは自分の姿を見て悲嘆した。制服の衣服としての機能が最低限になってしまったため、下着や肌やらが男子が喜びそうなくらい露になっている。とはいっても、戦闘が始まると同時に個種結界を張ったのでそのうち再生するけれど。

「ようやく妖魔の姿を現したわね」

ウロボロスを覆う金色の鱗を見て香雅里が満足げに言う。ウロボロスが無傷だったのはこの 竜鱗の鎧 のおかげだ。

「いやいや、まだ九割は『人化』のままだよ」

「だったら全部解いちゃいなさいよ。その方が私も人の姿より戦いやすいから」

「んと、これ紘くんにも言ったんだけど、あたしの本来の姿は大き過ぎてこの街を押し潰しちゃうかもしれないだよ」

ぽりぽりと頬を搔きながら困り顔で言ったウロボロスに、香雅里は僅かながらも戦慄したようだ。瞠目し、冷や汗を垂らしている。

「そう。流石はウロボロス ? 無限?の大蛇ってことね」

「そこ勘違い! あたしは蛇じゃなくってドラゴンタイプなんだよ!」

「どっちでもいいわよ、そんなの。あなたが妖魔であることには変わりないし」

くだらなそうに言いながら、香雅里は次の護符を取り出した。式神でもなければ周囲に張つてある結界のものでもない。紘也たちを吹き飛ばしたものとも梵字が異なっている。

「 来なさい、 天之秘剣・冰迦理^{あまのひつるぎ}」

香雅里が唱えるように呟いた瞬間、護符を中心に方陣が展開し、

細長い物体がそこから伸びてきた。それを香雅里は掴み、一気に引き抜く。

日光を青白く反射する、見事な反りをした日本刀だった。

「なるほど、陰陽剣士とかいうやつですか」

「そうよ。元々、葛木家は小手先の術には頼らないの。余裕ぶつてられるのも今のうちよ」

日本刀を刺突に構える香雅里。と、その姿が一瞬ぶれた。かと思った時には既に香雅里はウロボロスの眼前まで迫っていた。

人間にしては、速い。

まだ彼女を侮っていたウロボロスはかわすタイミングを逸した。

銀の閃光がウロボロスの首を貫く。直前、ウロボロスは鱗化した右腕でそれを弾いた。

だが

「痛っ……」

掠り傷程度ではあるが、ハルピユアの毒爪も防いだ強靱な鱗の鎧がすっぱりと斬り裂かれていた。僅かに赤い液体も流れている。ただの刀ではないとは思っていたが、どうやら厄介なレベルの業物らしい。

「このっ」

反撃しようとして右拳を振るうも、簡単にかわされる。とその時、ウロボロスは右腕に違和感を覚えた。

手が、思うように動かなかつたのだ。

見ると、？再生？するはずの傷がまだ残っていた。しかもそれだけではなく、流れていた血が変色しないまま固まり、傷口辺りから異様な冷気を感じる。

「凍ってる」

そう、ウロボロスの右腕はまるで霜が降りたように凍結していたのだ。

距離を取った香雅里は日本刀を一振りして僅かに付着した血を払い、

「どう？　口で説明するより体験した方がわかりやすいでしょ？」
「斬った場所を凍らせる能力かな？」

「正確には、斬った場所の周辺魔力を問答無用で氷結させる能力よ。葛木家の宝剣の一つ　天之秘剣・氷迦理　。妖魔にとってはきつい力のはずよ」

確かに幻獣はマナの乖離を防ぐために全身に魔力を巡らせている。それはウロボロスとて同じだ。魔力で『人化』しているのだからなおさら影響を受けてしまう。

「ふうん、なかなかやるじゃん」

「次は全身を氷結させてあげるわ」

あの刀は想像以上に厄介だ。凍らされたら？再生？は役に立たないし、　竜鱗の鎧　にも傷がつくのだから下手に受けるわけにもいかない。

「いやまあ、でもでも、斬られなければいいだけの簡単な話だよね」
「なによ、全部避ける気？　それとも得物を奪う気かしら？　後者だとすれば残念、　氷迦理　は手離しても持ち主の意思で手元に帰って来る術式が組み込まれているの」

「いえいえ、そうじゃないですよ」

ウロボロスは凍っていない左手を真横に伸ばす。すると次の瞬間、左手の先端の空間がぐにやりと歪んだ。そしてそこから、まるで光学迷彩を解除したかのように一振りの大剣が出現した。

淡い金色をした、透き通った刃の両刃剣である。トパーズを削って剣にしたような美しい刀身には、ルーン文字に似た紋様が刻まれている。

ウロボロスは『人化』した自分の身長よりも巨大な剣を軽々と肩に担ぐ。

「フッフッフ、これは知り合いのドワーフを脅しゲフンゲフン！」

協力してあたしの鱗から鍛え上げた至高の剣。その名を　スケイルソード　竜鱗の剣

。またの名を　ウロボロカリバー　！　欠けても？再生？するから刃こぼれしない優れもの！？永遠？に使えますよ！」

ちなみに個人的には後者の名称がお気に入りでたりする。ベストチヨイス。

自信たっぷりウロボロスに対し、香雅里はつまらなそうに鼻で笑う。

「まさかそれで戦う気？ 蛇なら蛇らしい戦い方をしなさいよ」

「ああもう！ 紘也くんといいあんだといい、あたしはドラゴンだつてーの！ 蛇の姿が一般的なのは、昔どっかの錬金術師が初めて象徴としてウロボロスを描いた時、手足と翼が書きづらかったって理由で省略されただけなんだよ！」

「それはお気の毒ね。でも私には関係ないわ。妖魔はただ滅ぼすのみよ！」

語気を強めに言い終わるやいなや、香雅里の姿が消えた。あの常人離れた動きは恐らく魔術による肉体強化。並の幻獣では目で追うことも叶わないだろう。葛木家がどのくらいの名家かは知らないが、次期宗主候補と名乗っただけのことはある。だが

「余裕で見えるね」

ウロボロスは、並の幻獣ではない。

ザキーン！ と不思議な金属音が鳴り響く。右側からの斬撃を、ウロボロスは左手の大剣で器用に防いでいた。使えない右手側からの攻撃は防がれないと思っていたのだろう、香雅里は驚愕に目を丸くしている。

「よ、よく防げたわね」

「あたしは両利きなんでね」

ブオン！ と腕力に任せて ウロボロカリバー を振るう。武器の重みの差もあり、香雅里は簡単に組み合った状態から弾かれた。

一息の間もなく香雅里はまた消えた。そして今度もウロボロスの死角から 冰迦理 の刃を閃かせる。背後からの攻撃だったが、やはりそれもウロボロスは太剣で受け止めた。

「くっ」

香雅里は呻き、さらに何度も何度も攪乱するように様々な方向・

角度から斬撃を加える。しかしそのことごとくをウロボロスは防ぎ切る。無数の剣戟音。香雅里の動きは人間にしては速い。だが、ウロボロスにとつてはそうでもないのだ。

「ふああ……ねえ、そろそろ飽きてきたんだけど？」

ウロボロスは欠伸を噛み殺すことさえしない。最初は目と気配で香雅里を追っていたが、今ではもう気配だけで充分だった。

ようやく止まった香雅里は息を切らせつつ戦慄していた。

「なんで、なんで傷もつかないのよ、その剣。少しでも斬れば氷迦理 の能力が発動するの……」

「フッフ、残念ながらこれを鍛えたあたしの知人は幻獣界屈指の名匠でね。その鍛え上げし剣はどんなナマクラでもベヒモスに踏み潰されたくらいじゃ欠けもしないって評判なのですよ」

中でも ウロボロカリバー は傑作中の傑作に違いない。この完全無敵たるウロボロスの鱗が使われているのだから当然だ。なんか遠くから「ついにアイテムまでチートだ！」とかいう紘也っぽい叫びが聞こえた気がする。きっと気のせいだろう。

「だったらいいわ。戦術を変える」

香雅里は息を整えると、両手持ちした 氷迦理 を中段に、刃を床と水平に構える。そして小さく短く呪文を唱えた。

刹那、刃の先に貯水タンクほどもある巨大な氷塊が出現した。それは槍のように先端を尖らせ、ウロボロスに向かって射出される。

「へえ、あの刀、装備者の魔力を喰らって力を発動させることもできるんだね」

簡単な分析をしつつもウロボロスは大剣を握る左手に力を込める。砲弾のごとく迫りくる巨大な氷槍。それを、掬い上げるような一閃で真つ二つに砕き割った。

所詮はこの程度、と勝ち誇るウロボロス。

その眼前数センチのところに 氷迦理 の剣尖があった。

「おわつと！ 危ないなあもう」

が、紙一重でかわす。

「嘘っ！？ 今のなんで避けれるのきやあつ！？」

隙のできた香雅里をウロボロスは大剣の腹で横薙ぎに殴りつけた。手加減はしたものの、ワンバウンドした香雅里の体は落下防止用のフェンスをぐしゃりと変形させた。

「うわ、大丈夫かよあれ」

紘也は吹き飛ばされた葛木香雅里を見て肝を冷やした。

ウロに殺す気がないのは戦いを見てわかった。だが、軽く病院送りにしてしまいそうに紘也は不安だった。

「葛木もすごいが、フローラの強さは次元が違うな。流石は紘也の親父さんの幻獣だ」

自分では結界を破ることはできないと判断したためか、孝一は実況者のように戦いを分析している。どうでもいいことだが、『フローラ』と呼び続ける限りいつまでも進展しないとと思う。

「ウロちゃん、そんなの持ったら危ないよう」

愛沙はどこかずれている。あのチート剣をどこから取り出したのか？ とか、ウロボロカリバー ってなんぞや？ とか、突っ込みたいことは山ほどあるというのに。ちなみに向こうからの声はほんやりとだが届いていた。

「とにかく、葛木の結界をどうにかしないと……」

屋上全域を包むように張られたウロボロスの個種結界は、契約者である紘也には影響しない。幻獣に関する魔術書にそう記載されていた。つまり、ここから先に近づけるのは紘也だけだ。

あまり、こういうことはやりたくないのだが……。

紘也は魔術を使えない。しかし一つだけ、習得した技術を持っている。

母に病院生活を余儀なくさせたのは、紘也の魔力が暴走したからである。

そのため、紘也は自分自身の罰として魔術を習うことをやめてしまった。

でも、それだけでは事足りないと思った紘也は、必死になって修行した。

二度とあのような事故を起こさないために。

二度と他の誰かを傷つけないために。

己の魔力を完璧に制御する方法を。

「うう……」

恐らく数秒の間だっただろうが、葛木香雅里の意識は途切れていた。

それすなわち、香雅里の敗北を意味している。そう認めると急激に悔しさが込み上がってきた。

祖父と兄以外に負けたことなどなかった。相手が人外であってもそうだった。

でも、負けた。圧倒的な実力差で。

「まだやる？ まあ、あたしはいいんだけど、これ以上やっちゃうと紘也くんの目潰しが怖いんだよねえ」

目の前に透き通った黄金の大剣が突きつけられる。似たような色の髪をした少女が、片手で軽々とその大剣を握っている。ウロボロスの個種結界が働いたのか、引き裂かれたはずの制服は修復されていた。氷迦理 で凍らしたはずの右腕も既に治っている。

「妖魔に敗れるなんて屈辱的ね」

自虐的に香雅里は笑う。

「オウ。つまり負けを認めると？」

「そうよ、私の負け。 殺しなさい」

「いやいやいや、殺しちゃまずいでしょ」

さつとウロボロスは剣を引いた。殺されなかったことに香雅里は不覚にもほっとしてしまった。

直後

周囲に張り巡らせた結界の護符が、一斉に弾け飛んだ。

「おや？ 和風魔術師の結界が解けたようだね。なら、あたしの方も解きますか」

もう戦意がないことを示した、ウロボロスはそう捉えたようだ。

しかし、香雅里は違う。

「私、なにもしてないわよ？」

誰かが結界を破ったのだ。そしてその誰かとは、香雅里とウロボロスを除けば一人しか考えられない。

「戦いはそこまでだ」

世界魔術師連盟の大魔術師・秋幡辰久の息子 秋幡紘也その人である。約十年前の事故で魔術師になることを諦めたはずの彼が、一体どうやって……？

「葛木、負けを認めたのならウロが学校へ来ても構わないよな？」

「……ふん、勝手にすればいいわ」

素っ気なく返す。と、彼に遅れて一般人の二人 確か諫早孝一と鷺嶋愛沙 が駆け寄ってきた。ウロボロスの個種結界が解除された証拠である。

「よかったね、ウロちゃん」

「当然の結果だよ。これで晴れて一緒に学生生活をエンジョイできるね、愛沙ちゃん」

「なあ、フローラ、その剣についてなんだが」

なんでもない日常みたいな空気がそこにできていた。馬鹿らしい、と香雅里は思った。自分はこんな性格だからあのような馬鹿話をする友達などいない。そもそも、子供の頃から自分とは違う貧弱な一般人とつるむことを香雅里は拒んでいた。だから羨ま ではなく、妖魔のくせに一般人と馴染んでいるのが苛立たしい。

むすつとした顔でいると、手が差し伸べられてきた。秋幡紘也だ。

「んなあ！ なにしてんだい紘也くん！ あたしという妻がありながら他の女に手を出すなんてムツキヤーツー！！」

「誰が誰の妻だ！ てか、さっきから目のやり場に困ってるんだ。早く立ってくれないか？」

目を逸らし、どこかバツが悪そうに言う秋幡紘也。なんのこともかと思つて香雅里は自分の状態を確認すると スカートが思いっ切り捲れ上がっていた。

バツとスカートを手で押さえ、彼の手を借りずに自力で立ち上が

る。困ったように頬を掻く彼に、少し涙目で言う。

「……見た？」

「ばつちしぶはあつ!？」

鳩尾に渾身の拳を叩き込む。くの字になった紘也はその場に膝をついた。やはり先程結界を破られたのはなにかの偶然に違いない。

「ところで、一つ訊きたいんだけど、あんたはなんで幻獣を嫌ってるんだ？」

起き上がった紘也が訊ねてくる。別に話す必要なんてないけれど、気が動転していたのかもしれない、香雅里の口は勝手に開いていた。「妖魔は私の兄様を奪ったのよ」

「あつ………なんというか、悪いこと訊いたな。すまん」

紘也は目を伏せて謝ってきたが、香雅里は続ける。

「兄様も兄様よ。あんな妖魔の女に誑かされて駆け落ちするなんて本当は兄様が葛木宗主になるはずだったのに、私や家のことなんてなにも考えてないんだわ。それもこれもあの妖魔のせいなのよ。ああもう、思い出すだけで殺意が湧く。あの妖魔の女、今度会ったら細胞単位で斬り凍らしてやるわ!」

ギリギリと恨みの籠った歯軋りをする香雅里。ふと気づくと、周りが戸惑ったような表情で一步引いていた。なぜだろう。特におかしいことは言っていないのに……。

「これは、意外なところでブラコン疑惑が浮上したな」

と諫早孝一。

「いやあ、こんな堅物そうな人が『兄様あゝ』ってのは萌えポイントだよ」

そう、ウロボロス。

「ああ、葛木、その、なんだ………頑張れよ」

なんか憐憫にも似た視線で香雅里を見る秋幡紘也。

「そうだよ。家族がいなくなるのは悲しいことだもんね。でも大丈夫。生きていればきっといつか会えるよう」

一人だけ他と対応の違う鷺嶋愛沙。こっちはこっちで視線に別の

痛みを感じるのはなぜだろうか？

「なによ！ 私になにか変なこと言った？」

「……いや、別に」「」

鷺嶋愛沙以外の三人が声を揃えて首を振った。なんだか非常に腹が立つ。

「おー、そうだそうだ」思い出したように、ウロボロス。「あたしが勝った時の条件を言ってなかったね」

「は？ 学校に来ることを許可したじゃない」

「それはそちらが負けたから必然的にそうなっただけだよ。そうだなあ、どうしてもらおうかなあ」

ニヒヒ、と嫌らしい笑みを浮かべてウロボロスは思案する。香雅里はなんとなく身の危険を感じて自分の体を抱き締めた。

「よし、決めた」

ポンと軽快に手を叩く。ウロボロスは嫌らしい笑みから楽しげな笑みにシフトし

「あたしとお友達になってくださいな」

言っている意味がわからなかった。

蒼谷市は全国有数の港町でもあり、その西側は海に面している。大型のフェリーから小さな漁船まで、船舶の往来は絶えることを知らない。

そんな港にある道と言えるかも怪しい倉庫と倉庫の間を、幻獣ハルピユイアは身を引きずるようにして歩いていった。

「あんのガキ、あんなやばい幻獣連れてやがったのか。クソツ！」
忌々しげにハルピユイアは悪態をつく。幻獣ウロボロス。アレは本当にやばい。ドラゴン族の強さは幻獣界でもトップクラスだ。策もなしにハルピユイアのような一幻獣が敵う相手ではない。

「つか、マジで死ぬかと思った」

ウロボロスが最後に放った魔力弾は、かろうじて直撃を避けることができた。正確には向こうが勝手に外したただだが、それでも威力はとんでもなかった。ハルピユイアが数キロ離れた港までぶっ飛ばされたくらいだ。

空も飛べないほどダメージを受けたものの、こうして生きていることは幸いだった。個種結界に付与された？逃走？の特性　人々からかつて退散する時や自分より強い相手との戦いを避けるためのおかげだろう。それにぶっ飛んでいる間も結界のおかげで騒ぎになっていない。この街には世界魔術師連盟に加入している強力な陰陽師の一族がいるらしいので、できるだけ派手には振舞いたくないのだ。

「ウロボロスとは殺り合いたくないが、あのガキどもには復讐しないと気が済まねえ」

なんの力もない人間に反抗されたことがハルピユイアは気に食わなかった。だが、復讐するならばウロボロスをどうにかしなければならぬ。非力なハルピユイアが真っ向勝負を挑んでも勝てないことは立証済み。癪だが、このまま逃げるといいうのも一つの手である。

「どつちみち、この体じゃ無理だ」

一旦『人化』してこっそり人間を喰らいながら魔力を蓄え、傷の回復を待つ。その間にウロボロスを退けるための作戦を練る。そうするしかない。

「見てやがれ、ウロボロス。てめえの主人はアタシが喰らってやる」
泣き喚くウロボロスの姿を想像した　その時だった。

「今、ウロボロスと言ったぎゃ？」

「いったいった」

「……重要な情報」

そんな声が出たかと思うと、上空から三人の少女が降ってきた。

「あんだ、てめえら？」

十二歳くらいの少女たちは、結っている髪的位置が違うだけで同じ顔をしていた。ただの少女でないことは一目でわかる。三人とも、背中から小悪魔みたいな翼を生やしているからだ。飾りではない、こいつらは半人化状態の幻獣だ。

「ウロボロスのことは旦那様に報告するぎゃ」

「ほうこくほうこく」

「……ウロボロスの契約者、おいしそう」

三者三様の口調で話し合う少女たち。まるで目の前にハルピュイアなどいないかのような態度だ。殺してやりたいところだが、現在の自分では恐らく返り討ちに遭ってしまう。

「おいてめえら、あいつらはアタシの獲物だ！　他をあたれ他を！」
ハルピュイアの言葉に耳を貸すつもりなど毛頭ない、三つ子の顔にはそう書いてある。

が、返事はあった。

背後から。

「悪いけど、それはもう僕の獲物だよ。君みたいな弱い幻獣には早々に退場してもらわないとね」

振り返る　暇はなかった。

ハルピュイアは自分の背中から胸にかけて違和感を覚えた。視線

を下げると、ハルピユイアの豊かな胸から白く細い腕が生えていた。真つ赤な血を付着させて。

それを認識した途端、ハルピユイアの違和感は激痛へと変化した。汚く悲鳴を上げてその場に崩れ落ちる。

「旦那様、いらしてたんですぎゃ？」

「いらしてたいらしてた」

「……報告の必要なし」

歡喜の表情を浮かべる三つ子に、旦那様とやらが妙な韻を含ませた口調で労う。

「ムル、シエ、ラゴ、三人ともご苦労様。早速だけど、他の仲間たちを連れて標的の捜索に向かってくれないかい？」

「了解ですぎゃ、旦那様」

「りょうかいりょうかい」

「……了解しました」

ムル、シエ、ラゴと呼ばれた少女たちは翼を広げて飛び去った。

「さて、君に止めを刺してあげないかね」

ハルピユイアは、暗転していく意識の中で？旦那様？の姿を瞳に映す。

「て、めえ、は」

数秒後、ハルピユイアの肉体にマナの乖離が始まった。

Section - 14 忍び寄る闇（後書き）

一章終わりです。

S e c t i o n - 1 5 放課後の寄り道（前書き）

第三章

Section - 15 放課後の寄り道

「来い、来い、来い」

慎重でいて、どこか高揚した感のある声が葛木香雅里の口から刻まれている。

「いやまあ、俺も楽しいからいいんだけどさ」

紘也は若干の呆れを孕ませた口調で呟いた。その小さな声音は周囲の喧騒に掻き消されて誰の耳にも届いていない。

「来い、来い………！ やった！ また一つ取れたわ！」

蒼洋高校の風紀委員長が、葛木家次期宗主候補が、ゲームセンターのUFOキャッチャーに馬鹿みたいに熱中していた。景品のペンギンらしきぬいぐるみをうつとり見詰めて「……きゅー」と漏らしている彼女と、三十分前にウロと決闘していた彼女とはもはや別人の域だ。

「カガリちゃんすごい！ わたしなんて一個も取れてないのにい」

「べ、別にすごくないわよ。こんなの普通よ、普通」

誉められ慣れていないのか、香雅里は頬を桃色に染めて愛沙から目を逸らした。多種雑多なぬいぐるみが詰められた紙袋を抱いている彼女は、どこにでもいる普通の女の子にしか見えない。

「一応、俺ら、来週からテストなんけど？」

紘也の呟きはやはり、騒音の中へと消えゆくだけだった。

「あたしとお友達になっってくださいな」

事の発端はその一言から始まった。

「は？ 友達？ 妖魔とそんな関係になれるわけないじゃない。馬鹿みたい」

最初はそんな風に突っ撥ねていた香雅里だったが

「陰陽師だって妖魔を式神として使ったりするんだらう？ 友達くらいになれるさ」

「ウロちゃんのお友達なら、わたしのお友達だよ」

「ちよつと、纏わりつかないでよあなたたち！」

この悪友たちは一旦絡みつくとスツポンのように離れないのだ。紘也はもうなるようになれと遠くから見守ることにしていた。

「はい、仲直りの握手だよ」

「オウ、それいいね愛沙ちゃん。なんかこう、？昨日の敵は今日の友？みたいな」

「ちよ、わ、私は妖魔が大嫌いなものよ！」

「彼女は葛木兄を誑かした奴じゃないんだろ？ 彼女を憎く思うのはお門違いだ」

そのまま強引に握手が交わされて友好条約が締結してしまった。本人の意思は完全無視。紘也は心中で香雅里に黙禱を捧げていた。

「よし、せつかくだからこのままみんなで遊びに行こうぜ」

「コウくん、わたしそれ大賛成だよ」

「ほらほらかがりん、行きましょ行きましょ」

「かがりんってなによ！ いや、ちよ、待って、私まだ仕事がある」

困惑する香雅里を引きずるようにして、紘也たちは学校を後にしたのだった。

そして、久々に駅前のゲームセンターへ行こうという孝一の提案が採用された。

もちろん、風紀委員長としての自覚のある香雅里は渋った。だがそこは孝一が『学校帰りにゲーセンへ寄ってはいけないなんて校則はないぜ』とか屁理屈じみたことを並べて説得してしまった。本当に、こういうことになるかと孝一は強い。

で

「カガリちゃんこれで十個目だよ」

「に、人形たちがこの狭い箱に乱雑に閉じ込められてるから、私が助けてあげただけよ」

それが一体なんの言い訳なのかは知らないが、彼女はぬいぐるみ

が詰まりに詰まった紙袋を片手に頬を上気させている。ゲーセンには行ったことないと言っていたから、その楽しさに目覚めたのだろ
う。

「ぬわあああああつ!? なぜ、なぜ勝てない。幻獣界で? 閃光のウロボロス? とまで言われたレースゲーマーのあたしが……」
「これで十五連敗だな」

あちらではウロがレースゲームの前で床に手をつけて沈んでいた。その横で孝一が勝ち誇っている。やっぱりウロは最強のゲーム音痴だ。才能としか思えないほどに。

「こつなつたら紘也くん、勝負だよ! 負けたらプリクラ一緒に撮ってもらおうからね!」

「わかった。受けて立つ。負けてもプリクラは撮らないがな」

孝一と交代して座席につき、コインを入れてハンドルを握る。画面に勢いよく『GO』の文字が表示されてレース開始。紘也は数あるゲーセンのゲームの中でも特にレース系は得意だった。だからコースを走りながら余裕を持って隣に話しかけられる。

「ウロ、なんだって葛木にあんなこと言っただんだ?」

「あんなこと、とは?」

「友達になれってやつ」

誰もが曲がり切れないと嘆く死のカーブを紘也は絶妙なハンドル捌きで切り抜ける。

「そりゃあ、学校は友達が多い方が楽しいじゃあないですか。あ、事故った」

「それでも陰陽師だぞ? なんかめちゃくちゃ幻獣のこと敵視してたし」

「でも敵や中立よりは味方になってくれた方がいいよ。紘也くんを守るためあつと転落した!? には多少無茶することもあるだろうから、葛木家と仲良くなつとけばってこんなカーブ曲がれるかつ! いろいろと大目に見てもらえるかも思っただのです。それにかがりんって面白いよね。弄りがいがあると云いますか」

S e c t i o n - 1 5 放課後の寄り道（後書き）

仕事の方が忙しいので朝のうちにアップしました。

Section - 16 夕闇の通り魔

期末テストが近いこともすっぱり忘れ、ゲームセンターでひたすら遊び倒した紘也たちが帰路についたのは、午後七時を回った頃だった。夏場の頑張り過ぎる太陽も休眠するために沈みかけ、住宅地を鮮やかなオレンジ色に染めている。

「紘也、女の子と同棲するのはどういう気分だ？」

前振りなく投げかけられた孝一の問いに、紘也は危うく噴き出しそうになるのを気合いで抑え込んだ。

「お、女の子といっても見かけだけの蛇だぞ？ なにを期待するっというんだ？」

「あたしゃドラゴンです！ なにやらを七つ揃えたら願いが叶うほどドラゴンです！」

意味のわからん叫びが後ろから飛んできた。女子三人で和気藹々と談笑していたはずなのに、なんとという地獄耳だ。

「ははは、訊いただけさ。でも、いい娘だとは思っぞ、彼女」

「人外に欲情なんてしねえよ。欲しいなら孝一にやるよ」

「……いや、ちょっと遠慮させてもらう」

「フン、妖魔と結ばれることなんてありえないわ。それで正解。せいぜい契約幻獣として扱き使うことね」

ゲーセンでの戦利品を詰めた袋を両手いっぱい抱えた香雅里が会話に割り込んできた。

「いいのが、こっちに来て。女子同士で話してたんじゃないのか？」

「鷺嶋さんはいいけど、妖魔となんか話したくないわよ。それに、あなたはあの空間に溶け込める自信ある？」

言われて、紘也と孝一は後ろの会話に聞き耳を立てる。

「そこでにんじんさんが活躍するのです」

「いえいえ、やっぱりそこはフングスとマンドラゴラが重要になる

かと」

「ほえ？ ふんぐす？ まんどら？」

「幻獣界でもメジャーな野菜の二つだよ」

「おお、それは是非食べてみたいよう。きつと舌がとろけるんだね」

「んもう口の中でジュバババドツカーンって弾けるよ。今度持つてくるよ。こっちにいる知り合いのエルフに森を焼き払うって言えば喜んで献上してくれるから」

「ウロちゃん、乱暴はよくないよう。でも、これでおいしいカレーができそうだよ」

「カレーの話かよっ！？ フングスって毒キノコだぞ誰を殺す気だ！？」

スルースキル上級者の紘也でも突っ込まずにはいられなかった。香雅里を見ると、『どう？ ツツコミが追いつきそうにないでしょ？』と言いたげに肩を竦めている。

「会話内容が異次元過ぎだな」

孝一もまさかカレーの話だとは思わなかったようだ。

「紘也くん紘也くん、愛沙ちゃんと相談したんだけど、今度みんなでカレーパーティーをやるうってことになったよ」

「きつと楽しいよう」

ウロと愛沙が駆け足で寄ってきた。どうやら殺されるのは紘也たちらしい。

「材料にフングスとマンドラゴラは禁止な」

「メイン素材を抜くなんて紘也くん頭大丈夫？ あっ、アルラウネの方がよかった？」

「そっちこそ大丈夫かと俺は問いたい。あとアルラウネもダメだ」

いくらカレーが万能でもそんな食材（？）までフォローできるとは思えない。食えば冗談抜きで死ぬる。阻止、もしくは厨房の監視は必須だ。

「私は参加しないわよ」

「そんなあ、かがりんもやるうよう」

「馴れ馴れしく呼ばないで！」

「お忙しいのかな？ だったらカガリちゃんがお暇な時に合わせるよう」

「ああもう寄るな触るな抱きつくなああっ！！」

ウロと愛沙に両脇から張りつかれ、香雅里は恥ずかしさに赤面して叫んでいた。

「！？」

その時、唐突にウロが香雅里から飛び退いた。彼女はまなじりを吊り上げ、なにかを探すように周囲をキョロキョロと見回し始める。ウロ、どうし　！？」

訊ねようとして、紘也も気がついた。忍び寄るように静かな、しかし大量の気配。やがてそれはキーキーと耳障りな獣の鳴き声へと変化する。

幻獣だ。

「上よ！」

香雅里の叫びに、バツ！ と紘也たちは天を見上げた。そこには、夥しい数の黒い影が夕空一面に飛び交っていた。鼠と豚を足して二で割ったような姿に悪魔を彷彿とさせる大きな翼　蝙蝠だ。それも普通の蝙蝠より遙かにでかい。中型犬くらいある。

「やったぎゃ、ウロボロスとその契約者を見つけたぎゃ」

「みつけたみつけた」

「……でも、気づかれた」

巨大蝙蝠たちの中に小学生くらいの少女が三人、周囲の蝙蝠と同じ翼を生やして浮かんでいた。彼女たちは背丈も顔立ちも服装もコピーペーストしたみたいだ瓜二つ。違うところと言えば、短めの髪を結っている位置が喋った順に右、後ろ、左というだけ。

「なんだ、あれは……？」

「はわわわわわ、たくさんいるよっ」

孝一と愛沙は恟然としていた。紘也もあまりの数の多さに戦慄する。十や二十ではない。目測だが五十匹は超えている。ふと、朝のニュースで見た吸血殺人を思い出した。

「アレはジャイアントバットだね」

ウロが呟く。幻獣ジャイアントバット。麻痺毒のある牙で動物の自由を奪い、その間に全身の血液を吸い尽くす蝙蝠型幻獣だ。あの少女三人は『人化』しているようだが、同種だろう。こいつらが吸血殺人の犯人で間違いなさそうだ。

「気づかれたのならば先手必勝だぎゃ！ 者どもやってしまえい！
だぎゃ！」

「やつちやえやつちやえ」

「……ウロボロスと契約者は旦那様の物。生け捕り」

恐らくリーダー格であろう少女たちの命令に従い、飛び交っていた無数のジャイアントバットが紘也たちに向かって音もなく滑空してくる。

「来るわ！ あなたたちは下がってなさい！」

ゲーセンの袋を放り捨て、香雅里が護符から宝剣 天之秘剣・氷迦理 を取り出す。それから二体の紙サムライを召喚し、後ろに退避する紘也たちの護衛を命じる。

ウロもどことも知れない空間から 竜鱗の剣 またの名はア

ホらし過ぎて口にしたくない を取り出し、群がる巨大蝙蝠をばつさばつさと斬り落としていく。

キーキーと悲鳴を上げて消滅するジャイアントバット。その向こうでは香雅里に斬られ、全身氷漬けとなった仲間が粉々に砕け散っている。

二人の攻撃はまさに一撃必倒。ウロや香雅里が剣を振るうたび、確実に一体以上のジャイアントバットが消滅している。この二人がいれば頼もしいことこの上ない。

ジャイアントバットはそこまで強くない。紘也たちを守っている式神でも軽く斬り捨てられる程度だ。

だが、いかんせん数が多い。

群れを成していた点はウィル・オ・ウィスプと同じだが、機動力が圧倒的に違う。

ウロが唸る。

「むう、こう多いと面倒だね。ジャイアントバットは雑魚だけど、世界の幻獣TCGでも群れるから厄介なんだよ。　かがりん、もつと式神出せないの？」

「無理よ。これで全部なの。他の式神はあなたに倒されたから」

「んもう、もつといっぱい用意しときなよ使えないなあ」

「悪かったわね！　あなたこそ一瞬で殲滅できるような術とかないの？」

「全力で魔力弾をぶつ放ちましょうか？　こう近いとあたしらまで吹っ飛ばけど」

「一匹ずつ、着実に片づけるわよ！」

作戦会議をしながらも二人は巨大蝙蝠の数を減らす手を止めない。たぶんウロだけだと、ここまで余裕を持って紘也たちを守ることはできなかっただろう。息ピッタリとまでは言えないが、香雅里と友達になることは共闘という意味で利があったのだ。

「ムツキヤーツ、なにやってんだぎゃあんたたち！　たった二匹相手！」

「なにやってんだなにやってんだ」

「……主要攻撃対象変更。契約者を重点」

左サイドテールの少女が冷静に指示を出す。すると、ウロと香雅里を攻撃していたジャイアントバットたちが分散し、紘也たちの方へ雪崩飛んできた。

「させないよ！」

ウロが群がるジャイアントバットを薙ぎ倒して地面を蹴る。

「……それはこっちの台詞」

と、そこに蝙蝠娘三人が立ち塞がった。もちろん、そんなことで止まるウロボロスではない。大剣を大振りに構え、敵三人を一度に

斬り飛ばす　ことはできなかった。

「させないさせない」

「これでもくらうぎゃー！」

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイーン！

蝙蝠娘たちが口を大きく開けたかと思えば、直接脳へと響くような奇声を発した。途端、ウロは頭を押さえて片膝をつく。彼女の直線状にいる香雅里も同様に苦しんでいる。

超音波。

音は聞こえるが紘也たちに影響はない。音波に込められた魔力が前方にしか飛ばないからだろう。

ウロは歯を食いしばって呻いている。？再生？と　竜鱗の鎧　という防御力を持ってしても、音による攻撃までは防げないのだ。

しかし、彼女の心配をしている暇など紘也にはなかった。

「あわわわわわわっ！　こ、こっち来ないでえ〜」

香雅里の式神をくぐり抜けてきた一匹が愛沙を狙う。愛沙は手で頭を庇ってしゃがみ込む。彼女の首筋に、麻痺毒のある牙が突き立てられた　かのように思えた。

寸でのところで孝一がカバンの角でジャイアントバットを殴り飛ばしたのだ。蒼洋高校指定のカバンが角の堅い物でよかった。いざつて時に武器になる。

「紘也！」

孝一が叫ぶ。殴り飛ばしたジャイアントバットの軌道上に紘也はいた。孝一の意図を一瞬で悟る。

「はあっ！」

紘也は裂帛の気合いと共にカバンをジャイアントバットの頭部にぶち込んだ。例の分厚い魔術書とか入っているから相当効くはずだ。アスファルトにしたたか叩きつけられた巨大蝙蝠は「キギヤ」と

変な悲鳴を上げたきり動かなくなった。それからすぐに光の粒子となって霧散する。

倒した！ と歓喜する余裕は与えてくれなかった。

振り返ると、香雅里の式神が二体ともやられたところだった。数が増えて対処しきれなくなったのだ。邪魔者がいなくなり、巨大蝙蝠の群れは全て絃也へと攻めてくる。優先度の低い孝一と愛沙は後回しというわけか。

絃也だけ狙われるのであれば逃げればいい。逃げ切れるかはわからないが、ここにいて孝一と愛沙をこれ以上巻き込むわけにもいかない。

そう考え、絃也が踵を返そうとしたその時

「!?!」

突如、黄金の閃光が絃也の鼻先を掠めて天へと昇った。よく見るとそれは光ではなく、ウロボロスの鱗で鍛えたとかいう剣 竜鱗の剣 の剣身だった。

ぐにより、と剣身が意思を持っているかのように動く。そして絃也を襲おうとしていたジャイアントバットを数瞬で一掃した。

「これは……」

剣身の根元を目で辿る。三十メートルほど離れた位置に持ち主がいた。その周囲ではコテンパンにボコられた蝙蝠娘たちが目を回して倒れている。

「フッフッフ、実はこの ウロボロカリバー はあたしの意味で？ 無限？に伸ばせて自在に操ることができるんですよ！」

勝ち誇ったように胸を張るウロ。特に大きくも小さくもない胸が控えめに揺れた。

「いやあ、危ないとこだったね絃也くん」

「言つとくが、お前の剣が一番危なかったからな！」

まだ少し鼻がヒリヒリする。それにしてもあの剣にまだチート能力があつたとは……そのうちビームでも出るんじゃないだろうか。

指揮官を失ったジャイアントバットたちは夕空を所在なげに旋回

している。襲ってくる気配はない。

紘也は孝一と愛沙の安否を確認し、ウロと香雅里の下へ歩み寄り。
「ウロ、超音波は大丈夫だったのか？」

「ん？ ああ、こいつらが息切れした瞬間フルボッコにしたから問題ないよ」

蝙蝠娘はマヌケだった。というか、消滅していないということはまだ生きているということだ。止めは刺さないのだろうか？

紘也の不思議そうな顔を読み取ったのか、香雅里が説明してくれた。

「こいつらが言ってたでしょ。？旦那様？つて。つまり、この妖魔たちにも主がいるってこと。その辺りを聞き出すために生かしてるの」

「主つて、契約者つてことか？」

「さあ？ それはわからないわ。たとえ魔術師だったとしても、人を襲わせるような奴は排除しなければならぬわね。というわけでこの妖魔の身柄は葛木家で預かるわ。たぶん、数日前から起こってる吸血事件の、ようやく見つけた重要な手がかりだから」

確か葛木家は世界魔術師連盟に加入しているはずだ。連盟はいわゆる悪の魔術師や魔術結社を潰すことも行っている。だったら、ここから先は彼女たちの仕事だ。

「つ、捕まるわけにはいかないぎゃ」

「にげるにげる」

「……任務失敗。旦那様に怒られる」

いつの間にか意識を取り戻していた蝙蝠娘たちが翼を大きく広げていた。

「逃がすかつ！」

ウロと香雅里が声を揃えて剣を振るう。だが、生き残っていたジヤイアントバットに妨害され、それら全てを斬り倒した時には既に、蝙蝠娘は夕闇の彼方へと消え去っていた。

「香雅里様！」

それから間もなく、黒装束に身を包んだ人々が駆け寄ってきた。葛木の陰陽師たちだ。

「遅いわよ、あなたたち」

「すみません。妖魔の個種結界が張られていたようで、どうにも辿り着けませんでした」

叱咤した香雅里に、黒装束の一人が代表して説明した。中年の男性だ。

香雅里はウロを睨みつける。そのウロはそっぽを向いて白々しく口笛を吹いていた。ウロボロスの個種結界は？無限？の特性が付与されているため、中からは出られても外からの侵入は困難なのだ。邪魔は入らないが、味方も来られない。微妙に諸刃の剣である。

「彼らは一般人ですか？ それならばここ数分の記憶を消去しますか？」

記憶を弄られる、そう思ったのか孝一と愛沙が肩をビクつかせた。「その必要はないわ」香雅里が絃也を見る。「彼はあの秋幡辰久の息子で、そっちは彼の契約幻獣。向こうの二人もこちらの事情を知ってる人間。……私の友達よ」

最後の言葉はかなり躊躇ってからぼそつと呟かれた。陰陽師たちは「なんとあの大魔術師の息子！？」と驚愕して聞き流していたが、こちらの地獄耳保有者はそうはいかない。

「かがりーん！ やつとこさ友達って認めてくれたねえ」

「ち、ちがつ、あ、あなたのことじゃないわよ他の三人のことよ！」ウロボロスの契約者である絃也もカウントされていることに正直驚いた。

「カガリちゃんに友達って言うてもらえて、わたしも嬉しいよう」

「は、離れなさいよあなたたちああもう鬱陶しいわねっ！」

なんとも微笑ましい光景に陰陽師たちからも笑いが零れる。

「彼女、ほとんど友達がいなかったみたいだから身内として嬉しいんだらう」

孝一が絃也の横でうんうんと一人頷いていた。

「いつどこで仕入れたんだよ、そんな情報」

「うちの学校。紘也も聞いたことくらいあるだろ、『悪魔の風紀委員長』の噂」

「ああ、そういえば」

今年に入ってから流れ始めたその噂は、『捕まるな 風紀の悪魔 マジ怖い 目を合わせたら 命取られる』という大げさなものだった。なぜ短歌調なのかは謎だ。

確かに紘也も初めて話した時にきついと感じた。普段ずっとあんな調子なのだとしたら人など寄ってくるわけがない。

しかし、ああやってじゃれ合っている彼女にそんなきつさは感じない。きつとこれが彼女の素顔なのだ。あの『騒がしい』を具現化したような存在にボケられたら誰でも素で突っ込みたくもなるだろう。紘也だってスルーできない時が多いのだから。

香雅里は抱きついたウ口と愛沙を引き剥がすと、避難するように陰陽師の輪に加わる。

「私はこれから逃げた妖魔の調査を行うわ。あなたたちは大人しく家に帰りなさい」

そう言い残して、香雅里は黒装束を引き連れて立ち去った。怪しい集団を率いた女子高生 傍から見ると異様な光景だった。

帰宅したところで紘也は夕食を買い忘れていたことに気がついた。幸いコンビニはすぐそこだ。歩いて三分もあれば着く。カバンを二階の自室に放り投げ、財布だけを持って紘也は玄関のスライド式の扉に手をかける。

がしっ、とウロに肩を掴まれた。

「紘也くん紘也くん、あたしに黙ってどこへ行こうとしてるんだい？」

「晩メシを買いにコンビニへ」

「今晚はあたしが腕を振るうって約束したよね？」

「その戯言はまだ生きてたのか。……俺はミックスピザにするけど、ウロは？」

「じゃあ、あたしはこの爆裂テリヤキチキンピザで　ってなんでピザ頼もうとしてんのあたしが作るんだよ！」

下駄箱の上に放置してあったピザのチラシはウロによって破り捨てられた。

「幻獣の作る料理が人間様の口に合うとは思えん」

「なんだとう！？　言ったね紘也くん。そう言われてはあたしも本気にならざるを得ないよ。紘也くんはリビングでモンバロでもやっとなさいっ！」

そういきり立ってウロはキッチンへ向かった。愛沙との会話からして奴が怪し過ぎる食材を使わない可能性は低い。監視しよう、そう思ったところで紘也は気づいた。

よく考えたら、フングスもマンドラゴラも幻獣だ。たとえ幻獣でなくとも幻獣界の物質はほとんどマナによって構成されている。そしてこちらの世界にマナは存在しない。持ち込んだ時点で消滅してしまう。

つまり、幻獣界の怪しい食材は使いたくても使えないのだ。

「なんで卵と冷凍食パンしか入ってないの!? やる気のない冷蔵庫庫め!」

とキッチンから怒声が聞こえてきたので紘也は携帯を開いた。さつき記憶した番号にかける。もちろん、ピザ屋だ。

ミックスと、爆裂テリヤキチキン……だったか(爆裂ってなんだ?)。サイズはMでいいだろう。紘也は手早く事務的に注文を終えた。

「むむむう、卵だけは異常にあるから卵料理のフルコースになるけど、なにを作るか」

ピザを注文してからキッチンを覗くと、ウロが十個入りの卵のパックと睨めっこしていた。顎に手をあててうんうんと唸っている。

「ここはウロボロス流錬金術で生成した秘伝のポーシオンで味付けするとして、目玉焼き、厚焼き卵、スクランブルエッグ、たまごスープ、フレンチトースト、お米もあるっぽいからたまごかけごはんもいけるね。でもやっぱり卵は殻ごと丸呑みするのが一番おいしいんだよねえ……じゅるっ」

「蛇だな」

「オウウ!? 紘也くん厨房に入っちゃダメでしょうが! って蛇じゃなくてドラゴンだって何度言えばわかるんだあんたはっ!」

「あーそうそう、もうピザ注文したから卵料理のフルコースなんて作らなくていいぞ。それ朝メシ用の食材だし。あとポーシオンは絶対に使うな」

「がーん! く、今日のところはこれくらいで勘弁してやらあつ! 覚えてるよ!」

「どこの悪の下っ端だ」

「明日は市街地のデパートでお買い物です! もちろん紘也くんも付き合ってもらおうよ! デートの気分だね!」

「ま、気が乗ればな」

絶対に乗らない自信のある紘也だった。

「そつだ、カードゲームをしよう」

ピザを食べ終わるとウロが突発的に意味不明なことを言い出した。紘也はピザの箱を片づけながら、

「トランプを二人でやっても面白くないぞ？」

「いやいや、トランプじゃないですよ」

「UNOか？ それも結局同じだろう？」

「UNOでもないんだよね」

「じゃあ花ふ」

「花札でも百人一首でもタロットでもクロノなんちゃらでもないよっ！」

ネタを先に潰されてしまった。他にになにかなかったか思考するも、時間切れとなる。

「世界の幻獣トレーディングカードゲームです！」

「さてテスト勉強でもするか」

「スルーしないで!？」

立ち上がった紘也の足に涙目のウロが鬱陶しく絡みついていた。

このまま蹴り飛ばしてくれようか、この蛇。

「世界の幻獣TCGは昨今発売されたとてもホットなカードゲームなんだよ。なんでも連盟の魔術師が趣味で作っていたもので、それを評価した連盟が商品として販売し始めたことが流行の始まりです。幻獣界でも大人気爆発中。はい、やりたくなつたあ！」

世界の幻獣TCGとやらは、ウロが敵の戦闘力の評価基準として用いていた謎カードゲームだ。実は魔術師連盟が開発・販売しているとなると……少し興味が湧いてきた。

「どうやって遊ぶんだ？」

「オウ！ ホントに紘也くんがやる気になった　じゃ、カード出しますね」

ウロは紘也から離れると両手を大きく横に広げた。次の瞬間、そ

の両掌辺りの空間が歪み、蛇口を全開にしたように大量のカードが流れてきた。まるで手品だ。

湯水のごとく床に蓄積してゆくカードを眺めながら、紘也はウロに問いかける。

「これといいあの剣といい、どっから出してんだよ？」

「ウロボロスさんの秘密無限空間です。ああ、細かいことは内緒だよ。なんせ秘密なんだから」

別に聞く気もない。魔術的に仮設異空間を作っているのだろうと想像できる。

「あたしの私物はだいたいこの無限空間に保管してあるんだよ。パジャマとか」

「あーそう。なるほど。へえ。よかったね」

「果てしなくどうでもよさそうな返事だね！ まあいいけど。そんなことよりカードカードと」

ウロボロスは床に広がったカードの海から適当に数枚摘まみ上げる。どれもこれも展覧会を開いてもいいくらい綺麗で迫力あるイラストだ。

「レッツルール説明！ まずプレイヤーは魔術師と呼ばれます。んで、このような『魔力カード』『幻獣カード』『魔術カード』で構成された五十枚の束。あ、これがデッキね。を用意し、自分のターンに決められた順序で行動を取りつつ、先に対戦相手のライフをアババホアチョーッ！ って感じに0にした方の勝利となります。初期ライフは10000で、ターンの進行は」

「あ、ここにルールブックが落ちてら」

紘也はカードに埋もれていた小さな本を取ってパラパラとページを捲った。時折意味不明な擬音を入れるウロの説明なんかよりずっとわかりやすい。彼女の説明を右から左に聞き流しながら、紘也はルールブックに目を通していく。

「へえ、けっこう本格的なんだな」

ファーストステップ、バインド状態、スタックなどなど、様々な

専門用語が散らばっていて初心者も正しく理解できない。それでもなんとなく大まかな流れは掴んだ。要は、地水火風光闇の六属性ある『魔力カード』を溜めて、その属性に対応した『幻獣カード』や『魔術カード』を駆使して対戦相手を叩き潰せばいいのだ。紘也は詳しいわけではないが、トレーディングカードゲームとしてはスタンダードな部類ではないかと思う。

「『幻獣カード』や持続系の『魔術カード』には維持コストが必要か」

幻獣契約の魔力供給システムがしっかりと反映されている。連盟の魔術師が趣味で作ったとウロが言っていたが、なるほど、得心がいった。

対象年齢は中高生くらいだろうか。なかなか面白そうだ。

「ウロ、こっだけカードあるんだから。自分でデッキとやらを作ってもいいか？」

孝一に影響されて紘也も『遊び』は大好きで大歓迎なのだ。自分のデッキを作るとは、こういうカードゲームの醍醐味の一つだろう。やるからには徹底的にやりたい。

「紘也くん目が輝いてるねえ。いいよ。好きなもん使いなさい。ただし、あたしは当たり前ながら『ウロボロスデッキ』です！」
確かデッキは五十枚で、『魔力カード』以外の同名カードは四枚しか入れられない。どう構成するかが重要になってくる。属性ごとに出来るカードが違うのなら、あまり欲張らない方がいい。属性は多くても三つだ。

「あつ」

カードを漁っていると、紘也は見覚えのあるイラストを見つけた。地獄のような荒野をバックに描かれているのは黒い犬。カード名は『ヘルハウンド』。ウロボロスに瞬殺された幻獣だ。

攻撃力・耐久力は共に1000。フィールドに召喚された時に自分より攻撃力の低い幻獣を一体消滅させる。そういう嫌がらせ的能力は大好きな紘也である。

コンセプトは決まった。とにかく向こうのフィールドを蹂躪しよう。

「お、『ジャイアントバット』があるな」

攻撃力・耐久力は500と少ないが、飛空の能力で空から直接攻撃ができるらしい。それに召喚した時デッキから好きなだけ同名カードを手札に持ってこられる。ウロが群れるから厄介だと言ったのはこのことか。

「これ入れるなら四枚は絶対だよな。見つかるか？ まあ、見つからなかったらそれはそれで別に　ん？　これは……」

紘也は拾い上げた一枚のカードを見て、面白い、と唇を斜に歪めた。

本格的にデッキ作りへと移行した紘也に、早々にデッキを仕上げたらしいウロが楽しそうに宣戦布告する。

「紘也くん紘也くん、モンバロやゲーセンではボコボコだったあたしだけど、こればっかりは譲れないよ。幻獣界でも十指に入るトッププレイヤーなあたしにはプライドってものがあります。もし万が一負けるようなことがあればあたし　脱ぎますから！」

二十分後。

「うわああああああん！？　負あ

けえ

たあ

ッ！？

「待てウロなに全裸になろうとしてんだよ！　まだお前のターンは終わってないだろ！」

上着とスカートを一瞬で脱ぎ捨てたウロに紘也は諫言した。白いレースの下着姿となった彼女は、脱いだところとある一部分が普段より大きく見えることはなかった。しかし小さいわけでもなく、しなやかで黄金比的な曲線美と相まってプロポーションはいい方だと思う。要するに、目のやり場に困る。

慌てる紘也に下着姿の蛇少女は涙目を吊り上げ、

「終わってるよ！ どうやっても勝てないんだよ！ あたしの手札はゼロだし、フィールドは『ウロボロス』だけ。対する紘也くんは、紘也くんは、は、は、うわああああああああああああああああん！？」

紘也は自分の状態を確認する。手札は三枚。フィールドは『ヘルハウンド』が一体に、『ジャイアントバット』が八体、さらに紘也のデッキの要である『ヴァンパイア』が召喚されていた。

『ヴァンパイア』は攻撃・耐久力2000の『幻獣カード』だ。能力は、魔力を消費して『ジャイアントバット』のコピーを生み出す上に、『ジャイアントバット』と名のつくカードの攻撃力・耐久力を500上昇させるというもの。さらに自身も『ジャイアントバット』を喰らうことで攻撃力・耐久力を上げられる。

見つけた瞬間にこのカードを切り札にすると決めた。そして実際、紘也の攻撃力総数は大変なことになっている。『ウロボロス』は攻撃力・耐久力が4000・4500と高いが、飛空と再生、維持コストがかからないという能力だけでは紘也の軍団に対抗できない。なぜなら、紘也が一斉攻撃を仕掛けた場合、『ウロボロス』で止めることのできる幻獣はルール上一体だけなのだ。

はつきり言って、詰みである。

「うわああああああああああん！？」

「もついいから脱ぐのやめれ！ 今のなしにしてもう一回やってやるから」

「え？ ホント？ やったラッキー やっぱあたしの運がたまたま悪かったただけだね。そんじゃまあ改めまして、バトルスタート！！」

目の前で『ウロボロス』のカードを紙吹雪にしてやるうかと思っ

その後

「いよっしやーっ！ 『ウロボロス』を召喚するぜ！」

「あ、それに『送還術の魔法円』を発動。手札に戻れ。んで、俺は『ヴァンパイア』召喚と」
「ノアアアアアまた負けたああああっ!? も、もう一回。ワ
ン・モア・チャンス」

紘也とウロの対戦は深夜まで繰り返したが、わざと負けるつもりなど毛頭ない紘也にウロは一勝もできなかった。

暗闇の中に少女たちはいた。

蝋燭の火ほどの明かりも存在しないため、どこかの室内ということしかわからない。しかし、視力による知覚情報に頼らなくてもよい彼女たちには関係のないことだ。

「任務失敗ですぎゃ。仲間がたくさん殺されたぎゃ」

「しっばいしっばい」

「……申し訳ありません、旦那様」

蝙蝠娘たち ムル、シエ、ラゴは片膝をついて頭を下げた。いつ怒られるかわからない恐怖に身を竦める。

だが、目の前にある旦那様の気配は一向に怒気を纏わなかった。

それどころか、ご苦労様、と優しげに労ってくれる。

「相手はあのウロボロスだ。しかも陰陽師まで味方につけている。無事に戻ってきてくれた君たちを労いこそすれ、怒ることはしないよ。だから、顔を上げて」

三人は顔を上げるが、不安は拭い切れていなかった。代表してラゴが開口する。

「……でも、我々は任務に失敗しました。旦那様から罰を受けるべきです」

「僕が言った命令はどんなものだったかな？」

旦那様は余裕たつぷりにそう返す。次はムルが答えた。

「ウロボロスと、その契約者の捕縛ですぎゃ」

「おや？ おかしいな。僕は搜索を頼んだはずだよ。ウロボロス相手に君たちだけで捕縛するなんて無理があるからね」

旦那様は、ウロボロスとその契約者を捕える、などと一言も言っていない。蝙蝠娘たちの早とちりだった。

となると、奴らの姿を見、魔力の気配を覚えて戻ったのだから任務は成功と言える。ジャイアントバットの探知能力ならば、この街

にいる限りどこに隠れようとも見つけれられる自信がある。

「にんむせいこうにんむせいこう」

一番言動の子供っぽいシエが万歳で喜びを表現している。旦那様が柔らかく息を吐く。

「君たちはウロボロスが誰かと戦ったり退治されたりする伝承を知っているかい？」

唐突な質問に、蝙蝠三人娘は同時に首を横に振る。

「そう、ないんだ。どんな神話や言い伝えにもね。でも、あの？貪欲？なウロボロスが大人しく自分の尻尾だけを噛みつけているはずがない。誰とも戦わなかったとはおかしいと思わないかい？」

旦那様がなにを言いたいのかわからず、少女たちは小首を傾げる。「つまり、ウロボロスは全ての戦闘に勝利し、敵を存在ごと喰らい尽すんだ。だから伝承には残らない。たとえこの僕、アンデットの帝王であるヴァンパイアでもまともに戦って勝てる相手じゃない」

今まで雲に隠れていた月明かりが窓から差し込む。漆黒のマントに包まれた、線の細い美青年の姿がスポットライトを浴びるように照らし出された。旦那様だ。

「だから、僕はそれほどまでに強力な？血？が欲しい。ついでにウロボロスほどの幻獣と契約している人間の魔力もね」

優雅な仕草で旦那様は窓に歩み寄り、月夜を見上げる。月光に照らされる旦那様は実に絵になっていた。ステキ過ぎて陶然と見惚れてしまう蝙蝠娘たち。

「君たちの働きでウロボロスを釣る餌も見つかったし、仕掛けるのは明日にしよう。それまでに体を休めておくように。いいね？」

「はいだぎゃー！」

「りょうかいりょうかい」

「……明日までに全快にしておきます」

Section - 19 必死の頼み

小鳥さえずる爽やかな朝。時刻は八時に到達しようとしていた。

紘也はリビングで食後のコーヒーを啜りながらぼんやりとテレビを眺めていた。本日は土曜日だが、ゆとり教育を撤廃した蒼洋高校では午前中のみ授業があるのだ。

テレビでは、事件レポーターが海上に墜落した『FLORA240便』について語っていた。奇跡的に死傷者ゼロだとか、勇敢な乗客が犯人を取り押さえたとか、そのうちドキュメンタリー番組にでも取り上げられそうな内容だった。

「世の中には本当にヒーローみたいな奴がいるんだな。 っと、そろそろ時間か」

制服には着替えているし、教科書などの準備も済ませている。いつもならばあとは学校へ行くだけなのだが……

「起きろこのぐーたら蛇がっ！」

紘也は天井裏へ登っていた。薄いかげ布団に包まったパールブロンドの美少女が安心してきたらしない顔で寝息を立てている。それだけ見せられると心臓が早鐘になりそうなものの、足の踏み場を奪っている床一面のカードが色気を大幅に軽減している。遅くまでデッキ調整に勤しんでいる姿が目には浮かんだ。

「起きろ」

とりあえず蹴ってみた。

「んんん、むにゃ、あと三十日」
「……」

紘也は一度下へ戻り、イヤホンと携帯用テープレコーダーを抱えて戻ってきた。どちらも妹の部屋から拝借したものだ。

イヤホンをウロの耳にセッティングし、再生ボタンを押す。

「うっん……にゃむん!? な、あ、お、おっさんがおっさんでおっさんの ハッ!?!」

「おはよう、ウロ。楽しい夢を見たようだな」

「あ、紘也くんおはよう。なんか、いろんなおっさんが無理矢理渋い声でカツコイイ台詞を延々と吐いてる夢見たよ。しかも全裸……おえ」

ウロの顔は血が通ってないのかと思うほど蒼白していた。紘也が即座に背中に隠したテープの内容は、オヤジ好きの妹が集めた『シビれる大人のボイス集その三（男性オンリー）』である。なお、六割ほど父親が演じていたりする。

「起きたのなら五分で支度しろ。メシはキッチンに用意してあるからな」

「ふわあ、紘也くん報告れふ。これよりウロボロスさんは冬眠、もとい夏眠に入りまふ」

「おい大変だウロ、このカードよく見てみる」

「ほえ？ なになに？ 致命的な傷でもついているの？」

グサツ！

「目から火花あああああああああああああああああああああああああああつ！？」

というわけで、ウロの目を強制的に覚まさせた紘也は天井裏を後にした。

一階に下りると、玄関に意外な人物が立っていた。

「朝っぱらからなにやってるのよ、あなたたち」

蒼洋高校の制服に、二つ合わせたら陰陽を表す太極図になる髪留めをした少女 葛木香雅里である。彼女は呆れた視線で紘也を見据えていた。どうやらウロの悲鳴が聞こえていたらしい。

「アホ蛇を起こしてただけだ。それよりなんの用だ？ てかインターホン鳴らせよ」

「鳴らしたけど出ないから勝手に入らせてもらったのよ。なんの用かは単刀直入に言っわ。あなたの護衛よ、秋幡紘也」

「俺の？」

「そう。昨日逃した妖魔の居場所はまだ見つかってないの。？旦那

様？とやらが余程の曲者のようね。あの妖魔たちはあなたを狙っているのだから、葛木家として護衛するのは当然よ」

「それで、俺を囿に誘き出して連中を叩くってことだな」

「なんだ。ちゃんと理解してるじゃない」

香雅里は満足げに微笑した。話が早くて助かる、と顔に書いてある。

「でも昼間っから襲ってくることはないだろ。蝙蝠は夜行性だ」

「飼い主はそうじゃないかもしれないわよ。それに」

香雅里は玄関の扉を開けて天を指差した。いつ雨が降り出してもおかしくない曇天だった。『夕焼けの翌日は晴れ』という諺は嘘かもしれない。

「こんな天気だったら夜行性でも行動できるんじゃないかしら？」

「……まあ、確かに」

相手は幻獣だ。地球上の生物と同様に考えてはいけない。

「あなたにはウロボロスがいるし、別に四六時中監視するわけじゃないから安心しなさい。それと、ボタンはきちんと全部留めるように」

ビシツと指摘され、ここは学校じゃないのに、と思いつつ紘也は渋々服装を正す。

「悪魔の風紀委員長にずっと睨まれてちゃ、俺の精神が擦り切れそうだ」

皮肉げに言うと、香雅里はふんと鼻を鳴らした。凍りついたバラのように刺々しい。だからあまり友達ができないのだ（と言ったら殴られるだろう。たぶん）。

「そうそう、一つ訊きたいことがあったのよ」

「なんだ？」

「あなた、昨日妖魔をカバンで殴り倒した時、なにかした？」

「というと？」

「ただのカバンで殴って死ぬほど妖魔は脆くないってことよ。あなた、本当は魔術使えるんじゃない」

「待つてえ紘也くん、学校行くなら一緒に行こうよ。おや？ なんてかがりんがいるの？」

パジャマ姿のウロがふらつく足取りで階段を下りてきた。あれだけやったのにまだ意識は完全覚醒していないようだ。トロンとした目にだらしなく開いた口、パジャマのボタンは全て外れており、ノブラの胸が一部エロティックに露出して

「……ッて！ シャキツとしろよ早く着替えるよ目のやり場に困るんだよ主に俺が！」

そのまま瞼が落ちそうになるウロを、顔を赤くした紘也は慌てて二階へと押し戻した。

「本当に、なにやってるのよ……」

背中に香雅里の冷たい視線が突き刺さった気がした。

ウロの準備を数分で終わらせ、紘也たちは急いで家を出た。

横一列に並んで通学路を歩く。

護衛対象の紘也は必然的にウロと香雅里に挟まれる形となる。この二人はどちらも外見だけは目の覚めるような美人なのだ。そんな彼女たちを両手に花な状態で連れていると……すれ違う人々の視線が痛い。

しかも

「紘也く〜ん」

「くつついてくるなよ狭っ苦しいんだよ！」

ただでさえ居心地が悪いというのに、隙あらばウロが腕を絡めようとしてくるから油断ならない。その度に香雅里が監視するような睨み目を向けてくるのも困りものだ。

これで敵が襲ってきたりしたら最悪だな、と紘也は心中で深く嘆息するのだった。

「……紘也くん紘也くん、なにか聞こえますんか？」

特に何事もなく蒼洋高校の学生寮前を通過した時、ウロがそんなことを口にした。彼女は目を閉じ、探るように耳を澄ませている。

「なにかって……廃品回収の呼びかけが遠くから聞こえるくらいだが？」

紘也は香雅里を見る。彼女も『聞こえない』と言うように首を横に振った。

ウロの様子に緊迫感はない。だから幻獣関連ではないと思う。しかし、紘也や香雅里に聞こえない音を幻獣である彼女は捉えているのかもしれない。

「聞こえるよ。寂しそうな、悲しそうな声が……あっち！」

そう言うと、ウロはピヨンとブロック塀の上に飛び乗った。それからこちらを一瞥すらしないで家と家の隙間を駆け抜けていく。恐らく？声？とやらがする方向に。

「なんだよ、あいつ。あんな真剣な顔して」

幻獣と戦闘している時ですら飄々とした態度を崩さないウロが、まるで人命救助をするレスキュー隊員のように表情を引き締めていた。

「追うわよ、秋幡紘也」

「ああ」

香雅里も今のウロの様子になにかを感じたのだろう、学校の始業時刻が近づいているにも関わらず追跡することを選んだ。

割とすぐにウロは見つかった。

およそ道とは呼べない狭い路地の入口に彼女は立っていたのだ。

「おいウロ、一体どうしたんだよ」

その肩を紘也が掴むと、ウロは今気づいたかのように体ごと振り返った。彼女はなにかを大事そうに胸に抱えている。それは

みゃー。

「仔猫？」

だった。眉を顰めて呟いた香雅里と同様に、紘也も怪訝な表情になつて路地の奥を覗き込む。

そこには大き目のダンボールと一緒に『どなたか拾ってください』というプラカードが置いてあった。それで大体の察しがつく。捨て

猫だ。

みゃー。

捨てられてから時間が経っているのだろうか、仔猫の鳴き声に力はなかった。絃也の隣で香雅里が頬を染めて「かわいい」と漏らしているが、そんなことより絃也は次にウロが言うだろう台詞をなんとなく予測できていた。

「絃也くん、この子、飼ってもいいかな？」

ウロがいつになくしおらしい声でお願いしてきた。仔猫の頭を優しく撫でながら、上目遣いで絃也を見詰めてくる。だが

「無理だ」

予測していた絃也は、一秒も逡巡することなくはつきりと告げた。「なんで？ 絃也くんはペット禁止のアパートに住んでるわけじゃないじゃん。面倒はあたしが見るからさ」

「無理だ。ダメなんじゃなく、無理なんだよ」

「意味わかんないよ！ この子、飼い主に捨てられて、拒絶されて一人ぼっちなんだよ！ 誰かが手を差し伸べないと生きていけないんだよ！ 絃也くんはそれを見捨てるって言うの！？ あたしにはできないよ！！」

ウロらしからぬ剣幕に気圧されて絃也は半歩後じさった。敵幻獣を笑いながら屠るウロボロスが、なぜ捨て猫に対してこうまで必死になるのか絃也にはわからない。ただ、そこには単なる優しさや同情といった類ではない、もっと深い気持ちがあるように感じた。

それでも、絃也にだって猫を飼育できない理由がある。

「アレルギーなんだよ、俺」

そう、絃也は猫アレルギーなのだ。昔、妹が今のウロのように猫を拾ってきたことがある。その時に喘息に近い発作が起こってアレルギーだと判明した。

アレルギーを舐めてはいけない。もしも処置が遅れてしまうと命を落とす危険性だつてある。そんな死神のような存在を身近に置くなど、とてもじゃないが許容できない。今だってレッドゾーンギリ

ギリの距離を保って喋っているのだ。

しかし、アレルギーと聞いてもウロは引き下がらなかった。

「……どうにかして克服してよ」

「無茶言うな」

「じゃあさ、今からこの子飼ってくれる人探そうよ。ねえ、そうしよ？」

「学校はどうすんだよ？」

「ねえ、ちよつといいかしら？」

言い争い寸前の二人に、香雅里が割り込んできた。彼女はちらちらと仔猫を見ながら、どこか言い難そうに、

「わ、私がおその子、飼ってあげてもいいわよ？」

「かがりんそれ本当!？」

香雅里の提案にウロの表情が、ぱあぁ、と輝いた。

「え、ええ、丁度、ペットが欲しいって思ってたところだし」

「捨てないでよ？」

「そんなことしないわよ」

「さっすが、かがりんは優しいね！」

仔猫を貰ってくれることが余程嬉しいのか、ウロはテンションを跳ね上げて香雅里の手を掴み、ブンブンと大げさに上下へ振った。

「ちよ、放しなさいよ！ こんな往来で、恥ずかしいじゃない」

「フッフッフ、往来？ よいではないかよいではないか。なんならハグとかしちゃいますよ。今のウロボロスさんはそれほど感激しているのです」

流石に抱擁までは交わさなかったが、香雅里はウロから仔猫を受け取ると携帯でどこかに電話をかけた。

「うん、そう、仔猫。八時五十分に校門まで引き取りに来てくれないかしら？ うん、ありがと」

どうやら葛木家の許可も下りたようだ。新しい主人が見つかったことを仔猫も感じたのだろう、みゃー、と嬉しそうに猫目を細めて鳴いた。

「よかったですね、紘也くん」

「いいのか、お前。自分が飼いたかったわけじゃないのか？」

「いいんですよ。あの子を大切にしてくれる人が見つければあたしは満足です。それに、あたしの我がままで紘也くんに迷惑はかけられないしね」

もう充分に迷惑かかってるけどな、とはウロの本当に安堵した表情を見た紘也には言えなかった。

午前中三時間で土曜日の授業は終了した。

紘也たちは昼食を取るために屋上に来ていた。平日だと放課後には閉められる屋上だが、合唱部などが時々使用することもあるので土曜日に限り十四時まで開放されている。

紘也たちはグラウンド側のベンチの一つを陣取っていた。

孝一と愛沙は当たり前のごとく一緒だが、香雅里はいない。風紀委員の仕事で校内の見回り中だそうだ。廊下ですれ違った時に声をかけたら、後で行くと言っていた。

天気が悪いためか他に生徒の姿はない。というか、土曜日の放課後にわざわざ残って屋上で昼食を取る生徒は少ないだろう。概ね部室などで食べるはずだから。

「か、勝てない？ どうして？ 紘也くんも孝なんとかくんも初心者のはずなのに……」

「孝なんとかじゃなくて孝一。こういち！ いい加減覚えてくれないか、フローラ」

三度のメシより遊びが好きなウロと孝一は、昼食そっちのけで例のカードゲームに興じていた。さっきから五回ほど対戦しているが、ウロが勝ったところは一度も見えていない。

ウロは今朝の仔猫の件が嘘だったかのように調子を元に戻している。本当にあの時の彼女はなんだったのだろうか。気になるけれど、紘也には無理に問い詰めるような無粋な真似はできない。あれは紘也ではなく、彼女自身の問題だと思っからだ。

「もう一回勝負だよ！ 今度あたしが負けたら、名前覚えます！」

「お　いいねその条件」

孝一も紘也同様に目の色を変えてデッキから自分で作成している。紘也の妨害系魔術を大量投入したコントロールとは違い、『ドラゴニユート』や『フェンリル』を主軸とした速攻系ビートダウンであ

る（専門用語はウロから教わった）。

ちなみに愛沙も興味は持っているのだが

「わああ、これ可愛いね。えっと、『カーバンクル』っていうんだ。ウロちゃん、これホントに貰ってもいいのかな？」

「いいよいいよ。それならコモンだし腐るほど持ってるから。」

『ヒポグリフ』召喚！」

「えへへ、ありがとう。大切にするね。おおお、こっちの絵もカッ
コイイ」

彼女はデュエリストではなく、コレクターのようだった。

「孝一、ウロの連敗数が二桁に達したら俺と勝負しようぜ」

「いいぜ。オレもそう思っていたところだ。『フェンリル』で
攻撃！」

「あたしが負ける前提で話進めないで!？」

こんな場面を香雅里に見られたら没収は確定だろうな、と心中で
苦笑しつつ、紘也はカツサンド片手に二人の対戦を見物する。愛沙
はカードのイラストを見るのに夢中で、正直手持ち無沙汰なのだ。

客観的に見ていてわかったが、ウロのデッキは強力なカードしか
入っていないように思える。強い入れれば勝てるんじゃないか？と
いう初心者も紘也でも違うとわかる思考をしているに相違ない。ア
ホだ。

「そうだウロちゃん」と気に入ったカードを両手一杯に詰め上げた
愛沙が、「昨日言ってたカレーパーティーなんだけど、明日の夜で
大丈夫かな？」

「げ、それホントにやるのかよ。死人が出るぞ」

「ヒロくん、そんなこと言っちゃダメだよ。これはウロちゃんの
歓迎会なのです」

しなくていいのに、と口内で呟く紘也。幻獣界の怪しい食材はこ
ちらの世界で使用できない。そこまでは考えが至っているものの、
思い返せば 竜鱗の剣 だって幻獣界の物質には変わりない。もし
も、食材にもなんらかしらの処置を施すことができるのだとしたら

……誰かが死ねる。

「明日かあ。じゃあフングスとマンドラゴラは間に合いそうにないかな」

セーフ。紘也はほっと胸を撫で下ろした。だが安心してはいられない。愛沙が日程をずらしにかかる前に明日で決定しなければならぬ。

「それなら別の日」

「ああつと！ 俺なんかすげー明日の夜にカレーが食いたい気分になつた！」

「ぐつ！ そうだ忘れていた。オレは明日の夜にカレーを食べないと死んでしまう呪いにかかったんだつた！ 愛沙、パーティーは明日にしてオレを助けてくれ」

孝一が口裏を合わせてきた。察しがいいのはありがたいが、頭の悪い嘘はどうにかならないだろうか。

「え、えつと、それじゃあ仕方ないね。ちょっと残念だけど、明日やることにしよう。場所はヒロくんのお家でいいかな？」

「ああ、存分に使ってくれ」

「カガリちゃんにも知らせないとね。ふふ、とっても楽しみだよ」
本当に楽しみなのだろう、愛沙は実にウキウキした笑顔を満面に咲かせた。

その、直後

「……ッ!?」「……」

ベンチに座る愛沙を、なんの前触れもなく出現した黒い霧が覆い隠した。

「愛沙!?!」

紘也たちは反射的に身構える。愛沙の悲鳴は聞こえない。竜巻のように渦巻く黒い霧に紘也が触れようとした時、霧の中からなにかが飛び出してきた。思わず尻餅をつく。

「また会ったぎゃ、ウロボロス！」

「またあつたまたあつた」

「……此度は昨日のようにはいかない」

見上げると、蝙蝠の翼を背中から生やした少女が三人、空中に浮いていた。

「まーたあんたらか。ハルピユイアみたいに尻尾巻いて逃げてりやよかつたものを、今度ばかりはこっちも油断しないよ。その翼、？ぎ取ってくれる」

ウロは空に向かって咆えながら 竜鱗の剣 を取り出す。いきなり本気だ。

「ふっふん、ハルピユイアなら旦那様が殺したぎゃ」

「ころしたころした」

「……だから、あのハルピユイアはもういない」

「はあ？ あんたらなに言って」

刹那、愛沙を包む霧が濃さを増した。いや、この場合霧がまだ残っていることが問題だ。

「違う！ 本命はこっちだ！」

孝一が霧を見て叫んだ。渦巻く黒霧はふわりと愛沙の体ごと宙に浮き、紘也たちから距離を置いた位置に着地する。

霧が三倍ほどに膨張する。本命 ？旦那様？が来る！

瞬間、黒い霧が霧散し、漆黒のマントを羽織った長身瘦躯の美青年が現れた。

「ごきげんよう、無限の大蛇とその契約者。昨日は僕の蝙蝠たちがお世話になったようだね」

粘つくような韻を含んだ声で青年が言葉を発した。マントの下にファンタジー世界の貴族みたいな紳士服を纏い、そこにいるだけで異様な存在感を放っている。全身から滲み出ている魔力は強大かつ異質、なにより禍々しい。

間違はなく、人間ではない。

なぜ気づかなかった？ ジャイアントバットを従える幻獣をつい最近見たはずなのに。面白さのあまり、本物の魔術師が作ったカードゲームだということを失念していた。

吸血蝙蝠を統べる、夜の、アンデットの帝王

「ヴァンパイア、か」

「ほう、こちらから名乗る前に看破されたのは初めての経験だね」
美青年は不敵な笑みを浮かべて答えた。正解。あのカードゲームは幻獣の関係性までしっかり反映しているようだ。

愛沙は……奴に抱かれる形で気を失っている。なんとも言えない怒りが湧き上がってくるが、紘也は努めて冷静に言葉を紡いだ。

「お前らの狙いは俺だろ。愛沙は返してくれないか？」

「流石、ウロボロスの契約者は己惚れているね。自分を商品に交渉しようだなんて」

ヴァンパイアはひゅーと口笛を吹き、彼の周りに集まった蝙蝠娘たちがパチパチと拍手を打つ。どうやら馬鹿にされているようだ。

「ウロ、愛沙を助ける」

「御意」

という返事を紡也が耳にした時には既に、ウロはヴァンパイアの眼前まで移動し大剣を振るっていた。

横薙ぎの大振り。愛沙を傷つけない絶妙な一閃でヴァンパイアの首だけを刎ねるつもりだ。

しかし、それは空振りに終わった。ビュオツと空気を薙ぐ音が虚しく響く。

階段室の上に黒い霧が集い、弾けてヴァンパイア一行が姿を現す。転移魔術だ。ヴァンパイアは変身したり霧になったりできると聞くが、自身が霧になれるわけではないらしい。

「危ないじゃないか。そんな問答無用で剣を振るなんてね。もしかして、この娘も一緒に斬るつもりだったのかい？」

くくく、と酷薄に笑うヴァンパイア。彼に抱えられた愛沙の首筋に、右サイドテールの蝙蝠娘が刃物を添えるように翼の先端を突きつける。

キツとウロは穴が開きそうなほどの視線でヴァンパイアを睨み、大剣を下げた。

「ああ、やはり人質は有効のようだね。そのまま大人しくしていてもらうよ。このお嬢さんも実においしそうな血をしているからね。無下に散らしたくないんだ」

こちらが要求を呑んだとしても愛沙は返さない、言外にそう言っている。

ここまで堂々と人質を取られてはウロボロスも動くに動けない。絼也も頭をフル回転させて策を講じているが、敵は階段室の上、近いはずなのに遠過ぎる。

だが、チャンスがないわけではない。奴らの狙いは絼也なのだから、必ずなんらかのアクションを起こすはずだ。もし絼也だけ階段室に登ってこいなどと言われれば、その時は……。

「さて、ここまでやっというてなんだけど、僕は争いに来たわけじゃない。清々しい曇天とはいえ、昼間だと僕の力は半減しちゃうからね」

「だったら、なにをしに来たんだ」

怒りを滲ませて絼也が凄むと、ヴァンパイアは気絶した愛沙を蝙蝠娘たちに預け、気品さえ感じられる仕草で片手を前に広げる。

「今宵開かれる僕の『パーティー』に君たちを招待しに、だよ。ああ、もちろん来客としてではなく、食材としてだけだね」

本音を隠すつもりもないらしい。幻獣ウロボロスを前にしてその余裕、流石はアンデットの帝王だ。ハルピュイアなんかとは幻獣としての格が違う。

「この娘の身柄はそれまで預かせてもらおうよ。くくく、どうかな？ 絶対に行きたくなる招待状だ　ん？」

その時、ヴァンパイアたちの背後から人影が飛び上がった。それに気づいたヴァンパイアが微かに瞠目する。

「水を差して悪いが、愛沙は返してもらおう」

孝一だ。いつの間にかいなくなっていたかと思えば、奴らの背後に回っていたのか。

彼は手に持ったカッターナイフを忍者のように投擲した。それは

愛沙を抱えるバツクテールの蝙蝠娘の腕に突き刺さり、強制的に愛沙から手を離させる。

その隙に倒れる愛沙を受け止め　　ようとしたところで、ヴァンパイアに胸座を掴まれた。支えられず倒れた愛沙を他の蝙蝠娘二人が抱き起こす。

「力のない人間が無茶をするものじゃないよ。僕は男の血は好まないのね、君はこのまま死んでもらうとしよう」

ヴァンパイアが孝一を掴んでいない方の手を掲げ、無慈悲に振り下ろす。　　その直前、紘也は叫んだ。

「ウロ！」

了解の返事もなしに跳躍したウロがヴァンパイアを背中から豪快に斬りつけた。漆黒のマントが引き千切れ、鮮血の飛沫が宙に踊る。

が、浅い。ヴァンパイアが咄嗟に身をずらしたのを紘也は見ている。

「ぐっ」

苦悶に喘いだヴァンパイアは孝一を投げ捨てて再び転移する。次に現れた場所は屋上の反対側の端だった。当然、蝙蝠娘と人質の愛沙も同伴している。

「孝一、無事か？」

「ああ、なんとか。それより失敗した。すまん」

謝ることはない、起き上がった孝一に安堵した紘也はそう返した。旦那様、と心配する蝙蝠娘たちを手で制し、ヴァンパイアは口元を不敵に歪める。

「やってくれたね。だけどこの程度では傷の内に入らない」

「だったらすぐにも致命傷を与えてあげるわ！」

ドゴン！　と階段室の扉が吹き飛び、そこから巨大な氷の槍が飛び出した。

氷槍の先端はヴァンパイアの左胸を正確にロックしている。心臓

に木の杭ならぬ氷の槍を打ち込めば確実に致命傷だ。

だが、凄まじい勢いで飛弾する氷槍は片手で軽々と弾かれた。勢いを失った氷槍はフェンスを押し潰して静止する。

「……陰陽師か」

忌々しげに吐き捨てるヴァンパイアの視線の先には、天之秘剣・氷迦理を構えた葛木香雅里の姿があった。戦闘の気配を感じ取って駆けつけてくれたのだ。

「かがりん遅いよ！ せっかく個種結界張らずに待ってたのにさ！」唇を尖らせるウロを香雅里は一瞥し、悪かったわね、と呟く。

戦力は揃った。ウロボロスと香雅里はもちろん、紘也や孝一にだってサポートはできる。あとはどう愛沙を取り返してヴァンパイアを討つかだ。

奴は自分から昼間は力が半減すると漏らしている。それなのにわざわざ昼間に現れたのは、目の前で愛沙を攫うことで確実に紘也とウロを『パーティー』に招待するためだろう。だからせっかく入手した人質を下手に殺すことはできないはずだ。

確かに人質を取るといふ狡猾な手段は紘也たちには効果的だ。しかし、奴は無力な一般人を眼中に入れていなかった。

その結果、ヴァンパイアは傷を負い、趨勢は紘也たちに傾いた。「フ、流石に分が悪くなってきたね」

こんな状況になっても、ヴァンパイアの表情から余裕は消えなかった。

彼の足下から黒い霧が間欠泉のように噴き上がる。ウロの攻撃を回避する時よりも量が多く、時間も長い。

そうか、奴らは遠距離転移もできるのだ。

紘也はヴァンパイアたちが最初に転移で現れた時のことを思い出す。奴らは、一体どこから学校まで転移してきた？

まずい、逃げられる。

「ウロ、逃がすな！」

「当たり前だよ！ 愛沙ちゃんはあたしの大事な大事な友達なん

だから！」

ウロと香雅里が同時に床を蹴る。人間離れた二人のスピードな
らからうじて間に合う。

「無駄だぎゃ！」

「にげるにげる」

「……旦那様は転移に集中してください」

キイイイイイイン！ と蝙蝠娘たちが魔力を乗せた超音波を放
った。ウロと香雅里の足が止まる。そして今度は紘也ももろに受け
てしまい、頭を内側から破壊されるような痛感に襲われる。

「ぐ、がっ」

平衡感覚が失われて堪らず紘也は膝をついた。途切れそうな意識
の中、黒霧からヴァンパイアの気取った声が耳に響く。

「『パーティー』の時間と場所は追って知らせよう。くく、ウロボ
ロスとその契約者に相応しい最高の調理場を用意して待っているよ」

黒い霧が空気に溶け、転移が完了したことを告げた。

Section - 21 敵地へ(前書き)

第四章

愛沙がヴァンパイアに攫われてから数時間が経過していた。

紘也、ウロ、孝一の三人は秋幡家のリビングにてテーブルを囲んでいた。

親友が攫われた。よりにもよって幻獣ヴァンパイアに。紘也とウロを誘うための餌なのだから、すぐに殺されるようなことはないだろう。しかし、それ以外だったらなにをされてもおかしくない。そう思うと、いても立ってもいらなくなる。

今すぐ家を飛び出して助けに行きたい、そんな衝動が胸中で渦巻いているが、残念ながら敵の居場所については皆目見当がつかない。無論、愛沙の携帯も繋がらなかった。闇雲に市内を奔走するほど、紘也はまだ錯乱していない。

それは孝一も同じだ。先程から難しい顔をして熟考している。

沈黙が続く。

それを破ったのは、ウロだった。

「紘也くんも孝一くんももつと表情緩めようよ。居場所がわかるのは時間の問題だよ。なにせ向こうから教えてくれるんだからね」

「よかったな、孝一。名前覚えてもらえたぞ」

「ああ、そうだな。じゃ、オレもフローラのことは『ウロ』と呼ぶことにしよう」

底抜けに明るい声に感化され、紘也も孝一も顔の曇りが少しばかり晴れた気がした。もしウロが「愛沙ちゃんなら大丈夫だよ」とか根拠のない慰めを口にした場合、たぶん紘也は怒鳴っていた。

「しかしな、ウロ。向こうからお呼びがかかるってことは、お前を打ち負かす準備が整ったってことだろ。それをただ待つのは馬鹿のすることだ」

「いえいえ、たとえどんな罠を仕掛けてようと、この完全無欠のウロボロスさんなら一瞬で片づけて差し上げますよ」

どん、とそこまで主張の激しくない胸を叩くウロ。頼もしい、と感じはすれど、言えば調子に乗るから紘也がその言葉を口にするこ
とはない。

「いやでもお前、昨日散々『ヴァンパイア』に泣かされただろ」

「カードと現実を一緒にしないでよ！」

「現実をカードで評価するお前に言われたくはない」

ぷっ、となにかが吹き出す音を聞いた。孝一からだ。

「ははは、なんか二人を見ていると、シリアスに考えるのが馬鹿ら
しくなってくるな」

「待て、そこはシリアスになるべきだと思うぞ。事は愛沙の、さら
に俺の命に関わるんだ」

「そうだよ、笑うとこじゃないよ」

「お前はさつき表情を緩めるとか言ってたよな？」

「とにかくだ、紘也。愛沙の安否を気にして焦るのはよくない。葛
木家が総力を挙げて捜査しているらしいから、その報を待ちつつ体
を休めることが今のオレたちにできることだ。違うか？」

「その葛木家が俺らにヴァンパイアの居場所を教えてくれるとは思
えないけどな」

『幻獣狩りは連盟の仕事よ。だからここから先は私たちに任せなさ
い。ウロボロスの契約者とはいえあなたは一般人。家にも引き籠
って一步も外に出ないこと。いいわね』

香雅里はそう言って紘也たちと別れた。彼女たちは彼女たちだけ
で動いている。こちらに情報が回って来ることはないと考えるべき
だ。

当然、引き籠っているとかわれて大人しく布団の中でビクビク震
えている紘也ではない。赤の他人ならいざ知らず、攫われたのは愛
沙なのだ。無関係じゃない。寧ろ紘也たちの問題であり、葛木家に
は手を引いてもらいたいくらいだ。

孝一が窓の外に視線をやる。

「なあ、盗聴はできないか？ いるんだろ、その辺に見張りが」

「この家を囲むように四人いるね。でも、四人ともたいした術者じゃないっばいから情報は伝わらないと思うよ」

「ウロ、お前のその探知能力で奴らの居場所を探れないか？」

「それは無理だよ、紘也くん。『人化』した状態だと半径一キロ圏内が限界です」

そこは？ 無限？ じゃないのか、と紘也は嘆息する。葛木家にしても無能とは思っていないが、昨夜も居場所を見つけられなかったのだ。あまり期待はできない。

そんなこんなで無駄に時間だけが過ぎ去っていき、ふと気づいたら鈍色の雲に隠れた太陽が西に沈みかける時刻となっていた。

だが、転機はそこでやってきた。

孝一の携帯からなんかのアニソンと思われる曲が流れた。通話らしく、孝一が携帯を取って耳にあてる。

「どうした？ ……なに！？ そうか、サンキュ。いや、警察には連絡しなくていい」

それだけの短い会話で孝一は通話を切った。表情が一変している。紘也とウロはなんのことかわからず、顔を見合わせてから孝一の口が開くの待つ。

「実はな、オレはオレの情報網を使って搜索してたんだ。で、今、後輩の一人から連絡があった。黒装束の怪しい集団がとある場所に集まっているそうだ」

孝一は自分の突発的な遊びの企画に、時折学年の壁を跨いでまで参加者を募ることがある。そのため学校では顔が広く彼を慕っている生徒も多い。そんな彼らと情報交換しているから孝一はいろいろなことに詳しいのだ。

情報に出てきた黒装束とは葛木家の陰陽師に違いない。そして、とある場所というのは恐らく

「ヴァンパイアの居場所が見つかった」

「その可能性は高いな」

「とある場所ってどこだ？」

「市街地の東にある廃ビルだ。ほら、昔映画館があったところ」

そこならよく知っている。映画館以外にも様々な店舗が集まった複合商業施設だ。三人で映画を見に行っていた頃の記憶は鮮明に残っている。だが、哀愁に浸っている暇などない。

「ウロ、行くぞ。ヴァンパイアが準備を完了する前に愛沙を助け出すんだ」

「オウ！ 和風魔術師なんか先を越させないよ！ 愛沙ちゃんはあたしが助けます！」

ウロはやる気満々だ。彼女はどこで馬が合ったのか愛沙と非常に仲良くなっている。助けたい気持ちは絃也たちにだって引けを取らないだろう。

しかし、商業施設跡地までは電車を乗り継いでも二十分はかかる。その間に香雅里たちがうまく救出したのなら文句は言わないが、相手はヴァンパイアだ。それもこの時間だと力もかなり取り戻しているはず。もし最悪の事態にでもなれば……絃也たちの到着を待たず愛沙が殺される。

と、ウロが庭に続く窓を全開にした。生温い風が絃也の皮膚を不快に撫でた。

ウロはピョンと庭へ飛び降り、ニッコリと微笑んで絃也を振り向く。

「絃也くん絃也くん、飛んで行くからあたしにしっかりと掴まって」

「は？ 飛ぶ？」

素っ頓狂な声を出した絃也は孝一と共に驚愕した。ウロの背中から、緩いウェーブヘアを押し除けて一対の巨翼が出現したのだ。巨大な鱗を重ね合わせたような翼は、鳥のそれとは違い無骨で頑丈そうであり、そしてやはりというか淡い金色をしていた。

飛ぶ。つまり、空から敵地へ行くこうというのだ。確かに、それなら格段に速い。

「すげえな。まるでドラゴンみたいだ」

「まるでじゃなくて真正銘のドラゴンだよっ！」

ぶくつと頬を膨らますウロに苦笑しつつ、紘也は世界の幻獣TCGでも『ウロボロス』には 飛空 の能力があったことを思い出した。

紘也は玄関から自分とウロの靴を持ってくる。それを履いてから、言われたように彼女に掴まろうとするのだが

どこを掴めば？

紘也は困惑した。とりあえず手が妥当なのではと考えるが、ウロは片膝をついて左右の手を別々の高さに置いて構えている。あれはどういう意味だと逡巡している間も、上体をやや前屈みにして離陸態勢を取るウロの目が「さあ掴まって！」と急かしてくる。

「なにやってんの紘也くん！ さあ遠慮なんかしないでお姫様だっこするようにその身をあたしに預けゴフンツ！？」

「わかった。背中に乗ることにする」

げしつと竜翼の付け根辺りを踏みつけて紘也は搭乗した。はずみでウロは地面と接吻を交わす。

「うぺっ……あ、あのう紘也くん？ そ、そこだと飛ぶのにすごく邪魔」

「翼なんて浮遊魔術のオプションのようなもんだろ。あと絶対に俺を落とすなよ」

「あうう、なまじ魔術の知識がある紘也くんは嫌いです。あとやっぱあんたSだ」

「いいから飛べ」

命令を下すと、竜翼が力強く羽ばたきウロの体がふわりと浮かんだ。彼女の背中に立つ紘也は危うく落ちるかと思ったが、まるでシートベルトを絞めて体を固定しているかのように不思議とバランスが崩れない。これも浮遊魔術の効果なのだろう。

「待ってくれ二人とも。オレも一緒に行くぞ」

と、自分の靴を持ってきた孝一が慌てたように言った。

「無理無理無理！ ウロボロスさんは一人乗りです！」

「悪い、孝一。気持ちはわかるが、お前をこれ以上危険に巻き込むわけにはいかない。居場所を突き止めてくれただけで充分だよ。サンキュ」

孝一を連れて行くと、またハルピユイアの時や屋上の時みたいな無茶をするに決まっている。だから、不満を満面に表した孝一に説得される前に、紘也はウロに命ずる。

「行け！」

「イエス、マイ・ロード！」

調子よくウロは返事し、巨大な翼をもう一羽ばたき。たったそれだけで、一瞬にして自分の家が米粒のように小さくなった。

落ちないと知っていても遙か上空から見下ろす地上の景色にはゾツとしてしまう。深く長い呼吸一つでどうにか気を取り直した紘也は、鈍色の雲の方が近くに見える上空から敵地 廃ビルとなった複合商業施設のある方角を確認する。

「無事でいてくれ、愛沙」

Section - 22 捕らわれの愛沙

蒼谷市市街地の東端に一際目立つ建物がある。高さも然ることながら、思わず駆け回りたくなりそうな敷地面積が周囲に林立するビル群とは一線を画している。

だがそこは、見るからに廃墟だった。

元々は映画館を主軸とした超大型ショッピングセンターだったが、経営上の理由等で倒産し、もう何年も放置されているため酷く荒んでいる。

「ん……」

ただっ広い屋上駐車場。いくつかあるペントハウスの一つに凭れる形で、愛沙は意識を取り戻した。

「……あ、あれ？」

愛沙はぼーっとする頭のまま周囲を見回し、ここが学校ではないことを理解する。知らない場所ではない……と思う。どこか懐かしい感じがするからだ。

「お目覚めのようなね、お嬢さん」

静謐な屋上にコツコツと靴音を響かせ、長身瘦躯の美青年が歩み寄ってきた。

「あなたは」

誰？ と訊ねようとした愛沙だが、そこで僅かに残留していた記憶が蘇ってきた。完全に意識を失ってしまう前に聞こえた、友人の声。

「ヴァンパイア、さん？」

「旦那様を気安く呼ぶなだぎゃ！」

「よぶなよぶな」

「……慮外者」

ヴァンパイアの後ろに控えていた蝙蝠娘たちがギャーギャーと喚く。そんな彼女たちにヴァンパイアは穏やかな口調で下がるよう命

じると、再び愛沙に向き直った。

「フフ、これは驚いたね。僕の魔術で眠らせたはずなのに、すぐには意識を失わなかったようだ。やはり君もただの人間じゃないのかな？」

「ど、どういうこと？」

言われた意味を理解できず愛沙は眉根を寄せる。少しでもヴァンパイアから離れようと身を擦るが、後ろはペントハウスの壁。逃げ場はない。

「僕は君から、微かだけど神官に似た気を感じるんだよね」

それは愛沙が神社の娘だからだろう。ただ、愛沙に霊感がないことも本当である。幽霊なんてこの間見た鬼火が初めてなのだ。

「まあ、それはいいや。ところで確認だけど、君は状況をわかつているのかな？」

愛沙はもう一度周囲を見回し、ヴァンパイアを見、自分の体を見る。別段、痛いところはないし、拘束されてもいない。

でも、なんとなくわかる。自分は捕まったのだ。

「君は人質だよ。ウロボロスとその契約者を釣るための餌だ。逃げようなんて考えは持たないように」

彼は釘を刺しに来たのだろうが、愛沙は逃げることなど微塵も考えていなかった。逃げられるとは到底思えないからだ。

それに、愛沙がなにもしなくても紘也たちは助けに来てくれると思う。いや、必ず来る。たとえそれがヴァンパイアの望むことであつたとしても、愛沙が彼らの足枷になることを知っていても、必ず、
だけ

「ヒロちゃんとウロちゃんは、あなたなんかには負けません！」

そう信じられるから、愛沙は逃げない。

「負けてもらわないと困るね。僕はどうしてもウロボロスの血がほしいんだ」

「？ どうして、ウロちゃんのを？」

紘也が狙われる理由は知っている。幻獣がこの世界で生き残るた

めに必要な魔力を、彼は充分過ぎるほど持っているからだと聞いた。でも、どうしてウロボロスを？

「戦いにおいて伝説を一切残さないウロボロス。その強さを得るためだよ。そうすることで僕は純粋な力でドラゴン族をも越えることができる。かつて僕に最大の屈辱を与えてくれた『あいつ』だって踏み潰せる」

その瞬間、愛沙はヴァンパイアから底知れぬ憎しみの念を感じ取った。それがなにか訊ねる前に、ヴァンパイアは踵を返した。

「まったく、この世界に飛ばしてくれた魔術師連盟には感謝しなくちゃいけないね。『人化』で弱体化したウロボロスなら僕にだってどうにでもできる」

ぶつぶつと呟きながら、ヴァンパイアは屋上の端にまで歩いて行く。そして眼下の夜景を眺めながら、くくく、と忍び笑いを漏らす。

「迎え撃つ準備は整っている。あとは使いをやって彼女らを呼ぶだけだ。でも」
「マントを翻し、ヴァンパイアは遠くのペントハウスの入口を見やっ

った。
「その前に、ゴミ掃除をしなきゃいけないみたいだね」

刹那、ペントハウスのガラス扉が砕け散り、黒装束の集団が雪崩込んできた。

その中の先頭に立ち、集団を率いている少女が声高に命令する。

「吸血鬼及びその眷属を一匹残らず滅殺しなさい！ もちろん、人質の安否は最優先よ！」

「あちゃー。どうも戦闘が始まったっぽいよ」

蒼谷市上空を飛翔するウロが僅かに深刻さを滲ませた声で告げた。

「わかるのか？」

「戦ってさえいれば『人化』してても遠くの魔力を感知できるからね。それはそうと紘也くん、やっぱりあたしは背中に乗せるよりお姫様だっこした方が楽なだけど？」

「愛沙が巻き添えを食うかもしれない。ウロ、急げ」

「……しくしく、やっぱスルーですかい」

こんな時にいちいち突っ込んでいられない。それにもう二度とあんな屈辱的な担がれ方はごめんだ。もし今後も空を飛ぶ機会があったとしても、今みたいにウロボロスというサーフボードで空中サーフィンをする形になるだろう。

「でも、あのヴァンパイアが大事な人質を巻き添えなんかで傷つけるようなへマ、しないとと思うよ」

「あん？ どういうことだ？」

さらに飛行速度を上げつつ、ウロは容赦のない分析を口にする。

「並の術者よりちょっと強いくらいが集まったところで、人間じゃあヴァンパイアには勝てないんだよ」

「ビュン！ と大気が悲鳴を上げた。

葛木香雅里の持つ宝剣 天之秘剣・冰迦理 が、盛大に空振りした音だった。

「はあ、はあ、妖魔なんかに、こんな妖魔なんか……」

息を荒げ、額から血を流した香雅里は前方を親の仇を見るように

キツと睨んだ。重たい雲で覆われた暗天を背景に妖魔　幻獣ヴァンパイアが佇んでいる。

無傷で。

「君も頑張るねえ。でも僕は暇じゃないんだ。早く彼らみたいにくたばってくれないかな？」

ズボンのポケットに手を入れ、余裕ぶった表情で香雅里を見下すヴァンパイア。一見隙だらけに構えている敵に、香雅里は床を全力で蹴って突撃する。

葛木家秘伝の術式で強化した体が蓄積されたダメージのせいで軋む。苦悶に表情が歪むが香雅里は止まらない。止まるわけにはいかない。

香雅里は葛木家の精鋭を十三人率いて妖魔討伐に赴いた。だが、その十三人は全員、屋上のおちこちで倒れている。考えたくないが、既に事切れている者もいるかもしれない。

これが、夜の帝王。

香雅里はヴァンパイアを甘く見ていたわけではなかった。寧ろその脅威を充分に承知した上で討滅するに足る戦力を揃えたはずだった。

なのに、全員でかかっても全く歯が立たなかった。徒党を組んだ赤子が刃物を持つ大人に挑んだように、埋めようのない実力差に一方的に蹂躪された。

香雅里の判断ミスが失敗を招いたことになる。その責任を強く感じている香雅里は、最後の一人に「逃げてください」と言われても、ここで退くわけにはいかなかった。

「はっ！」

渾身の力を込めて刀を振るう。左から右に青白い残光を引く　氷迦理　がヴァンパイアの頭部を真横に分断せんと疾る。

が、ヴァンパイアは二本の指で　氷迦理　の刃を容易く白刃取りしてみせた。ニヤついた顔が香雅里の感情を逆撫でする。

激情に任せ、叫ぶ。

「凍りつけええッ!!」

ありつたけの魔力を 氷迦理 に注ぐ。刀はそれに答え、刀身に絶対零度の冷気を纏う。だがそれよりも先に、ヴァンパイアの掌底が鳩尾を強く殴打した。

「がはっ」

大気に波紋が生じ、体を粉碎されるようなとてつもない衝撃で香雅里は吹き飛ばされる。

……死ん、だ？

そう思った。痛みは感じていない。視界が真っ白に染まり、意識が遠退いて行く。

「カガリちゃん!？」

とその時、助けるべき人質 鷺嶋愛沙の悲鳴が遠く聞こえた。ハッと正気つき、どうにか意識を取り留める。

「そうだ、私はまだ死ねない。せめて彼女を助けないと、彼に、秋幡紘也に会わず顔がないじゃない」

連盟の仕事だからって彼らの協力を断ったのは自分だ。こちらでなんとかかすると言っておいて、死んだので失敗しましたでは話にならない。

「みんなの仇も討たないと!」

視界が正常に戻る。遠くに見える茫漠とした屋上に、ヴァンパイアと蝙蝠娘たちに捕らわれた鷺嶋愛沙の姿を確認する。

遠くに、見える？

「ッ!？」

香雅里は自分が空中に放り出されていることをようやく理解した。下に見える地面も遠い。この高さからだ、いくら術式で強化した肉体でも耐えられない。

「う……そ……」

吹き飛んでいた体が一瞬停止する。物理法則に従い、落下が始まる。

両の瞳に涙が滲む。今度こそ死んだという絶望と、一矢すら報い

ることもできなかつた悔しさに支配される。

「た、助けて」

だから、そんな弱音を無意識に吐いてしまった。

「かがりん!!」

直後、視界の端に金色の翼らしきものが映った。かと思うと、香雅里から落下していた感覚が消え去った。代わりに自分がなにか温かいものに包まれる感覚を覚える。

「悪い、葛木。屈辱的かもしれんけど少し我慢してくれ」

すぐそこに見覚えのある顔があった。秋幡紘也だ。自分は彼に受け止められているようだ。それもフィクションの世界でしか見たことのないお姫様だつこで。

普段であれば喚いて彼を殴っていたらろうが、今はそんな余力などない。

「なんで、来た、のよ」

「愛沙を助けるために決まってるだろ。ああ、別に葛木を信じてなかったわけじゃないぞ。俺は自分で動かないと気が済まない性質なんだ」

彼の言葉から、鷺嶋愛沙ほどではないが自分のことも心配してくれている感情が伝わってきた。とても優しい感情だった。

「紘也大佐！ 紘也大佐！ 緊急事態であります！ やはり一人乗りのウロボロスさんに二人は厳しいようです！」

「どうにか踏ん張れ」

「しかし大佐、『人化』した状態だと浮遊魔術の制限が自分と大人一人分なのですよ」

「いいから頑張れ。墜落したら眼球にカラシ塗りたくってやる」

「そんな殺生な!？」

ヨレヨレと、安定しない飛行でウロボロスは巨大な廃ビルの屋上へと向かう。

「まあ、なんだ、あとは俺たちに任せてくれないか？」

そう紘也が言った瞬間、彼らが来てくれたことに安堵してしまっ

たのか、一度取り留めた香雅里の意識が朦朧とし始める。

「……………ごめ、ん」

絞り出した力のない声でそれだけ囁くと、香雅里の意識は暗転した。

「手間が省けたね。丁度君たちを呼ぼうとしていたところだったんだ」

屋上に着地すると、ヴァンパイアが歓迎するように両腕を広げてきた。

紘也は香雅里をペントハウスの陰に寝かせた後、屋上の惨状に吐き気を催しながらもヴァンパイアに問うた。

「愛沙はどこだ？」

「御安心を。僕の可愛い蝙蝠たちがしっかりとお世話しているよ」
パチン、とヴァンパイアが指を鳴らす。すると、ヴァンパイア側のペントハウスから四つの影が夜空に飛び上がった。愛沙と、彼女を支える蝙蝠娘の三人である。

「ひ、ヒロくん！ ウロちゃん！」

「愛沙、もう少し我慢してくれ。すぐに助けてやるからな！」

愛沙の姿に愛沙の声。彼女が無事であることに紘也は安心の吐息を漏らす。

「うるさいぎゃ、人間！」

「うるさいうるさい」

「……黙って」

蝙蝠娘たちに愛沙は口を塞がれた。もがいているようだが、彼女の力では幻獣を振り払うのは無理だ。

「ウロ、そっちは任せたぞ」

「イエッサー 　　って紘也くん、一人でジャイアントバットを相手にする気？」

「俺を死なせたくなかったら、さっさとあいつ片づけてこい」

「むう、ウロボロス使いが荒いんだよ紘也くんはもう」

余裕ぶっこいているヴァンパイアにウロが向き直った時、それは起こった。

「ッ!?」

ウロと紘也を中心に黒い光が灯った。と思つたら、光は幾何学的な模様を描きながら円形に展開していく。

「魔法陣!?!」

「紘也くん離れて!」

どん、と紘也はウロに陣の外まで突き飛ばされた。すぐに起き上がって振り返ると、彼女はまだ陣の中心に立っている。しかも、様子がおかしい。

「あ、あれ……? か、体が、動か、ない」

「僕の魔術、深淵の束縛だよ。それも時間をかけて仕込んだ強力なやつだ。どうだい、指の一本も動かないだろう? 君に自由にされると敵わないからね」

ヴァンパイアは勝ち誇っている。余裕ぶっているが決して油断はしていない。奥の手を速攻で使ってきたのがその証拠だ。

なにか仕掛けてくるとわかっていたのに、気をつけていたはずなのに、愛沙に気を取られている隙にまんまとハマってしまった。蝙蝠娘たちを飛び上がらせたのは、人質を解放させにくくするためもあり、術式発動を見極めさせないためでもあったのだ。

いきなり大ピンチである。

「くくく、君はしばらくそこで見物しているといい。ウロボロスの生血を僕の力に変換するには、陰陽師と戦った後だと些か魔力が不足しているんだ。だから」

次の瞬間、ヴァンパイアは紘也の前まで移動していた。

「なっ!?!」

「まずは契約者の魔力をいただくとするよ」

転移魔術でもないのになんて速さだ。いや、問題はそこじゃない。待て、あんたの目的は俺の魔力じゃないのかよ」

「違う。君はおまけだよ」ヴァンパイアは即答し、「と言っても、人間でありながらヴァンパイアの僕をも凌ぐ魔力量は確かに魅力的だ。君を喰らえばどんなザコ幻獣でも相当な力入手できるだろう

ね」

正直、驚いた。奴の狙いが紘也でなかったこともそうだが、紘也の潜在魔力がヴァンパイア以上だということは初知りだった。紘也が幻獣に狙われる理由は、ただ魔力量が多いからではなく、凄まじく多いからだ。

だが、今はそんなことどうだつていい。

「ウロボロスの生血、それがあんたの本当の狙いってわけか。なんのためだ？」

「君はお話が好きなようだね。まあいいさ。君を喰らう前に少しだけ簡単な昔話をしてあげよう」

ヴァンパイアは一呼吸置き、必死に束縛術式内でもかくウロを一瞥してから、芝居がかった口調で語り始める。その顔には実に嫌らしい笑みが貼りついていていた。

「むかしむかし、一体のヴァンパイアが人間界にやってきました。ヴァンパイアは楽しい楽しい人間界で生きるために多くの人間の血を吸ってきました。しかしある日、ヴァンパイアは悪い悪い魔術師に見つかってしまいました。そして死闘の果てに、幻獣界へと送り帰されてしまったのです。戦いの影響で力の大半を失ってしまったヴァンパイアは、いつの日か再び人間界へと訪れ、その魔術師に復讐することを誓いましたとさ」

文章だと五行くらいで終わりそうな短い昔話だったが、内容は実にわかりやすかった。

「力を得るために最も手っ取り早い方法が高位のドラゴン族の生血を飲むことなんだ。だけど、幻獣の頂点に君臨するドラゴンにヴァンパイアが勝てるはずもない。『人化』していない状態なら、ただどね」

「悪い魔術師つてのは、まだ生きてるのか？」

「昔と言っても十年ほど前だからね。死んでなければ生きているはずよ」

「その魔術師の名前は？」

訊ねると、ヴァンパイアは記憶を辿るように顎へ手をやり、

「秋幡辰久……だったかな？ 人間ごときに敗れたあの日の屈辱は未だに忘れてないよ」

脳裏をピンピンと刺激していた嫌な予感が的中した。幻獣ヴァンパイアを退けたという自慢話を、紘也は遠い昔に聞いたことがあったのだ。

あの父親がこんなところでも息子に迷惑かけていたことを知り、内心で怒りを滾らせる紘也。

だが、「それは俺の父親です」なんて言えるわけもなく、紘也は口籠る。そのだんまりをこれ以上質問はないと捉えたのが、ヴァンパイアは犬歯を剥いてニイと笑った。

「男を喰らうのは趣味じゃないけど、君は特別だ。その血、魔力と共に一滴残さず吸い尽してあげるよ」

「がっ!？」

身構える暇もなく、紘也は一瞬で背後へ移動したヴァンパイアに羽交い締めにされる。ヴァンパイアは大口を開き、紘也の首筋にその鋭い犬歯を突き立てようとする。

その時だった。

「!？」

ゴゴゴゴゴゴゴ! と地鳴りのような音を立てて廃ビルが微振動した。僅かに遅れて、紘也は膨大な魔力の高ぶりをその身に感じる。

紘也は知っている。彼女と初めて会ったその日に、一度経験している。

「ウロ!」

見ると、ウロは自身の左腕に噛みついていて。自らを喰らうことによって力を高めるウロボロスの魔力ドーピングだ。

「な、なにをしているんだ!？」

紘也を喰らうことも忘れ、初めてヴァンパイアは驚愕に目を見開いている。それほどの魔力がウロから溢れている。

風もないのに金髪を靡かせるウロが、一步、また一步と動き始める。

「まさか、僕の 深淵の束縛 が……」

パキン！

氷に罅が入るような音がした瞬間、ウロボロスを拘束していた魔法陣が消し飛んだ。

ウロは噛みつきをやめる。だが前のようにすぐ魔力が収まることなく、彼女の周囲の空間がオーラを纏うように揺らいでいる。

凜とした表情でウロはヴァンパイアを睥睨し、ビシッと指差す。

「その変態吸血鬼！ 今すぐあたしの絃也くんから離れなさい！」
ウロの啖呵のせいで我に返ったヴァンパイアが忍び笑いをする。

「くくく、僕の術式が破られたのは残念だけど、もう遅いよ。君の主さえいただけば」

彼の言葉は最後まで紡がれることはなかった。

まさに瞬間移動とも言える動きで一瞬にして間合いを詰めたウロの拳打が、ヴァンパイアの顔面を見事なまでに陥没させたからだ。

「ぐべあつ！？」

と妙な悲鳴を発してヴァンパイアが高速で吹っ飛んだ。その体で背後にあったペントハウスの壁に大穴を穿つ。

「あ、馬鹿！ あそこには葛木がいるんだぞ！」

「大丈夫だよ絃也くん、ほらあそこ見て」

言われた通りにウロの指差す方向へ視線をやると、意識を取り戻したらしい香雅里が屋上の端まで移動していた。

「まったく、僕としたことが、少し油断していたみたいだね。まさかここまで強いとは思わなかったよ」

ペントハウスの大穴からヴァンパイアが姿を現す。鼻血が出ているが、それ以外はどうも無傷に近い。

「でも、『人化』したまま夜の僕に勝てると思わないことだ。君を

討つ策は 深淵の束縛 だけじゃないのね」

パチン。再びヴァンパイアが指を鳴らした刹那、彼を中心に闇が広がった。一切の光もない暗黒が廃ビルの屋上を包み込む。なにも見えなくなった。

「な、なんだよこれ!？」

「落ち着いて絃也くん。これ、ヴァンパイアの個種結界だから」

ヴァンパイアの特徴は？暗黒？だ。暗ければ暗いほど強くなる。

純粹に自分自身を強化する上に、敵の視覚を奪う強力な結界だ。

「どうやらこの場所はいつの特徴を強化する仕掛けがしてあるみたいだね。？暗黒？でここまで真っ暗になった結界なんて初めて見たよ」

分析するウロの声だけが絃也の耳に届く。絃也を不安にさせない。明るい口調だった。

「そこを動かないでね絃也くん。ヴァンパイアなんて速攻でコテンパンのグツチャグチャにしますよ」

そう言い残したウロの気配が遠ざかる。

数瞬の静寂。

その後、すぐに激しい打撃音が響いてきた。なにも見えないから戦闘がどのように行われているのか判然としない。

ヴァンパイアはウロに任せておけばいいだろう。今のうちに愛沙を助けたいところだが、こう暗いと絃也にはどうすることもできない。目が慣れたら見えるとかいうレベルの闇ではないのだ。

かといってただじっと待つなんてしたくない。上空にいる愛沙は助けられなくても、この暗黒結界をどうにかしよう。

絃也は自分の頼りない魔力感知能力を総動員し、慎重にその場を移動し始めた。

視力が全く利かないヴァンパイアの個種結界の中、ウロボロスはどこからくるかも予測できない拳打や蹴りの猛襲に堪えていた。

竜鱗の鎧 と？再生？のおかげでダメージこそ微々たるものだが、一方的に攻められるだけで反撃に転じられない。

「くくく、どうした、ウロボロス。速攻で僕を倒すんじゃないのかい？」

「ええ、速攻で倒しますとも。でもまだそのタイミングじゃあないんだよ」

「減らず口を。いいだろう。もう少し甚振ってもよかったけど、手早く君を行動不能にしてあげるよ！」

ヴァンパイアの気配が闇の奥へ消える。感知できないほど魔力も抑えられているため居所が掴めない。わかることといえば、紘也の方には行っていないということだ。紘也の魔力は乱れていないから、ウロボロスが暗闇でもたついている間に彼が襲われるような事態にはなっていない。

ヴァンパイアは、今度こそ邪魔されないようにウロボロスを叩き潰す腹なのだろう。

「そうはいかないよ」

長年使っていなかった感覚を馴らすのに少々時間を食ったが、反撃の用途は立った。

後ろ。

首を掴まんと伸ばしてきた手を、頭を僅かに横へ傾けてかわす。無論かわすだけでは終わらせない。ウロボロスはその腕を逆に掴むと、一本背負いの要領でヴァンパイアをコンクリの床面へと叩きつけた。

「！？」

ヴァンパイアの驚愕が気配で伝わる。だがすぐにウロボロスの腕

を振り払い、飛び起きて距離を取る。

「僕の攻撃が見切られた？ まさか、偶然だ」

「偶然だと思う？」

「思いたいけど、それはこれから確かめてみるよ」

前方から強い魔力が接近するのを感じる。

が、それは罔だ。

「見え見えだね」

ウロボロスは腕を振り払って迫る魔力を薙ぐ。案の定、それは魔力弾だった。

振るった腕の勢いを殺さぬまま体を捻じる。紙一重の位置を真横から強い魔力が通り過ぎた。これも、魔力弾。

「そこ！」

二重のフェイクに隠れて背後から襲ってきた本体に肘打ちをぶつける。恐らく顔を潰したのか「ぶがつ！？」と奇妙な悲鳴が聞こえた。

「な、なぜ、僕の個種結界の中でこれほど動けるんだ……？」

「慣れたからだよ」

即答すると、ヴァンパイアは動揺を孕んだ声で返す。

「慣れる？ 馬鹿な。目が慣れるような闇ではないよ」

「目じゃあないんだよ」

「じゃあ、なんだと言っただい？」

「姿や気配、魔力は隠せても、体温までは隠せないからね」

ヴァンパイアの息を飲む気配。そう、ウロボロスはヴァンパイアの体の熱を感知することで居場所を特定し、行動を読んでいたのだ。アンデットの帝王と謳われるヴァンパイアだが、死人とは違う。人間よりは低いだろうけれど体温だってちゃんとある。

「……そうか、僕はまだ無限の大蛇を見縊っていたようだね。温度の微妙な変化を検知して獲物を探す、まさに蛇のような能力を持っていたというわけか」

「みんなして蛇蛇言うな！ あたしはドラゴンなのに！」

ウロボロスは蛇に近いけど、部族で言えばドラゴンに分類されるのだ。ここ重要。

「『人化』していてこの強さ。ますます君の血が欲しくなったよ」
ヴァンパイアの熱が微かに変動し、一鼓動の内にウロボロスへと接近する。速いが、？貪欲？の魔力強化で身体能力も向上したウロボロスにとって追いつけないスピードではない。

存在を感知できるようになればこっちのものである。繰り出される拳を、半身を捻ってかわし、そのまま脚を鞭のように撓らせる。

しかしヴァンパイアは寸でのところで後方へ飛び退り、高々とジャンプする。最早ヴァンパイアは気配や魔力を隠すつもりもないらしい。

上方から高密度の魔力の塊が降ってきた。ヴァンパイアの魔力弾だ。ウロボロスは瞬時に 竜鱗の鎧 を纏わせた腕でそれを弾く。

さらに間髪入れずその場から飛び退く。一瞬遅れて何者かがすたりと着地する。当然、ヴァンパイアだ。

ウロボロスは無限空間に手を入れる。引き抜いた黄金の大剣

ウロボロカリバー で一閃。ヴァンパイアは避けるために跳んだようだが、無駄だ。この剣からは逃れられない。ウロボロスの意思でどこまでも伸びる剣身が敵を追う。

ザシュツ、というはつきりとした手ごたえを感じた。「ぐあつ」と聞こえてきた呻き声はヴァンパイアのもの。間違っても紘也や愛沙を斬ってなどいない。

感覚的には浅かった。まだ敵は生きている。未だ個種結界が存在していることがそれを証明している。そう判断して次の一手を打とうとしたウロボロスだったが

突如、暗闇が消し飛んだ。

と言っても元々夜だったわけなので周囲は淡黒く染まっている。それでも全容を視認できる程度には明るくなった。

見ると、ヴァンパイアは血溜まりの中で膝をついていた。斬ったのは手で押さえている腹部のようだ。しかし、個種結界が消えたのにどうして生きているのだろうか。

斬られたシヨックで解けたとは考えられない。個種結界は一度発動させればあとはオートで持続されるからだ。解けるとしたら本人の意思で結界を維持している魔力を断つか、絶命するかだ。

「なんで結界解いちゃったの？ アレがあった方があんたにとって都合がいいでしょ」

ウロボロカリバー を肩に担いでウロボロスは訊ねた。

「ぐ……それは、僕の方が知りたいね。どうして解けたのか、一番驚いているのは僕なんだけど」

紳士服を血で染めたヴァンパイアがよろめきながら立ち上がる。

と

「ウロ！ なにやってんださっさと止め刺せよ！」

屋上の隅付近から絃也が駆け寄ってきた。

「オウ！ もしかして絃也くんがなにかした感じ？」

「俺はどうか愛沙を助ける。だから早くそいつ片づける」

「うっう、こんな時までスルーしちゃいやんいやん」

あの御主人様はどうしてウロボロスと会話のキャッチボールをする気がないのだろうか。

「くく、そうか。やはり彼は只者ではなかったようだ。君を倒すにしても、彼の魔力を奪うにしても、本来の僕の力を取り戻さなければならぬらしい」

スルーされた精神的ダメージで落涙するウロボロスの際を突き、ヴァンパイアが跳躍した。狙いは絃也 かと思いきや、彼はどういうわけか愛沙を拘束している蝙蝠娘たちの下へ飛んでいく。浮遊の魔術を使っているようだ。

ジャイアントバットにウロボロスの相手をさせて、その間に絃也を襲う気なのか？

そう考えたが、どうやらそれも違っていた。

「きゃっ」

ヴァンパイアは愛沙の腕を掴んで蝙蝠娘から引き剥がした。

「まさか、ここで人質を!? ウロ! どうにかしろ!」

「イエツス! もうこれ以上愛沙ちゃんに指一本触れさせないよ!」

ウロボロスが背中に竜翼を出現させようとした次の瞬間

「君、もう邪魔だから」

冷酷に告げて、ヴァンパイアは愛沙を放り捨てた。

S e c t i o n - 2 5 無光の個種結界（後書き）

次話が短いので本日はもう一度昼ごろに更新します^^

Section - 26 差し伸べられた手

「なっ!?!」

紘也は反射的に駆け出した。悲鳴を上げて落下する愛沙を受け止めるために。

しかし、あの軌道だとギリギリで屋上の鉄柵を越えてしまう。ビルの外に落下してしまう。そうなたら死は免れない。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおっ!!」

走る。走る。走る。

なんとか、かろうじて、追いつく。だがやはり、愛沙は屋上の鉄柵を僅かに越える。

紘也も鉄柵から身を乗り出し、手を突き出す。

「愛沙っ!!」

「ヒロくんっ!!」

愛沙も手を伸ばす。まだ届きそうにない。だったら、もっと体を向こうに

掴んだ。

ぐらり、と紘也のバランスが崩れた。視線が下に移動し、十階建てに相当する高さからの地上が目飛び込んでくる。

一瞬の浮遊感。紘也は、愛沙と手を繋いだまま自分も一緒に落ちてしまった。

「くそっ! 諦めるものか!」

思考が加速する。視界に移る光景がスローモーションで流れる。

掴めそうな場所を探すが、頭から落下している体勢では見つけても掴むことは不可能に近い。

絶体絶命。そう思っても、最後の瞬間まで諦めるつもりはない。

と、その時だった。

「紘也!」

聞き慣れた声と共に落下感がなくなった。片足を誰かに掴まれている。

どうにか頭を動かして見上げ　　驚愕に目を見開いた。

「こ、コウくん……!?!」

ガラス戸の外された窓から、諫早孝一が上半身を覗かせていたのだ。両手で紘也の足をしっかりと掴み、二人分の重さを支えている。

「今、引き上げる……」

「どうして孝一がここに　　いや、わかりきったことか。とにかく助かった。サンキュ」

「ありゃ？　　こういう場面は普通『手を放せ！　お前まで落ちるぞ

！』的なことを言うんじゃないのか？」

「言ったら放すのか？」

「はは、まさか」

孝一は冗談っぽく笑ってみせるが、その顔に余裕はない。紘也と愛沙、二人分の体重を一人で支え、それを引き上げようとしているのだ。負荷が軽いわけではない。このままでは本当に孝一まで落ちてしまう。

「くっ……ちと、きついで」

「コウくん、無理しないで」

「まずい。孝一もそろそろ限界に近い。」

「私も手伝うわ」

と、孝一の横から身を乗り出してきた香雅里が紘也のもう片方の足を掴んだ。ここは屋上のすぐ下に位置する階。自身のダメージも回復し切っていないのに、彼女は助けに来てくれた。

「秋幡紘也、これでさっきの借りは返したわよ」

「ああ」

「なんにしてもありがたい。」

「よし、一気に引っ張り上げるぞ！」

Section - 27 喰うか喰われるか

愛沙が放り投げられた瞬間、ウロボロスも紘也同様に動こうとした。

しかしそうしなかったのは、ヴァンパイア側に異変が起きたからだ。

「三人とも、悪いけど、一度僕の魔力に還ってもらおうよ」

ヴァンパイアはそう言うと、真ん中にいたバツクテールの蝙蝠娘の首筋に噛みついた。

「あぐう！？ い、いたいたい……んん……んあ！？」

トロンと目を恍惚させて弛緩した蝙蝠娘は、そのまま光の粒子マナとなってヴァンパイアへと吸い込まれる。

「シエ！？」

「……旦那様、あの、私たちも？」

返事することなく、ヴァンパイアは残った二人にも順に噛みついた。「んぎゃ」「……あうっ」と喘いだ後、その二人もヴァンパイアに吸収され、消えた。

瞬間、ヴァンパイアの魔力が爆発的に膨れ上がった。先程の傷も完全回復している。口元の血を拭い、ヴァンパイアは不敵に笑う。

「くくく、今度こそ本当に僕の本気だ。契約者が落下死したのは残念だけど、君が『人化』を解かないのであればこのままでも充分に戦える」

「なに言ってるの？ 紘也くんは死んでないよ。もちろん、愛沙ちゃんも」

紘也と契約しているからわかる。彼との魔力の繋がりを、命の鼓動を感じる。彼はまだ死んでいない。

「だとしたら、助けにいかないのかい？」

「あたしは紘也くんを信じてるんだよ。それに、あたしの仕事はあんなたをぶっ飛ばすことだからね」

ウロボロスは背中に金の竜翼を出現させる。

羽ばたき、離陸する。

ヴァンパイアと同じ目線まで飛翔し、凄みを利かせ、言う。

「あんたやり過ぎ。流石のあたしもプッチンときたよ。だからあたしがあんたを惨たらしく喰らってあげる」

一羽ばたきだけでウロボロスはヴァンパイアに突進した。黄金色の大剣を構え、袈裟斬りに振り下ろす。が、黒い霧の転移でかわされる。

「まだまだあ！」

間髪入れず後ろを振り向き、大剣を刺突。高速で剣身が伸びて現れた黒霧を貫いた。

「残念、ハズレ」

大剣は僅かにずれた位置を突いていた。ヴァンパイアは右手を前に翳すと、その五指の先端に魔力の塊を生む。スーパーボールくらい小さいが、圧縮された魔力は相当な量だ。

五つの魔力弾が同時に撃たれる。無論そんなものに当たるはずもなく、ウロボロスは避けながら手首を捻って伸ばした大剣を操作する。

刃がうねり、剣尖が予測不能な軌道を取りつつヴァンパイアの心臓を狙う。

が、寸前で見切られ、必要最小限の動作で避けられる。

一息の間も与えないように大剣を操作し、ウロボロスは何度も何度もヴァンパイアの急所を狙う。だがやはり、その全ては空振りに終わった。

「だったらこれはどうかかな？」

ウロボロスは掌に魔力を集中。夜闇を振り払うほどの輝きが爆発し、練り上げた魔力を光線としてぶつ放す。

超速で直進する魔力光は、とても避けられるようなスピードと範囲ではない。触れれば一瞬で塵となる威力だ。

だが、相手はアンデットの帝王。ハルピュイアのようにはいかな

い。

「確かに凄まじい攻撃だけど、この程度かい？」

声は頭上から。

見上げるが、そこには闇を纏ったヴァンパイアの拳が迫っていた。避け切れない。

殴打されたウロボロスは、空中に衝撃の波紋を残して弾かれたようにその身で商業施設の建物を破壊した。

「出てくるんだ。？無限？のウロボロスがこんなお遊びでくたばるわけがないだろう？」

バゴン！ 瓦礫を跳ね除けてウロボロスは再び飛翔する。

「当たり前だよ。あたしの恐ろしさをあなたに刻むのはここからだからね」

ウロボロスは掌に魔力の光を凝集し、ぶっ放つ。当然のように転移でかわされた。

「まったく恐ろしいよ。まさか同じ手を使ってくるとはね」

「そいつはどうかかな？」

ウロボロスが握った大剣を軽く揺する。と

「ッ！？」

ヴァンパイアは背後から迫る剣尖に気づいて瞠目した。奴の転移には前後にモーションがある。先程の数手でそれを正確に見極めた。だから転移先に前もって ウロボロカリバー を張り巡らすこともできる。

今度は転移する間も与えない。

「フン！」

鼻で嗤い、ヴァンパイアは迫りくる剣に漆黒のマントを巻きつけて受け止めた。刃の伸長が停滞した瞬間に転移。出現場所は ウロボロスの後方。

「さようなら。そしていただきます」

黒霧の中から吸血の牙を剥き、ヴァンパイアが襲い来る。剣を戻している暇はない。伸びる剣さえ止めてしまえばウロボロスは隙だ

らけになる、と思ったのだろうか

「歴戦のウロボロスさんを舐めないでよ。いただきますはこっちの台詞」

かぶり、とウロボロスは左手に噛みつく。噛みついたまま、右手をヴァンパイアへ翳す。

「今さらなにをやっても遅　！？」

ウロボロスを捕まえるために伸ばしたヴァンパイアの腕が、寸前で空間に呑まれた。

「む？　なんだこれは？　くっ、どうということだ、抜けないなっ！？」

ヴァンパイアは気づいたのだろう。彼を取り巻く周囲の空間が歪み、竜の頭のような姿を形成していることに。そして、その口にあたる部分に自らの手を差し入れていることに。

「もがいても無駄だよ。愛沙ちゃんに怖い思いをさせたあんたは、あたしの？　無限？　にぶち込む刑に処します。行き先は牢獄用無限空間。一日ほどであんたは存在が分解していなくなったことになるから、それまでせいぜい足掻くんだね」

最初からこれを狙っていた。ただ、向こうから突っ込んでくれな　いと意味がないため、そうするようにわざと隙を作って促したのだ。開いた左手を握る。竜の顎が閉じられいく。

既に片腕を絡め取られたヴァンパイアに成す術はない。彼の顔は血の気が引いて真っ青になり、涙と鼻水でくしゃくしゃだった。

「く、や、やめろ、僕はまだ消えたくない！　そうだ、転移を……なっ、なぜできない！？」

「残念、これも一種の転移だから。転移中に転移はできないよね。まあ、たまには自分が喰われる立場になってみるのもいいんじゃない？」

「これが、ウロボロスの……う、あ、あああああああああああああ
ああ　」

断末魔の悲鳴が途切れ、ヴァンパイアは『喰われた』。

S e c t i o n - 2 7 喰うか喰われるか（後書き）

朝更新だとあまり新規読者を獲得できていないようなので、やはり0時ごろ更新にしたいと思います。

そして今日ももう一話アップ予定です。

紘也は空中で練り広げられているウロの戦いを途中から見ている。「あいつ、まだあんな技を持っていたのか」

敵を別空間に封じ込めて存在ごと消滅させるとか言っていたが、それが本当なら？貪欲？による魔力ドーピングと比肩するほど強力だ。竜鱗の鎧なんて普通有能力に思えてくる。

「紘也、無事か？ 戦いはどうなった？」

孝一たちが屋上へ出てくる。ウロボロスの個種結界の影響で今まで紘也しか中に入れなかったのだ。

「終わったようね」

香雅里が曇り夜空を見上げて呟く。彼女は強化術式を解除した途端に力が抜けたらしく、今は愛沙の肩を借りてかろうじて立っている状態である。

「オウ！ 紘也くんたちも無事だったみたいだね」

着陸し、翼と大剣を消し去ったウロボロスが駆け寄ってくる。

「ウロちゃん、ごめんね。わたしが捕まったらせいで危ない目にあっただよね」

しゅんと頂垂れる愛沙にウロはブンブンと手を振った。

「いえいえ、愛沙ちゃんのせいじゃあないですよ。悪いのは全部あの変態吸血鬼なんだから」

自分に責任を感じている愛沙の暗雲を晴らすように、ウロは極めて明るく振舞う。

「それよりも愛沙ちゃん、怪我とかしてない？ もし怪我してるんならこれで即回復！」

ウロは例の無限空間から透明な液体の入った怪しげな小瓶を取り出した。

「たららったらら、ウロボロス印のエリクサー」

「そんなチートアイテムさらっと出してくるなよっ！」

錬金術師に信仰的人気のあるウロボロスだから、たぶん本物だ。どんな傷も病もたちどころに治してしまう不老不死の万能薬。一つ売れば億万長者も夢じゃない。

「ありがとう、ウロちゃん。わたしなら大丈夫。ちよつと膝を擦り剥いたくらいだから」

「それならウロボロスさんも一安心です。なんか紘也くんから金の亡者の視線を感じるのだからこれはかがりんにあげますね」

「チツ」

「そこ！ あからさまに舌打ちしない！」

紘也にツッコミを入れたウロはエリクサーの小瓶を香雅里に渡そうとするが、

「ありがたいけど、遠慮するわ。傷は深くないし、出血も止まっているから」

香雅里は丁重に断った。幻獣からの情けを受けたくないのか、もしくはあのエリクサーに激しく怪しさを感じているのか。紘也の場合だとしたら後者だ。

と、そこで初めてウロは孝一存在に気づいたらしい。

「あや？ なんで孝一くんがいるの？」

「ああ、実はお前らが飛び立った後かくかくしかじかで」

「なるほど、これこれこういうことなわけですな」

「いやわかってないだろ！？ ホントに『かくかくしかじか』って言っているだけだぞ！？」

単純に、孝一に大人しく家で待ってるなんて言っても聞くわけがなかったのだ。

「ごめん、鷺嶋さん、ちよつと」

香雅里が愛沙から離れる。そして悲しげな表情で周囲を見回した。

「……葛木」

紘也は思わず呟いた。屋上には彼女の仲間たちが無残な姿で転がっている。呻き声が聞こえるのでまだ生きている人もいるようだ。となれば、やることは一つだろう。

「俺たちも手当て、手伝うよ」

「ありがと、助かるわ」

柔らかく微笑むと、彼女は黒装束の懐から携帯電話を取り出した。実家に救援を要請するのだろう。

「ほら、かがりん元氣出して。敵はあたしが屠ったから笑顔だよ。

ハッピースマイル」

「空気読めよアホ蛇が」

ゴン！

「おふっ！？ 紘也くんゲンコツはないんじゃないかな？ あとドラゴンです」

「やっぱ目を突く方がいいのか」

「殴って！ どんどんあたしを殴っちゃって！ ほらバッチコーイ！」

ゴン！

「ああん、この痛みの瞬間がエクスタシー……」

なんかウロがMに目覚めてしまった。なんと始末に負えない。

「てか、お前はそのエリクサーで救えるだけ救ってこいよ！」

「オウ！ その手がありやしたね！」

不老不死にはならないらしいが、エリクサーは本物だった。

その後、十分ほどで葛木家の救援が到着した。倒れた陰陽師の中には致命傷を受けて死にかけていた人もいたが、ウロボロスのエリクサーのおかげで九死に一生を得ることができた。

紘也たちは葛木家の車 黒塗りの高級車だった 家でまで送ってもらった。

帰宅してすぐ、ウロは天井裏に引き籠ったまま出てこなくなった。貪欲？の魔力強化を二回も行ったのだから、流石に疲れたのだろう。紘也もベッドに倒れ込むなり睡魔が襲ってきたので、そのまま身を任せることにした。

アンデットの帝王 ヴァンパイアと戦ったのだ。これ以上厄介

な相手が襲ってくることはそうそうないだろうと思う。しばらくは平和な日常が続いてほしい、そう願いながら、紘也は意識を沈ませた。

しかし、そんな紘也の願いを嘲笑うかのように、次なる厄介事は着実に近づいていた。

Section - 29 ウェールズの赤き竜(前書き)

第五章

それは、早朝六時のことだった。

『秋幡紘也様ですか？』

珍しく家の据置電話が鳴ったかと思えば、やけに丁寧な少女の声で名前を呼ばれた。

最初、ウロの新手のイタズラかと考えた。だが、彼女は天井裏で寝息を立てている。こんな朝っぱらから動けるほど彼女の血圧は高くない。それに声も口調も違う。底抜けに明るくやかましいウロとは真逆の、あまり抑揚のない澄んだ声色だった。

『秋幡紘也様ですか？』

紘也が黙っていたので、少女らしき相手がもう一度確認してくる。

「そうだが、あんたは？」

『ウェルシユはマスター 秋幡辰久様の命令で紘也様を危険から守るために派遣された契約幻獣です』

「……………え？」

電話の向こうの少女がなにを言っているのか、紘也は咄嗟には理解できなかった。

『ですから、ウェルシユは紘也様を守るようにマスターから命じられた契約幻獣です』

「……………」

紘也は沈黙した。耳から入ってきた情報が脳内で忙しく駆け回っている。

ウェルシユ

秋幡辰久

マスター

命令

紘也を守る

契約幻獣

派遣

寝ぼけて聞き間違えたわけではない。紘也の寝起きの覚醒速度は反射神経並に速いのだ。霧の一切かかっていない思考で紘也は聞き取った情報を整理する。

まさか父親はもう一体送ってきたのだろうか？

そう考えるのが自然だろうが、なにかが引つかかる。

今思えば、ウロは父親の名前を一度も言っていない気がする。

それは彼女が紘也の父親を嫌っているからだ、そう考えていた。だが違うのではないか。彼女は最初から、秋幡辰久とはなんの関係もなかったのではないか。

『もしもし、紘也様？』

「あ、悪い。なんだっけ？」

『ウエルシユはもう少して到着すると思います。よろしいですか？』

「あ、ああ」

『了解です。ではすぐに向かいます』

通話が切断される。紘也はすぐに二階の自分の部屋へ駆け込み、携帯を開いて登録してある番号に電話する。こちらからは滅多にかけることのない番号。秋幡辰久の携帯電話に。

T r r r n ! T r r r n ! T r r r n ! T r r r n ! ガチャ！

『お父様は感激しているうつつうつつうつつうつつうつつうつつ！』

「親父！ あんたが送ってきた幻獣は何体だ！？」

『え？ スルーなの？ なにを感激しているかスルーなの？ 実は父さん、紘也少年から電話かけてくれたことにすこぶる感激している』

「んなもんでもいいから質問に答えろ！」

『なんか今日の紘也はキツイねえ。えっと、幻獣何体寄こしたかって？ 一体だけど？』

「その幻獣の名前は？」

『なにを言ってるんだ？ 本人から聞いていないのか？』

「いいから！」

『ア・ドライグ・ゴツホ ウエルシユ・ドラゴンだよ。ウェール

ズの赤き竜。紘也なら知ってるだろう？」

そこで紘也は通話を切った。もう充分だった。

ウエルシュ。電話の少女は確かに自分のことをそう呼んでいた。ウエルシュ・ドラゴンはウエルズの国旗や、イングランド歴代王朝の紋章などに取り入れられている真紅の竜だ。伝承では地底に住む侵略民族の象徴。白き竜と戦ったと記されており、ウエルズの人々にとっては守り神以上の存在となっている。

そんな存在が紘也を守りにやってくる。それは決して、ウロボロスではない。

だとしたら、ウロボロスは一体なんなの？ なにが目的である蛇は紘也に近づいたのだ？

考えるより先に体が動いた。部屋を出て廊下の端にある梯子から天井裏へと駆け上り、布団を蹴飛ばして爆睡している少女に容赦なくフライングエルボースタンプ。

「おぶげぼごっ!？」

ビクンと跳ねてウロが変な悲鳴を発した。

「ひ、ひほやくん？ げほっ、いくらあたしが低血圧だからって、

ごほっ、この起こし方は酷くない？」

一瞬で覚醒したようだ。起こすところから始めると面倒極まりなかったので丁度いい。

「ウロ！ お前、なんで俺と契約したんだ!？」

「え？ え？ どしたの突然？」

ウロが狼狽するのは当然だったが、一から説明している心の余裕は紘也にはなかった。早くしないと父親の契約幻獣がやってきてしまう。

「答えないとぶっ刺す」

「ええっ!？ 理不尽過ぎて意味わかんないよ!？ あっ、そうかわかりやした。これは恋人同士の愛の確認的なアレで 言います！ 言いますからそのチョコキを下ろして!」

ウロはパジャマの乱れを整え、姿勢を正し、真剣な表情で口を開

く。

「あたしが紘也くんと契約したのは」

「嘘つくどぶつ刺す」

「見抜かれた!? まだなんも言っていないのに見抜かれた!？」

「一回刺してやるうかと思っただがやめた。そうすると話が進まない。」

「俺を守るため、と言っていたな」

「そうだよ。紘也くんを悪い虫、もとい野良幻獣から守るためです」

「本当は？」

「本当だよ!」

「じゃあ質問を掘り下げる。俺を守る本当の理由は？」

父親の電話やヘルハウンドの襲撃で、結局本人の口から聞かないままだった質問だ。あの時は父親が送ってきたということに納得していたが、それは勘違いだった。

ウロはしばらく渋って目を泳がせていたが、紘也があまりにも真剣に見詰めてくるので、ついに折れた。

「……あたしを守るため、だよ」

その言葉が嘘でないことを、紘也は直感的に感じ取った。

「どういうことだ？」

「人間と契約する必要のないあたしは、今までずっと野良としてこの世界で生きてたんだよ。だけど、魔術師連盟が実験ミスって幻獣狩りを始めちゃったから、もう野良では自由に過ごせなくなったのだからあたしは契約者を探した。あたしはあたしの好きなように過ごしたいから、連盟の魔術師なんかと契約なんてしたくない。かといって魔力の少ない一般人だと契約そのものが成り立たないし、できたとしても魔術師でもなんでもないから野良と変わらない」

「そこで俺、か」

ウロはコクリと頷いて、訥々と話を続ける。

「この街に来てすぐに紘也くんを見つけたよ。なんせビツクリするくらいすごい魔力を垂れ流しにしてたからね。でも接触は躊躇った。だってもしかしたらどっかの組織の魔術師かもしれないし、ただの

一般人かもしれないもん。そこであたしは絃也くんを二日間監視して調べたんだ。んで、絃也くんは一般人だけど魔術師と関わりを持つてるってことがわかった。だから、あたしは絃也くんと契約しようと思っただけです」

「ほとぼりが冷めるまで幻獣界に帰る、という選択肢はなかったのか？」

「それは無理だよ。連盟の実験の弊害は、幻獣をこの世界に無差別召喚しただけじゃない。無理にマナをこの世界に定着させようとしたことで、世界が他世界を拒絶するようになったの。つまり、次元の壁がもんのすごく硬くなって、召喚術も送還術も使えなくなっちゃったのですよ」

ウロボロスやヴァンパイアのような高位の幻獣は自分で世界間を渡れる。普通なら勝手に戻るところを、それができなくなっただけで連盟は慌ただしく幻獣狩りを始めたのだ。

「てか、なんでお前は連盟の事情に詳しいんだよ」

「知り合いに情報通がいました」

「もしかして元契約者か？」

「いやいや幻獣の知り合いだよ。まあ、確かにあたしは何百年前かに一回だけ錬金術師と契約してたさ。無論、とっくのとうに破棄されてるけどね」

ウロはへらへらと笑って頭を掻いた。「何百ってお前何歳だよ！」と突っ込みたい衝動を絃也は持ち前のスルースキルで押し殺す。

「つまりお前の目的は、連盟の幻獣狩りを回避して自由に楽しく遊ぶためってわけか？」

「そうだよ。これ契約前に言っちゃうと、絃也くん絶対契約してくれなかったでしょ？」

「ああ、しなかつただろうな」

「あたしは絃也くんを守って、絃也くんの存在があたしを守ってくれる。これが俗に言うギブ&テイクです」

ウロボロスは、ウロボロスという非日常は、私欲のために絃也へ

と接触し利用した。今まで守ってくれたのも紘也のためではなく、
全て己のため。

少し、イラッときた。

「そうか。よくわかった。 出て行け」

「…………… ホワッツ？」

キョトンとするウロに、紘也はもう一度告げる。

「これから俺の本当の守護幻獣が来る。お前は邪魔なんだ。だから
出て行け」

重い口調で言い終わると、ウロは時が止まったかのように静止し
た。瞬き一つせず、指一つ動かさない。等身大の人形みたいになっ
ていた。

何分経っただろう、やがて、彼女の口から囁くような声が漏れた。

「…………… それ…………… ホント……………？」

「ああ」

紘也は首肯する。すると、彼女の瞳が潤み、目の端にじわりと涙
が滲んだ。

「あはは、なんだ。あたし、もう、用済みってことですか」

呟き、立ち上がるウロ。俯いているためどんな表情をしているの
かわからない。ただ、声は震えていた。

彼女はそのまま紘也の横を通り過ぎ、天井裏の窓を開くと、寝巻
のまま外へ飛び出していった。

開き切った窓をしばしの間見詰め、紘也は頭を振る。

「…………… これで、いいんだ」

口の中だけでそう呟いた時、ピンポーン、と間抜けたインターホ
ンの音が響き渡った。

鷺嶋愛沙は早朝の路地を愛犬と散歩していた。

愛犬はパピヨンのメスで、名前はニコ。愛らしくてみんなをニコ

ニコさせてくれるから愛沙がそう名づけた。

犬の散歩は愛沙の日課でもある。五時半に起床して弁当を作り、朝食を済ませてから行つ。散歩から帰ると少しのんびりしてから登校するのだが、今日は日曜日。休日だ。特にやることもないのでテスト勉強が読書をすることになるだろう。

昨日は大変なことに巻き込まれた愛沙だったが、それで一日の生活習慣が変わるようなことはない。家族に心配かけさせないためにも普段通りに過ごしている。

「あ、この辺りってヒロくんちの近くだ」

気がつくとも秋幡家の近くを愛沙は歩いていて。いつも気の向くままに進路を決めているので、愛沙の散歩ルートはこれといって定まっていない。今日はたまたま秋幡家の近くを通っているみたいだ。

いや、たまたまではないかもしれない。

「昨日ちゃんとお礼言えなかったから、ちよつとヒロくんちに寄つて行こうかな？ でもこんな時間からは迷惑だよ。ウロちゃんはお寝坊さんみたいだし」

ウロ曰く、あのヴァンパイアは存在ごと消滅するため、一般人の愛沙は一日二日もすれば攫われたことすら忘れてしまうらしい。だからそうなる前にきちんとお礼がしたい。そんな気持ちが無意識にあったから、愛沙はついこの辺りまで来てしまったようだ。

「気づかなかつたらコウくんの寮とかカガリちゃんのお家まで行つてたかも。……あれ？ そう言えばカガリちゃんのお家ってどこだろ？ 今度訊いてみようかな」

えへへ、と微笑する愛沙。その時、わうわう！ と唐突にニコが吠えた。

「どうしたの、ニコ？ ……あれ？」

ふと前を見ると、目の前の角を見覚えのある姿が通り過ぎていった。

ピンクの可愛いパジャマに、非常に目立つペールブロンドの長髪をした少女。彼女はなぜか裸足で走っていた。

「あれって、ウロちゃん？」
「なんだか、泣いているように見えた。」

Section - 29 ウェールズの赤き竜（後書き）

夕方くらいにもう一話投稿します。

玄関を開けると、紘也と同じ年頃と思われる小柄な少女が立っていた。やたらでっかい旅行カバンを引きずるようにして持っている彼女は、紘也を見るなりペコリと丁寧な頭を下げる。

「おはようございます、紘也様ですね」

少女らしいあどけなさを残した端正な顔立ちに真紅の瞳、同じく真紅の長髪は後ろで二つに結われていて、二又の尻尾みだいになっている。頭の上からぴよこんと飛び出た人房の髪はいわゆるアホ毛というやつだ。初めて見た。

赤を基調とした海外のブランド物っぽいワンピースを身に纏ったその姿は、ウロボロスの時と同様でも幻獣には見えない。幻獣なんて非現実な存在が素の姿でその辺を闊歩していたら大変な騒ぎになるだろう。だから『人化』して当然なのだ。

「あなた、ウエルシュ・ドラゴンなんだって？」

「はい、ウエルシュは幻獣ウエルシュ・ドラゴンで間違いありません」

彼女の声は鈴を転がしたように澄んでいた。だが抑揚は少なく、表情もロボットみたいに微動だにしない。頭上のアホ毛だけが犬の尻尾よろしくピョコピョコ揺れている。

「来るのって一昨日じゃなかったのか？」

「はい、その予定でした。しかしウエルシュが乗っていた飛行機がハイジャックされて墜落してしまい、犯人の殲滅や人命救助をしていて遅くなりました。すみません」

ハイジャックされた飛行機が墜落。どこかでそんな話を聞いたことがある気がする。

「まさか、この前ニュースでやってた……？」

「ウエルシュはそのニュースを知りませんが、たぶんそうだと思います。それより中に入れていただけますか？」

「ああ、そうだな。話はリビングで聞くよ」

彼女は、おじやまします、と一礼し中に入ってくる。

とその折、引きずっていた旅行カバンの車輪が玄関の段差に引っかかった。

「あっ」

と少女が声を漏らした時にはもう遅く、ぐらついた彼女の体勢は前のめりに崩れ

ビタン！

盛大にすっ転んだ。

「……痛い」

「えっと、大丈夫か？」

「鼻が痛……いえ、問題ありません。ウエルシュは時差ボケで少し眠いだけです」

そう言いながら彼女は何事もなかったかのように起き上がった。

少々涙ぐんでいたように見えたのは目の錯覚ではないと思う。

「ところで紘也様はもう朝食はお済みになられましたか？」

廊下の途中で唐突にウエルシュが訊ねてきた。

「いや、ただだけ」

「では、ウエルシュがお作りします。紘也様の守護の任務には、生活面のサポートも含まれていると勝手ながら推測していますので」

「家事手伝いもするってことか？ 真面目だな」

「よく言われます。マスターもウエルシュのことを『はっはっは、俺の契約幻獣は俺と違って真面目ない子だぞ』と周囲に評価しています」

第一印象で無口無愛想だと思っていたが、存外に彼女はよく喋るようだ。ウロボロスほどではないけれど。

「作ってくれるのはありがたいが、冷蔵庫にはなにもないぞ」

「大丈夫です。あらかじめ食材はこちらで用意しています」

ウエルシュは旅行カバンを指した。一人分にしては大き過ぎると思っていたけど、そうか食材が入っていたのなら納得

ガタガタガタガタン！

「……」

跳ね飛ぶ勢いで旅行カバンが振動したのを、紘也は見逃すことができなかった。

「……時に、なにを作るつもりなんだ？」

「はい、ここへ来る途中に捕獲したクローラーの子供を使っ」

「よしちよつと待て」

おかしい、今、人食い巨大イモムシの名前を聞いた気がする。

「どうしたのですか？」 ウエルシュは小首を傾げ、「ああ、大丈夫です。食材程度であれば魔術的にマナを封じ込める膜を張ることができますので、乖離は発生しません」

「そういうことじゃねえよ！ てかやつぱり加工できるのかよ！」

「ではなにを……ああ、わかりました。生活のお手伝いをするのだから、それに相応しい格好をしろと仰るのですね。つまりメイド服を着ると。了解です」

「だからそうじゃねええ！？ って了解すんなメイド服持つてんのかよ！？」

「はい、マスターがウエルシュに買ってくださいだった服の中にそのようなものが」

あの変態親父はもういつそ死ねばいいと思う。

「朝食はまだ作らなくていいから先に話をしようぜ。あとクローラーは廃棄処分してくれ」

「お嫌いなんですか？ 好き嫌いはいけませんよ」

「アレルギーなんだ。食ったらジンマシンが大発生して死ぬ」

無論、嘘だ。紘也のアレルギーは猫だけである。

「……それなら仕方ありません。了解です。後で処分しておきます ウエルシュは素直に信じたようだ。それにしても幻獣が作るうとする料理は怪し過ぎる。人間様の感覚で食材を選別してほしい。

ウエルシュをリビングに案内してソファーに座るように促す。彼女はしばし部屋の様子を見回していたが、やがてなにかに気づいた

ようにピクつと反応した。アホ毛がピコンと『！』を描くようにそり立つ。

「……モンバロ」

「へ？」

「いえ、なんでもありません。それよりお話をする前に一つ質問してもよろしいですか？」

今絶対にモンバロ 対戦格闘ゲーム『モンスターバトルロイヤル』の略称を呟いた。なぜだろう、ウエルシュからもウロボロスと同じ臭いがプンプンしてくる。

だがそんなくだらないことを口にする必要はない。紘也は頷いた。「なんだ？」

「先程から気になっていたのですが」
ウエルシュはもう一度部屋中を見回して、静かに口を開いた。

「この家にさつきまで幻獣がいましたね。それもウエルシュの大嫌いなドラゴン族です」

「なっ！？」

「その顔は凶星ですね。どのような理由で隠していたのかは知りませんが、ウエルシュの任務は紘也様の守護です。紘也様に近づく幻獣はなんであれ殲滅します」

ウエルシュの無感情な瞳に真剣な光が宿った。？プロの顔？というやつである。

彼女は、ウロを殺しに行くつもりだ。

「ま、待ってください」

「待ちません。紘也様の守護と幻獣狩りはマスターの命令です」

ウエルシュはそう言うとりビングの窓を力強くスライドし、顔だけ外に出してくんくんと犬みたいに臭いを嗅ぎ始めた。それに合わせてアホ毛もピコピコ動く。

「……まだ近くにいますようですね。これよりウエルシュは幻獣狩り

を実行します。すみませんが、お話はその後にさせていただきます」
素足のままウエルシュは庭に降り立つ。そして次の瞬間、彼女の背中からバサツと紅の巨翼が飛び出した。

ウロボロスのように無骨だが形状は蝙蝠に近い。そんなドラゴンの翼。

それを力いっぱい広げ、羽ばたく。そのたった一動作だけでウエルシュはあっという間に絃也の視界から消え去った。

契約者に拒まれた。

それはウロボロスにとって二度目の大きな精神的ショックだった。一度目は前の契約者である。

どこの組織にも属さず、錬金術師として知識欲の赴くままに流浪する自由奔放な人だった。そして同時に飽きっぽい人でもあった。一つの街に三日も滞在すれば禁断症状を起こして発狂していたほどの変人だ。

彼によつて偶然召喚されたウロボロスは、なんとなく気が合い、契約した。

楽しかった。宛てのない旅ばかりだったが、充実していた。

だが、三ヶ月で終わった。なんの前触れもなく解約されたのだ。

理由は最悪。『ウロボロスの生態は調べ尽くした。もう興味はない』である。解約した瞬間にうつかり半殺しにしまいそうになったほどショックだった。

かといって人間を嫌いになることはできなかった。契約者には裏切られたけれど、最後まで自分によくしてくれた人間も少なからずいたからだ。

「……絃也くん」

邪魔と言われた。数百年ぶりに人間と契約したいと思えたのに、一週間も持たなかった。二回目なのに、経験しているはずなのに、

すごく悲しかった。

嫌われないために、飽きられないために、たとえ度が過ぎようとも底抜けに明るく振舞ってきた。……けれど、それは意味のないことだったようだ。

紘也にはつきり『出て行け』と言われたら、頭が真っ白になつてなにも考えられなくなった。力が抜け、自虐的に笑つてしまい、足が勝手に動いて家を飛び出していた。がむしゃらに走り回つたのでどこをどう通つたのかもわからない。

気づくと市民公園のベンチに腰かけていた。

西区市民公園は蒼谷市内にある公園の中でも最大規模の敷地面積を誇り、芝生広場に鯉が泳ぐ大きな池、噴水、それらを人口林が取り囲んでいる。もちろん、ブランコやジャングルジム等の遊具も充実している。

「あ、あたしパジャマのままだ」

早朝の公園には割と人がいる。ジョギングや犬の散歩をしている者がほとんどだ。皆、不思議そうな顔でウロボロスをチラ見しつつ通り過ぎていく。

「わう！」

そんな中、一匹の小型犬がウロボロスの前で吠えた。毛並の整つた可愛らしいパピヨン犬である。

怪訝に思い、首輪についた手綱を目で追っていく。赤いリボンを結んだ長く艶やかな黒髪が目に入った。知っている少女の顔が、ほんわかと優しい微笑みを浮かべていた。

「おはよう、ウロちゃん」

鷺嶋愛沙だった。

「まずい」

ウエルシュが飛び去つた空を見上げ、紘也は呟いた。

「なんでこうなったんだ！　こうならないためにあいつを追い出したのに、これじゃまるで意味がないじゃないか！」

壁に拳を打ちつける。紘也は最初から、さりげなくウロボロスのことを話してどうにかウエルシュを説得するつもりだった。説得してからウロを連れ戻すつもりだった。そのタイミングを掴む前に相手に見抜かれるなんて馬鹿みたいだ。

「そう言えば俺、ウロになんて言っただけ追いついたっけ？」

冷静になって考える。あの時は正直テンパっていて、自分がなにを言ったのかあまり覚えていない。ウロボロスとウエルシュを争わせたくない、そんな気持ちはよく覚えているのに、気持ちとは裏腹な酷い言葉をぶつけたかもしれない。

いや、ぶつけた。ウロの自己中的な契約理由に苛立って口走ってしまった。なぜならあの時、彼女は泣いていたから。

ヘルハウンドに襲われた時を思い出す。

ハルピユイアに襲われた時を思い出す。

ヴァンパイアに愛沙が攫われ、彼女を救出した時を思い出す。

ウロは契約幻獣としてしっかり紘也を、紘也たちを守ってくれた。孝一や愛沙とも仲良くなっている。正直、紘也にとっても彼女はかけがえのない仲間になっていた。

泣かしてしまうほどきつく言わなくてもよかったと後悔する。もっとも、あのウロに一から緩く説明したところで「そんな面倒なことするくらいならあたしが力づくで捻じ伏せます」と言い出しかねない。どうせなら、怒らせて飛び出させる程度がよかった。

「ウロ、どこにいるんだ？」

ウエルシュより先に見つけるのはたぶん無理だ。戦闘は確実に勃発する。そしてその戦闘を收拾することができるのは紘也だけだ。

「くそっ、あいつ携帯置きっぱなしだったから連絡が取れないじゃないか」

いざって時に使えないのでは番号を交換した意味がない。

となると……紘也は取り出した携帯で頼りになる親友たちに電話

をかけた。

Trrrガチャ！

『よつ。朝っぱらからどうした、紘也？』

ワンコールも鳴り終わらない内に孝一は出てくれた。

「朝早くに悪いな。起きてたのか？」

『いや、この電話に起こされたばかりだ。まあ、オレはお前と同じで寝起きはいい方だから気にしてないさ』

「ホントか？ 流石の俺でも寝てる時にワンコール前に入るなんて芸当できないぞ」

などと突っ込んでいる場合でないことを、突っ込んでから思い出した。

「孝一、少し手伝ってほしいことがある」

紘也は事情を掻い摘んで話した。

『……わかった。すぐに出る。なにかわかったら連絡する』

次は愛沙だ。

Trrrn! Trrrn! Trrrn! Trrrn! Trrrn!

ガチャ！

『あれあれ！？ 録音十二秒しかないの！？ えつとえつと、い、今近くにいます』

ピー。

留守電だった。メッセージがマヌケなのは置いといて、彼女の場合、寝ているよりもとつくに起きていて携帯をどこかに置き忘れている可能性の方が高い。

「仕方ない。葛木にも頼むか……って携帯の番号知らねえし。それに昨日の怪我も治り切ってないだろうから、そっとしておいた方がいいかもな」

携帯を置き、玄関へ向かう。

「あいつがやられるとは思えんが、心配だ。いろいろと」

Section - 31 向き合っ気持ち

「そっかあ。ウロちゃんはヒロくんのお父さんの契約幻獣じゃなかったんだね。ビックリしたよう」

ウロボロスの隣に腰を下ろした愛沙は真剣に話を聞いてくれた。

「だけどウロちゃんは悪くないよう。仕方なかったんだよね？」

「そうなんだよ！ あたしも生きるため必死だったのに紘也くんつては酷いんだよ！ パジャマ姿で出て行行って真性のS ハッ！ そうかわかりやしたよ紘也くん。あたしに酷いこと言って追い出して一人で泣いてるところ見て笑ってるんでしょ！ ウロボロスさんは見抜きましたよさあどこに隠れてるの出てきなさいそれ出なさいっ！」

しん。

愛沙の手前強がって見せたが、当然、誰かが出てくることはなかった。

「うっう、やっぱり捨てられたのかな、あたし」

「よしよし。じゃあわたしが電話してヒロくんの本当の気持ちを聞いてみるね」

俯いて涙を零すウロボロスを宥めつつ、愛沙はスカートのポケットをまさぐる。

「あ、あれ？ あれあれ？ あうう、携帯忘れたあゝ」

涙目で「どうしよう」と嘆く愛沙。ウロボロスはパジャマの袖で自分の涙を拭い、

「あたしが本当に捨てられちゃったら、愛沙ちゃん拾ってくれる？」

「大丈夫。ヒロくんはそんな酷い人じゃないよう。きっとなにか理由があるのです」

「理由つて、例えば？」

「ふえ？ ええつと……例えば……例えば……」

ウロボロスが訊ねると、愛沙は左右のこめかみを両手の指で押さえて黙考する。

「……夢だったとか？」

「愛沙ちゃん、夢オチが一番やっちゃいけないことなんだよ」

やっぱり嫌われて捨てられたと考えるのが一番自然でしっくりくる。嫌われて、飽きられて、世話するのが辛くなったペットみたいにポイッと捨てられて。捨てられ、捨てら……

「えぐつ……うぐ……捨てられたあ」

「よしよし。泣かないでウロちゃん。わたしが代わりにヒロくんに聞いて あうう、そうだった。携帯ないんだった」

考えれば考えるほど悲しくなる。このまま公園にいたところでなにか変わるわけでもない。そう思ったウロボロスは寝巻の袖で涙を拭くと、意を決したように立ち上がった。

「ごめんね、愛沙ちゃん。変な話につき合わせちゃってさ。でも、おかげで元気凛々、漲ってきましたよ。うん、あたしが直接紘也くと決着つけてくるね」

「ねえ、ウロちゃん、無理して明るく振舞おうとしなくてもいいんだよ？ 泣きたい時は、思いつ切り泣いた方がいいのです」

愛沙は柔らかく微笑んだ。慈愛の化身ではないかと疑ってしまう彼女の言葉に、ウロボロスはいつもの調子で答えた。

「いえいえ、無理なんてしてませんよ」

「でも、ウロちゃんの顔、とっても辛そうだよ？ またヒロくんに拒まれるのが怖いつて書いてます」

「……それは」

凶星だった。いつもおっとりしているこの少女にすら、見抜かれていた。

もう一度紘也に『邪魔』と言われてしまったら、その場で『人化』を解いてひたすらこの世界に八つ当たりするかもしれない。それは

もう、消滅するまで。

でも、この街には愛沙たちがいる。

できればそうならないようにしたい。心を強く持ち、もし紘也に『いらぬ』と言われても、一人静かに消え去ろうと自分に誓う。

怖いからってこのまま紘也と話もしないで消えたとしても、不安とトラウマに押し潰されてしまうことは明白。

そんなのは、嫌だった。

怖いけど、紘也にはもう一度会わなければならない。

「あたしなら大丈夫だよ、愛沙ちゃん。紘也くんにもまた拒絶されても、あたし頑張るよ。それでもダメだったら、愛沙ちゃんのところに行き行っていないかな？」

「きつとそうはならないよう。本当はわたしも一緒に行つてあげたいんだけど、たぶんこれはウロちゃんとかヒロくんの問題だもんね」
彼女から元気を分けてもらった。きつと、大丈夫。

「うん。このウロボロスさんの魅力をドドドシャキュピーン！つて振り撒いて、紘也くんをメッロメロにしてもう二度とあたしを拒絶できないように籠絡してやりますよ」

いつも以上にテンションのギアを跳ね上げて、ウロボロスは覚悟の決まった顔で愛沙にガッツポーズを作つて見せた。

と、その時

「紘也様が拒絶しなくても、このウエルシュが？拒絶？します」

静かな声が、静かな公園に響動した。

「まさか、いつの間に……？」

ウロボロスは周囲を確認する。さっきまでそれなりに人がいたのに、今は自分と愛沙以外誰もいない。

結果。それもその辺のザコ幻獣とは比べ物にならないほど強力な個種結果だ。結界を張られてしまつてから気づくとか、さっきまでの自分はどれだけ無防備だったのだ。

『これから俺の本当の守護幻獣が来る。お前は邪魔なんだ。だから出て行け』

紘也の言葉が蘇ってくる。今まで忘れていた、というより思い出したくなかった拒絶の言葉。その前半部分が示している意味が、今ここに現れる。

「愛沙ちゃん、あたしから離れないで！」

愛沙が結界内にいるということは、仲間と思われたに違いない。彼女だけ逃がすと先に攻撃されかねない。

バサツバサツという重たい空気の振動を感じ取る。

「上！」

天を仰ぐ。昨日から引き続く鈍色の曇天を背景に、赤い双翼がゆったりと羽ばたいていた。

その翼はウロボロスより少し背の低い少女から生えていた。燃えるような真紅のバツクツインテールに同色の瞳。服装まで真つ赤だ。背中の翼で既にわかったが、ドラゴン族。それもかなり上位の存在だ。

「マスターの命により、紘也様に近づいた幻獣を排除します」

機械的な口調で宣戦布告し、赤髪の少女は両掌をウロボロスに向けて翳す。

瞬間、その掌の前に巨大な炎の塊が出現した。普通の炎みたくにオレンジに近い色ではなく、炎色反応でも起こしているかのような深みのある赤色。

それを、赤髪の少女は一切の躊躇いもなく射出した。

公園内に紅の爆光が広がった。

S e c t i o n - 3 1 向き合つゝ気持ち（後書き）

今日から一話更新に戻ります。

秋幡紘也は諫早孝一と合流していた。

「孝一、そつちはどうだった？」

「ダメだ。見つからない。彼女は飛べるからもう遠くに行ってしまった可能性もある」

そうなるかと捜しようがないが、ウエルシュはまだ近くにいると言っていた。

「これは俺の勘だが、たぶん、ウロは西区からは出てないと思う」

「そうか、勘は大事だ。オレも知り合いにメールで情報提供を呼びかけたが、あまり期待はしないでくれ。朝っぱらから熱心に働いてくれる物好きはそんなにいないんだ」

紘也としては、孝一が協力してくれていることだけで満足だった。

「それで紘也、彼女の行きそうな場所とかわかるか？」

「わかるならもう探してるよ。あいつと出会ってまだ一週間も経ってないんだぞ」

騒がしくて、楽しいことが好きで、強くて、友達思い。彼女と過ごしてわかったことだ。でも、辛い時にどうするのかは見当がつかない。彼女の内面、裏側というものを、紘也は全く理解していなかった。

ただ出て行くように言っただけで、あの一度巻きついたら離れないアナコンダのような彼女が傷つき、涙を流して去っていった。

捨て猫を見つけた時の彼女の態度が脳内にフラッシュバックされる。

もしかして紘也は、彼女の心の傷を、トラウマを抉ってしまったのだろうか？

ズキリ、と胸に痛みが走る。体はいくら傷ついても？再生？するが、心はそうじゃない。今もどこかで泣いているのだろうか？ だとしたら、一刻も早く彼女を見つけ、せめて『嘘だ』の一言だけで

も言っただけならいい。

「そういえば紘也、愛沙や葛木には連絡したのか？」

物思いは孝一の言葉で中断した。

「葛木は昨日のこともあるからやめておいた。てか番号知らないし。愛沙は何度かけても出なかった。たぶん携帯忘れてどっか行ってるんだと思う」

「この時間だと……犬の散歩つてところか。どうする？ 一応、鷺嶋神社まで行ってみるか？ 案外、愛沙が家出少女みたいに匿っているだけかもしれないぞ」

電話に出ないのがそういう理由かもしれないと孝一は言っている。その可能性は否定できない。鷺嶋神社は西区にあり、紘也の家からも近い。

けれど釈然としない。それは恐らく、ウロが愛沙の家をまだ知らないからだ。少なくとも彼女と行動していた時に鷺嶋神社へ行った記憶はない。

一つの可能性として、ウロと犬の散歩中の愛沙が偶然出会ったと考える。

泣いているウロを見かけたら、愛沙なら放っておくはずがない。

愛沙がウロと一緒にだとすると、場所などどこだろうと変わらない。

愛沙も危険だ。

ウェルシュは一般人には手を出さない。それは墜落した飛行機から人々を救助していたことから窺える。だが、ウロボロスと関係があると思われたらどうなるかわかったものじゃない。

「紘也、どうやら、居場所がわかりそうだ」

と、孝一が口元に笑みを浮かべて路地の先を見ながら言った。ここでは、最近ではすっかり見慣れてしまった黒装束たちが忙しなく移動していた。

「葛木の陰陽師か」

個種結界を感知できる彼らが動いているということは、もう戦闘は始まっているのだ。

「あつちは市民公園の方だな」

「行こう、孝一」

二人は頷き合うと、陰陽師を追って駆け出した。孝一のことだ、どうせ来るなど言っても無駄なのだ。それにここまで手伝わせておいて、今さら『帰れ』はない。紘也だったら間違ひなくキレる。

走りながら、紘也は念のためもう一度愛沙に電話をかけてみた。だがやはり、あの間の抜けた留守番電話のメッセージしか返って来なかった。

連続的に爆音が轟く。灼熱の紅いプラズマが流星のごとく降り注ぐ。それはまるで世界の終わりのような光景だった。

そんな中を、ウロボロスは愛沙を抱えて疾走していた。

「う、ウロちゃん……」

愛沙が不安げに瞳を揺らしている。彼女の胸に抱かれる形でパピヨン ニコという名前らしい が威嚇するようにわんわん吠えている。

「心配ないよ、愛沙ちゃん。あたしが身を盾にしても絶対に火傷一つ負わせないから」

とは言っても、飛空状態の敵の攻撃を避け続けるだけではギリ貧だ。あの炎はヘルハウンドの比ではない。触れるだけで灰燼と化してしまいそうだ。ウロボロスは？再生？できるから問題ないが、愛沙はそういうわけにはいかない。

この力、あの翼。赤髪の少女はもう間違いなくドラゴン族だ。ウロボロスでも余裕を持って戦える相手ではない。どうにかして現状を変えなければ……。

やはり、まずは空から引きずり降ろさないことには始まらない。

ウロボロスは左腕だけで愛沙を抱え直すと、右手で無限空間から竜鱗の剣 もとい ウロボロカリバー を引っ張り出す。半透明な黄金色の両刃大剣を片手で一振りするだけで、灼熱の紅蓮弾が三つ、消し飛んだ。

火炎の流星が止む。

「ウエルシュの炎を斬った……？」

上空の赤い少女は戸惑ったように眉を顰めていた。まじまじとウロボロスの大剣を見詰め、何事かをぶつぶつと呟いている。

「今だ！ 愛沙ちゃん、ちょっと離れてて」

愛沙を放し、ウロボロスは投げ釣りの要領で ウロボロカリバー

を大上段から振るう。どこまでも伸びる剣身が、釣り糸が重りに引つ張られるように弧を描く。

「なるほど、わかりました。なら、その剣も？拒絶？するだけです」
剣が伸びることに驚きもせず、赤髪の少女は自分の前方に六つの炎弾を並べ、一斉に撃ち放った。対するウロボロスは手元の柄を軽く上下左右に振り、剣身を操作して器用に炎弾を避ける。

「当たらないよ、そんなの」

伸びに伸びる剣の刃が螺旋を描きながら少女を包囲する。

「いつまでも上にいないでさっさと降りてきなさいなっ」と！

「くい、と剣の柄を引いた。すると剣の包囲する幅が一気に縮まり、蛇が獲物を捕えるように少女を締め上げた。ザコ幻獣ならばそれだけでバラバラに解体できるが、そんな手応えはない。だから

「らぁあッ！！」

大剣を鞭のように操作し、ドラゴン族の少女を思いつ切り地面へと叩きつけた。ズドゴン！ と一際大きな衝突音が木霊し、石タイルの歩道が土煙を巻き上げて陥没する。

剣をデフォルトの長さまで戻す。あれで倒せたとは到底思えないが、ダメージは期待できる。両足の骨でも折れてくれていれば後は楽なのだ。

「無限に伸長する金色の剣 竜鱗の剣。ウエルシユの敵はウロボロスですか」

土煙を吹き飛ばして少女が飛び上がってきた。スタリと地面に足をつけたその姿は傷一つ、否、汚れ一つついていない。代わりに、揺らめく赤いオーラのようなものを全身に纏っている。

「あのまま逝ってくれたら大助かりだったんだけど、そのオーラで防いだわけ？」

「これはウエルシユの 守護の炎 です」

少女は竜の翼とオーラを消し、淡々と答えた。

「ウエルシユ？ …… あー、なるほど、ウエルシユ・ドラゴンね。

世界の幻獣TCGでは火属性の切り札的レアカード。んで、なんで

そのウエルズの赤き竜がこんなとこにいるのさ？ あたしは忙しいんだよ。死にたくなければさっさと母国に帰ってスノードン山でも守ってるんだね」

「ウエルシユの使命は絃也様の守護です。だから、今は絃也様がウエルシユにとつてのウエルズです」

「意味わかんないこと言ってるんじゃないよ。あたしだって絃也くんを守ってるんだよ！」

邪魔だ出ていけ、そう言われたことをウロボロスは脳内から追放した。同時に、絃也がウロボロスを滅ぼすためにウエルシユをけしかけてきた、という可能性も否定する。なにかの間違いだ、きつと自分の勘違いだ、と反芻しなければ心が折れてしまうから。

「絃也様を守護するのはウエルシユだけで充分です。他の幻獣、特にドラゴン族は大嫌いなのでいりません」

「あんただってドラゴンでしょうがっ！」

「ウエルシユはウエルシユだからいいのです」

「子供かあんたはっ!？」

埒が明かない。話し合いは無理だ。手っ取り早くぶちのめした方が性に合っている。

そう思つてウロボロスが大剣を中段に構えた時、ウエルシユが視線を僅かに逸らした。

「少し、訊きたいことがあります」

彼女が温かみのない視線で見ているのはウロボロスではなく、愛沙だった。

「ふえ？ わ、わたし？」

「あなたは見たところ一般人のようですが、ウロボロスとはどのような関係ですか？」

場合によつては殺します、口には出していないその言葉が、はつきりとウロボロスには聞こえた。

愛沙は低く唸り続ける愛犬の頭を撫でて宥めさせ、自らも落ち着くために深呼吸をし、しっかりとした強い意思を瞳に宿してウエル

シユを見た。

「ウロちゃんはわたしのお友達です」

途端、ウロボロスは胸の内からなにか熱いものが込み上げてくるのを感じた。自分を受け入れてくれる者がいるという安心、こんな状況でも無関係を装わない友情に歓喜した。

「では、あなたはウロボロスの契約者ですか？」

愛沙は明確な動作で首を左右に振った。

「うっん、それは違うよう。ウロちゃんが契約しているのはヒロくんです」

「ヒロくん？」 ウエルシユは眉を顰めたが、「それが誰かわかりませんが、魔力がリンクしていないところを見るにあなたは本当に一般人のようですね。邪魔です。消えてください」

シユツ、とウエルシユは右手を水平に振った。刹那、そこにいたはずの愛沙が愛犬ごとテレポートでもしたかのように跡形もなく消え去った。短い悲鳴すら聞こえないほど一瞬の出来事だった。

「愛沙ちゃん！？ ちよいこらその腐れ火竜！ 一体愛沙ちゃんをどうしたのさ！？」

「ウエルシユの個種結界の中から弾いただけです。結界に付与したウエルシユの特性は？ 拒絶？ と？ 守護？。必要のないものは外へ強制退場させ、そして侵入は絶対にさせません。あとウエルシユは腐ってません」

ウエルシユ・ドラゴンは侵略者を許さない。？ 拒絶？ と？ 守護？ の特性はそこから来ている。結界の範囲を考えると、愛沙は公園外のどこかに飛ばされたのだろう。ひとまず安心ではあるが、ここからが本番だ。

ウエルシユの掌上に真紅の炎が宿った。それが、そこにだけ酸素が大量に存在するのかと疑いたくなるほど勢いよく膨張していく。アドバルーンくらいの大きさになるまで二秒とかならなかつた。

とてつもない熱量がウロボロスの玉肌を灼く。まるで小さな太陽だ。

「一般人は結界内から消しました。ウロボロスは世界から消滅してください」

ウエルシュは最低限の動きで小太陽を投げつけた。『小』といっても直径は数メートルもある。それをメジャーリーガーも反応不能な剛速球で投げられると避けるのは難しい。

「ハン、さつきみたく斬り捨ててやりますよ。ウロボロカリバーは耐熱使用なのです」

ウロボロスは大上段から大剣を振り下ろす。ザン！と空気が絶叫し、火炎球は予定通り真つ二つ割れて霧散した。余裕の笑みで唇を歪めるウロボロス。しかし

「え？ はあ？ なああああつ！？ なんで ウロボロカリバーが溶けてんの！？」

金色の大剣は刃が三分の二ほど熔解していた。いや、溶けたというより炎に触れた部分が一瞬で蒸発したようにも思える。

役割をあらかた失った大剣を見て、ウエルシュが微かに得意げな表情になる。

「これはウエルシュの 拒絶の炎 です。ウエルシュが拒むものは塵も残しません」

「あつつつんのドワーフのクソジジイ手え抜きやがったな！ あたしの鱗で鍛えた ウロボロカリバー があんな炎ごときに負けるはずないんだよ普通は！」

「ウエルシュが？ 拒絶？ したからです。剣のせいにするのはずるいです」

「なあにが『マグマに落ちてもダイジョーブ』だよ！ 全然ダメじやん！ 今度会ったら硫酸の海にでも投げ込んでやる！」

「だからウエルシュが、ウエルシュが？ 拒絶？ したのです！」

若干涙目になったウエルシュが初めて叫んだ。どうやら彼女も無視されるのが嫌なタイプらしい。

「？ 拒絶？ ね。ホント、世界の幻獣TCGでも選択した一つの属性をなんでもかんでも破壊してくれちゃうから困るんだよね。多属性

デッキには弱いけど」

ウロボロスは周囲を広く見渡した。最初の炎弾群で焼け野原となつていていると思つていた公園は、実はどこも焦げてすらいない。最初の炎を斬り消せたのも、ウロボロカリバー が？拒絶？の対象になつていなかっただけ。

それでも一撃で ウロボロカリバー を焼滅させたウエルシユの特性は危険だ。 竜鱗の鎧 でもきつと防げない。部分消滅なら？再生？も可能だろうが、ただの傷と違つて治りはすこぶる遅くなるだろう。というか全身を一瞬で消されては？再生？も意味がない。

まとめると、あたれば終わり。

「あなたがあたしと紘也くんの最大の障害物 ラスボスつてわけだね。いいよ。それならそれでメラメラと燃えてくるつてものです。あんたを捻じ伏せて、あたしは紘也くんのハッピーエンドを見る！」

「マスターの命令は絶対です。だから他の幻獣を紘也様に近づけるわけにはいきません」

ウエルシユはその場で回転し、無作為に真紅の炎弾をばら撒いた。それらは不自然に空中で静止すると、落下することなくウエルシユの頭上に浮遊して燃え続ける。

「数撃てば当たると思つたら大間違いだよ」

余裕を持つているようにウロボロスはそう言ったが、数えるのも億劫なほどの炎弾群を一斉掃射されると危ないかもしれない。

「撃つわけではありません。生まれるのです」

「はい？」

ウエルシユの言葉は謎だった。しかし、意味はすぐに理解することができた。宙に浮かぶ数多の炎塊が、不定形から明確な形を持つなにかへと変態し始めたのだ。

まず、太い足と尾が形成された。続いて細く短い腕、蝙蝠の双翼、蜥蜴のような顔が順に作られていく。そして最後は頭部から後方に反り立つ二本の角が生えた。

真紅の炎竜。サイズは小さいが、それが多数、公園の上空を自在に飛び回っている。

「……眷属」

ウロボロスは歯を噛み締めた。自らの魔力を分けて生み出した存在。ヴァンパイアのジャイアントバットと理屈は同じだ。

ただ、見る限り奴らはウロボロスのみを？拒絶？する炎で構成されている。突進されるだけでウロボロスは深刻なダメージを負うことになる。

「多対一って卑怯くない？」

香雅里の式神やジャイアントバットを相手にした時とはわけが違う。

「これはスポーツではないので、卑怯呼ばわりされる筋合いはありません」

「まあいいけどね！ 多対一だろうと、最強無敵絶対至高のウロボロスさんは負けませんから」

強がり、というわけではない。遅延と隙の発生する眷属ならばなんとか戦える。まだあの数の炎弾を隙間なく叩き込まれる方が怖い。

まずは周りのザコから潰す。これ、ボス戦の鉄則。

ウロボロスはほとんど柄と鏢の部分しか残っていない大剣を捨てる。放っておけば個種結界の影響も受けて倍速で？再生？が行われるだろうが、待っている暇はない。

空間を歪め、少し大き目の無限空間の扉を左右に一つずつ開く。

そこから、ガシャガシャと金属の擦れる音を立てて大量の剣が落ちてきた。

片刃や両刃、直刀に曲刀など、多種多様な剣が地面へと突き刺さる。共通点は刀身が半透明の黄金色であることだ。

「こんなこともあるのかと、ウロボロス流錬金術で予備を大量生産していたのですよ」

そう、これらの剣は全て ウロボロカリバー のコピーだ。オリジナルと形が違っているのは、能力の劣化を補うための細やかな処

置でもある。

「さて、殺し合いを再開しましょうや　ん？」

ウロボロスはウエルシュが呆然としていることに気がついた。よく観察すると頭の上から人房伸びた髪がピコピコ跳っている。さらに赤い瞳の中ではお星様が輝いているように見えなくもない。

「……剣がいつぱいでマンガみたいですよ」

「は？」

「いえ、なんでもありません。殺し合い再開ですよ
輝いていた瞳が無感情に冷める。」

「なんか今、気になる眩きが聞こえたんですけど？」

「気のせいですよ」

「あー、そう」

もしかしたらウエルシュはどこか自分と通じるところがあるのではないか、微妙にそう感じてしまったウロボロスだった。

Section - 34 結界破り

蒼谷市西区市民公園の入口に黒装束の集団が屯していた。

紘也と孝一は少し離れた電柱の陰から彼らの様子を窺っていた。

どうもなんらかの作業に忙殺されているようで、とてもじゃないが近づいて声をかけられる雰囲気ではない。

「丁度あの入口の部分に結界があるんだろうな」

「そうなのか？ オレにはよくわからんが、紘也が言うならそうなのかもな」

魔力の強い紘也とは違い、普通の一般人である孝一は個種結界の認識障害に否応なく影響される。たぶん彼はそこに公園があることすら理解できていないだろう。

葛木の陰陽師は個種結界を破ろうと試行錯誤しているが、どうもうまく行っていない様子だ。ウロボロスの個種結界の影響を受けない紘也でも、契約幻獣ではないウエルシュのものは問答無用で受ける。解除されない限り侵入は困難だ。

「そこでなにをしているのよ、あなたたち」

「「おわっ!?!」」

背後から突然投げかけられた声に二人は同時に飛び跳ねた。振り向くと、陰陽師の黒装束を纏った少女 葛木香雅里が呆れ顔で腕組みしていた。

「おっす、葛木」

孝一が誤魔化すように挨拶するが、

「おっす、じゃないわよ。そこでなにをしているのかって訊いてるの」

普段のきつい口調で彼女は問う。昨日の傷も回復し切っていないだろうに、彼女は平然としている。流石は戦闘のプロと言ったところか。

「ウロを捜してるんだ」

「ウロボロスを？」

「ああ。詳しいことは後で話す。とにかく、俺はあそこに入らなければならぬ」

紘也は公園の入口を指し示した。香雅里は顎に手をやり、ふむ、と逡巡してからきつぱりと告げた。

「無理ね」

「どうしてだ？」

問うたのは孝一だ。

「確かにあそこの公園は二つの個種結界で隔離されているわ。一つはウロボロスなんだって今わかったけど、問題になるのはもう一方の方ね。これが相当厄介よ。認識障害を認識できる私たちでも指先すら入れてもらえないの。ウロボロスもそうだけど、大抵の個種結界は別に侵入を阻止しているわけじゃない。入ろうと思えば簡単に入れるわけ」

辿りつけるかどうかは別問題だけどね、と香雅里は付け足した。

「だけど今あそこに張られてあるものは侵入すら許さない。完全にシャットアウトしてるってわけか」

ウエルシュ・ドラゴンの個種結界 付与されている特性は恐らく？拒絶？だろう。

「破ることは？」

「今のところできないわ。私がこの前屋上で使ったような結界とは強度がまるで違うもの。護符を破壊すればいいってわけでもないし。正直、八方塞がりよ」

香雅里は嘆息し、お手上げのジェスチャーをした。

「まあ、ウロボロスが敵を倒して出てくるのを待つしかないわね」「それじゃダメなんだ！」

紘也はつい声を荒げてしまった。孝一も香雅里も驚いて目を丸くしている。

「あいつは親父の契約幻獣じゃなかったんだ。それでその敵つてのが、親父の本当の契約幻獣なんだよ」

香雅里は面倒そうに前髪を弄った。

「じゃあなに？ あなたは戦いを止めたいの？ それともウロボロスを自分の手で滅ぼしたいの？」

「止めたい。あいつは俺の契約幻獣だ。二人が争う必要はないとはつきり告げてやる」

「そしてオレらの仲間で友達、だろ」

孝一が付け加えると、香雅里も小声で「そうね」と囁いた。

「で？ 止めたいのはいいとして、なにか方法があるわけ？ 大魔術師の息子さん」

「ああ、割りと神経使うけど、俺なら」

「あつ！ ヒロくん、コウくん、カガリちゃん！ ウロちゃんが大変なんだよう！」

紘也の言葉は、切羽詰まっているもどか間延びした声に遮られた。小型犬を抱えた黒髪の少女が、公園の駐車場がある方向から慌てた様子で駆け寄ってくる。

「「愛沙！？」」

紘也と孝一がハモる。愛沙は息を切らしながらも状況の説明を試みた。

「あのね。ウロちゃんとお話してたの。そしたら真っ赤な女の子が飛んできて、炎が赤くてすぐでドッカーンって」

「愛沙、少し落ち着こうな」

すーはーすーはーと愛沙は呼吸を繰り返し、ようやく落ち着いたところで説明に入った。

紘也の予測通り、彼女は泣いていたウロと遭遇して話し相手になっていたようだ。そこにウエルシュが現れて、愛沙を結界の外へ放り出したらしい。

「そうになると、中では本格的な戦闘が始まっているわね」

「ああ、急がないと。葛木、お前んとこの陰陽師たちに話を通してくれ」

言っや否や紘也は駆け出した。香雅里たちも慌ててついてくる。

「ちょっと待って、だからどうするのよ！」

「個種結界に流れる魔力を読み取って、俺の魔力を干渉させて断ち切る」

「そんなことできるの？ いえそれより、あなた魔術使えないんじゃないの？」

「魔術じゃねえよ。単なる魔力制御の応用だ。十年前のあの日から、俺は二度と自分の魔力を暴走させないために鍛えてきたんだ。そのくらいできる」

「他人の魔力にまで干渉するなんて芸当、連盟の大魔術師でもそうそうできることじゃないわよ。それをそのくらいって、冗談でしょ？」

「ヴァンパイアの時も、あんたとウロが戦った時にも結界破ってみせただろ」

「ジャイアントバットをカバンで殴り倒した時もそうだ。あれは魔力干渉で幻獣の魔力を乱し、強制的にマナの乖離を引き起こしたのだ。もっともそれは弱い幻獣だからできたことで、試したことはないが、強い幻獣だと一時的に麻痺させる程度の効果しかない。」

「やっぱり、あれはあなたの仕業だったのね。……わかったわ。できるならやってみなさい。あなたの 結界破り が成功すれば私たちにとっても都合がいいから」

「香雅里の承諾は得られた。あとは実際にウエルシュの個種結界に触れ、魔力の流れを読み、供給源を断ち切る。それで結界は消えるはずだ。」

「陰陽師たちがこちらに気づく。」

「か、香雅里様！ 今まで一体どこに
「みんなだいて。今から結界を破るわ」

「紘也は陰陽師たちを掻き分けて市民公園の入口 結界の正面に立つ。思った通り中の様子は判然としない。ここから見える普段通りの公園の姿は偽りだろう。その認識すら阻害される孝一と愛沙にはどう見えているのか少し気になった。」

紘也は自分の掌を見詰める。

まさかこんな短期間で三度も結界を破ることになるとは……。

最初、葛木香雅里の結界を破壊した時は、本当のところ自分でもできるかどうか自信を持てなかった。魔力制御を極めに極めたものの、魔術を捨てた紘也がそれを真面目に実行する機会なんて過去十年に一度もなかったからだ。

なのになぜ魔力干渉までできるようになったのか。理由は単純でくだらない。帰国する度にウザったくふざける変態親父を、どう効率よく引つ叩くかを研究した成果だ。

「秋幡紘也」

改まった口調で香雅里に呼ばれる。

「どうせ結界を破壊するのなら、ウロボロスの個種結界も破壊してくれないかしら。私たちだって中の戦いを鎮圧するために来ているのだから」

「了解。やってみるさ」

手を伸ばして結界に触れる。試しにそのまま入ってみようとしたが、同極の磁石を近づけた時みたいな斥力が働いて押し戻されてしまう。これが？拒絶？の特性か。

目を閉じて精神集中。魔力の流れを直に感じ、それを逆さに辿って根元を見つける。陰陽師の結界は護符が根元となっていてわかりやすかったが、幻獣の個種結界は毎度毎度に探索しなければならぬ。非常に面倒臭い。継続的に魔力干渉すると船酔いみたいに気持ち悪くなるから嫌だ。

……あつた。

見つけた後は簡単だ。その部分へ自分の魔力を流し込み、栓をすめるだけ。

「壊れる！」

ピシッ、と空間に小さな亀裂が走った。

上空から猛進するミニ炎竜の群れを、ウロボロスは目にも留まらぬ速さで剣を投擲して撃ち落とすしていく。

察するに、ウエルシュ・ドラゴンの？拒絶？は一度炎として具象してしまうと対象の追加や変更はできない。これらの剣は炎竜の後に取り出したから？拒絶？の対象には入っていないはずだ。だから撃ち落とすことが可能となっている。

しかし、剣はあくまでウロボロスが自作した劣化品である。炎竜を二体も屠れば跡形もなく消滅してしまう。

それでも、一本で二体を潰せる計算だ。

一度あらかた投げ終えて剣を周囲に展開させたウロボロスは、攪乱するように縦横無尽に動き回り、拾っては投げるを繰り返す。時には魔力弾も織り交ぜ、時には剣を投げずに振るい、有限の伸長能力で数体を同時に斬り伏せる。

だが、炎竜もただ飛び回るだけの的ではない。知能は低いが、自らの意思で動く生ける炎なのだ。ウロボロスの攻撃の隙を突き、その炎の爪や牙を向けてくる。

触れれば焼失しかねないそれらをウロボロスは紙一重でかわす。少し掠った程度であれば？再生？で傷は癒えるが、その分疲労も蓄積していく。

そして、本来の敵は飛び回る炎竜などではない。

「隙だらけです、ウロボロス」

ウエルシュの 拒絶の炎 が怒涛と化して襲い来る。ウロボロスは横に跳んでかわし、そこにいた炎竜を魔力で吹き飛ばして地面を蹴る。

落ちていた劣化剣を二本回収。そうしてウエルシュまでの二十メートルを、たったの二歩で踏破する。

「ッ！？」

ウロボロスのスピードにウエルシュは驚愕する。戦っていてわかったことだが、遠距離系のウエルシュよりもウロボロスの方が速度の面で圧倒的に勝っているのだ。

首を刎ねるつもりで双剣の片方を振るう。が、反応速度ではウエルシュも負けていなかった。咄嗟に 守護の炎 を全身に纏い、素手で劣化 ウロボロカリバー の刃を掴んだ。

「無駄です。ウエルシュの 守護の炎 はあらゆる攻撃を防ぎます」「それがホントなら紘也くんがチートって叫んでるところだよっ！」「紘也様の悪口は許しません」

「言つてないよ!？」

ウエルシュが片手をウロボロスの胸に添える。フツと 守護の炎 が消えた瞬間、真紅に燃える火炎弾が射出された。

「がっ!？」

反射的に剣を放して飛び退こうとしたものの、腹部に直撃してしまった。火達磨になる前に慌てて地面を転がって炎を消火する。

「ふあっち!？ と、溶け……あれ？ 溶けてない?」

パジャマの上着を下半分ほど失い、腹部の肌も黒焦げに焼かれているが、それだけだ。重傷には違いないけれど、一瞬で蒸発するようなことにはなっていない。

火傷の激痛は？再生？が進むにつれて引いていく。

「はぁ、はぁ、どうやら、一回であたしを？拒絶？できなかつたみたいだね」

「……そのようです。だったら、何度でも？拒絶？するまでです」「じゅ、とウエルシュの手に宿った 拒絶の炎 が、掴んでいた金色の刀身を一瞬にして焼失させた。まるで次はお前がこうなるとでも言うように。

「そんな無表情で愛刀を押し折られたら心が痛いよ」

「なぜですか？ これは量産型なのでしょう？ それにウロボロスは自分から剣を粗末に扱っていました」

「それはそれ、これはこれだよ」

正直なところ、ウロボロスに余裕はなかった。ウエルシユは強い。過去に戦ってきた相手の中でも指折りの強さだ。そこは認める。

「貪欲？の魔力強化で一気に……と考えたが、昨日も使ったばかりだから体に負担がかかり過ぎる。下手したら『人化』が解けるかもしれない。アレの連日使用は厳禁。一日の休息は必須なのだ。」

「だったら牢獄用無限空間に閉じ込める……のは難しい。あの空間使うには魔力強化が必要だし、そもそも遠距離系だと相性が悪い。」

敵の攻撃を防ぐことに使えなくてもないが、一方向しか防げない上、一度見せたらアウトだ。しかもウエルシユの場合、下手をすればそれすらも？拒絶？される恐れがある。

「加えて、なんとか数えられる程度まで減らしたが、ウエルシユ・ドラゴンの眷属はまだ残っている。」

「ここまで減らせれば、あとは一気に粉碎できるかな？」

「とりあえず適当に魔力弾をぶつ放つ。ウエルシユは炎弾をぶつけて相殺した。」

ウロボロスは飛翔し、襲いかかる炎竜を飛燕が舞うようにかわして上空へ抜ける。

そして今度は空から雨霞のごとく魔力弾を連射する。数少ない眷属たちは抵抗する間もなく魔力弾と衝突して消えていく。

最初からこうしたかったが、敵の数が多過ぎて叶わなかったのだ。空へ舞い上がることはもちろん、四方八方に散った敵を連射で掃討しようものなら、いくら？循環？するとはいえ魔力の無駄遣いになる。それに、ウエルシユ本体がその隙を逃さない。

輝く球体が無数に殺到する中、やはりウエルシユは相殺するため炎弾を空に向けて放出した。

と

「お？」

一つだけ炎弾の衝突を免れた魔力の光がウエルシユに直撃する。

爆光と衝撃。吹っ飛んだウエルシユは公園の噴水をその身で崩壊させた。

しかし、一度は瓦礫に埋もれたものの、すぐにゾンビのように這い出てくる。無論、その身は 守護の炎 に守られていた。

「ははん、なるほどねえ。そういうわけですか」

ウロボロスはなにかを思いついた顔でニヤリと笑った。絶対防御の炎で身を包んでいるウエルシュが、幻獣ウエルシュ・ドラゴンが初めてその体に傷を負っていたのである。

屹立する姿こそ毅然としているが、左腕と額から真っ赤な血が流れ、ズタズタになった服装からもダメージを受けたと推測できる。

「弱点見破つたり」

一撃必死の 拒絶の炎 に完全鉄壁の 守護の炎 というチート過ぎる能力にも、必ず欠点はあるものである。

ウロボロスは颯爽と降下し、地面に足が着くや否や速攻で疾駆する。

「！ 来ないでください」

ウロボロスの動きに危険を察したのか、ウエルシュは自分の周囲の空中に、六つの中規模魔法陣を均等に並ぶように展開した。真紅の炎で描かれた魔法陣、その全てから対空レーザー兵器のごとく炎熱光線が発射される。

「はっ！ よっ！ とわっ！」

だが、直線的な攻撃の軌道は見切りやすい。ウロボロスは前進しながら華麗なステップで光線をことごとく回避していく。何度か掠って身を削られたが、超火力もクリティカルヒットしなければ怖くない。

ウエルシュの懐に入り込んだウロボロスは、がっ、とその首根っこを鷲掴んだ。数瞬遅れて 守護の炎 が発動したが、ウロボロスは手を放さない。

「ふっふっふ、ウロボロスさんは弱点を三つも見つけましたよ」

「……」

ウエルシュは無言でウロボロスを睨みつける。構わず、ウロボロスは言葉を紡ぐ。

「弱点その一。あんたの 守護の炎 には攻撃力がない。まあ、これはたつた今確認したんだけどね」

実際にウロボロスの右手が炎に炙られているが、熱も痛みも感じない。壁に穿たれた穴に手を突っ込んでいるような感覚だ。

「……ぐ」

首を絞められて呻くウエルシュがゆっくりと手を振り上げる。

「おつといいのかな？ 弱点その二。？拒絶？と？守護？を同時に使用することができない。このまま？拒絶？に移行してもいいけど、その前に首と体が『もうあなたとはやってられないわ離婚よ離婚！』ってことになっちゃうよ？」

そのふざけた調子の脅しがハツタリではないと悟ったウエルシュは、ピタリと振り上げた手を停止させる。

満足げに微笑するウロボロス。

「そんでもって、弱点その三は」

言いながらウロボロスは腕に力を込める。ぐん、とウエルシュの体を引き寄せ 思いつ切りぶん投げた。

赤き砲弾と化して宙を高速移動するウエルシュは、進路上に設置されてあつた自動販売機と激突した。ぐしゃぐしゃに潰れた販売機から青白いスパークが迸り、缶ジュースが辺り一面に散乱する。

「……痛い」

自販機の残骸を下敷きにしたウエルシュが上体を起こした。

「弱点その三は、 守護の炎 で防げるのが敵意ある攻撃だけってこと。つまり派生した衝撃やぶつかった物のダメージまでは守備範囲外ってわけですね」

ウエルシュ・ドラゴンの？守護？とは、細かく言えば？侵略者からの守護？になる。だから無意識の事故には対応できない。さっきの魔力弾で彼女が吹っ飛んだ時にピンと来たのだ。白状すると勘だったことは秘密。

「地面に叩きつけた時は皮肉にも ウロボロカリバー がクツシヨンになつたようだけど、もうそんなへマはしないよ。攻略方法がわ

かったからね」

「ウロボロスは知識に富んでいると聞きますが、知恵はないようですね。そんなことを敵であるウエルシュにペラペラ喋っているのですか？」

「いいんだよ。次で決めるから」

疾風のごとき跳躍でウロボロスは地を駆ける。完全に起立したウエルシュは凜とした双眸を赤く煌めかせ、宣言する。

「わかりました。ウエルシュも全力の攻撃で迎え撃ちます」

ボワツ！ とウエルシュ・ドラゴンの足下から真紅の炎が噴火した。

「！」

身構えるために急停止したが、その炎でウロボロスを攻撃するわけではないようだ。炎はウエルシュに纏わりつくくと西洋鎧に似た形を成し、攻撃性を明示するかのごとく煌々と燃え盛る。

「？拒絶？特化モード、移行完了です」

魔力が先程とは比べ物にならないくらい高まっている。「人化」の器から漏れ出た魔力が？攻撃力ある鎧？となってウエルシュを包んでいる。

？守護？を捨て、あの魔力を全て？拒絶？に注がれては、いかにウロボロスと言えどもただでは済まないだろう。

直接触れるのは危険 ならば武器だ。

ウロボロスはオリジナル ウロボロカリバー の？再生？が完了していることを認め、敵の出方を警戒しながらまずはそれを回収する。

と同時に、ウエルシュが両手を大きく広げた。瞬間、赤熱する火炎が爆発的に何メートルも広がり、竜翼に似た形となって具象する。そしてそれが羽ばたくように左右からウロボロスを挟撃する。

拒絶の炎 の対象はウロボロスのみであるはずなのに、炎翼の広範囲攻撃は公園のあらゆる物を焼かないまでも薙ぎ倒していく。

「うっそ、範囲広っ！？」

ウロボロスの速度を持つてしても、挟まれるよりも速くウエルシユに辿りつくことは不可能と思えた。剣を拾いに行つたため距離が離れ過ぎている。前後左右がダメなら上空へと避難するしかない。「逃がしません」

重積した二翼の炎から数多の火柱が間欠泉のごとく噴出する。上に退避するしかないことは向こうも承知の上だ。無駄なく次の攻撃に繋がっている。

「やっぱあれだけで終わりってことはないか」
現在の状態で下から噴き上がってくる火柱全てを避けるのは難しい。

「一回くらいなら、大丈夫かな？」
というか、もうこれをしなければ勝利はない。

剣を握っていない左手。その手首を、ウロボロスは自らの口へと持つていく。

かぶつ。

歯を立て、ウロボロスは流れた自らの血液を啜った。その瞬間、周囲の空気が陽炎みたく揺らぎ、大気がビビビと軋みを上げた。ウロボロスの？貪欲？による魔力強化だ。魔力が高まれば『人化』している肉体の身体能力も比例して向上する。

「さてと、こつからは瞬殺コースですよ！」
休みなく続くイラプションを掻い潜り、超高速の飛行でウエルシユに急接近する。

だが、ウエルシユも甘くはない。
「そう何度も避けられるほどウエルシユは馬鹿ではありません」
間一髪でかわしたはずの火柱がホーミングし、ウロボロスの右翼を貫いた。

「しまった、翼が……」

片翼では浮遊のバランスが取れない。飛空を崩されたウロボロスに、ウエルシユの意思を宿した火柱が集中砲火を仕掛ける。かわすことも防ぐこともできず、ウロボロスは 拒絶の炎 の奔流に呑み

込まれた。

「終わりです」

と思われた。が

「そうでもないよ！」

炎が弾け飛び、ウロボロスが地面に落下する。そして次の一瞬には、既にウエルシュとの間合いを詰めていた。驚愕に目を見開くウエルシュの腹部に、ウロボロスは瞬速の勢いを殺さぬまま ウロボロカリバー を叩き込んだ。

「なんで、無事」

言葉は最後まで紡がれることなく、ウエルシュの小柄な体は大地を深々と抉りながら人工林へとストライクした。

「無事？ なわけないよ。もう片翼を犠牲にして振り払わなかったらやばかったっつての」

斬った手応えはなかった。鎧状の 拒絶の炎 が刃の切れ味を削いだからだ。

それでも衝撃によるダメージは敵を再起不能にするには充分だったのだろう。特に今のウエルシュは？ 拒絶？ に特化しているらしく、守護の炎 を纏えないのだ。

待てども反撃が来る気配はない。思わず笑いが零れる。

「フ、フフフ、どうですか？ 紘也くん紘也くん、あたしは勝ちましたよ」

振り向けど、そこに求める人物はいない。急激に虚しさが込み上げてくる。

「……そうだったね。紘也くんとは、これから会談しないといけな
いんだっつた」

寧ろそちらの方がウエルシュ・ドラゴンなんかよりも怖くて不安なウロボロスである。

と、その時

バリイン！ となにかが碎ける音。続いて、フツ、となにかが消える気配を感じた。

「個種結界が消えた？ あいつのはわかるけど、なんであたしのみで……!?!」

独り言の途中で『それ』を見つけ、ウロボロスはビクリと体を震わせた。

市民公園の入口がある方向から、ウロボロスの契約者 秋幡紘也が歩み寄ってきていたのだ。

戦闘は既に終わっているようだった。

というのも、紘也がウエルシュ・ドラゴンの個種結界を破るのに時間を食ったからだ。？拒絶？の特性は想像以上に頑丈だった。

それはそうと立っているのがウロボロスだけということは、世界魔術師連盟の大魔術師である秋幡辰久の契約幻獣が倒されたことを意味している。

厄介なことにならなきゃいいが、などと紘也は胸中で嘆息する。悪い方向に傾き過ぎて連盟に目をつけられたらどうしよう。魔力制御ができるといっても一高校生に過ぎない紘也は真っ先に死ぬる。

「や、やあやあ、これはこれは紘也くんじゃあないツスカ。おっひさあ」

無駄な思考をしている間に先に声をかけられてしまった。ウロは盛大に刃こぼれしている 竜鱗の剣 を無限空間に放り投げ、普段通りの軽いノリで手を振っている。

が、紘也は見逃していない。彼女の瞳が小動物のような弱々しさで揺れていることを。

「ウロ」

呼びかけると、ビクン、と彼女の肩が跳ねた。

「 ったく、無理してんじゃねえよ」

紘也は思わず溜息をついてしまいそうになったところを堪え、

「悪かったな。出ていけって言ったの、あれ全部嘘だ」

彼女が軽い調子を望んでいるのならば、と頭も下げずに謝罪した。「う、そ？ あはは、嘘って……紘也くん、またまた御冗談を。あのウエルシュ・ドラゴンが来るからあたしはもういらなんて」

「おいおい、いらぬとは言っていないだろ。あのままお前が家にいたらどうなっていた？ 絶対に戦闘が始まっていただろうが。だから少し席を外してくれって意味だったんだよ。ま、結局は戦っちな

「たけどな」

無事でよかった、とはあえて口にしない。無事だと信じていたから。

「えっと、じゃあやっぱりあたしの勘違いで、あたしは紘也くんの嫁のままでもいいと？」

「さて、迷子の主役も見つかったし、今日は予定通りカレーパーティーができるな」

「あの紘也くん、慰めてる時くらいスルースキルをオフにしてくれないかな？」

普段通りの遣り取りにも関わらず、なおもどこか怯えの色が見えるウロ。やれやれと肩を竦め、紘也はガツンと言ってやることにした。「ウロ、お前は俺の契約幻獣で、もうとっくに俺の、俺たちの日常の一部なんだよ。だから不安そうにするな。いつも通りでいる。お前がシリアスに沈んでると天変地異でも起こりそうで怖いんだよ」

愛の告白ではないにしろどうも照れ臭い。なんか顔が火照ってきた。と、ウロの目尻にじわりと涙が滲んだ。

「ひっく、えぐ、紘也くん、ふえええええええええええん」

「って泣くなよ！ シリアスにするなって言ってるだろ！」

堰を切ったように嗚咽しながら紘也の胸で涕泣するウロ。本物の涙だ。ここで引き剥がすと人でなしだな、そう思った紘也は、彼女の小さな背中を優しくそっと抱き締めた。

しばらくそうしていると、落ち着いたウロが自分から身を離す。

「うっぐ、紘也くん。実はあたし、過去に一度こっ酷く捨てられたことがあるんだ。だから紘也くんに出ていけって言われた時、また理不尽に捨てられるんじゃないかって思ったらすんごく悲しくなつて……でも、違っただんだね。もう、拒んだりしない？」

「ああ、しないよ」

紘也が頷くと、うん、よし、とウロは気持ちを切り替えるように自分の頬をしばいた。

「まあ一度捨てられたからかな、あたしって紘也くんのそういうな

んだかんだで仲間想いなところに惹かれたのですよ。 うん、惚れ直しちゃいました。 紘也くん大好きです。 あ、もちろんラブ＆ライクだよ」

「め、面と向かって恥ずかしいこと言うなよ！ 聞かれたらどうする！？」

「いえいえ、個種結界の効果が働いていたので他に人なんて」

ウロは言葉を詰まらせた。 紘也の後ろ、公園の並木道からぞろぞろと団体様が御到着なされたからだ。

ふんわり笑顔で愛犬を抱いている鷺嶋愛沙。

なぜか険のある表情で紘也を睨んでいる葛木香雅里。

楽しそうなニヤついた顔を満面に貼りつけている諫早孝一。

その他、葛木の陰陽師たちが遠慮するように遠巻きに眺めている。

「紘也、もう話は解決したのか？」

「白々しいな。全部聞いてたんだろっが」

「ありや、バレたか。心配するな。別に詰ったりはしない。……で、返事はどうするんだ？」

「早速前言撤回だなおいつ！？」

孝一は時々親友でさえ娯楽のオカズにするから始末が悪い。

「まさか、告白を受ける気じゃないでしょうね？」

「アホか。アレは告白にカウントされねえよ。だからそんな顔で睨むな、葛木。怖いから」

香雅里は兄のこともあってか幻獣との交際を酷く嫌悪しているのだ。

「ウロちゃん無事でよかったよう！ わたしすっごく心配したんだよ」

愛犬を地面に下ろした愛沙が温かくウロを抱擁する。 愛沙がいるだけで場の雰囲気はすこぶる優しくなるのだ。

「オウ！ やっぱり愛沙ちゃんも天使だよ！ 紘也くんなんか心の裏では心配に心配を重ねてるくせに口を開けば『し』の字も出てこないツンデレ」

グサツ！

紘也流対ウロボロス戦必殺奥義 『アイズクラッシュャー』発動。
「目つがビリつてきたあああああああああああつ！
？」

オプシヨン効果 魔力干渉による一時的な麻痺付加。

「ひ、紘也くん、なんか、なんかいつもよりきつくない？」

「それはお前がパジャマだからだ」

「確かにパジャマだけでも意味わかんないよ！？」

普段通りに戻った身食らう蛇はウザいことこの上なかった。

「紘也、お前って時々酷いよな」

「そう？ 妖魔が相手ならこれでも生温いんじゃないかしら？」

孝一と香雅里は先程と一変して柔らかな微笑みを浮かべていた。

そんな温かな空気を感じ取ったのか、再びウロの青い瞳から感激の雫が溢れた。

「なんかアレだね。あたし、紘也くんを監視していた時から『楽しそうだな』『あの輪に入りたいな』ってずっと思ってたんだよね。

で、ようやくその夢が正式に叶ったって気分だよ」

「うん。ウロちゃんはずっとずっとわたしたちのお友達です」

愛沙が今一度ウロと抱擁を交わす。

その刹那

「愛沙ちゃん離れてっ！？」

血相を変えて愛沙を突き飛ばしたウロの正面を、真紅の火炎流が横切った。

「……ウロ（ちゃん）！？」「……」

紘也、孝一、愛沙の三人の声が重なる。香雅里が素早く臨戦態勢を取る。

「あつ……」

苦悶の表情で呻くウロ。愛沙を庇った彼女の両腕の肘から先が焼け爛れていた。血は流れていないが、力が入らないのかだらりと弛緩している。

ヘルハウンドの地獄の炎すら物ともしなかつたウロボロスが、一瞬にして腕を使い物にできなくされた。寒気を覚えるほど恐ろしい威力だ。

紘也は火炎が飛んできた方向に目をやる。人工林の奥から、赤髪をバツクツインテールに結った少女　幻獣ウエルシュ・ドラゴンが姿を現した。

「……ウエルシュは、頑強な超火力砲台として定評があります。あのくらいでは……破られません」

彼女の息は絶え絶えで、見た目も酷くズタボロだった。そんな状態で動いていることよりも、生きていたことに紘也は驚いた。てっきり消滅したものだと思っていた。

「ウエルシュ！　もういい、やめろ！」

「そうはいきません。マスターの命令ですので、紘也様が上書きすることはできません」

「こいつに危険はない！　だから戦う必要なんてない！」

「それはウエルシュが判断することです」

ウエルシュが手を翳す。真つ赤な炎が渦巻きながら収斂する。

「その体では自由に動けませんね。？　再生？　する前に止めを刺します」

灼熱の業火球が宙を走った。ウロは避けられない。さっきの炎と同威力、いやそれ以上だとしたら、恐らく　竜鱗の鎧　を纏おうともウロボロスは焼き消される。

ウロは紘也の契約幻獣で仲間だ。消滅させるわけにはいかない。

「くそつ、一か八かだ！」

可能性に賭けて、紘也はその行動を取った。

「……え！？　」「」

ウロを含め、その場にいた誰もが絶句する。ウロを庇うために、紘也はウエルシュの火炎弾の前に立ちはだかつたのだ。

ウエルシュは紘也を守るためにここにいる。だから紘也には攻撃をあてられないはずだ。

しばらく殺意に似た衝動を覚える紘也だった。

「申し訳ございません紘也様！」

「どわっ!？」

紘也はいつの間にか真後ろにいたウエルシュに仰天する。彼女は両膝をつき、額を擦り切らんばかりに地面に押しあてていた。滅多に見られない完成された美しい土下座である。

「? 拒絶?の対象ではないとはいえ、守るべき紘也様に攻撃をあててしまいました。ウエルシュ、一生の不覚です。日本流に則って腹切りで謝罪を……刃物がありません。ウロボロス、貸してください」「オウ! 勝手に死ぬならこちらら大歓迎ぶごあつ!？」

紘也のゲンコツがウロに炸裂した。頭上でお星様を公転させる彼女は放置し、紘也は自害する気満々のウエルシュに言う。

「あのな、俺はお前にも死なれたら困るんだよ。親父になんて言えばいいかわからなくなる。どうしても謝罪したいのなら他の方法にしてくれ」

「では、紘也様が決めてください」

「ウロボロスとこれ以上争うな。それで許す。あいつは俺の契約幻獣なんだ」

言うつと、ウエルシュは顔を上げた。彼女は不思議そうにきよとんと小首を傾げる。

「……ウロボロスの契約者は『ヒロくん』という人物だと聞いています」

「秋幡紘也だから、ヒロくんなのです」

人差し指を立てて愛沙が説明した。ウエルシュが「そうでしたか」と納得するのを確認すると、愛沙はととととウロへ駆け寄る。そこには既に孝一と香雅里がウロを補助するように集っていた。

「ウロちゃんの腕……酷い。病院行ったら治るかな?」

「いえいえ、このくらいすぐにピロロ〜ンって?再生?しますよ」

「本当だ。どんどん傷が癒えていくぞ。時間が巻き戻っているみたいだ」

「寧ろ腕がない方が蛇らしくていいんじゃないかしら？」

「ノット！　かがりんそこはノット！　アーム・ドラゴン！」

そんな間の抜けた会話には参加する気など毛頭なく、紘也は土下座から正座に移行して逡巡しているウエルシュを見下ろす。

「で、どうだ？　これ以上争われるといるんな人に迷惑なんだ」

「……やはり、命令違反になるのでウエルシュにはできません」

紘也から目を逸らし、ウエルシュは囁くようにそう言った。しかし

「ですが、一つだけ方法があります」

希望はあるようだ。

「その方法は？」

「紘也様がウエルシュの新しいマスターになればいいのです」

ウエルシュから紡がれた言葉の情報を紘也はうまく処理できなかった。ウ口たちのアホな会話を耳にしたせいに違いない。

「悪い、もう一回」

「紘也様がウエルシュの新しいマスターになればいいのです」

無表情をキリツとさせて、ウエルシュが一字一句変わらずに答えた。どうしても他の意味を思いつかない。

「えーと、要するに、俺と契約することか？」

「はい、ウエルシュはそう言っています。そうすれば、命令の上書きが可能です」

「多重契約って、大丈夫なのか？」

「はい、大丈夫です。ウエルシュのマスターはウエルシュ以外にも十一体の幻獣と契約しています」

一般魔術師だと幻獣契約は一体が限界だ。それを十二体分も行っているとは、紘也の父親はとんでもないバケモノのようだ。

「それに紘也様の魔力量なら、ウエルシュを含めてもまだ十体以上の幻獣と契約しても問題ないと思われます」

どうやら紘也もバケモノになり得るらしい。将来は大魔術師になれると期待されていただけあって驚きはしないが、そこは論点とは

異なっている。

「いやそうではなく、あんたが二重に契約できるのかって話だよ」
「いえ、現マスターとの契約は破棄されます。マスターは優しい方です。幻獣狩りの間だけ、護衛のため仕方なく、という理由なら許してくれます」

確かに、と紘也は唸った。まだウロボロスを父親の幻獣だと勘違いしていた時、電話で似たようなことを話したからだ。というか、父親は既に契約が破棄されたと思っているのではなからうか？ 十体以上と契約していれば、一体分の魔力供給が消えたか消えてないかなど判断し難いだろう。

紘也が黙考していると、腕の？再生？を終えたウロが血相を変えて口を挟んできた。

「ちよつとちよつとちよつと待ていっ！ さつきから聞いてりや紘也くん、あたしという伴侶がいながら浮気する気じゃなからうね！」

「で、契約の方法は？」

「ウガーツ！ 紘也くんここはスルーさせるわけにはいかないよ！ 浮気するなんてガツデムです！ 紘也くんにはウロボロス愛好精神が全く持つて足りてな」

グサツ！

「ふぎゃあああああああああああああああああああああああ
あっ！？」

割り込んできた鬱陶しい蛇を強制退場させ、紘也はもう一度ウエルシユに問う。

「契約するから、方法を教えてくれ」

「わかりました。安心してください。ウエルシユとの契約は簡単です」

ウエルシユはゆっくりとした動作で立ち上がると、その小柄で華奢な体を紘也に急接近させた。「フンガーツ！ あたしの紘也くんになにする気だこの腐れ火竜っ！？」と香雅里に抑えつけられたウロがなにやら叫んでいるが、余裕で黙殺する。

「ウエルシユとキスしてください。できるだけディープに」

「さーてなんか俺めっちゃ疲れたから帰って寝るわ」

「……冗談です」

心なしか残念そうにウエルシユは呟いた。アホ毛も萎びた雑草みたいに力なく垂れる。紘也がなにかしら既視感を覚えていると、彼女は掌を上に向け、そこに真紅の炎を宿す。一瞬身構えそうになった紘也だったが、ウエルシユに戦意がないことを読み取って押し留める。

メラメラと燃え滾る真つ赤な炎は、数秒と経たずに弾けた。すると金属質な小さな物体が出現し、彼女の掌へと落ちる。

六芒星を形取ったペンダント型のアミュレットだった。色はもちろん真紅。よく見ると六芒星の片隅に幼稚な文字で『Made in Welsh』と書かれてあったが、気にしないことにする。

ウエルシユはそのアミュレットを紘也に手渡した。

「これは？」

「ウエルシユの 守護の炎 を編み込んだお守りです。ウエルシユの体の一部だと思ってくれてかまいません………ぼっ」

「いや、かまうよ！ けっこう大事なもんじゃねえのか？ あとなぜ頬を染めた？」

「次は紘也様の大事な物をウエルシユに預けてください」

まさか紘也がスルーされるとは考えもしなかった。

「ウエルシユの大切な物を守るべき場所に、守るべき場所の大切な物をウエルシユに。これが？ 守護？ の特性の契約方法です」

そういうことか、と紘也は得心した。なんか向こうで「あたしも紘也くんの大事な物欲ーしーいっ！ ぬはあーっ！ ジェエエ エラスイイイー！」と猛獣のごとく牙を剥いているウロは、とにかくひたすらに無視する。

「大事な物って言っても、今持つてるもので……あっ」

ズボンのポケットの中に丁度いい物があった。それを取り出し、ウエルシユに差し出す。

鉄色で細く平べったい、ところどころに凹凸のある金属　鍵だ
った。

「家の玄関の鍵だ。？守護？ってことだからけっこう合ってると思
うが？」

「はい、それでオーケーです。辰久様がウエルシユに預けた大切な
物も鍵でしたので。家ではなく、オトナの宝物庫と仰っていました
が」

「その鍵は永遠に預かっておいた方がいいかもしれないな」

恭しくウエルシユは秋幡家の鍵を受け取った。合い鍵があるので
紘也はそっちを使うことになるだろう。

「契約成立です」

拍子抜けするくらい呆気なかった。契約は幻獣によって異なると
ウロが言っていたが、異なっても迫力的には似たようなものなのか
もしれない。要は魔力供給のために互いの魔力をリンクさせること
に意味があるのだ。無駄な演出はいらないのだろう。

「じゃ、命令する。これ以上ウロボロスと戦り合うな。迷惑だから
な」

「了解しました、新マスター」

このことを後で親父に伝えなければ、と紘也は心の予定帳に記録
する。

「あうう、浮気成立う……ひぐ」

と涙の海に沈んでいるウロには「浮気じゃねえよ。お前だって俺
の契約幻獣だ」と適当に声をかけておき、紘也は香雅里を見る。

「面倒をかけたな、葛木」

「まったくその通りよ。次からは身内の喧嘩に私たちを巻き込まな
いでくれるかしら？」

「善処するよ」

香雅里はフツと軽く笑って踵を返した。と、愛沙が彼女を呼び止
める。

「あ、待ってカガリちゃん！」

「なに？」

「今晚、ウロちゃんの歓迎会をヒロくんのお家でするから、カガリちゃんも来てね」

「……気が向いたらね」

若干頬を赤く染めてそう言い、香雅里は陰陽師の仲間と共に公園を去った。

「ところで紘也、お前の親父さんに連絡して命令を変えてもらう方はダメだったのか？」

「言うな、孝一。それは俺も気づいていた。契約が終わった後だったけどな」

今さら契約を破棄するなんて気が引ける。ウエルシュに失礼だろうし、契約していれば今後彼女の個種結界に阻まれることもなくなる。紘也は無理矢理そう納得していた。

さて、と呟き、紘也は自分の契約幻獣たちを振り向いた。

「ああああんた！ ひ、紘也くんの本妻はあたしなんだからね！ 渡さないからね！」

「それはマスターが決めることです。もつとも、マスターにスルーされるウロボロスには見込みはなさそうですが」

「なんやて！？ もう三べん言ってみろ！！」

「ほらお前ら帰るから喧嘩するな目え刺すぞ！」

二倍に増した騒がしさに、紘也は頭痛を抑えることができなかつた。

S e c t i o n - 3 6 和 睦 (後 書 き)

Volume - 01は残すところエピソードだけです。もう
今日中にあげちゃいます。お昼ごろに。

場所はデンマーク自治領・フェロー諸島　ヴォーアル空港内。

『本当にいいんだな、親父』

「いいともいいとも。ちゃんと返してくれるんなら、お父様的には問題ナツシング」

世界魔術師連盟の大魔術師　秋幡辰久は、空港ロビーの椅子を複数占領してだらしく寝そべっていた。電話の相手は日本にいる息子だ。

わざわざ北欧の秘境地まで足を運んでいる目的は、言うまでもなく幻獣狩りだ。各地の魔術師だけでは対処不能な大物が現れた場合、こうして連盟に十人といない大魔術師の称号を持つ者が派遣されるのだった。……いい迷惑である。

「どうだ？　ウエルシユは真面目でいい子だろう？」

『真面目過ぎて融通の利かないところが今回の騒動を招いたんだよ。あんたがちゃんと指示してなかったのも悪い』

「そうは言っけどね、紘也少年。父さんは紘也がまさか幻獣契約しているとは思ってなかったわけよ。勘違いしていた紘也も悪いってことでプライマイゼロにしようや」

『どこにプラスがあるんだよ』

呆れた溜息が電話口から聞こえてきた。

「それはそうと、ウロボロスのウロちゃんだっけ？　今度父さんにも紹介してよ」

『あんたが帰ってくりゃ嫌でも会えるさ。あー、帰ってくる、てのは間違った表現だよな。もうそっちが本宅になってるようなもんだから』

「年中海外で暮らしていても、日本は心の故郷さ」

『いいこと言っただつもりか？』

「そうそう、父さん今ロンドンじゃないのよ。幻獣狩りであっちこ

「つち引つ張りだこでもう勘弁つて感じ」

『あんたの実験が失敗したせいだろうがちゃんと責任持て！』

「この前なんかマダガスカルでロツク鳥を狩った時にでっかい卵拾つてさ。国中に日本伝統のたまごかけごはんを振舞ったりなんかしちゃってハツハツハツ」

『実は楽しんでないかつ!? ていうか食つたのかよ!?!』

息子の元気なツツコミが本当に無事だという証拠を示してくれる。今回はまだ一度もスルーされていないのだが、どうしてそれがこんなにも嬉しいのだろうか?

「まあ、なんだ。ウロちゃんの紹介ついでに紘也少年がロンドンへ来るといふ手もある」

プツツ! ツー ツー ツー。

一方的に切られてしまった。今日は機嫌がいいと思って話を持ちかけたが、失敗した。

「もう少し時間が必要なんだろうな」

十年。随分と経つたと思うのだが、まだ母親に会いに来る覚悟はできないらしい。母親は紘也のことを全く恨んではないというのに……。もしかすると、ただ恥ずかしいだけなのかもしれない。

「あーあー、ロンドンからの旅は疲れたなあ。おっさんには応える重労働だ。てことで、今日はだるいから寝る」

「なにを言っているのですか、主任。これからすぐに幻獣狩りを始めますよ。さっさと起きて指揮を取ってください」

目線だけ動かすと、そこに専属部下の女魔術師が睨みを利かせていた。

「えー、だつてだるいし」

「えー、ではありません! 動かないのならば、引きずつても連れていきますからね!」

宣告通り、女魔術師は辰久の手を取って椅子から引きずり落とし。その際にゴチン! と床で後頭部を強打する。

「痛っ!?! ちょ、痛いんだけど!?! 引きずるならもっと丁寧に

俺ワレモノですからワレモノがはっ!? は、柱で膝打った……」
これから戦う幻獣からのダメージよりも、この時のダメージ量の方が遥かに多い大魔術師様だった。

ところ変わって日本は蒼谷市 秋幡家のリビング。

時は夕刻。網戸の換気など物ともしないカレー独特のスパイシーな芳香が部屋中に満ち溢れ、食欲という名の暴君をこれでもかと思わせる。気づけている。

ウロと、急遽主役参加が決定したウエルシュの歓迎カレーパーティーである。

厨房には愛沙と孝一が立った。紘也もそうだが、孝一は料理をやらなくても別段できないわけではない。といつても、三人を競わせれば愛沙がダントツ優勝を搔うことは火を見るよりも明らかである。

真っ先に手伝いを申し出てきたのはウエルシュだ。彼女に触発されるようにウロも手伝うとか言い出したのだが、紘也が頑としてキッチンには入れなかった。人間様の料理に幻獣が手を加えるなど許さない。特に彼女らは幻獣界の食材(?)を当たり前のように使用しやがるから困る。よって紘也の任務は、隙あらばキッチンへ潜入しようとする二人をブロックすることであった。

約一時間でカレーが完成し、現在はリビングのテーブルを五人で囲って食事している。

あと一人、葛木香雅里の姿はない。来るとは連絡があったのだが、連盟関係の仕事で遅れるそうだ。だから彼女抜きで先に歓迎会を開始する運びとなった。

賑々した食卓を久し振りに感じながら、紘也は自分のカレーを口に運んだ。数種類のルーをブレンドした辛過ぎず、甘過ぎずの絶妙な中辛加減。それでいて牛乳を使用したまるやかな風味が口内に広

がる。大き目に切ったジャガイモやニンジンもホクホクで柔らかく、角切りタイプの牛肉はタマネギとシナジーしてとろける旨味を引き立てる。

まさに絶品。これだけで店を開けそうだ。

「どう？ ウエルシュちゃん？」

愛沙が味の評価をウエルシュに求める。皆が美味そうに食べているので愛沙の表情はニッコニコだった。

「はい、とてもおいしいです。……ですが、実はウエルシュは甘口派です」

「ハッ！ あんたドラゴンのくせに辛いのがダメなんだ。舌がお子様じゃあないの？」

スプーンを突きつけたウロが見下すように笑った。

「なんで挑発してんだよ。仲良く食べよ、主役同士」

「紘也くん、あたしがこの腐れ火竜と仲良くできると思ってたの？」

「そうですマスター。ウエルシュはドラゴン族が大嫌いです。あと腐ってます」

ドラゴン嫌いは侵略民族の白き竜のせいか、と紘也は勝手に推測する。

「いいかウエルシュ、よく聞け。ドラゴンじゃない。ウロボロスは蛇なんだ。ウロボロスは蛇なんだ」

「ドラゴンだよ！？ なんで二回言ったの！？ そんなに大事なこと！？」

泣きながら喚き散らすウロは毎度のごとくスルーする。

「もういいよ！ 話戻すけど、あたしは中辛派です！ 幻獣界では？ ミス中辛？ と謳われるくらい中辛派です！ フッフ、この中で甘口が好きなのはあんただけだよ。このカレーが中辛なのがその証拠さあ、アウエーな気分を味わうんだね」

「だからその喧嘩腰をやめれ！」

一人騒がしいウロを鎮めるために紘也の手がV字を取ろうとした時、愛沙が申し訳なさそうに挙手した。

「えつと、ごめんね、ウロちゃん。本当はわたしも甘口の方が好きなんだ」

「なんですと!?! まさかの愛沙ちゃんに裏切られた!?!」

「愛沙様はウエルシュのお仲間です」

あまり表情に変化はないが、たぶんウエルシュは『ざまあみろ』と笑っている。

「絃也くん! 絃也くんは中辛派だよね! ね!」

「期待の眼差しで見詰めているところ悪いが、俺は辛口派だ。辛さ二十倍は余裕だな」

「ぬはっ!?! また一人裏切り者が……こうなったら最後の砦、孝一くん!?!」

とウロは今まで静かに食事を、というか絃也たちの遣り取りを楽しそうに傍観していた孝一に話を振る。彼は勿体ぶるようにスプーンを置き

「すまない、ウロ。オレも辛口派だ。ハバネロペッパーを一瓶丸ごとカレーに投入しても楽勝で食えるくらいのな」

それは絃也でも無理そうだ。よい子はたとえ罰ゲームでもマネしないように。

「え? なに? じゃあ、つまり、あたしがアウエーってことじゃないですかあッ!?! 気づけば全員裏切り者……ううう、あたしなんて部屋の隅っこで『中辛派バンザイ。中辛派バンザイ』って呟きながら根暗にカレー食ってりゃいいんでしょ……」

なんかウロが自虐モードに突入してしまった。部屋の隅に移動して壁に向かって体育座りなんかをしている。流星に少し可哀想に思えてきた。

「ウロちゃん泣かないで。辛口が好きな人も、甘口が好きな人も、中辛だったらみんなおいしく食べられるんだよ。中辛は偉大なのです」

「ですよねー 愛沙ちゃん今いいこと言っただよ!?!」

前言撤回。全く可哀想じゃない。寧ろウザい。

「マスター、ウロボロスは常時こうなのですか？」

「いや、寝てる時と寝起きは隙だらけだ。試しに今度夜襲してみる。俺が許す」

「そこは許さないでよ!？」

「あつちこつち忙しい奴だな、お前は」

「大半は紘也くんのせいじゃないかな!？」

「ぜーはーぜーはーとウロは息を荒げている。まったく、なぜ食事
中にそうなるのか紘也には理解できない。」

「紘也、インターホン鳴ってるぞ」

「ん？ ああ、悪い孝一、全然気づかなかった」

一人冷静に傍観者を決め込んでいる孝一だからこそ気づけたのだ
ろう。彼が話題に介入してこないのは、見ている方が楽しいと踏ん
だからだ。

「んじゃ、ちよつと玄関まで迎えに行つてくるよ」

そんなこんなで葛木香雅里がカレーパーティーに参戦。片手に持
っているレジ袋は差し入れだろう。お菓子やジュース、イベントグ
ッズまで入っている。意外にも気合い充分だった。

「かがりんに問う！ カレーは何口派？」

「な、なによ、いきなり」

リビングに入るや否やのウロの問いに香雅里は狼狽する。

「いいから答えて!」

「えつと……………中辛、かな」

なぜか目を逸らし、前髪のヘアピンを擦りながら香雅里が答えた。
瞬間、ウロのテンションメーターがおかしな方向に振り切れた。

「イヤッホハッハーツ 中辛派バンザイ！ 中辛派バンザイ

！ これよりあたしは中辛革命をゴゴゴシユンゴガボボフゲホンゲ
ホン！ て起こすよ起こしちゃうよ起こしてしまうよ。具体的には
敵対国の武器全てを中辛カレーに沈めます。そして世界は我々中辛
帝国に支配されるのです。我らに逆らった者は毎朝毎昼毎晩が中辛
中辛中辛中辛中辛中辛中辛中辛中辛中辛カラカラカラカラカラヒ

「ヤッホーイ!!」

「バコン！」

紘也は速やかにキッチンから持ってきたフライパンでウロの後頭部を撃墜した。もちろん魔力干渉でウロボロスの魔力を乱し、部分的にパラライズ効果を付与することも忘れていない。父親を張り倒す時によく使用していたので干渉加減のコントロールは朝飯前である。

殴られたウロは機能停止したロボットみたいにあらぬ虚空を見詰めて動かない。そんなウロを心配してか、愛沙が彼女の肩を揺らす。「す、凄い音したけど、大丈夫、ウロちゃん？」

「一撃であのウロボロスを沈めるとは、新マスターは怒らせると怖いようです」

「ははは、紘也は本当にSだな」

「ちよつと秋幡紘也、これって大丈夫なの？」

「このくらいいしないと止まらねえよ、この蛇は」

「ドラゴン！ ハッ！ あたしは今までなにを……？」

「お、起きた。『蛇』の単語がスイッチだったようだな、紘也」

「チツ」

「ちよつと紘也くん！ なんでそこで舌打ち!？」

正気に戻ったら戻ったで騒がしいウロだった。これからはらくこんな日常が続いて行くのかと思うと頭が痛くなる。

でも、楽しくはある。

イレギュラーな生命体が二体ほどいるが、こうしている分には自分たちとなにも変わらない。そんな彼女たちと歩んでいく日常も悪くない、そう紘也は思い始めていた。

「よし、葛木も来たことだし、ここいらで主役の二人になにか一言喋ってもらおうか」

急に孝一が仕切り始めた。彼はテレビのリモコンをウエルシュに渡す。マイクのもりなのだろうか？

「一言、ですか？ はい、この度はウエルシュなんかのためにこの

ようなパーティーを開いていただきありが

「言い終わる前にウロがマイク、もといテレビのリモコンを奪い取った。」

「はいつまんない挨拶でした！ まったく、これはこのウロボロスさんのための歓迎パーティーなんだよ？ ゴホン、あーあー、テストス」

「テストする意味ないだろ。テレビのリモコンだぞ」

「はいそこ細かいこと気にしない！ いやあ、ウロボロスさん的にはこんな楽しいパーティーを開いてもらうのは実は初なんだよね。」

「なんかどうでもいいのが一匹紛れてるけど、みんなあたしの大事なお友達」

「……ぐすん、ウロボロスを？ 拒絶？ します」

「マイク（もうマイクでいいや）を奪われたウエルシュが危ないオラを纏っていた。いや比喩ではなく、真紅に揺らめく 拒絶の炎に包まれてウロボロスを睥睨している。そんなに喋りたかったのだろうか。」

「なんですか？ やろうつてんですか？ 一度負けたから早速再戦の申込みですか？」

「ウエルシュは負けてません。寧ろ両腕を失っていたウロボロスの負けです」

「なんだとう！ だったら次こそはつきりと白黒つけようじゃあないの！」

「はい喧嘩両成敗」

グサツ！ ゴン！ とそれぞれから違う効果音が発せられた。

「あうう、紘也くん、なんであたしは殴ってくれないの？」

「……痛いです、マスター」

片方は目を、もう片方は頭を押さえて仲良く蹲っていた。どちらがどうとは言わずもがなだ。我ながら器用な動きをした、と紘也は思った。

「楽しそうね、あなたたち」

「そういう葛木もな。さつきからカレー食っては恍惚としているぞ」
「なっ！ そんなはずは……ええそうよ！ このカレーがおいし過ぎるのが悪いのよ！」

なぜか逆切れする香雅里。どうやら心底中辛が好きなのだと思受けられる。

「そう言ってもらえると嬉しいよう。作った甲斐があるというものです」

愛沙は相も変わらずニコニコだった。

「そうだ。カレー食い終わったらみんなでモンバロのトーナメントしようぜ」

「さつきから唐突だな孝一！ トーナメントって言っても六人じゃ切りが悪いだろ」

「CPUを二体入れるとか、総当たり戦にするとか、対策はいくらでもあるさ」

忘れていた。孝一は思いついたら即実行する男だった。

「はいはいはい！ あたし賛成！」

ウロが真っ先に賛成票を入れるのは自然の摂理だろう。愛沙も香雅里も特に断る理由がないので二つ返事でOK。紘也にしても楽しそうなので問題はない。

「……その、ウエルシュは」

真面目キャラを通したいのか、控え目に断ろうとするウエルシュ。だが、紘也は彼女が一度「モンバロ」と呟いたことを知っている。

「お前、あれやりたかつたんだろ？ ずっと思ってたんだけど、実は遠慮して自分を押し殺してるんじゃないのか？ だとしたらその必要はない。見てみる、あそこで颯爽と準備に取りかかっているウロボロスの辞書に『遠慮』なんて言葉は載っていない」

「紘也くん！ それはあたしがアホの子だって言いたいの！」

最速でゲーム機をスタンバったウロがぶんすかと抗議してきた。

自分にとって都合の悪い言葉を逃さないとは、なんとも素晴らしい地獄耳だ。

「……わかりました。ウエルシュもやります。やらせていただきます！」

ウエルシュの赤い瞳に炎が滾った。どうやら自分を解放したようだ。

「じゃあこうしよう。優勝者はなんでも願いを一つ叶えてもらえる。もちろん、可能な範囲でな」

という孝一の提案に、

「オウ！ だったらあたしが優勝した暁には 絃也くんと同衾します！」

「いや、それは無理な相談だ。二つの意味で」

「ではマスター、ウエルシュが優勝したらドーキンしてくれますか？」

「お前『同衾』って言葉知ってるか？」

ウエルシュは遠慮したままの方がよかったかもしれない、そう絃也は早速後悔するのだった。

「わたしはね、ヒロくんとコウくんのお弁当を作らせてもらいます。あ、今はウロちゃんもいるんだよね。むむむ、これは腕が鳴ってくるよう」

「くだらない提案ね。ま、私が優勝したらその時にでも考えるわ」

愛沙は絃也たちを手懐ける気だ。そして香雅里は言葉とは裏腹に物凄いやる気を見せていた。説明書とコントローラーを持って操作法の暗記を行っている。

「よし、そうと決まればちゃっちゃとカレーを片づけるぞ」

「……オー！」

全員が拳を天井に突き上げて鬨の声を放った。

「お前ら忘れてないか！？ 本来カレーの方がメインだからな！？」
絃也以外、だったけど……。

ちなみに優勝は孝一だった。発案者ということでは願いはなかったが、悔しげな表情をした者が四人ほどハンカチを噛んでいた。

そして、ウエルシュの實力はウロボロス並に酷かった。

Section - 37 エピローグ（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

天井裏のウロボロスVolume - 01はこれにて完結です。

Volume - 02以降を書くかどうかは、時間と読者様との相談になりますね。書きたいですけどw

しかし仕事やってる身で連載二本はけっこう辛そうです。

なので人気投票も兼ねたちょっとしたアンケートをしようかと思えます。続き希望者が多ければ粉骨砕身で臨もうかと（毎日更新は無理ですが^^;）

というわけで、下のリンクから飛べますのでよければよろしくお願いいたします（人気投票だけでも可ですし、匿名で答えられますのでお気軽にどうぞ）。

アンケートは締め切りました。

感想・評価お待ちしております！！

S e c t i o n 0 0 プローグ(前書き)

続きを書いてほしいという読者の声を多くいただいたので、忙しいながらも頑張ることにしました！

Section - 00 プロローグ

地面を打つ激しい雨音が真夜中の静寂を破っていた。

陰陽師の名家である百済家。その宗主　百済時政は、十畳半の和室の中央で正座していた。

齢七十二。両目を閉じ、不動の姿勢を崩さない彼の姿からは、積み重ねた年月に相応しい威厳が放たれていた。

「……来るか」

静かに瞼を開く時政。雨音に混じり、遠くから悲鳴のような叫びが幾重にも響いてくる。それは時政のいる部屋へと次第に近づいており、やがて、ピタリと止まった。

時政はギンとした眼光で目の前の襖を射る。
数秒の沈黙。

ザッ！ と襖に穴を穿って銀色のなにかが飛び込んできた。
刃物。それも櫛状の刀身をした奇妙な日本刀だった。

「ぬっ！」

時政が顔の前で印を結ぶ。すると奇妙な日本刀は見えない力場に阻まれ、時が止まったかのように空中で停止した。

瞬間。

ボワツ！ と日本刀から灼熱の業火が爆散した。瞬く間に部屋中が火の海と化し、炎は時政へと襲い来る。が

「温いわっ！」

叫ぶと同時に時政の周囲に無数の護符が展開される。次の瞬間、護符から発生した不可視の衝撃波が荒れ狂い、全ての炎を消し飛ばした。

間髪いれずに時政は印を結び、衝撃波を操って日本刀ごと襖を吹き飛ばす。下手をすれば屋敷が崩壊する威力に、襖の奥にいる襲撃者は五体満足でいられるはずがない。

そう、時政は確信していた。

襲撃者が無傷で部屋の中へと足を踏み入れてくるまでは……。

「今の攻撃を防ぎ切るとは、流石は百済家宗主と言ったところか」
襲撃者は真夏なのに黒いロングコートを纏い、顔の下半分をマフラーらしき長い布で隠していた。声から察するに若い男性のようだが、それ以上のことはわからない。

「何奴だ、貴様。この儂を殺しにでも来たのか？」

「抵抗するならばそれも有り得る。俺の狙いは最初から、貴様の後ろに大切そうに飾ってあるそいつだ」

襲撃者の男が指差すは、本床に飾ってある半分焼け焦げた風神の掛け軸。ではなく、その下に置かれてある漆塗りの鞘に収まった刀だった。その刀の周囲は、結界でも張られていたかのように不自然な焦げ跡が形成されている。

「……なるほど、我が百済家の家宝が目当てだったか。となると、貴様が最近噂になっておる宝剣強盗か？」

「答える義理はない」

時政の問いを、黒衣の襲撃者は一蹴する。

「おとなしくそいつを渡せ。貴様らが持っていてもどうせ使わないだろう？ 宝の持ち腐れになるより刀のためになると思うが？」

「ほざけ。貴様の方こそ、各地から盗んだ刀を返してもらおうか。今ならばまだ、痛い目を見るだけで済むぞ？」

フツ、と黒衣の男が失笑した。

「あくまで歯向かう、か」

男はコートから陰陽師の護符に似た紙を取り出し、空中に投げた。すると紙が弾け、ぐにやりと空間が歪み、そこから一振りの剣が出現する。剣尖が平坦な直刀。それが男の周囲で円運動を始める。さらに、どこかへ飛んでいったはずの櫛状の日本刀までもが、男の下へ戻り同じように円運動する。

「ならば、死ね」

二本の宝剣を従えた男がそう言った途端だった。天井が崩れ、足が三本ある漆黒の怪鳥が奇声を上げて飛び込んできた。

「なっ、妖魔だと!？」

頭上を見上げて驚愕する時政。

その隙が命取りとなった。

「ぐふっ!？」

ずぶり、とした感触。見ると、二本の宝剣が時政の胸部と腹部に突き刺さっていた。痛みも感じる暇もなく、時政は自分の血溜まりの中に沈んだ。

男は時政を跨ぎ越え、百濟家の家宝を手取る。

「これで三本揃った。残りは葛木家にある一本、か。流石に葛木へは単身で攻め込めないが……まあ、時期が来ればどうとでもなる」
それだけ呟くと、男は漆黒の怪鳥に跨り、何処へと飛び去った。

Section-00 プロローグ(後書き)

宝剣強盗は影魔導師ではありません。
シャッフル読者のみにわかるネタ。

ここ一週間で行っていたアンケートの人気投票の結果は活動報告にて発表しております

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/126722/blogkey/241639/>

S e c t i o n - 0 1 大魔術師の息子の日常(前書き)

第一章

Section - 01 大魔術師の息子の日常

七月七日 火曜日。

先日の大雨が嘘だったような快晴の下、秋幡紘也は一人路地を歩いてきた。時刻は放課後。学校の帰り道である。

「うん、今日はこれといったトラブルもなくてよかったよかった」
天を仰ぎ、紘也は坊さんのような平和主義的微笑みを浮かべてそう呟いた。

秋幡紘也は魔術師の息子である。

それも世界最大規模の魔術組織である、世界魔術師連盟が誇る大魔術師の息子だ。そのため紘也の魔力量はそこら辺の魔術師とは比べ物にならないほど多い。それは自他共に認める事実である。

しかし、紘也は魔術を使えない。才能がなかった、というわけではない。寧ろ天分の才を秘めていたのだが、ある魔術的事故で母親を傷つけてしまったから、紘也は自ら魔術を封印したのだった。

魔術を捨てたことで、紘也は普通の人々と同じ生活を手に入れた。友人たちと戯れ、学校で勉学に勤しむ。そんなどこにでもある高校生の日常を謳歌していた。

つい数日前までは。

「ちよっとちよっと紘也くん！ どうして置いてっちゃうんだよ！」
後方から猛烈な勢いで駆け寄ってきたのは、高校の制服を着たペールブロンドの少女だった。寶石のような青い瞳に、白い肌、黄金比的な肉体美を持つ彼女は、通りを歩けば誰もが注目する美少女である。

もちろん、こんな美少女が人間であるはずがない。

「よう、ウロ。こんなところで会うとは奇遇だな」

「奇遇だな、じゃないよ！ 紘也くん、職員室に用があるから待ってるって言ったよね！ だからあたし校門のところでずっと待ってたんだよ！ 一緒に下校する恋人を待つ気分をキャッキャウフフのド

キドツキンって感じに堪能してたんですよ！　なのに先に帰ってるとはどういう見ですかっ！　あたしは紘也くんの契約幻獣なんだよー！」

彼女の正体は無限の大蛇　幻獣ウロボロスである。

つい一週間ほど前のことだ。世界魔術師連盟の大魔術師である秋幡辰久　つまり紘也の父親が行っていた魔術実験が失敗し、世界中に野生の幻獣が召喚されてしまった。マナという地球には存在しない物質で構成された幻獣は、この世界に居続ける限りいずれマナの乖離を起こして消滅してしまう。それを防ぐための方法が、人間と契約を交わすか、人間を喰らい続けて魔力を補充するかである。そして、野良幻獣の大半は人間と共存など考えず後者を選択している。

そんな幻獣から紘也を守るために、父親がこのウロボロスを寄こしてきた。

と、紘也は最初勘違いをしていた。

本当は、彼女は父親の契約幻獣ではなかった。遥か昔から地球で暮らしていた野良の幻獣だった彼女は、連盟が始めた幻獣狩りを回避するために紘也と契約したのだ。自分の安全のために紘也を利用しようとした彼女に一度は怒りを覚えたが、動機はどうあれ彼女は紘也と紘也の友人たちを守ってくれた。そこに感謝の念はあれど、怒りはない。

今は『人化』により人の姿をしているが、実体はこの蒼谷市を押し潰してしまっただけの巨大らしい。紘也の目で確認したわけではないので本当かどうかは謎だけれど。

「まったく、紘也くんにはあたしの恋人だっていう自覚はないの！」

「お前こそ、その発言が妄言だということにさっさと気づけ」

「紘也くん紘也くん、あの時もあたしを拒絶しないって言ったよな？」

「それはそれ、これはこれって便利な言葉だと思わないか？」

「思わないよっ！？　単なる逃げ言葉だよっ！」

一昨日のとある騒動で紘也は契約幻獣として正式に彼女を受け入れた。そのことでこの蛇は調子に乗っているらしい。昨日はどういうわけかおとなしかったのだが、その分今日は爆発している。最終授業が終わった後も「一緒に帰りましょ」と周りに関係を見せつけるようにつきまといてきて非常にウザかった。

紘也は大きな溜息を一つ。

「お前がせめて愛沙くらいお淑やかだったらストレスは溜まらないんだろぅなあ」

「え？ なに言ってるの紘也くん？ このお淑やかなの権化たるウロボロスさんを捕まえて」

「そいつは人違い、もとい蛇違いだ」

「蛇って言うな！ ドラゴンだいつ！」

彼女は頑なに蛇と言われることを嫌っている。ウロボロスは種族的にドラゴン族に分類されるようだが、紘也にそれを認める気はさらさらなかった。

「ところで、紘也くん、職員室になんの用事があったの？」

「いや、あれはお前を巻くための嘘なんだが……まだ信じてたのか」

「なにうおッ！？ そ、そういうえば、紘也くん似の強い魔力が学校から遠ざかって行くなあって思ってたらまさか本人だったとは！？」「なぜ気づかない」

このウロボロス（通称ウロ）は時々、いやしょっちゅうアホになる。そこを弄くり回すことが、非日常な存在と暮らし始めた最近の紘也のストレス解消法だったりする。

「ううう、このS太くんめ！！」

なんか涙目で罵り始めたウロ。失敬な。善良な一般高校生たる紘也のどこがSなのかまったくもって理解に苦しむ。

「紘也くんは罰としてこれからあたしとデートです！ ここいらでガッチリとウロボロスルートフラグを固めておく必要があるからね！」

「あー、ちょっと待ったウロ。電話だ」

紘也は微振動する携帯を片手にウロを制した。画面には『孝一』という親友の名が表示されていた。

「どうした孝一？ え？ 今日？ まあ、いいけど」

「ちょ、紘也くん、あたしとのフラグを押し折るだけじゃ飽き足らずアブノーマルな方向に走る気ですかっ！？ いや待って……孝×紘……それはそれでありかもじゆるり」

携帯を仕舞い、紘也はなにやら涎を垂らして恍惚しているウロを真っ白い視線で睨む。

「アホ。そんなんじゃないよ。今日の夜、孝一と愛沙がうちに来て勉強会をするんだと」

「ほえ？ 勉強会？」

「明日から期末試験だろうが」

言っと、ウロは思い出すように顎を人差し指で持ち上げ、

「あー、あつたねそんな行事。まあ、この博識のウロボロスさんには関係ないことだけど」

「てなわけで今日は遊ぶ日じゃないんだよ。一夜漬けの日だ」

「紘也くん紘也くん、それは学生としてなんか間違ってる気がするよ」

余計なお世話だ。

「ハッ！ てことは今日の七タイイベントは？」

「そんなもんはない」

「なぜ！？ せっかくそれらしいイベントがあるんだからあたしとラブコメしようよう！」

「コメだけならやってやらんこともないな」

「うふう、紘也くんの愛が行方不明……」

そんな風に話していると、紘也の自宅が見えてきた。大魔術師として儲けている父親が建てたそれなりに立派な一軒家である。家族が海外にいるため紘也はそこで独り暮らしをしていたのだが、先週末からウロボロスが、今週からもう一人居候が増えたために随分と賑やかになっていた。

「ストップ、紘也くん」

家の敷地に足を踏み入れかけたところでウロに呼び止められた。

彼女はいつになく真剣な顔をし、紘也を押し退けて先に家の敷居を跨ぐ。

「ウロ？」

「紘也くんはそこで待ってて。いいつて言うまで絶対に入っちゃダメだよ」

ウロは一度振り返ってそう告げると、玄関を開けて一人家の中へと消えて行った。

居候のもう一人は野暮用で昨日から出かけている。つまり、今、家には誰もいないはずだ。それなのに、玄関の鍵が開いていた。鍵をかけて登校した記憶はしっかりある。

まさか、また野良幻獣が現れたのだろうか？

ウロの真剣な表情が脳裏に蘇ってくる。ヴァンパイアと戦った時すらあのような顔はしていなかった。ドラゴン級の大物が待ち構えているのではないかと心配になる紘也である。

だが、いくら待っても家からは争っているような気配を感じない。幻獣の個種結界が働いているからだと思っただが、その考えはすぐに捨てる。ここまで近くにいれば、魔術を使えなくとも紘也は結界を感知することができるからだ。今、結界は張られていない。

何分待っただろうか。やがて玄関の扉を隔てて「どーぞー」というウロの暢気な声が聞こえてくる。

何事もなさ過ぎて逆に怖い。紘也が恐る恐る玄関の扉をスライドさせると、そこにウロがかしこまった様子で正座していた。

なぜか裸にエプロン姿で。

「……」

「……」

「……」

「……うふ」

紘也は見なかったことにして扉を閉めた。上目遣いで「うふ」

なんて言った気持悪い生命体など存在しない。いなかった。そこにはなにもいなかった。

「絃也くん絃也くん、心の準備ができてないことはわかってるから早く入って来なよ」

中から催促の音がかる。強引にラブコメ展開に走る気だ。激しく入りたくないが、このままでは埒が明かない。

奴のやりたいことは手に取るようにわかる。恐らくは古典的な展開、『ごはんにする？ それともお風呂？ それとも』って流れだ。どの選択肢を選ぼうとも悲惨な目に会うことは請け合いだろう。

スルーするしかない。

自分の家に入るのに覚悟が必要とはどういうことだ、と思いながら、絃也は渋々と家の中へ入った。

「お帰りなさい、あなた」

当然のようにそこにいたエロティックなエプロン姿の金髪美少女がペコリと頭を下げ、

「今日はどうなされますか？ 世界の幻獣TCGですか？ それともモンバロですか？ それとも、でえと」

選択肢がおかしかった。

「じゃあモンバロ」

「やったあーい」

三十秒で瞬殺してやった。

「あぐ……あぐ……」

巷で人気の対戦格闘ゲーム『大乱戦・モンスターバトルロイヤル』の対戦結果画面を前にして涙海に沈むウロ。彼女は天性のゲーム音痴なのだ。下手に無視するよりこうした方が速いと考えたが、正解だった。

「じゃ、俺は着替えてくるから」

そう言って絃也は二階にある自室へ向かった。後ろから「鬼！

悪魔！ あんたは手加減って言葉を知らんのか！」という恨み声を

ぶつけられたが、そこはスルーする。

「ったく、あいつに付き合っているとホント疲れ なっ!？」

自室に入った紘也は、眼前に飛び込んできた光景に絶句した。

「嘘、だろ？」

紘也の部屋が、荒らされていた。

S e c t i o n - 0 1 大魔術師の息子の日常（後書き）

一話が非常に長くなったので分割することにしました。

連載を想定せずに書いたので、文章量の高低差が相変わらず安定しないのはすみません^^；

次回の更新日は8月21日（日）です。

紘也は荒らされた自室を見回した。

小物や本などが散らかっているだけではない。本棚が倒れ、ベッドが引つ繰り返り、カーテンが千切れ、不自然に歪んだ姿勢のタンスは引き出しが乱雑に開け放たれている。

空き巣かと思ったが、それにしても荒らし過ぎだ。

余程マヌケな空き巣でもここまで侵入した形跡を残すわけがない。そうなると考えられる可能性はもう一つ

幻獣か、魔術師の仕業だ。

紘也の考えでは後者だ。野良幻獣が目的とするとしても、それは紘也の魔力に限定される。ヴァンパイアみたいな例外も考えられないことはないが、部屋だけを荒らす理由はない。

どこかの魔術師が父親の物品でも漁りに来たのか、それともなにかの警告か。

どちらにしても、警察に通報するような普通の対処などできない。犯人が戻ってくるかもしれないし、ウロにも相談して警戒を強めなくては……。

ガッ。

逆転したベッドの方から、なにかがぶつかるような音を聞いた。

犯人！？

よく見るとベッドはなにかを下敷きしているらしく、斜めに傾げていた。人が一人隠れるスペースは充分にある。紘也は忍び足でベッドに近寄り、意を決して隙間を覗き込んだ。

すう すう すう。

少女が寝ていた。燃えるような真紅の髪を後ろで二又の尻尾みたく結び、さらにアホ毛を搭載した小柄な美少女だった。

「……………」
紘也は彼女のことを知っている。父親が紘也の護衛に派遣した『本当』の契約幻獣。秋幡家の居候の一人、幻獣ウエルシュ・ドラゴンの『人化』した姿である。

またの名を『ア・ドライグ・ゴツホ』と呼ばれるウエルズルの赤き竜は、ウロボロスとの一件以来、紘也と幻獣契約を交わしている。その件で元契約者の秋幡辰久から契約の証として預かっていた『大切な物』を返すために、律儀にも昨日ロンドンまで旅立ったはずだった。帰ってくるには早過ぎる。

考えても無駄だ。本人に訊くしかない。

「おい起きろ、ウエルシュ　って、はい!？」

腕の筋力をフル稼働させてベッドをずらした紘也は、改めて見えた彼女の姿に言葉を失った。彼女は、濃紺のワンピースにフリルたっぷり白いエプロンを組み合わせさせた衣服を纏い、頭には同じく白いフリルのカチューシャを装着していたのだ。
すなわち、メイド服。

「……………」
「あ、マスター、おはようございます」

眠そうに目を擦りながらウエルシュが起き上がる。『荒らされた部屋』『ベッドの下敷きになって眠っていた少女』『メイド服』。それらのキーワードから導き出せる答えを、紘也はシヨート寸前まで頭を回転させて考えた。

「……………」
考えた。

考えた。

「わかるかぁッ!？」

という答えに辿りついた。この謎はきつと彼の有名な数学者ピエール・ド・フェルマーでも解けないだろう。

「どうしていきなり大声を出したのですか、マスター？」

ウエルシュが不思議そうに首を傾けてくる。どうやってるのかア

ホ毛がクエスチョンマークみたいになっていた。

「どうしてはこっちの台詞だ！ ウェルシュ、この部屋で一体なにがあったんだ？ なんてベッドの下敷きになって寝てたんだ？ なんてメイド服なんだ？ ていうかそもそもお前は今ロンドンじゃないのか？」

「うう、困りました。マスターの質問が多過ぎて覚えられません。ウェルシュは聖徳太子の記憶力が欲しいです」

「……悪い。少し落ち着くよ」

真剣に自分を責め始めるウェルシュを見て、紘也の血圧は緩やかに低下していった。

「とりあえず、この状況を説明してくれ」

周りの惨状を示しながら言うと、ウェルシュは右を見て、次に左を見て

ポン、と思い出したように手を叩いた。

「そうでした。ウェルシュはお掃除の途中でした」

「は？ 掃除？」

抑揚の少ない声でウェルシュから拍子抜けな言葉が返ってきた。

当然、紘也は困惑を隠せない。

「はい。ウェルシュはマスターのお部屋をお掃除していたのです」

「そうなった経緯を箇条書きで語尾に『それは矛盾しています』とつけて説明してくれ」

- ・ ロンドンでの用事が早く終わりましたそれは矛盾しています
- ・ ウェルシュは先程帰ってきましたそれは矛盾しています
- ・ マスターのためにお掃除をしようと考えましたそれは矛盾しています

・ そうだメイド服を着ようそれは矛盾しています」

「よし、その矛盾を一つずつ解決していくぞ！」

最後のメイド服はなにを言われようと理解できない自信があるので、実質詰問すべき箇所は三つ、いや二つだ。

「まず、お前帰ってくるの早過ぎやしないか？ 三日はかかるんじ

「やなかったのか？」

彼女は旅立つ前に自分でそう言っていた。日本からだと言った。日本からだとロンドンまで十時間以上は普通にかかる。いくら向こうでの用事がすぐに済んだとしても、今この時に日本で余裕を持って昼寝ができるとは思えない。

「ウエルシュもその予定でしたが、飛行機に乗るよりも、『人化』を解いて自分の翼で飛んだ方が速いことに気づきました。新発見です。マスターと契約してからなぜか魔力の調子がよくなったので、今のウエルシュならマスターを乗せても片道に一時間とかがりません」

最後の方の言葉には自信が満ち満ちていた。確かに日本からロンドンまで一時間とか信じられない速度だ。幻獣の、特にドラゴン族のチート性は計り知れない、と紘也は改めて感じた。

「行きますか、ロンドン？」
「行かねえよ！ そんなスピードを人間が耐えられるか燃え尽きるだろ！」

きつぱり断ると、ウエルシュはしゅんと項垂れた。そんなに紘也を乗せて飛びたかったのだろうか。まだ出会ったばかりだが、ウエルシュの思考パターンが全く読めない。

「まあいい、次。ウエルシュは掃除をしてたんだよな。だつたらどうしてこんなに部屋が荒れてるんだ？ 敵でも現れたのか？」
「どう考えても掃除の途中、という状態ではない。」

「敵……ですか。はい、現れました」
「マジか」
「はい、カサカサとすばしっこく這い回る黒光りした昆虫が三匹。全て抹消しました」

「……もう一度訊く。なんで部屋がこんなに荒れているんだ？」
グツ、と無表情でサムズアップしてくるウエルシュに、紘也は額を手で押さえながら今一度問うた。それにしてもこの部屋だけでゴキ……コックローチが三匹もいたとは、今度バルサンでもした方が

いいかもしれない。

しばらく黙り込んだウエルシュは、紘也から視線を明後日の方向に向けて口を開いた。

「……これがウエルシュのクリーニングスタイル、です」

「本当は？」

「ウエルシュはお掃除が下手糞でした」

ウエルシュは素直に頭を下げた。彼女の嘘の下手さはウロボロスよりも酷いように思える。基本、嘘がつけない子なのだろう。

「それで部屋をめっちゃめっちゃにした挙句、器用にもベッドの下敷きになって寝てしまったと？」

コクリ、とウエルシュは頷いた。紘也は溜息を一つ。

「ここは俺が片づけるよ。あ、手伝うとか言うなよ。もっと酷くなる」

釘を刺され、ウエルシュはまたもしょんぼりとした。役立たずと思われた、と思っているのだろうか。彼女の全身から寂しいオーラが滲み出ている。

「後で買い物を頼むから、下で待ってる」

「……了解です、マスター」

こつやつて使命を与えると、彼女は一気に笑顔……にはならずとも、覇気を取り戻すのだった。

心なしか意気揚々と部屋を出ようとしたウエルシュだったが、ふとなにかを思い出したように戻ってくる。

「……マスター、一つ言っておかなければならないことがあります
た」

「なんだ？」

と促すと、彼女は顔の横で人差し指を立て、少し前屈みになり、無理に眉根を吊り上げて上目遣いで

「えっちなのはいけないと思います」

紘也は五秒ほど固まっていた。

「は？」

ようやく絞り出せた声が素っ頓狂だったことは仕方のないことだろう。裁判になっても無罪放免。

「悪い、意味がさっぱりわからない」

「いえ、元マスターがマスターの部屋でいかがわしい本を見つけたらこうしろと仰ったので、実行してみました」

「あの変態はもう燃やしてもいいからな！ ていうか、俺はそんな本なんて一冊も持ってないぞ」

「これです」

ウエルシュはどこからか一冊の薄いA4サイズの本を取り出し、紘也に手渡した。表紙には常夏のビーチを背景に、どこかで見た白みがかった金髪の美少女が際どい水着でやたら胸を強調するポーズを取っている。

ピンク色の柔らかそうな文字で書かれたタイトルは

『紘也くんに捧げる？ウロボロスのセクシー写真集』

中身を見るまでもなく破り捨てた。

「ウエルシュ、焼却」

「了解です」

紙吹雪と化した本は、ウエルシュの掌から生まれた真紅の炎を浴びて塵芥一つ残らず焼失した。

ウエルシュ・ドラゴンには？拒絶？の特性がある。その特性が付加した 拒絶の炎 は、ウエルシュが拒むもののみを有無を言わず完全に燃やし尽くすことができる。一言で言えば、チートだ。

「あのアホ蛇、昨日は随分おとなしいと思ってたら、こんな物を作ってたのか」

自分の写真集をこっそり紘也の部屋に隠すとか、なんとあざとい。急激に暴力的衝動が沸き起こってきた紘也である。

「はっ！ 待てよ、あんなのがここにあってたつてことは……」

紘也の嫌な予感センサーが物凄い勢いで反応した。

すぐさま部屋を出て、二階の廊下の角に下りている梯子に手をかける。この上の天井裏がウロボロスの部屋なのだ。ちなみにウエルシユは妹の部屋を使っている（まじめにも本人の許可を取っただけ）。

梯子を登る。

「きゃあッ！？ 紘也くんのエッチ！？」

ウロが着替えていた。それにしても悲鳴がわざとらしい。

「もう、入る時はノックしてっついても言ってるよね」

「言っつてないし、別にお前の裸体などに興味はない」

「さりげなく酷い！？」

そんなウロなどアウト・オブ・ガンチュー！。紘也はざっと周囲を見回した。

数日前まで布団しかなかった天井裏には、漫画や小説しか仕舞われていない勉強机が大幅に面積を陣取っており、その横に最新のデスクトップパソコンとプリンタが設置されていた。一体いつどこから持って来たのか疑問に思うが、それを問い詰める気はない。疲れそうだから。

「そこかっ！」

紘也は勉強机の鍵つき引き出しに目をつけた。鍵は突き刺さったままで、とても怪しい空気が嫌な予感センサーをピンピン刺激してくる。

「ひ、紘也くん、人のプライベートを勝手に覗かないで！」

机に近づこうとした紘也の前にシュバツとウロが回り込んできた。ますます怪しい。

「蛇のプライベートだから問題ない」

「あります！ あたしドラゴン！ そこ大問題！」

「ウロ、その中にはなにが入っている？」

「べ、べべべ別になななにも入ってませんですヨヨヨ」

絵に描いたような動揺を見せるウロ。ぎしりと床を軋ませ、紘也は一步踏み出した。

「なっ、ダメですよあかんですよ絶対に通しませんよ！ どうしても通りたかったら、このあたしを倒してからに」

グサツ！

「容赦なくきたあああああああああああああああああああああああああああああああッ！？」

ウロは悲鳴を上げながら両目を抑えて転がり回った。襲い来る敵を圧倒的なまでの力で捻じ伏せる彼女だが、紘也の目潰しにはダメージを受ける。それには理由がある。紘也は魔術を使えない代わりに、卓越した魔力制御を有している。それも他人の魔力に干渉できるほどだ。自分の魔力を撃ち込んで相手の魔力を掻き乱すことで、強力な幻獣であるウロボロスにもダメージを与えられる、という理屈だ。

紘也は今の内に引き出しを開き、一番上に積まれていた薄い本を手取る。

『ウロボロスに捧げる？秋幡紘也のセクシー写真集』

どう見ても合成したと思われる、とても口で説明したくない紘也のアレな隠し撮り写真がぎっしり詰まっていた。なんとなく対になるものがあるんじゃないかと思っただが、ビンゴだった。

「ああっ！ 紘也くん、それは、それはなんでもないんです！ だから返して！」

ウロボロスが鬱陶しく縋りついてくる。当然、こんなものを返すわけにはいかない。

「ウエルシュ、燃やせ」

「了解です」

いつの間にか天井裏へ登っていたウエルシュに写真集を投げ渡す。
が

「……………」
写真集を受け取ったウエルシュは、すぐには燃やさずペラペラとページを捲り始めた。そして妙に頬を上気させ、時折ゴクリと喉を鳴らしている。

しばらくして、彼女は本を閉じた。

「……………これは、後でウエルシュが責任を持って処分しておきます」

「俺の目を見て話せ、ウエルシュ」

ここで見逃すとまず処分されない。紘也はウエルシュが大事そうに抱えている本を指差し、

「命令だ。今すぐそれを焼き尽くせ」

「いくらマスターの命令でも、ウエルシュにはできることとできないことがあります」

「明らかにできることだよな！　ってなにメイド服の中に隠そうとしてんだよそれを俺に渡せ！」

手を突き出すと、ウエルシュはいやいやをするように首を左右に振った。

「ちょっとコラ腐れ火竜！　それはあたしなのだから返しなさい！

あんたにあげる紘也くんの写真集はないんだよ！」

「これはウエルシュが没収します。ウエルシュの一番の宝物になりそうです。ウロボロスには勿体ない代物です。あとウエルシュは腐ってます」

「だいたいなーんであなたは紘也くんに惚れてんのさ！」

「ウエルシュの炎に飛び込んだマスターの勇敢さに心打たれました」

「むむむ、やっぱりあんたとは一度決着をつける必要があるみたいだね」

「望むところです。今のウエルシュはもう二度とあの時のような不覚は取りません」

ウエルシュが火炎を、ウロが魔力の光を掌の上に出現させて睨み合う。

ブチリ、と紘也の額辺りから変な音が聞こえた。

「お前らそこに直れええッ!」

S e c t i o n - 0 2 帰国幻獣（後書き）

次回の更新は8月25日（木）です。

Section - 03 集中できない勉強会

三時間後。

「……だいたいの事情は理解したが」

リビングのソファに腰を下ろした紘也の親友 諫早孝一は、

眉間を指で揉みながら眼前に座る紘也に言った。

「そろそろ許してやったらどうだ？」

孝一は視線を紘也から逸らす。その先に、二人の少女が仲良く並んで座っていた。

ただし、二人とも正座で、首から『反省』と書かれたプラカードを掲げ、さらに太股の上に一杯まで水を張ったバケツを乗せた状態であるが。

「いや、あいつらならあと七日間くらいは楽勝だと思っぞ」

紘也是無慈悲に答え、手元にある数学の問題集にペンを走らせる。と、正座組の片割れであるパールブロンドの少女が喚き声を発した。「ちょ、楽勝じゃないよ！ いかにか柔軟な体質のウロボロスさんでも足ガツタガタのアビュポーンって痺れちゃってますよう！」

「……足、痛いです、マスター」

かれこれ正座をさせて三時間。流石の彼女たちもそろそろ地獄が見えてきたようである。紘也は問題集を解く手を止め

「ああ、そのバケツの水、一滴零すごとに一時間追加だからな」

「おおおおお鬼！ 悪魔！ あんたは紘也くんの皮を被ったアスモデウスかつ！」

「……痛いです」

二人とも目から塩水が滝のように流れていた。ちなみに件の写真集は庭の片隅で灰になっている。無論、パソコンの中にあつたデータも削除済み。隠し撮りした小型カメラも踏み潰した。抜かりはない。

「ヒロくん、もうウロちゃんたちもすっかり反省してるよう。こ

れ以上続けさせちゃうと、ヒロくんが本当に鬼さんになっちゃうよ？」

のんびりした口調でそうやってきたのは、紘也の左隣に座っている鷺嶋愛沙だった。腰まで届く艶やかな黒髪と赤いリボンが特徴の、やや幼い相貌をした少女である。

昔からの親友である孝一と愛沙は、紘也が魔術師の息子だということはもちろん、ウロやウエルシュの正体も知っている。知っていて普通に接してくれているのだ。これほどありがたい存在はいないと紘也は思っている。

「ウロちゃんもウエルシュちゃんも足が痺れちゃったら可哀相だよ」

「オウ！ 愛沙ちゃんマジ天使！」

「紘也、今オレたちは『遊びたくて堪らないゲージ』がカンストしても我慢してテスト勉強しているんだぞ。そこにあんな呻き声を聞かされたら落ち着けないだろう」

諭すように、孝一。実は紘也にもさつきから「あ、足……」「痛い……ん……」「ひゃう！ ああん！」「ま、マス……ター……」なんて声が耳に刺さるのだが、聞こえないフリをしていた。目を離すとサボると思っただけ監視できる場所を選んだことが間違いだったよ。うだ。

「わかったよ。二人がそう言うなら仕方ない。お前ら、反省したのならもういいぞ」

溜息をついて言うと　ウロが飛び跳ねるように立ち上がった。

「いよつしゃあッ！ やつとこさ解放されたよ。フッフ、実はまったく痺れてなどいないウロボロスさんでした！」

「……ウロボロス、ずるいです」

万歳三唱するウロの横で、足を崩したウエルシュが涙目で抗議する。

「ハッ、腐れ火竜とは生物としての格が違うんだよ。蛇の柔軟さを舐めちゃあいけませんね。たかが一、三時間の正座で根を上げるわ

けがな　　って誰が蛇じゃいつ!」

ウエルシュの足を軽く小突くウロ。「ひゃあうっ!?!」と可愛い悲鳴を上げてウエルシュの全身が跳ねた。

「おやおや、どうやら今あんたは動けないようだね。ムッフ、今なら殺れる。ゲチヨチヨバビーンって感じに殺れますとも」

ガシツ。

「なあ、ウロ。俺、言ったよな?　反省したのならやめていいと」
背後から紘也に肩を掴まれたウロは、一気に顔を青くしてガタガタと震え始めた。ギギギギ、と壊れたカラクリ人形のように彼女は振り向く。

「あ、あの、紘也くん?　あたし、ちゃんと反省　　」

「全然してないみたいだな。?　眼球をスプーンでぐりぐりする刑?　ってどうだろうか?　楽しそうだろ。ところで幻獣って可燃ゴミの日に出せたっけ?」

「　　ッ!?!」

声にならない悲鳴。

とりあえず、頭が床に減り込むほど土下座してきたので許してやった。

数学のテスト勉強に戻る。紘也たちの通う私立蒼洋高校の期末試験は三教科ずつ三日間で行われる。つまり、明日のテストは数学以外にも二つあるのだ。これ以上ウロのアホにかまっている暇はない。「ウロちゃん。ウロちゃんは勉強しなくていいの?」

邪魔にならない場所に避難して大人しく漫画本を読んでいるウロを心配したのだろう、愛沙が優しく声をかけた。

「大丈夫も大丈夫。あたしはIQポポーン!!!　の天才美少女なのですよ。今さら人間の学問なんて勉強する必要ないね。ちなみに得意教科は保健体育とか保健体育とか、あと保健体育です。紘也くん紘也くん、今からさくつと実習してみない?」

「孝一、その参考書取ってくれないか?」

「オウ!?!　ここぞとばかりの華麗なるスルー。　　ぐすん、もう

いいよ。あたしは漫画の世界にダイブするから」

相変わらずのオーバリアクションで涙するウロ。と、紘也の裾が控え目に引かれた。見れば、そこには若干寂しげな色を瞳に宿したウエルシュがいた。

「マスター、ウエルシュも学校に行きたいです。ウロボロスだけずるいです」

おねだりするように、というか完全におねだりだった。

「いや、これ以上学校で面倒事を増やしたくないんだけど。ウエルシュは家の方を守ってくれれば」

言いかけて、紘也は夕方のことを思い出した。ウエルシュ一人を放っておいたら家がどうなるかわかったものじゃない。今は着替えているが、あのメイド服姿で近所を出歩かれるのも非常に困る。

「わたしは大歓迎だよ。ウエルシュちゃんも学校に来たらきっと楽しいよ」

愛沙は言うまでもなく賛成。

と、孝一がなにか思いついたような笑みを顔に貼りつけた。

「そういうことなら、簡単にテストをしてみようぜ」

「テスト、ですか？」

「ああ。うちの学校は転入生にも容赦ないからな。たとえこの時期に転入できたとしても、期末試験免除になんてならない。夏休み補習三昧になりたくなければ、当人の学力を見てから転入時期を決めるべきだ。まあ、大丈夫とは思っけどな」

ウエルシュは少し考え、

「……わかりました。ウエルシュ、テスト受けます」

と真剣な眼差しで答えた。

「丁度いい。ウロ、お前も受けてみる」

紘也はついでとばかりに自称天才美少女　ウロへと投げかけた。

彼女は漫画本から視線をこちらに向けて億劫そうに口を開く。

「えー。なんであたしまで」

あからさまに嫌な顔をされた。

「勝った方が明日の晩飯のメニューを決めるってのはどうだ？」

「やります！ あたしはコカトリスのペキンダック風姿焼きを希望！」

「ウエルシュはオーク肉のハンバーグがいいです」

「どちらも負けてくれ、と紘也は引き分けることを切に願った。

とりあえず明日の三教科である数学・世界史・現国の答案を孝一が作り、それぞれ三十分の制限時間を設けてテストを行った。

その結果は

「ほう。流石は天才美少女。全問正解だ」

感心する孝一に、どんなもんだい、と中型の胸を張るウロボロス。「ウエルシュちゃんは、えっと……もうちょっと頑張ろうねえ」

困り顔の愛沙が持つウエルシュの答案は 全て赤点だった。最も点の高かった世界史でさえ二十五点とは酷過ぎる。

その結果を見て、当の本人はわなわなと全身を震わせていた。

「ウエルシュは……ウエルシュは一体どうすれば……」

「にはははははっ！ 腐れ火竜は脳味噌まで腐って燃えて溶けてんじゃあないの？」

「う、うるさいです、ウロボロス。あとウエルシュは腐ってません。そのまま子供レベルの口喧嘩に発展する紘也の契約幻獣たち。紘

也はあのウロがこれほど勉強できたとは今も信じられないでいるが、ウエルシュの想像以上のポンコツさにも驚いていた。仮にも大魔術師・秋幡辰久の元契約幻獣だろう、と心の内で突っ込んだ。

「こりゃ、転入の話は二期期まで繰り越したな」

紘也が言うと、ウエルシュは心底残念そうに頂垂れた。が、そこは素直で物わかりのいい彼女である。すぐに自分の現実を受け入れて納得してくれたようだ。

「というわけで紘也くん。この天才ウロボロスがマンツーマンでしつとりムフフと家庭教師をしてあげますよ。そんでもって紘也くんの残念な成績も一気にトップクラ」

グサッ！

「捻じ込むようにキタア

ッ!？」

目を突かれて悶えるウ口に、紘也は一枚のプリントを差し出す。

「誰の成績が残念だ! 見ろ、これが俺の中間テストの成績表だ」

「見ろって言うくらいなら目を突かないでよっ!！」

待つこと数秒。視力を取り戻したウ口は紘也の成績表を見て唸った。

「むう、平均九十一点とな。一夜漬け人間とは思えない意外さだよ、紘也くん」

「流石はウエルシユのマスターです」

成績表を横から覗き込んでいたウエルシユがなぜ誇らしげなのかは置いて、紘也は当たり前のことを話すように言う。

「授業聞いてればだいたい理解できるんだよ」

もつとも、それができない人間が大勢いることくらい紘也だってわかってる。自分の記憶力や理解力が魔術師の血によるものだと考えたこともあった。

孝一が笑う。

「うちの高校は頭いい奴多いからな、紘也の成績でも順位は十番台だったりするんだぜ。予習復習とかしっかりやってりゃ、もつと伸びるんだろっけどな」

毎度毎度ベスト3に入る親友はそう語る。お前だつてやってないだろ、と紘也は言い返してやった。

「ふむふむ、孝一くんは文字通りトップクラス。紘也くんも最上位レベル。じゃあ、愛沙ちゃんは？」

「愛沙もけっこう上だよな」

紘也が振ると、愛沙は慌てたように顔の前で手を振る。

「そ、そんなことないよう。わたしなんてよく解答欄間違えちゃうんだよ」

それでもきちんと点を取っているのは、果たして愛沙がすごいのか、採点が甘いのか。

「むむむう、誰もあたしの力を必要としないとは、まったくもって

面白くないですね」

不満そうに唇と尖らせるウロボロス。

「ウエルシュに教えればいいじゃないか」

「ばっ、なにを言うか絃也くん！ そんなことするくらいなら腹切りますよ！」

「そうです、マスター。ウエルシュもウロボロスに教わるくらいなら……ウロボロスを消し去ります」

「ちょっと待てい！ あたしは自害を選んだのに、なんであなたはあたしを消そうとするんだよ！ 舌でも噛みなさい！」

「ウエルシュもウロボロスのように超速再生があればそうし……いえ、やはりウロボロスを消し去ります」

「ウガアーツ！」

「お前ら静かにしろっ！」

ゴン！ グサツ！ と怒りのゲンコツと目潰しが炸裂した。どんどん器用になっていくことを自覚する絃也だった。

S e c t i o n - 0 3 集中できない勉強会（後書き）

次回の更新日は8月28日（日）です。

Section - 04 葛木家の対策

蒼谷市西区 葛木家邸内。

葛木宗家の長女である葛木香雅里は、現宗主の部屋に呼ばれていた。

「それで、私になんの御用ですか、お爺様」

葛木家は蒼谷市の有力者にして陰陽師の名家である。世界魔術師連盟にも加入しており、その影響力は魔術世界においても低くない。そんな葛木家の現宗主 葛木玄永かつらぎげんえいが今、香雅里の目の前で胡坐を掻いていた。

六十代後半の豊饒かくしゃくたる老人である。白髪に白髭、やや痩せこけた感が否めないが、そこにただ在るだけで圧倒的な威圧感に押し潰されてしまいそうだ。

口を開かなければ。

「おお……誰じゃったかの？ このべっぴんさんは」

「その痴呆ネタはもう飽きました」

香雅里の口調と表情は厳しかった。この老人はかまってほしいのか、時折こうしてボケたフリをするから面倒である。

「そうじゃ。そのよい具合に発育した胸を揉ませてくれたら思い出すかもぎゅん!？」

「いい加減にしないと殴りますよ？」

「……殴つてから言うでない」

涙目で頭を押さえる葛木家宗主・葛木玄永。このエロじじいは一度三途の川を渡り切れればいいのに、と心中で呟く香雅里だった。

「要件はなんですか？ 私は明日のテスト勉強で忙しいので手短にお願いしますよ」

「うむ。もう少し孫とじゃれ合いたかったのじゃが、仕方ないの」
玄永は不満げに姿勢を直した。そして一呼吸すると、彼の瞳に威厳の煌めきが宿る。

「宝剣強盗の話は知っておるか？」

「はい」

数ヶ月前から、日本各地の宝剣を所有する陰陽師が襲撃されていることは香雅里も聞いていた。死傷者は何人も出ているが、驚くべきことに、犯人はたったの一人だという。妖魔を従えていたという情報もあるが、単独で襲撃を成し遂げられる術者はそうはいない。

さらに不思議なことに、必ず宝剣が盗まれるというわけではないらしい。数十件の被害のうち、盗まれたのはたったの三件だけなのである。

「昨日、百済家が襲撃されたのじゃが」

「聞いています」

百済家は隣県にある陰陽師の一族だ。葛木家ほどではないにしろ、かなりの名家であることには変わりない。やはりそこもただ一人の男に襲われ、宗主が重傷を負い、宝剣まで盗まれている。

「盗まれた宝剣は 都牟刈つむがりのたち大刀 だそうじゃ。これの意味がわかるか、香雅里？」

「……まさか」

あることに気づいた香雅里に、葛木家宗主は静かに頷いた。

「次に宝剣が盗まれるのは、葛木かもしれん」

低く唸る祖父に、香雅里は自分がここへ呼ばれた意味を考える。

次期宗主候補である彼女にその裁量を試しているのではないかと、思ったが、違ちがう。

「今週末に日下部家ひかへと合同で行う例の『儀式』があるのは覚えておるな。葛木の宝剣をその『儀式』に使うことも」

「はい」

端然と答えると、玄永は少しばかり言い難そうに次の言葉を続ける。

「つらいと思うが、やはり『儀式』に参加するのは香雅里、お前ではなくてはならん」

「その話ともういいです、お爺様。覚悟はできていますから」

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおお！」「」

クラス中から鬩の聲が上がる。先週に行われた肝試しには見向きもしなかった彼らであるが、どうもテストが終わったという解放感からテンションがおかしくなっているようだ。

「こいつら元氣過ぎだろ」

半ば呆れ返っている紘也に、夏用セーラー服姿のウロと愛沙が声をかけてくる。

「紘也くんはやらないの？」

「みんなで遊ぶと楽しいよう？」

「いや、やるよ。嫌いじゃないしな、こういうことも」

高二になっても子供心を忘れない孝一の遊び企画は、ハズレも多いがアタリも多い。そして、こうして皆が乗り気な時は大概アタリなのだ。

「ただ、最近平和だなあって思ってたんだよ。立て続けに幻獣に襲われていた一週間前が嘘のようだ」

ウエルシュとの騒動以来、野良幻獣と遭遇していない。それは日常を愛する紘也にとって喜ばしいことだった。

「まあ、そのことなら理由はあるよ」

とウロ。理由？ と紘也は顔をウロに向けた。

「まず、食物連鎖で言えば最下層にあたる超ザコ幻獣なんかは、無契約召喚された時点で消滅するのです。それで、超がつかないまでも力の弱い幻獣もこちらでは長生きできない。さらに世界魔術師連盟が幻獣狩りをやっちゃったりなんかしちゃってるから、もう相当な数が減ってると思うんだよね」

「つまり、もう滅多に野良幻獣が襲ってくることはない？」

「そゆことそゆこと。力の強い幻獣は無闇やたらと行動は起こさないしね」

「裏を返せば、今後襲ってくる幻獣は強力な奴らばかりだということ、か」

今の状態が束の間の日常にならないことを祈る。

「大丈夫。ヒロくんにはウロちゃんもウエルシュちゃんもいるんだ
よう」

「オウ！ 愛沙ちゃんわかってるじゃあないですか（腐れ火竜は余計
計だけど）」

「えへへ」

照れ笑いする愛沙。するとウロが思い出したように付け加えてくる。

「あ、あと昔の紘也くんは魔力垂れ流しで遠くからでも感知できた
んだけど、最近は自分の魔力をかなり抑えてるよね？ それも効い
てるんじゃないですか？」

確かに紘也は最近、眠っている時以外は魔力制御能力をフル稼働
させている。そうすることで魔力の気配を抑えていたのだが、どう
やら効果はあるようで安心した。

自分の魔力の気配を軽減することはそう難しいことではない。た
だ、普通の魔術師なら術式でどうにかするところを、紘也は魔力制
御だけで行っている。それは紘也だからできたことだ。始めた頃は
かなり疲労していたけれど、慣れてくれば呼吸と似たような感覚で
やれることを知った。そのうち眠りながらもできそうだった。

紘也は孝一の方に目をやる。校内隠れ鬼企画はだいぶ纏まってき
たようだ。

「よし手始めに一組と三組を侵略、もとい、勧誘するぞ。一人も
逃がすな。部活？ そんなものは知らん！」

孝一の命令で実行委員たちが散開しようとしたその時、ガラツ！
と勢いよく教室の戸がスライドした。

クラス中の視線が集中する。そこには、一人の女子生徒が腰に手
をあてて仁王立ちしていた。肩ほどに伸ばした髪に白と黒の勾玉型
ヘアピン。顔立ちは端正で、猫のように吊り上った大きな目をして
いる少女。

「ご、五組の葛木だ……」「なんで風紀委員長が？」「きつと騒が

しかつたからよ」「まさか諫早の企みを嗅ぎつけたとか?」「そんな馬鹿な」「いくらなんでも早過ぎる」「このままにもなかつたことにしましょう」

そんなクラスメイトたちのヒソヒソ話は、女子生徒 葛木香雅里が一睨みするだけで沈黙させられた。今年度の頭ごろから『悪魔の風紀委員長』と噂されている彼女は、多くの生徒から畏怖の対象として見られている。彼女が具体的になにをやっているのか紘也は知らない。なぜなら、彼女の折檻を受けた生徒は、折檻内容を口外できないほど恐怖するらしいからだ。

静まり返った教室内を、香雅里はギンとした眼光で端から端まで睨め回し 紘也にその照準を固定した。

「秋幡紘也、ちよつと来なさい」
「俺!？」

紘也は思わず自分を自分で指差した。周囲から『秋幡、お前なにやっただんだよ』的な視線が突き刺さる。

「それと」

香雅里は実に嫌そうにしながら、もう一人を指名した。

「その留学生。あなたも一緒に来なさい」
指名されたのは金髪美少女の留学生 という設定になっているウロボロスである。クラスメイトからは『フローラ』と呼ばれている彼女は、フレンドリーな調子で笑った。

「やほやほ、かがりん。あたしたちになんの用ですかい?」

「か、かがりんって呼ばないで。いいから、二人ともついてきて」
紘也とウロは顔を見合し、踵を返した香雅里の後に続く。周囲が『校内で淫らなことでもしたんじゃねえの』的な会話を始めるが、スルーしておく。

すると、思い出したように香雅里が教室内を振り返った。

「そうそう。あなたたち、テストが終わったからって馬鹿騒ぎでも始めたりしたら わかっているわね?」

悪魔の微笑みで忠告され、教室内は再び凍りついた。

S e c t i o n - 0 4 葛木家の対策（後書き）

次回の更新は9月1日（木）です。

「おい、葛木。一体どこに行くんだよ」

正門を出たところで、紘也はついにその疑問を口にした。

「私のうちよ。お爺様に会ってほしいの」

香雅里は素っ気なく返した。風紀委員室という名の拷問部屋に放り込まれるのではないかと内心ビクビクしていた紘也だったが、まだそちらの方がマシだったかもしれない。

知る人ぞ知る陰陽師の名門、葛木家。そんな平凡な日常からかけ離れた場所に踏み込んで、ただのお茶会だけで済むはずがない。なにかしら面倒事に巻き込まれそうな予感がありありとしてくる。

紘也の父親と葛木家宗主は旧知の仲らしいが、できるだけ穏便な内容であってくれ、と日常をこよなく愛する紘也は心から願った。

「お爺さんに会う……お爺さんに会う……はっ、まさかっ!？」

先程から思案顔でぶつぶつと呟いていたウロが、どんな考えに至ったのか血相を変えて香雅里に飛びかかった。

「かがりん! あんた、あたしの紘也くんをご家族に紹介する気だね! 紘也くんに『娘さんを僕にください(キリッ)』って言わせる気だね! さ、さささせませんよそんな前段階のフラグすら立たせてないのにそんなことさせませんよ例え神様が許してもこのウロボロスさんが神様を呑み込んだ上で否定します!」

「ひゃあっ、ちよ、変なとこ触らないでよ!？」

「触るなど言われたら触りたくなるじゃあないですか。ここか？」

「ここがええんか？」

「うう、あ、や、脇はやめっ」

「うひよひよー、ウロボロスさんに絡まれたことが運の尽きだと思つて観念しいや」

「エロオヤジかお前はっ!」

紘也はウロの後頭部をカバンの角で強打した。ゴチン! と鈍い

音がしてウ口は道端に突つ伏す。角の堅いカバンなだけに一般人なら気絶は免れないだろうけれど、そもそも『人』ですらない彼女ならすぐに復活するだろう。

放置して歩を進める。

「で、あんたの爺さんに会って俺にどうしろって言うんだ？」

「それはお爺様に直接訊きなさい。私だって、お爺様がどういうつもりなのか計り兼ねているのだから」

「ちよつとコラちよつとコラその二人コラ！ 置いてかないでよこの人でなし！」

「人でない奴にだけは言われたくない言葉だな」

うるさいのが復帰してきたので、紘也はこれ以上香雅里に質問することを放棄した。

そんなこんなで、なにかと話題に事欠かない身食らう蛇のおかげもあってか、葛木邸に到着する間の数十分間はあつという間だった。

葛木家の屋敷は西区高級住宅地からやや離れた山の麓にある。陰陽師のイメージにピッタリな和風で趣のある屋敷は、流石は市の有力者だけあつて城のように広い。聞いた話、裏に連なる山々も全て葛木の私有地だとか。

紘也たちはその入口に聳える大門を見上げていた。

「オウ！ でかつ！ かがりん家ってこんなに広かつたんだね。いやあ、あたしと紘也くんの愛の巣も大きい方だと思つてたけど、これは月とスツポンだね。いえいえ、太陽とアリくらいかな」

「愛の巣ではない。断じて。まあ、俺は親父に連れられて一度来たことはあるんだけど、昔過ぎてあんまり覚えてないな」

「陰陽師の名家、葛木家。その宗家に入ったことがあるとは羨ましいぞ、紘也」

「カガリちゃんのお家ってすつごく大きいんだね。お庭でピクニックができそうだよ」

「……マスター、やはりウェルシュも学校へ行きたいです。一人は寂しいです」

「そんじゃあ、かがりん。早速中を案内してくれるかな」
「ちよつと待ちなさい！」

突然大声を出した香雅里に、紘也たちは顔を見合わせた。忍者屋敷よろしく敷居を跨ぐ前に注意事項でもあるのだろうか。

「その前に、訊きたいことがあるんだけど」

片眉をピクつかせながら彼女は言った。紘也たちを代表して孝一が応答する。

「どうした、葛木？」

「どうした、じゃないわよ！ 諫早孝一！ あと鷺嶋さん！ なんであなたたちまでいるのよ！ ていうか、いつの間に現れたのよ！」

「あんたがついさつきウロに絡まれていた間だよ」

傍観者、時にはウロボロスの鎮圧者として一部始終を見ていた紘也が説明した。

「なんでつて言われてもねえ、コウくん」

「単純に、お前らについて行った方が楽しいと思っただけだが？」

「遊びじゃないの！ いくら魔術の世界を承知しているって言うてもあなたたちは一般人なのよ。帰りなさい！」

そう言われて素直に引き下がる孝一たちではない。長年二人の親友をやっている紘也は知っている。エサに喰いついたワニのごとく引き剥がすのは困難だということを。

紘也も一般人なのだが、と思考だけで突っ込んでいると くい くい。控え目に袖が引かれた。

「マスター、この陰陽師はいつもヒステリーなのですか？」

「いや、普段は冷静……だと思っ」

「そしてそこっ！ ウェルシュ・ドラゴン！ あなたはどこから湧いて出たの！」

「……ヒステリーの矛先がウェルシュに向きました」

香雅里の剣幕に気圧され、ウェルシュは人見知りする子供のよう
に紘也の背中に隠れた。

「言われてみると、ウェルシュ、なんでお前までいるんだ？」

てつきり孝一と愛沙にくつついてきたものだと思っていたが、それはそれでおかしい。彼女は学校ではなく、家にいるはずなのだ。「ウエルシュは……………そうです。葛木家の宗主様に御挨拶に来たのです」

「本当は？」

「退屈だったのでマスターの匂いを追いかけてきました」

そんな行動を取るウエルシュの思考回路が紘也には理解できない。ただ、退屈という感情はわかる。家事のできない彼女には、紘也たちが学校に行っている間はモンバ口でもしている、と命令してある。三日間、一人で対戦格闘ゲームは流石に飽きる。RPGを勧めるべきだったか。

「ありゃ？ 腐れ火竜もいたんだ。存在感なさ過ぎて気づきませんでしたねえ」

わざとらしく、ウロ。するとウエルシュは僅かにムツとした表情になり、

「…………ウロボロス、存在ごと燃やしますよ？ あとウエルシュは腐ってません」

「あなたの方こそ存在ごと喰らってやりますよ」

「お前ら、こんなところで暴れたら一週間メシ抜きだからな」

メシ抜きの一言で両者は睨み合ったまま沈黙する。やがて申し合わせたかのようにぶいっつと顔を逸らした。

一方では、香雅里が孝一と愛沙の説得を試みている。

「とにかく！ ウエルシュ・ドラゴンはいいとして、無関係なあなたたちをここから先に通すわけにはいかないわ」

「無関係とは酷いな。友達だろう？」

「その台詞を口にする奴は信用できないって相場が決まっているわ」「わたしたちは、お友達。だから、無関係ではないのです」

「あーもう！ 調子狂うから鷺嶋さんは黙ってて！ まったく、どう言えば納得してくれるのよ……………」

苦戦しているようだ。今まで放っておいたが、紘也だって二人を

危険な目に遭わせたいわけではない。助太刀しようかと思ったその時、やけに古めかしい音を立てて門が開いた。

「あー、よいよい、香雅里。構わんから皆通せ」

門の奥から、白髪に白髭の若干痩せた老人が歩いてきた。今にもスキップでもしそうなほどの笑顔を満面に浮かべているが、この老人がただ者ではないことを紘也は感じた。

「この人、どこかで……？」

見覚えのあるような、そんな曖昧な記憶を漁っていると、香雅里の口から答えを聞いた。

「お、お爺様!？」

この老人こそが、葛木家宗主　　葛木玄永その人だった。

S e c t i o n - 0 5 葛木邸へ(後書き)

次回の更新は9月4日(土)です。

Section - 06 呼ばれた理由

葛木家の屋敷内に入ると、玄関にて誰よりも先に紘也たちを出迎えてくれた者がいた。

みゃー。

仔猫だった。見覚えがある。いつぞやにウロが拾って香雅里が引き取ることとなったあの仔猫だ。自分を見つけてくれた恩を忘れていないのか、飼い主の香雅里よりも先にウロの足下へと仔猫は頭を擦りつける。

「オウ！ この子はあの時の仔猫ですな。ちゃんと可愛がってもらってるようでなによりです」

ウロがしゃがんで仔猫の頭を撫でる。そんな微笑ましい様子に葛木玄永は「先に部屋で待つとるぞ」と告げて屋敷の奥へ消えていった。空気を読める人らしい。

「仔猫さん、可愛いねえ」

「ほう、葛木は猫を飼う趣味があったんだな」

「成り行きでそうなただけよ」

「？ マスター、どうかされたのですか？」

人懐っこく皆に順番に体を押しつけていく仔猫を、紘也は複雑な表情を浮かべて見詰めていた。皆の視線が紘也に集中したためか、仔猫がとてとてと歩み寄ってくる。

「おっと、俺には懐かないでくれよ」

紘也は口元を手で押さえて一歩下がった。紘也は猫アレルギーなのだ。

「この人はダメよ」

香雅里が仔猫を抱えて紘也から遠ざけた。普段のキツさなど微塵もない、赤子をあやすような優しい口調だった。

「そうですね。うちの紘也くんは猫系漫画の主人公でもないのに猫アレルギーを患ってるからね。だから近づいたらめっですよ、ゼウ

ス」

「なに人の家の猫に勝手な名前をつけてるのよウロボロス!？」

しかもとてつもなく偉そうな名前だった。

「じゃあ、かがりん、この子になんて名前をつけたのさ？」

「……小鉄」

「か、カツコイイ!」

感動したように仰け反るウロ。そのネーミングセンスもどうかと思う絃也だが、他人の家で飼われている猫の名前についてとやかく言うつもりはない。名前を呼ばれたのかと思っただろうか、香雅里の胸に抱かれている仔猫　小鉄が、みゃー、と嬉しそうに鳴いた。

それから一般人である孝一と愛沙は客間に通された。が、絃也たちは違った。香雅里の後について歩き、恐らくは屋敷の一番奥にあたる部屋へと案内された。宗主の部屋だ。

敷かれた座布団に正座し、絃也は部屋を見渡す。屋敷こそ広いがこの部屋は無駄なスペースが少ない。畳を数えてみると、八畳だった。無駄な調度品も少ないためどうも質素に見えるが、そこが和の雰囲気を最大限に醸し出していると絃也は思う。

ただ、ここで暮らす老人のイメージは、気難しくて融通の利かない絵に描いたような頑固ジジイである。

「おーおー、あのタツ坊の倅がこんなに大きくなつるとは、年も取るわけじゃ」

「はあ」

だから、軽快で気さくで『ふおっふおっふお』と笑いそうな葛木玄永は、絃也のイメージからかけ離れていた。とてもこんな質素な趣味を持っているとは思えない。人は見かけによらないのだろう。ちなみに『タツ坊』とは秋幡辰久のことで相違ない。

「タツ坊は元気にしとるか？」

「はい、元マスターはお元気でした」

ウエルシュが答えると、玄永は「そうかそうか」と嬉しそうに笑った。

「しかしまあ、この香雅里に夕亜ちゃん以外の友達ができるとはのー。おじいちゃんとしては嬉しいかぎり」

「お爺様、そのような世間話をするために彼を呼んだわけではないのでしょうか？ 早く本題に入ってもらえますか」

刺々しい調子で、香雅里。彼女は玄永の隣に座っている。そしてどういうわけか先程から険のある表情で紘也を睥睨している。きつとウロボロスとウエルシュが密着する勢いで紘也を板挟みにしているからだろう。香雅里は妖魔　幻獣と人間が仲良くすることをあまりよく思っていないのだ。

「ふむ、香雅里はせっかちでいかん。急いで仕事を仕損じるという言葉もある。紘也君とは十年以上も会っていないのじゃ。まずは世間話をしたいという古い先短いジジイの気持ちを汲んでくれてもよかるう？」

「若い頃に仙術を齧ってあと百年は余裕で生きられそうなお爺様が、よくも古い先短いなどと言えますね」

香雅里が溜息混じりに言う。紘也は一応葛木家のトップの手前、おずおずと遠慮がちに挙手した。

「あの、俺も早く話を聞きたいんですけど。孝一たちも待たせてあげるし」

「そうだよ。つまらない話は後で勝手にやってればいいんだよ。その間にあたしはかがりんの部屋でも物色してるから」

「させないわよ。ていうか、妖魔なんかを私の部屋に入れるわけないじゃない」

「あうう、冷たいねえ、かがりんは。ちょっとくらい部屋漁ってもいいじゃん」

香雅里の氷の視線に射抜かれ、ウロはわざとらしく落胆した。「とにかく」と紘也が放っておいたら脱線しそうになる話の軌道を修正する。

「俺は魔術側とあまり関わりたくないのですが、親父がお世話になつていらっしゃるようですし、要件だけは聞きます。手短かに話してください」
紘也の発言に同意するように、ウエルシュも頷いた。

「うむ。紘也君がそう言うのであれば仕方ない」

葛木玄永は、うおほん、と咳払いをし

「紘也君。香雅里の婿になつてはくれぬか？」

「……」

「……」

「……」

「……？」

「……はあッ！？」

数瞬の間を開けて、紘也、ウ口、香雅里の三人は同時に声を張り上げた。ウエルシュだけが頭上のアホ毛を『？』にして小首を傾げている。

「な、なななにを言っているんですかお爺様！？　そういう話じゃなかったでしょう！！」

「紘也くんはあたしのものだよ！　いくらかがりんだからって譲れませんね！」

顔から火を吹き出す勢いで激昂する香雅里や、対抗意識満々のウ口に紘也も同調する。

「そ、そんなこといきなり言われても困ります！　婿だなんて。だいたい俺と葛木はそういう関係でもなんでもないんですから！」

「（……なんでもないってことはないでしょう）」
「ん？　なんか言つたか、葛木？」

「言つてないわよ！　そうよ、私は兄様以上の人じゃないと、け、結婚なんてする気ないんだから！」

「出た！　かがりんのブラコン発言！」

「そ、そんなんじゃないわよ！」

「それじゃよ」

物静かに玄永が指摘する。

「本人は『尊敬』と言い張っておるが、香雅里は幼い時からなにか
と言えば兄様兄様。いい加減に兄離れしてもよい頃だと思ったんじ
ゃ。いや、少々遅過ぎるかの」

「いや、だからってなんで俺が……」

「相手がタツ坊 秋幡辰久の息子であれば文句はない。強力なド
ラゴン族の幻獣を二体も従えておるしの。どうじゃ？ うちの香雅
里はかなりの美人だと思うが、本当にこれっぽっちもその気はない
のか？ うん？」

身を乗り出して絃也に切迫する玄永。そのなんとも言えない迫力
に、絃也は無論、ウロとウエルシュまでたじろいだ。

「絃也くんだつて男じゃ。こんな美人を見てなんとも思わんことは
なかるう。儂がまだ若いころはそりゃあもうゲブン！？」

青筋をこたたま額に浮かべた香雅里に玄永は殴り倒された。彼女は
無理矢理な笑顔を貼りつけ、畳の床に伏す葛木家宗主に向かって
言う。

「お爺様、そろそろ天国行の列車の発車時刻ですよ。乗り遅れない
ようにしませんとね」

「……我が孫は最近どんどん冗談が通じなくなっておるから面白く
ない」

こぶのできた頭を擦りながら玄永は起き上がった。かなりの鈍い
音がしたと思つたが、この爺さんはケロリとしている。

「「なんだ冗談か」」

絃也とウロは声を揃えて胸を撫で下ろした。それにしては目が血
走っていて本気だったように見えたが、あれも演技だとしたらいろ
いろな意味でこの爺さんはただ者じゃない。

「……マスター、『ムコ』ってなんですか？ おいしいですか？」

未だに状況を理解していないウエルシュはスルーしておく。でも
ようやくわかってきた。ウエルシュは話し方こそ丁寧だが、思考回

路がどうもお子様だ。

「うおほん。ではまあ、戯れはこのくらいにして本題に入るとするか」

「最初からそうしてくださいよ……」

緊張こそしなかったものの、異常に疲労が溜まった紘也だった。

「まずはこれを見てくれ」

そう言っただけで玄永が畳の上に置いたのは、一振りの抜き身の刀だった。長さは一メートルにギリギリで達していないと思われる。刃先はシヨウブの葉のような形状をしており、柄元には魚の背骨に似た節がある。ここで取り出すくらいだから、単なる刀ではないのだろう。

落ちて着いた香雅里が真面目な顔で紘也を見る。

「天叢雲剣あまのむらさきのつるぎ。そう言えばわかるかしら？」

「！」

天叢雲剣。別名、草薙の剣。天照大神が授けたと言われる宝刀で、三種の神器の一つに数えられるアレのことだ。名前だけならば広く知れ渡っているが、その実態を見た者はいないという。

そんな伝説の刀が、紘也の眼前に置いてある。

本物だろうか？

「本物よ」

紘也の顔色から思考を読み取ったのだろう、訊く前に香雅里に先手を打たれた。

「ゲームでよく聞く名前だね」

「ウエルシユもゲームでよく聞きます」

うちの幻獣どもの情報源が人間的過ぎることは置いて、紘也はまだ半信半疑のまま質問する。

「どうしてそんなものがここに……いや、それを俺にどうしろ？まさか、これ装備して世界魔術師連盟の幻獣狩りに参加しろ、などと言いませんか？」

もしもそうならコンマ一秒で断る。が、どうやらその心配は杞憂

のようだった。

「そうではない」と玄永。「絃也君は知らんじやろうが、数ヶ月前から各地の陰陽師を襲撃して宝剣を奪っている者があるんじや。儂らの予想が当たっておれば、宝剣強盗が次に狙ってくるものは、この葛木家にある 天叢雲剣 なんじやよ」

「だから俺に預かってことですか？ もしその宝剣強盗に襲撃されたとしても、盗まれないようにするために」

「流石はタツ坊の倅。頭は回るようじやな。一般人に預けることは避けたいところじやが、絃也君ならば信用できる。頼もしい幻獣たちもついておるしの」

頼もしいと言われ、ウロとウエルシュは競うように胸を張った。

しかし、と玄永は続ける。

「そうも言っておれんのじや。明後日の日曜日、儂ら葛木家は同じ陰陽師の日下部家と合同で、ある『儀式』を行うことになっておる。その『儀式』にはこの刀が必要不可欠でな。宝剣強盗は恐らくそこを狙ってくるじやろう。まあ要は絃也君に剣の護衛をしてもらいたいわけじや」

「お断りします」打てば響くように絃也は断った。「そんなことに俺の出る幕はないと思います。葛木家だけでも充分に守り切れるのでは？」

「先日のヴァンパイアの件がなければ、そうしておったかの」
「あつ……」

絃也は気づいた。あの戦いで葛木家の精鋭はほぼ全滅している。ウロボロスが所持していたエリクサーのおかげで死人こそ出ていないが、ほとんどの術者が戦力に数えられる状態ではない。

つまり、今この葛木家はかなり弱体化している。各地の陰陽師を襲撃して未だに捕まっていない犯人の実力は相当なものだ。弱体化した葛木家では守り切れないと判断できる。

そして元を辿れば全部絃也の父親のせいである。尻拭いをするみたいで嫌だが、とても断れる頼みではない。

「日下部家の力は実戦向きではないし、連盟に応援を頼んでもよいが、幻獣狩りで手一杯じゃろう」

「だから、不本意だけどあなたに頼るしかないのよ」

「その『儀式』とやらを中止にすればいいのでは？」

「残念じゃが、それはできん。定められた日にやらねば意味がないのでな」

およそ儀式と呼ばれるものは大半が条件を揃えないとできない。日時もその一つだ、と紘也は父の本で得た魔術の知識を思い出す。

「『儀式』はどこで？」

「八櫛谷と呼ばれる場所じゃ。出発は明日になっておる」

近くはないが、県内だ。もつと遠ければまだ断れたものの……もはやどうにでもなれという気持ちで紘也は承諾する。

「……わかりました。どうせ戦うのは俺じゃないですし」

「えー、嫌だよそんな面倒臭いこと。せつかくの土日なんだし、家でモンバロやってた方がマシってものだね。目標は紘也くんをコテンパンのビショショワハーツてすることです」

「ウエルシュは、マスターが行くのであれば一緒にします。ウエルシュの任務はマスターを守護することです。……そうです。ウロボロスだけ置いていきましょう」

「んな！？　こんのアホ火竜はちゃっかり紘也くと二人きりになる気だね！　そうは問屋が卸してもウロボロスさんは卸しませんよ！　残るならあんたが残ればいいんだよ！」

「嫌です。ウエルシュはマスターと一緒にいたいです」

「あたしだって紘也くんの傍から片時も離れたくないんだよ！」

「ウロ、ウエルシュ」

紘也は声のトーンを低くして凄んだ。二人の肩がビクリと跳ねる。「両方来ること。オーケー？」

「……いい、いえっさあ」

「……了解です、マスター」

ウロボロスとウエルシュ・ドラゴン。彼女たちがいれば千人力だ

し、連盟から並みの魔術師が送られてくるより遙かに安心なのだが、二人が水と油の関係であることだけが激しく不安だ。

と、視線を感じた。見ると、香雅里がジト目で紘也を見据えていた。

「モテモテね」

「皮肉はやめろ」

人外にモテたところで嬉しくもなんともない。

「フッフ、話は聞かせてもらったぞ」

その時、唐突に声が聞こえた。瞬間、ガバツ！ と隣室との境界線である襖が開く。

敵襲かと身構える香雅里と玄永。紘也の前にも、ウロとウエルシユが庇うように立つ。だが

「面白そうなことをしようとしてんのに、オレたちだけハブられるのは御免だぜ、紘也」

そこに立っていたのは、紘也の親友である諫早孝一と鷺嶋愛沙だった。

「あ、あなたたち、どうして……」

「愚問だな、葛木。このオレたちが黙って別室で待機しているわけがないだろう」

確かに愚問だ。二人が大人しくしているはずがないとわかっていたのに、紘也は警戒することを忘れていた。葛木玄永の冗談のせいにしておこう。

「宝剣の護衛で八櫛谷。実に楽しそうだ」

ニヤリと孝一が笑う。絶対なにか企んでいる顔だ。

「知ったところ悪いが、お前たちは連れていけないぞ」

「そのことなだけどねえ」

愛沙が朗らかな笑顔の横に人差し指を立てる。その言葉の続きを、孝一が提案するように引き継いだ。

葛木家現宗主に向かって。

「玄永さん。オレに一つ、考えがあるんだが
？」

S e c t i o n - 0 6 呼ばれた理由（後書き）

次回の更新は9月8日（木）です。

S e c t i o n - 0 7 出 発 (前 書 き)

第 二 章

八櫛谷とは、蒼谷市から車で三時間ほどの距離にある溪谷のことだ。避暑地として人気があり、金持ちの無駄に豪華な別荘や観光客用の貸しペンションなどが多く並んでいる。それでいて景観を害すことなく、自然浴をするにはもってこいの場所と言える。さらには天然温泉なんかもあり、夏場でなくとも客の数は衰えることがないらしい。

そんな場所で行われる陰陽師の『儀式』とやらを、紘也は詳しく聞かされていない。気になってはいたのだが、孝一と愛沙が乱入したために訊くタイミングを逸してしまったのだ。孝一の提案に、我ながらテンションを上げてしまったことも原因ではある。

「しっかし、マジで用意してやがる……」
時刻は早朝六時過ぎ。秋幡家の前に、見慣れない車が停車していた。

荷台部分の上部が運転席方向に突き出した形状の、白い改造トラック。実際に見なくとも荷台の内部はホテルの一室みたいに設備が整っているだろうと想像させられる代物。つまり、キャンピングカーである。キャブコンタイプだ。

いつ襲ってくるかわからない敵を欺くために『八櫛谷へキャンプをしにきた高校生のグループ』を演じる。それが孝一の出した提案だった。自分が遊びたいだけということが見え見えだったが、孝一と気の合いそうな葛木家宗主 葛木玄永は予想通り乗ってきた。紘也もどうせ行くなら楽しみたいし、孝一と愛沙は危険だと思っただけで逃げるのと約束してくれたため、特に文句はなかった。

ただ一人反対していた香雅里に関しては、孝一と宗主のテンションマックスな言葉攻めを受けて強引に了解させられた。『せっかくだから友達と楽しんでくればいい』。そう宗主に言われた後は、もう全てを諦めたように沈黙してしまっていた。もっとも、彼女も満

更でもない様子だったことは皆が気づいていたけれど……。

で、『キャンプに相応しい移動手段はこちらで用意する』と言った玄永が持ち出してきたのが、今紘也の目の前にあるキャンピングカーなのだ。

「おつす、紘也」

「ヒロくん、おはよう」

集合時間十五分前きっかりに孝一と愛沙がやってきた。両者とも虫除けのためか薄手の長袖にジーパンという格好だ。そこはかとなくやる気が滲み出ている。

「おはよう、二人とも。それにしてもすごい荷物だな」

紘也は孝一に向けて言った。着替えやその他必要品が入っているだろうバッグ一つの愛沙はともかく、孝一の装備はパンパンに詰まった登山用のリュック二つに、ゴルフバッグみたいな縦長の入れ物リュック二つの時点で決して一人前とは言えない量だ。

それだけの荷物を持って汗一つかいていない孝一は得意げに鼻を鳴らし、

「キャンプと言えばいろいろ必要だろう？ 人数分の飯盒とか、鍋やフライパンとか、寝袋とか、虫除けスプレーとか懐中電灯とか方位磁石とか非常食の缶詰に財宝発掘のためのスコップにそれから

」

「お前はどこへ冒険に行く気だ！ だいたいはコレに備わっているんじゃないのか？」

と、紘也は道路脇に停めてあるキャンピングカーを親指で示す。

すると孝一はやれやれと肩を竦め、教え子に講義する教官のような口調で言う。

「わかってないな、紘也。世の中なにが起こるかわからないんだぞ。車で行けないような未踏の地でキャンプすることになるかもしれないじゃないか。例えば唐突に次元に門が開いて異世界へ飛ばされるとか」

「ねえよ！ あったとしても溪谷で迷うくらいだ！」

現在、この世界は魔術師連盟の実験失敗の影響で、次元の壁が凄まじく強固になっている。召喚術も送還術も使えないため、ウロボロスのような強力な幻獣たちでも元の世界に戻ることができなくなっているのだ。

「ねえねえ、ヒロくん。ウロちゃんとウエルシユちゃんは？」

二人がいないことに気がついた愛沙がキョロキョロと周囲を見回す。

「ああ、あいつらなら」

ドドガシヤゴガガンドガツツッ！

「あだだだだだだだ！？ な、なななにしてくれんですかこの腐れ火竜ッ！！」

「……ウロボロスを起こしていました」

「起こし方おかしいよね！？ なんで階段から突き落とすんだよ！？」

「ウエルシユは悪くありません。どうやっても起きないウロボロスが悪いのです」

「そしてなにプリンタ持ち上げてトドメ刺そうとしてんですかあッ！？」

「そろそろ来ると思う」

寝坊助ウロボロスを起こすようにウエルシユに頼んでいたのだが、朝からなんて近所迷惑な奴らだ。後で説教しなくては、と紘也は心の予定帳に書き記す。

「ふふふ、ウロちゃんとウエルシユちゃんは仲良しさんだね」

「いや、仲良しからはだいぶかけ離れていると思うぞ」

最近は紘也がテスト勉強している間によく二人でモンバロの対戦をやっていたようだが、根本的なところは未だ天と地の関係だと紘也は思っている。

「秋幡紘也、ちょっとこっち来て手伝いなさい」

キャンピングカーの影から紘也を呼ぶ声。葛木香雅里だ。葛木家が用意したキャンピングカーがあるのだから、彼女がいるのは当然である。先程からなにやら作業をしているみたいなのだが、紘也の位置からは死角になっていて見えない。ちなみに葛木玄永はいない。本人は行くつもりだったらしいが、昨晚、はしやぎ過ぎてぎっくり腰を引き起こしたとか。

それはともかく紘也を指名するということは、孝一たちのような？普通の？一般人には見せたくない物があるのだろう。？普通ではない？一般人というのもおかしい話だと思っけれど、紘也がそちら側だという自覚はしている。

「お呼びだぞ、紘也」

「わかつてるよ」

孝一に促されて数歩、車の影にいる香雅里の下まで歩く。彼女の姿が見えた瞬間、このタイミングで一体なにをやらせる気だ一般人に見られたくないなら事前にやっておけよ、と紘也は言っつもりだった。

が、彼女の行っている作業が目に入るや、紘也の用意していた台詞はもつとシンプルなものに上書きされた。

「葛木、お前は一体なにをやってるんだ？」

「見てわからないの？ これを組み立ててるの」

白い半袖Tシャツにショートパンツという格好の香雅里は、説明書を片手にバーベキューコンロを組み立てていた。不器用なのか足が変な方向を向いている。アレでは絶対に安定しない。

「それ今組み立てても邪魔だからな。あと、あんたが一番浮かれるよな」

葛木家の次期宗主はこんなので大丈夫なのかと心配になる紘也だった。

Section - 07 出発（後書き）

本日はテイ○ズの新作の発売日です。私の人生を変えたゲームのシリーズですからやらないわけにはいきません。執筆そっちのけでプレイすることとなるでしょう。断言します。

ですが、安心してください。天ウロはストックがあるので安定して更新できます。もう一つの方はどうなるかわかりませんがね。

というわけで、次回の更新は9月11日（日）です。

「まったく、土曜は見たい深夜アニメがたくさんあるつてのに、なにが楽しくて電波が届いているのかも怪しい山奥まで行かなきゃならないんだよ」

出発して間もなく、紘也の右隣に座っているウロがふてくされたように唇を尖らせていた。紘也の左隣には当然のようにウエルシュが陣取り、小テーブルを挟んだ向かい側には紘也から見て左から香雅里、愛沙、孝一という並びになっている。

「文句言う割には、ずいぶんと楽しそうに見えるぞ」

「なあに言ってますか、紘也くん。こう見えてもあたしは幻獣界で『クイーン・オブ・ジ・インドア』の名を擅恣し続けているんだよ」

「引き籠りにしか聞こえないな」

彼女はそこまでヒッキーな感じではないと思うが、どうでもいいので横に置いておく。

「ところで今日の夕飯なんだが、カレーとバーベキュー、どっちがいい？」

「バーベキュー！！まったく、紘也くんてばわかってないね。キヤンプと言えばバーベキューに決まってるじゃあないですか。口の中で蕩ける霜降りの肉、それを優しく補助する野菜たち、他にも自分で釣り上げたアスピドケロンなんか塩焼きで食べるとおいしいんだよね。あつ、食べ終わった後はみんな花火しませんか？」

とウロは得体のしれない謎空間　ウロボロスの秘密無限空間とやら　に手を突っ込んで、コンビニにでも売っていきそうな花火セツトを取り出した。

「めちやくちや楽しみにしてるよな！　いつの間を買ってたんだその花火！」

「まあまあ、細かいことを気にしてたら長生きできないよ紘也くん。」

あたしが絃也くんの方もアスピドケロン釣ってあげるから落ち着いて

「……ウロボロス、アスピドケロンは海の魚です。川にはいません」
「それ以前に幻獣だからな！ 島くらいでかい怪物だからな！ いたとしても食わないからな！」

せっかくスルーしていたのに二度目は突っ込まざるを得なかった絃也である。

「ところでマスター、ウエルシュのお守りは持ってきていますか？」
「ん？ ああ、あのアミュレットのことか？ それなら一応持つてるけど？」

幻獣契約を交わす際にウエルシュから受け取った六芒星のペンダント。彼女の 守護の炎 を結晶化したらしく色は鮮やかな真紅である。それを持っていくようと、昨夜絃也は彼女に散々念を押されていた。

「肌身離さず、ウエルシュだと思って身につけていてください」
「何度も聞いてるよ。だからこうして持つてるんだろ」

「なっ！？ 腐れ火竜だけずるい！？ あたしも、あたしもなにか絃也くんに」

無限空間に手をつ突っ込んでポイポイとガラクタを散らかし始めるウロ。どこのネコ型ロボットだと蹴り倒してやりたいが、そうすると負けな気がする。

「絃也くん絃也くん！ これをあたしだと思って受け取って！ 身につけるだけで悪霊退散、ウロボロス印の浄化結界を術式で込めたタリスマンです」

「ってわさびのチューブじゃねえか！ いらねえよそんなもん！」

「まあまあ、そんな遠慮なさらずに。もろたもろた言ったらあかんで」

「やかましい！」

全力で断ったのも虚しく、強引にポケットに捻じ込まれてしまっ

た。どこまでもウエルシユと張り合いたいらしい。そしてわさびを貰って紘也にどうしろと言うのだ。ウロの目にも流し込めばいいのだろうか？

「秋幡紘也、そろそろコントはやめてもらえないかしら？」

「コントじゃねえよ！」

腕を組んだ香雅里が半眼で紘也を睨んでいた。なんとなくイライラしているように見受けられる。原因は不明。

「これからのことを話すわ。静かに聞いてちょうだい」

至って真面目な顔になる香雅里。と、孝一と愛沙も話に加わるように僅かに身を乗り出してくる。

「そうだな。着いたらまず、テントを張らないとな」

「お昼ごはんの準備もしないとね」

「ええ。その後は川で遊んで、夕ごはんを食べて、八櫛谷の天然温泉に入って、夜は　って違うわよ！　キャンプはカモフラージュだつてあなたたちが言い出したんでしょ！　そんなの適当でいいのよー！」

「意気込んでコント組み立てていたのは誰だっけ？」

「あーもう！　黙りなさい、秋幡紘也。あなたは聞きたいんでしょ？　私たちが行う『儀式』のことを」

そのことか、と紘也は納得した。確かに気になっているし、それは宝剣の護衛をするからには知っておきたいことだ。香雅里も話しておくべきだと判断したのだろう。だが

「いいのよ。ここだと、孝一と愛沙に聞かれちゃうぞ」

「いいのよ。言っておけば危険な場所に近づかないでしょうし」

香雅里はこの二人に関して完全に諦めているようだった。？危険な場所？があるということに引っかかりを覚えるが、好奇心だけでそういうところへ飛び込むほど孝一たちは馬鹿ではない。だから、紘也も教えておくことに異存はない。

一応、釘を刺してみる。

「二人とも、絶対に危ない場所には入るなよ。特に孝一」

「おう、任せとけ」サムズアップで返す孝一。
「わかったよう」ふんわりニッコニコの愛沙。
なんか激しく不安になった。

香雅里は皆が聞く姿勢になったことを認めると、一呼吸置いてから話し始めた。

「これから向かう八櫛谷の奥には、強力な妖魔が封印されているの。そしてその封印は年を重ねるごとに弱まっている。だから私たちは数十年に一度、妖魔の封印を強化し、再封印を施さなければならぬ。それが明日行われる『儀式』よ」

「妖魔の封印……」

紘也は思わず唾を飲んだ。彼女の言う『妖魔』とは紘也たちで言う『幻獣』と同義だ。封印とは基本、滅ぼすことが不可能だと判断された存在にしか使われない。それほどの幻獣が八櫛谷に眠っていると思っていると寒気がしてくる。

ピツ、と香雅里が一枚の護符を取り出した。二本の指に挟まれたそれは、小気味よく破裂すると、代わりに一振りの刀となって彼女の手に握られる。紘也が護衛を任された葛木の宝剣あまのむらぐものかみだ。
天叢雲剣

「封印は一年の中で八櫛谷の地脈が最も活性化する時期に行く必要があるの。その時間は明日の正午。この 天叢雲剣 に地脈の力を集めて封印するってわけ。だから宝剣強盗に狙われるかもしれないからってこの刀を使わないわけにはいかないのよ」

「オレから一つ質問してもいいか？」

と一般人代表の孝一が挙手した。香雅里が「なに？」と質問を許可すると、孝一はおもむろに 天叢雲剣 を指差し、
「その刀が次に狙われると予想できたのはどうしてだ？」

「ああ、そのことね。簡単よ。これまで宝剣強盗に盗まれた剣が、盗まれた順に 八重垣剣やえがきのつるぎ 沓薙剣くつなぎのけん 都牟刈大刀つむがりのたち だからよ」
「な、なんかすっごく難しい名前だね」

聞き慣れない名前に愛沙が眉を顰めた。紘也は頭の隅にある曖昧

な知識を引つ張り出し、自信がないまま呟く。

「それって全部 草薙の剣 の別名だったような……?」

「そうよ。でも、それぞれ別の剣であり性質も形も全く違うわ。共通しているのは、ある妖魔の体内から見つかったということ。八櫛谷に封印されている妖魔はその一体よ」

草薙の剣 を体内に持つ妖魔。絃也はそいつの名を予想できた。いや、どうやら孝一や愛沙にも心あたりがあるようだった。

「かがりんかがりん、それってなんて名前の幻獣?」

あまり興味なさそうにウロが訊ねる。

「教える必要はないわって言いたいけど、もう察してるみたいね。

『ヤマトノオロチ』よ」

「……やっぱりな」

絃也の予想は当たっていた。ヤマトノオロチは日本神話に登場する八頭の大蛇だ。八つの谷と八つの峰に跨るほど巨大であり、水害の象徴とされている。日本神話では、主人公の一人である『スサノオ』によって出雲の地で退治されており、その時に尾から出てきた刀が 天叢雲剣 なのだ。

流石に有名な話だ。ウェールズの国民的象徴であるウエルシユは首を傾げているが、孝一や愛沙だって知っている。

「あー、オロちんね」

「待てウロ。なんだそのフレンドリーな呼び方は? 知り合いなのか?」

絃也はあえてスルーしなかった。

「いえいえ。ただ三百年ほど前にヤマトノオロチ族の一人と友好を交わしてるだけで、そのなんとか谷に封印されてる奴があたしの知り合いだとは限りませんよ。いやあ、懐かしいなあ。あたしが傷心旅行してる時に優しくしてくれたんですよ、オロちん」

遠い昔を懐かしむようにウロはぼんやりと虚空を眺め始めた。もつとも、絃也にウロの回想シーンへ突入する気など微塵もない。

「そうだったな。幻獣名とはつまり種族名だったな。ところでお前

は何歳なんだ？」

「紘也くん紘也くん、女性に年齢をき」

「蛇だからいいだろ」

「よくないよ！ なぜならあたしはドラゴンだから！」

どうしても教えてくれそうにないので紘也は諦めた。少なくとも見積もっても三百数歳であることがわかっただけでもよしとしよう。なにがよしなのか紘也にもわからないけど。

ふと、紘也はウロの年齢とは別にあることが気になった。

「なあ、ウエルシュ」

「はい。なんでしよう、マスター」

「お前の『ウエルシュ・ドラゴン』も種族名つてことは、本名もちやんとあるんだよな？」

「はい。あります」

「なんていうんだ？」

好奇心のまま訊ねると、ウエルシュはポツと両頬を紅潮させた。

「……マスターは、ウエルシュに放送コードに引っかけられることを言えと仰るのですか？」

「お前もかつ！？ だから逆に気になるんだよそういうの！」

種族名を一人称にしているのはあざとくもキャラを作っているのだろうか。きつと親父がそうしろと言ったに違いない。紘也は実の親を疑うことにした。

「ははは、天然のコントだな。お前ら三人で芸人を目指したらどうだ？」

「孝一くん、いいねそれ！ あたしと紘也くんめおしで夫婦ツツコミ。腐れ火竜がボケ。完璧じゃあないですか！ コンビ名は『ウロボロフアミリーとその下僕』で決まりだね！」

「ずるいです、ウロボロス。ウエルシュもマスターとめおとツツコミしたいです」

「ヒロくんたちが芸人さんを目指すのならわたし応援するよう」

「目指さねえよ！ 誰が幻獣とコンビなんか組むか！」

呟いた。

葛木家は、次に狙われる宝剣が自分たちの所有する 天叢雲剣だと気づかないほど無能ではない。戦闘向きではない日下部家を頼りにできない以上、『儀式』には相応の戦力を用意して当然だ。それなのに

「一般人を招いてキャンプだと？」

宝剣強盗は考えなしで突撃するほど愚かではない。彼は今朝早くから葛木家を見張り、どのくらいの戦力を揃え、どういった警備体制を取るのかを分析しようとしていた。

するとどうだ。葛木家から発進した車両はキャンピングカーで、しかも一般の民家の前に停車し、どう見ても一般の高校生と思しき男女数人を乗せていた。葛木家の術者と呼べる者は、運転席と助手席の二人と次期宗主候補の葛木香雅里だけである。

「俺の目を欺くつもりか？ 無駄なことを」

こちらを惑わせるということには成功しているが、そんなことに意味はないだろう。

だが、考えられることは他にもある。

「余程強力な術者が乗っているのか。他の術者全員が足手纏いになるほどの」

可能性は充分にある。宝剣強盗はそうであることを前提に行動することにした。

フン、と鼻息を鳴らす。

「ならば少し遊んでやるか。俺の目的を阻むほどの力があるのか、見極めてやる」

カラスに似た怪鳥に指示を出し、男も八櫛谷を目指す。

S e c t i o n - 0 8 四本の宝剣(後書き)

次回の更新は9月15日(木)です。

Section - 09 八櫛谷溪谷

八櫛谷溪谷。

角の丸い石が絨毯のように敷き詰められた河原。溪流の澄み切った水に膝まで浸かり、少女たちがワイワイキヤーカーと賑やかに川というものを満喫していた。

騒がしいのは主にウロなのだけねど。

紘也は組み立てたばかりのテントの横に腰を下ろし、ぼーっと彼女たちの様子を眺めていた。ウロがウエルシュに水をぶっかけ、反撃を喰らっている。それを愛沙がふんわりとした笑顔で見守っている。

こうして見ると、やっぱり人間にしか見えない。

無論、ウロとウエルシュのことだ。『人化』しているってだけじゃない。心とか、意志とか、そういったものも自分たちと差はないように感じられる。

そんなわけで、遠くから見ている分には美少女たちの戯れ。退屈はしない。これが目の保養というやつか。

「秋幡紘也、ちよつといいかしら？」

と、香雅里が葛木の術者二人 交代でキャンピングカーを運転していた を従えてやってきた。なんだ？ と紘也は彼女に顔を向ける。

「私は先に自分の用事を済ませてくるわ」

「用事って？」

「八櫛谷の温泉宿に日下部家の人たちが来ているの。だから挨拶も兼ねて、明日の段取りとかの話し合いをするのよ」

日下部家は、葛木家と合同で『儀式』を行うことになっている陰陽師の一族だ。彼らがどういった役割を担っているのか知らないが、「俺も行った方がいいのか？」

言っと、香雅里は首を横に振った。

「いいわ。どうせあなたたちは儀式場に入れてもらえないだろうから。あなたたちのことは伝えてあるし、あの子に紹介するのも後にするつもり」

あの子？ と紘也は疑問に思ったが、それを口にする前に香雅里が一枚の護符を差し出してきた。天叢雲剣を封じてある護符だ。「これはあなたに預かってもらうわ。悔しいけど、私が持っているより安全だと思うから」

「ああ、わかった」

紘也が護符を受け取ると、香雅里は安心したように微笑んだ。

「すぐに戻るから」

そう言つて香雅里は踵を返した。いつも怒つたような顔をしている彼女だが、笑つとあんなに可愛いんだな、と紘也は不覚にも思つてしまった。

「さて、預かつたはいいが、これどうしよう？」

うーん、と紘也は唸つた。肌身離さず持つておくのが一番かもしれないが、なにかの拍子に失くしたり、護符をおしゃかにしてしまうかもしれない。荷物の中も四六時中見張っているわけではないので不安だ。

と

「やつはー 紘也くん紘也くん、一緒に遊ぼうよ！ いくらあなたの姿が魅力的だからってこーんなどで眺めてるばかりじゃつまらないよ！ 水かけごっこしましょ水かけごっこ！ あっ、ちゃんと服の下は水着なんで大丈夫 おや？ かがりんはどこ行つちやつたんですか？」

自立歩行型騒音発生機が当然のように騒音を撒き散らしながら歩み寄ってきた。

「葛木なら、日下部家とかいう陰陽師のところに挨拶に行つたよ」
適当に説明する。というかこれ以外に説明のしようがない。

「まったく、かがりんてば真面目人間なんだから。そんなの後でいいんだよ。今はあたしたちと楽しむ時間じゃあないですか」

「……」

「……」

「これだけ？」

「ああ、これだけ」

「結婚の話は？」

「冗談は存在だけにしろ」

「酷いつ！？」

ウロはオーバー気味にがつくしと頂垂れた。妄想と現実はしつかりと区別してもらいたい。

「ヒロくんも一緒に遊ぼうよう」

「……マスター、お水、冷たくて気持ちいいです」

ウロの相手ばかりしていたため、いつの間にかウエルシュと愛沙も紘也の周りに集合していた。

「テント張る作業は俺と孝一だけでやったんだぞ。少しは休ませてくれ」

「えっと、コウくんはどこ？」

言われてみれば、テントを張り終わってから孝一の姿を見ていない。

「大方、スコップ片手に財宝発掘の旅にでも出たんじゃないか？」

「いや、それをするならオレは全員を巻き込むぞ」

噂をすればなんとやら。どこでなにをしていたのか知らないが、孝一が戻ってきた。

「……って孝一、どうしたんだその格好は？」

孝一は先程の姿とは一変していた。薄茶色のウエーダーを履き、日よけの帽子を被り、そして手には溪流釣り用のカーボンロッドが握られている。一目で釣り人だと認識できるスタイルだった。

「孝一ではない！ フィッシャー・ザ・孝一と呼べ！」

「は？」

なんだこのテンション。

「葛木は用事があるらしいからな、今はこのメンバーでやるか」

孝一　もといフィッシャー・ザ・孝一は香雅里以外の皆が揃っていることを確認すると、バツ！　とパーに開いた右手を前に突き出した。

「唐突だが、これより溪流釣り大会を始める！」

唐突もなにも、見た瞬間なんとなくそんなことを言い出しそうな気はしていた。

「待てよ孝一、参加したいのは山々だが、俺たちは釣りの用意なんてしてないぞ？」

事前に知っていれば自分の竿の一本や二本、念入りに用意するのが紘也である。この前ウロに借りたカードゲームもそうだが、遊びは準備段階から楽しみみたいのだ。

「安心しろ、紘也。みんなの分もちゃんと用意してある」

フィッシャー・ザ・孝一はこれからゴルフにでも行きそうな縦長のバッグを紘也に寄こした。中を見ると、種類豊富な釣り竿やルアー、さらには毛針なんかも入っている。孝一の用意周到さには流石に舌を巻かざるを得ない。

「オウ！　さつすがフィッシャー・ザ・孝一くん。あたしなんだか燃えてきちゃいましたよう！　アスピドケロン釣っちゃいますよう」

「ウロボロス、アスピドケロンは海の魚だと言いました。川では釣れません。でも、ウエルシユはウロボロスより大きな魚を釣ります」

「なんですと！　あたしが腐れ火竜に負けるはずないんだよ！」

二人ともやる気と闘争心のオーラが全身から湧き出ている。そのオーラで魚が逃げないことを紘也は心から祈った。

「それで孝一、ルールは？」

「フィッシャー・ザ・孝一だ！　まあいい、ルールは簡単だ。制限時間は午後一時まで。量・大きさ・珍しさで点数を競い、合計得点が最も高い奴が優勝だ。ただし、エサは用意してないぞ。使つなら自分たちで調達するんだ。そうそう、これは今夜の夕飯のおかずを

増やす重要なミッションでもある。各自、心して取り組むように」
遊びはなんだろうとゲーム性が重要だと考えるのが孝一だ。だからこそ、彼の提案する企画は面白いものも多い。

「優勝者には夕飯のバーベキューで優先的に肉を食べることにしよう。逆に最下位はほとんど肉を食べないと思え」

「むむむ、それは負けられない戦いだね。肉のないバーベキューなんて魔力が枯渇した魔術師と同じです！ ウロボロスさんの戦意の炉にはさらに薪がくべられましたよ！」

青い瞳に赤い炎を宿すウロ。すると、愛沙が遠慮勝ちに口を開いた。

「あの、コウくん、わたし釣りつてやったことないんだけど……」

「ん？ ああ、そうだったな。紘也とはよく釣り勝負をしていたが、愛沙は釣りにはあまり誘ってなかったからな」

「……そういえば、ウエルシユもやったことありません」

初心者のことを考慮していなかったのか、孝一は顎に手をやって三秒ほど思考し、

「じゃあこうしよう。愛沙にはオレが教える。紘也はウエルシユたちに教えてやれ」

「うん。それなら頑張れるよう」

愛沙は花咲くような笑顔で言った。自分だけ参加できないのではないかと不安だったのだろう。

「フツフツ、紘也くん、あたしには教える必要なんてないですよ！ どうせ優勝は幻獣界でも『釣りキチウロボロス』と名高いこのあたしになるだろうからね！」

「お前はいろんな称号持つてるな」

「どれだけ本当なのか怪しいところではあるが……」。

「そういうことでいいか、紘也？」

「別にいいけど、初心者が負けて肉が食べなくなるのは可哀相じゃないか？」

「まあ、それもそうだな。じゃあその罰ゲームはオレか紘也かウロ

に限定しよう」

話は纏まり、孝一が晴天に拳を突き上げる。

「よし、気持ちが高ぶってきたところで、フィッシングスタートだ
」！

S e c t i o n - 0 9 八 檜 谷 溪 谷 (後 書 き)

次回の更新は9月18日(日)です。

Section - 10 溪流釣り大会

香雅里は部下である術者二人を連れて八櫛谷に存在する唯一の温泉宿 『八櫛亭』を訪れていた。

「こんにちは」

少し声を張って挨拶をしながら香雅里はフロント内を見回した。築百年を超える八櫛亭は、木造建築ということもあり中も外もレトロな雰囲気を醸し出している。たとえ根っからの都会っ子だろうと、ノスタルジックな気分には浸らずにはいられない。そんな赴き溢れる宿である。

「おやまあ、香雅里様。お久しゅうございます」

落ち着いた調子で奥から現れたのは、和服に身を包んだ恰幅のいい中年女性だった。この八櫛亭の女将である。

「相変わらず、いい宿ね」

「おほほ、『いい宿』として維持するために私どもが毎日骨を折っておりますもの」

口を手で隠すようにして笑う女将。社交辞令もほどほどに、香雅里は早速用件を口にする。

「日下部家の宗主はどこにいるのかしら？」

この八櫛亭は日下部家が営業しており、働いている従業員も全て日下部家の人間である。もちろん、この女将も。

「それが……」

女将は申し訳なさそうに目を伏せた。

「もしかして、まだ到着してないの？」

訊くと、女将はいえいえと言うように顔の前で手を振った。

「宗主様は先程、部下も連れずにお散歩に出かけられました」

「え？」

「三十分ほどで戻られると思いますが、お待ちになられますか？」

少し俯き、香雅里は逡巡する。

「（どうしよう？ 秋幡紘也にはすぐ戻るって言っちゃったし……）」

口内で呟く。ここで待っていても、あのマイペースで気紛れな日下部家宗主が本当に三十分で戻ってくる保証はない。それに、ただ待っているのは性に合わない。

「仕方ないわね。ちよつと捜してくるわ」

香雅里は部下たちには残るように命じ、駆け足で八櫛亭を後にした。

渓流釣り大会は二手に分かれることになった。キャンプ場から上流を紘也とウロとウエルシュが、下流を孝一と愛沙が攻めるといふ塩梅だ。

既に開始されてから約三十分が経過している。

紘也はスプーンやミノーなどといったルアーを使い、魚が潜んでいそうな障害物の多いポイントに的確に打ち込んでいる。ルアーはエサほど釣果を上げられないかもしれないが、勝負が速く、かかれればそれは大物である可能性が高い。その証拠に、紘也用のバケツにはそこそこな大きさのイワナが三匹泳いでいる。前半はルアーで大物を狙いながらエサを集め、後半で数を稼ぐという作戦だ。

ビュン！ と紘也の隣で竿が振られる。ウエルシュだ。初心者の彼女にはエサ釣りを勧めた。エサはその辺で捕獲した川虫。女子が気持悪がりそうな姿をしているが、ウエルシュは特になんとも思っていないようで無表情のまま針に刺していた。

そして彼女の釣果はというと……小さなヤマメが一匹。本当は紘也の倍はヒットしているのだが、タイミングを逃してエサを盗られるため一向に釣果が伸びない。そのヤマメだってスレ（口以外の部分に針がかかること）で釣り上げた奇跡の一匹だ。

だが、一匹は一匹である。

「ノアアアアアアアツ!? なんで!? なんであたしの針には小魚一匹かからないのさ!？」

釣れてないよりはマシだ。

ウロは紘也たちから少し離れた岩場に登って釣っている。使用しているのはルアー。理由は「あたしプロですから!」だそう。プロならあんなに騒がしくしない。

「ぷっ」

別段表情に変化のないウエルシュが口元を手で押さえた。必死に笑いを堪えている、を表現しているらしい。

「コラその腐れ火竜! 今笑ったよね!」

地獄耳少女ウロボロスがプンスカと怒りながらこちらに寄ってくる。ああ、これでこの場所もしばらく釣りができないな、と紘也は諦めてリールを巻くことにした。

「笑ってません。……ぷっ」

「笑ってるよね!? 確かに顔は笑ってないけど心で笑ってるよねえ!? あんただって釣ったのはそんな骨みたいなお魚だけじゃないですか!」

「ウロボロス、釣果は?」

「うっ……手頃な棒切れが一匹……」

「? 無?のウロボロスなだけにゼロですね。……ぷっ」

「によわああああっ!? む かつ ぐうぐうぐうぐうぐうぐう!?!」

そんなやかましい口喧嘩を背中に、紘也は移動の準備を進める。

溪流釣りとは一箇所に止まらず点々と移動を繰り返すものだ。紘也たちは既に二回場所を変えている。場所変えの基準は、ウロが喚いたら。

「ちよつと紘也くん!」

面倒なことに白刃の矢が立ってしまった。

「なんだよ、釣りキチウロボロス先生」

「その皮肉が痛いっ!?! っそんなのは過去の話だよ!」

うるさくしない、という釣り人の基本とマナーはいくらブランクがあっても忘れないと思う。

「とにかく紘也くん！ 紘也くんがそんなに釣れてるのはあたしの知らないコツがあるからですね！ 一人だけ知ってるなんてヒキョーだよ！ あたしにも教えて！」

「あー、どっかのプロさんが自分には教える必要ないと言ってたよな」

「過去の話だよ」

「なんでも過去の話にすりや解決すると思うなよ」

「といっても自分だけのコツなんて紘也にはない。いやあるのかもしれないが、それは無意識のことで教えられないようなものではない。「なんでもいいから教えてよう！ 腐れ火竜にだけは負けたくないんですよう！」

「わかつたからくつつくな鬱陶しい！ ちよつと構えてみる」

「観念して紘也が言うと、ウロは自分の竿を剣道の中段みたいなポーズで構えた。」

「やっぱりな。そこからダメだ。プロ野球の四番バッターを意識して構える」

「はい！ コーチ！」

「言われた通りウロはこれからホームランでも打ちそうなポーズになる。」

「次に、ルアーをこうやってお前のパーカーの後ろ襟のところに引っかけて固定する。そうすることで照準が狂わなくなるんだ」

「なるほどなるほど」

「素直に頷くウロ。」

「最後にロッドを大きく振り被って気合を込めて『メイン』と叫びながらフルスイングすれば」

「オウ！ 実は簡単だったんですね」

「アホだ。」

「せーの。メ　　んおあはっ!?!」
バツシャーン!!

自分の振った竿に引つ張られたウロはバランスを崩して川の中に転がり落ちた。

「　　このようにすつ転ぶからよい子はマネしないように」

紘也は笑いを堪えながらコクコクと頷くウエルシュに教授した。

「わかってたんならやらせないでよ!」

びしょ濡れのウロがガニ股で戻ってきた。

「悪い悪い。マジで振るとは思ってたなかつたんだ」

「今度は本当のこと教えてくれるんだよね!」

「ああ、もちろんだ。まず竿を横に置いておき、両足をその場で八字になるようにして立つ。そして手を重ねて前屈みになるんだ」

「ふむふむ。こうですね」

「そのまま姿勢を崩すな。俺がタイミングを計って号令を出すから、お前は『アイキャンフライ』と叫びながら膝を使って全力で前に飛ぶんだ」

「わかりました! 師匠!」

なんていい返事だ。

「いくぞ……今だ!」

「アイキャンフライ!!」

バツシャーン!!

川を中心辺りで大きな水柱が立ち上った。

「これ絶対違うよねえ! 釣りと何一つ関係ないよねえ! てか水泳だよねえ!」

川を中心は足が届かないのか、あつぷあつぷと立ち泳ぎしながら叫喚するウロ。そんな彼女に紘也は背を向ける。言葉が出せない。口を開くと爆笑してしまいそうだ。

なんでこんなのがテストでいい点取れるのか？ まったくもって世の中とは不思議である。

「ちよつと紘也くん聞いているの！？　なんでこんな時に隠れSを発動させ　んあぐつ！？」

変な声が聞こえた。振り向くと、ウロの口に針が刺さって片頬が上向きに引つ張られていた。

針についた糸を辿ると、ウエルシュが竿を握っていた。

「ひよつほふはれふいひゆう！？　はひふんはひよ！？」

そのままバシャバシャと水上で暴れるウロを、ウエルシュはいそいそとリールを巻いて引き寄せる。なんと頑丈な糸と竿だ。

陸に打ち上げられたウロを、ウエルシュは猫を掴むようにして持ち上げ、

「……ウロボロスが釣れました」

「やったな。珍しさ部門では間違いなく優勝だ」

「優勝……嬉しいです」

「ちよつ！？　あたし魚じゃないよ！　ドラゴンですよ！　審査の対象外だよ！」

「でもやかましいからリリースしなさい」

「了解です」

バツシャーン！！

「こんの腐れ火竜め覚えてろ

ッ！！」

流れの強いところに投げ込まれたウロは、悪の下っ端みたいなおとを喚きながら下流の方へと流されていった。

「さて、存在するだけで魚を散らすような奴もいなくなったし、もう少し上流に登ってみるか」

「はい、マスター」

「ふふふ、楽しそうね。お魚は釣れてる？」

溪流の水よりも透き通った声が紘也たちの後ろからした。

知らない声。そこには一人の少女がいた。

「まあ、そこそこに」

適当に返事をしながら紘也は彼女を見据える。小枝のように細い肢体を白いノースリーブのワンピースが包み、頭には鳥の羽根を二本挿した麦わら帽子。髪は長く綺麗な黒髪で、小振りな顔には黒真珠のような瞳が輝いている。背は紘也より五センチほど低いくらいで、恐らく同年代だろう。

『清楚可憐なお嬢様』。そんな言葉がピッタリと当て嵌まりそうな容姿だが、纏っている空気は落ち着きがなく、『天真爛漫な活発系お嬢様』といった感じだ。

彼女は向日葵のような笑顔を咲かせ、

「それはよかったわ。ところでさあ、キミが秋幡紘也くん？」

「！？ どうして俺の名前を？」

「ワオ！ やっぱりそうなのね！」

ウロに似た奇声を発して喜びを表現する彼女に、紘也は警戒のレベルを一段階上げる。今日と明日に限り、この八櫛谷には一般人は入れないようになっていいる。谷の入口となりそうなところは全て厳重に警備されているので、迷い込んできたという可能性も薄い。

要するに

「あなた、何者だ？」

「そうね。名乗るのはこっちが先よね。私は、日下部夕亜^{ひかへゆあ}。日下部家で陰陽師をしてるの」

彼女は魔術世界の人間なのだ。

S e c t i o n - 1 0 渓流釣り大会（後書き）

新キャラ登場です。でも名前だけならちよつと前にこつそり出て
たりしますw

『くさかべ』ではないんです、あえてw

次回の更新は9月22日（木）です。

Section - 11 壊された祠

「……これは、どういうこと？」

遊歩道から少し外れた獣道の先。木々の開けた場所で『それ』を見つけた香雅里は目を丸くしていた。

目の前には古びた祠がある。無論、それだけで驚いたりはしない。香雅里が驚いている理由は、祠がなんらかの衝撃によりバラバラに粉碎されていたからだ。

被害は祠だけであり、周囲の地面や植物にはなんの傷跡もない。壊れ方が不自然過ぎる。誰かが故意に狙ったと考える方が自然だ。

香雅里は身を屈め、転がっている祠の破片を手に取る。

まだ壊されてからそれほど時間は経っていない。でも、一体誰が……？

八櫛谷にはヤマタノオロチの他にも多くの妖魔が封じられている。この祠もその一つ。封印の周囲には？人避け？の結果が張られているため、一般人が悪戯で破壊した可能性はありえない。

「一般人じゃないとすれば……魔術師？」

だが、魔術を学んだ者が封印を破壊する意味を知らないわけがない。葛木家はもちろん、この地域を管理している日下部家がそれをするとはいえない。

葛木でも日下部でもない第三者。こんなことをやるとすれば、噂の宝剣強盗くらいだ。

やはり動いてきた。確証があるわけではないが、香雅里はそうだといい確信を抱いていた。

「ほう。妖魔と遭遇する前に封印の方を見つけたか」

「ッ！？」

突然の声に香雅里は反射的に飛び退いた。

葛木家の宗主候補である自分が、敵の気配に気づけなかった？

瞬時に護符を構え、声のした方角を睨む。鬱蒼と繁った木々の暗

がりに、人影が佇んでいた。真夏にも関わらず黒いロングコートを羽織った、声からして男。大木に背中を預けるようにし、暗いことと、マフラーで顔の半分を隠しているため表情は読めない。

「葛木香雅里だな」

「あなたは何者？」

「貴様は既に知っている。わざわざ答える必要はない」

宝剣強盗。香雅里はもつと深い素生を訊いたつもりだったが、問われて答える愚か者ならとつくに面は割れている。

「この封印はあなたが壊したの？」

「いちいちわかつていることを確認するな。時間の無駄だ」

男は氷でできたナイフのような冷たく鋭い口調で言う。

「天叢雲剣 を寄こせ」

「直球で言ってくるわね。でも残念。ここにはないわ」

「……なるほど。小娘一人に宝剣の護衛を任せるほど葛木宗主も馬鹿ではない、か」

一般人に護衛を任せるほど馬鹿ですがなにか？ という言葉は心の中だけに留めておいた。

欲しい物がないとわかるや、宝剣強盗は興味を失ったように立ち去ろうとする。

「逃げる気？」

「力づくで吐かせても構わんが、貴様は死ぬより辛い目に遭おうとも答えるつもりはないのだろう？」

「そんなの当たり前よ」

「だとすればやはり、時間の無駄にすぎん」

香雅里など宝剣を盗むにあたってなんの障害でもない。言外にそう言われ、香雅里の癩癪玉は破裂する。

くだらなそうに男はコートを翻す。

「この私が、目の前にいる敵をむざむざ逃がすと思ってるの？」

護符から方陣が展開される。そこから現れたのは一振りの刀。青白い反射光を放つ、見事な反りの日本刀 葛木家が有する宝刀の

一つ、あまのひつるぎ 天之秘剣・ひかり 冰迦理 である。

香雅里はそれを握ると即座に一閃した。刀に込められた魔力が氷結し、刃となつて男へと飛ぶ。大木すら両断する切れ味と威力。生身の人間が受ければひとたまりもないだろう。

だが、氷の刃が男を切断することはなかった。

その寸前にボワツ！ と爆散し、大量の水蒸気へと変化して消滅したからだ。

「蒸発した!？」

「フン。 天之秘剣・冰迦理 か。所詮は 天叢雲剣 の欠片から作られた劣化品だな。こんなものだろう」

男の前には櫛状の刀身をした日本刀が浮遊していた。どういう理屈で浮いているのかは知らないが、その宝剣には見覚えがある。

「 八重垣剣 。 火気を操る宝剣ね」

香雅里の頬を汗が伝う。 冰迦理 は水気を操る刀だが、その力は？ 魔力を凍らす？ という限定的なものである。 八重垣剣 が生み出す火力には、悔しいが太刀打ちできない。

それでも香雅里は葛木家次期宗主である。 退くわけにはいかない。ここで『儀式』の邪魔となり得る者を排除しなければならぬ。そんな使命感から再び香雅里は 冰迦理 を構える。

「やめておけ。 貴様では俺には勝てん」

「刀の能力だけでそう決めるのは早計じゃないかしら？」

余裕ぶつてみるも、男の実力は本物だ。勝てないとは言わないが、勝てるとも言えない。

フツ、と男は微かに嘲笑した。

「俺を追うのは勝手だが、ここに封印されていた妖魔は放っておいてもいいのか？ 戦闘能力の低い日下部家では手に負えんぞ。 まあ、だからこそ封印されていたのだろうがな」

「くっ……」

一瞬、香雅里の気持ち揺らいだ。その隙を突かれる形で、 八重垣剣 から熱波が放たれる。空間が歪んで見えるほどの熱量。 香

雅里は咄嗟に顔を腕で庇った。

そして熱波が止んだ時にはもう、男の姿は見当たらなかった。こうなると迷っている暇はない。香雅里は急いで獣道を引き返した。

たぶん、妖魔に狙われるのは

封印を解かれたばかりの妖魔はまず、なによりも先に空腹と魔力を満たそうとするはず。つまり現在八櫛谷にいる人間で最も魔力の高い者が襲われる。それは決して、日下部家ではない。

「大丈夫だとは思うけど、無事でいなさいよ」
残留していた妖魔の魔力を香雅里は追う。

S e c t i o n - 1 1 壊された祠（後書き）

次回の更新は9月25日（日）です。

香雅里の予想は的中していた。

「マスター、幻獣の臭いがします」

アホ毛を忙しく動かしているウエルシュが鼻をひくひくさせてそう言った。紘也は眉を顰める。

「ウロじゃないのか？」

「ウロボロスの臭いとは違います。こちらに近づいています」

真剣に辺りを警戒し始めるウエルシュ。そんな彼女を日下部夕亜と名乗った少女が怪訝そうに見詰める。

「ねえねえ、どうかしたの？」

「いやなんか幻獣 あんたらの言葉だと妖魔か。それがこっちに近づいてるんだと」

「そう言えば、微かに妖魔の魔力を感じるような、感じないような……？」

果てしなく曖昧な調子で首を傾げる日下部夕亜。同時、紘也の魔術に関わった者としての知覚がそれを感知した。

妖魔（＝幻獣）の魔力。当然、『人化』により魔力を極力外に漏らさないようにしているウエルシュやウロのものではない。体外へ放出された、幻獣の『気配』とも呼べるものだ。

紘也は眼球運動だけで辺りを見回す。が、それらしい存在は周囲には見受けられない。

「下です、マスター！」

珍しくウエルシュが叫んだ瞬間 ドゴン！！ と地面が爆発した。

紘也たちはそれぞれ後ろへ飛んだ。巻き上がった土煙の中から現れた幻獣は 蜘蛛だった。しかしただの蜘蛛ではない。タランチュラを熊ほど大きくしたような姿をし、背部から無数のなにかが生えている。否、刺さっている。

矢だ。一目では数えきれないほどの矢が刺さっている。さつきまで誰かと戦っていたのではと紘也は思ったが、すぐにその考えを振り払う。矢があまりにも古い。

「ジャイアントスパイダーですか」

ぼそつとウエルシュが呟く。幻獣ジャイアントスパイダー。名前の通り巨大な蜘蛛の幻獣だ。基本的に体が大きいこと以外は普通の蜘蛛と変わらないが、蜘蛛としての能力は侮れない。背に刺さった戦いの痕がこの幻獣がいかに強力なのかを如実に証明している。

「ジャイアントスパイダー？ 違う違う。あれはツチグモよ！」

能天気な口調で、夕亜。いやそんなのは英語名と日本名の違いにすぎないよ、と現役陰陽師に紘也はツツコミを入れようとしてできなかった。

「危ないっ!？」

紘也は夕亜の腕を掴んで強引に引き寄せた。今の今まで彼女がいた場所を、白い粘着質な糸の束が絡め取る。ツチグモの口から吐き出された糸である。

あのツチグモはここにいる全員を食らうつもりのようなのだ。今この場にウロはいない。どこでなにをやっているんだあのダメ蛇はと思いつつ、紘也は夕亜を抱き留めたまま叫ぶ。

「ウエルシュ！」

「はい、マスター」

紘也の意思を汲み取ったウエルシュが飛び出す。

「マスターを傷つけようとする者は、このウエルシュが？ 拒絶？ し
ます」

ウエルシュの掌に真紅の炎が宿る。彼女が定めた対象のみを焼き尽くす 拒絶の炎。それを、威嚇するように尻部を立てているツチグモに向けて投げ放つ。

バレーボール大の火炎球は、しかし寸前でかわされた。想像以上に素早い。

ツチグモの開けた口から捕獲用の粘着質な糸が次々と射出される。

ウエルシユは腕に 拒絶の炎 をオーラのように纏い、迫りくる全ての糸を的確に焼き払っていく。その表情に焦りの色はない。寧ろ糸を捌きつつ、凄まじいスピードでツチグモに接近している。

ツチグモは巨大な足を振り、爪でウエルシユを串刺しにしようとした。ウエルシユは真上に飛んでかわすと再び火炎球で狙い撃つ。だがツチグモの体を微かに掠っただけで避けられた。

空中のウエルシユに向かって糸が吐き出される。糸は彼女を捉える前に花火のように爆散したかと思えば、蜘蛛の巣状に張り巡らされ、落下する彼女を待ち構える罟となる。

「無駄です」

ウエルシユは両手に鞭状の炎を生成し、新体操のリボン演技をするように振り回して蜘蛛の巣を薙ぎ払った。すたりと着地するウエルシユにツチグモが悔しげに唸る。

普段はぼけーっとして頼りない印象のウエルシユだが、いざ戦闘になるとこれほどまでに圧倒的な実力を発揮するらしい。彼女の『戦闘』を初めて目にした紘也は、真紅に煌めく炎と演舞のような動きの美しさについつい見入っていた。

「これが親父の契約幻獣……」

大雑把で行き当たりばったり感の漂うウロとは大違いのエレガントさだ。

「あのさ、私は別にいいんだけどね。キミ、いつまでこうしてるつもり？」

と、紘也は自分の腕の中に柔らかな温もりがあることに今更ながら気がついた。

「うわっ!?!? わ、悪い……」

ぷくつと頬を膨らませている夕亜を慌てて放す。紘也は狼狽を押し隠すように、

「えーと、大丈夫か? どこか怪我とか「ねえねえ! あの子ってもしかしてキミの使い魔かなんか?」してないか?」

見事に言葉を被せられた。

「まあ、俺の契約幻獣だけどレンタルしてるようなもんだ。本当の主は俺の親父、秋幡辰久なんだけど」

「ワオ！ 超ビップ！ いいなあ。私もあんな可愛くって強い子を式神にしたいなあ」

夕亜の瞳は羨望の色でキラキラしていた。本当に純粹で天真爛漫な人だ。

「そういえばあの矢の刺さってるツチグモ、どっかで聞いたことあったような気がするんだよね。ん〜、どこだったかなあ？ ねえ、どこだか知らない？」

「俺が知るかよ！」

そして唐突に話を変えてくる人だった。

そのまま人差し指で顎を持ち上げてうんうん唸り始めた夕亜はこの際放っておいて、紘也はウエルシュとツチグモの戦いに視線を戻す。

ウエルシュは手を伸ばせば触れられるほどの距離までツチグモに肉迫していた。そこからほとんどゼロ距離で 拒絶の炎 を放射する。

後ろに高く飛び跳ねて回避するツチグモ。だが、前足の一本が炎に吞まれて焼失していた。

それに、遅い。

たかが虫が竜に敵うはずがないのだ。ウエルシュはツチグモのスピードを易々と上回り、一瞬で着地点に先回りしていた。

ウエルシュの魔力が高まり、宙空に炎の魔法陣が描かれる。彼女は肉弾戦よりも、超火力の炎をぶっ放す中距離型としての戦い方が得意だと聞いている。

「この一撃で終わりです」

狙いを定めるようにウエルシュはツチグモを指差した。

直後

「!?!」

ツチグモの尻部から、口からのものと同じ糸が射出された。

魔法陣の方に集中していたウエルシュは避けることができず、頭の天辺から足の先までぐるぐるに絡め取られてしまった。蚕の繭のような姿となつたウエルシュ。まさに蜘蛛が食事する時の獲物の状態である。

描かれていた魔法陣が蠟燭の火のように吹き消える。

「ウエルシュ!？」

まさかやられたのではと紘也は焦った。ツチグモが後ろ足で立ち上がり、鋭い牙を剥く。あのままかぶりついて麻痺毒を注入し、体液と共に魔力を搾取するつもりだろう。

ツチグモが迫る。

その時。

ウエルシュを包んでいた糸が呆気なく燃え落ちた。姿を見せた彼女の全身には、薄い炎の膜が張られてある。あれは彼女のもう一つの特性を付加した炎、あらゆる敵意ある攻撃から身を守る 守護の炎 だ。彼女は？ 守護？ と？ 拒絶？ の両方の特性を同時に使用することはできない。だからあの時魔法陣を消したのだろう。

守護の炎 には攻撃力がないと聞いていたが、蜘蛛の糸を焼くことくらいはできるらしい。

「……少し、驚きました」

ウエルシュは静かな動作で、表情一つ変えずツチグモへ右手を翳す。

真紅の魔法陣が展開。放たれた灼熱の火炎流は、ツチグモの半身を丸呑みして跡形もなく消滅させた。残った半身にもマナの乖離が始まり、間もなく霧散する。

「やったやったあー 凄いいじゃない、えっと……パトラッシュちゃん!」

「ウエルシュです。そんな飼い主と一緒に天へ召されそんな名前ではありません」

ピョンピョンと飛び跳ねてその辺を駆け回り、子供よりも激しく嬉しさを表現する夕亜。名前を間違えられたウエルシュは少しふて

くされているようだった。

「ところであなた、さっきなにか思い出そうとしてたみたいだったけど、もういいのか？」

あのツチグモはどこか必死だったように紘也は見えていた。背に刺さっていた無数の矢からしても、魔術師連盟の実験のせいで無差別召喚された幻獣とは違う気がする。彼女はなにか心あたりがあるようだったので紘也は気になって訊ねてみた。

「そうそう！ 思い出したのよ！ あのね。昔読んだ日下部家の文獻にさっきのツチグモが載ってたの。三百年くらい前かな。もうすつごく凶暴だったらしくってね。三匹纏めてこの八櫛谷に封印されたんだって」

「待った！ あなた今なんて言った？」

紘也は聞き間違えかと思って確認する。夕亜はそんな紘也にキョトンとした様子で、

「八櫛谷に封印されたって言ったけど？」

「お約束のボケはいいから、その前に何匹って言った？」

「え？ 三匹だけど？」

刹那、夕亜の背後の地面が爆発し、二体目のツチグモが彼女に襲いかかった。

逃げると叫ぶ間も、ウエルシュが迎撃に向かう間もなかった。

夕亜は振り返り、瞠目した。一体目と同じく背部に無数の矢を背負ったツチグモは、横開きの口から糸を吐き出そうとしている。

やられる！ 彼女が殺される！

紘也は足を動かし、彼女の方に手を伸ばすが、間に合うはずがない。こんなことなら彼女を抱き留めたままいればよかった。

吐き出された蜘蛛糸が、夕亜を包み込む。

次の瞬間

バチイイツ！？

突然、彼女の周囲に力場のようなものが現れ、糸ごとツチグモを吹き飛ばした。

「え？」

呆気にとられる紘也。なにが起こったのか、彼女がなにをしたのか、わからなかった。

一体どこから取り出したのか、無数の護符が夕亜を守るように周回していた。

「縛　！！」

先程までの彼女とは違う凜とした表情に、覇気のある落ち着いた声。彼女の周りに展開していた護符が引つ繰り返っているツチグモの周囲に移動する。

夕亜は右手を前に突き出し、開いていた五本の指を一気に閉じる。

「封滅　！！」

ツチグモの周囲を円運動していた護符が、一斉にその体へと張りついた。もがき苦しむツチグモは、塩をかけられたナメクジのごとくみるみる収縮していく。

そして最後にはなにも残らなかった。あれだけあった護符もどこかに消えている。

「はあ、ビックリしたなあ」

間の抜けた口調で、夕亜。さっきの凜とした表情と覇気のある声はどこへやら。

「マスター、なにが起こったのですか？」

ウエルシュが紘也の服の裾を引きながら訊いてきた。

「いや、俺もわからん」

夕亜が陰陽師だということは忘れていないが、日下部家の能力は戦闘には不向きだと聞いている。それなのに、彼女はたったの数手でツチグモを消滅させてしまった。

「封印したんだよ、えっと……エリザベスちゃん」

「ウエルシュです。もう一文字も合ってますん」

この人はわざとやってるんじゃないだろうかと紘也はそろそろ思

い始めてきた。

「どういうことだ？」

「うん。ちよっと待ってね。えっと……あっ！ あったあった。これこれ」

夕亜はさつきまでツチグモがいた場所から漬物を漬けるとすれば手頃なサイズの石を拾う。その石には先程の護符が数枚、ピタリと貼りつけられていた。

「あのツチグモはここにいるんだよね。どう？ 凄いでしょ？ 日下部家でもこんな一瞬で封術を使えるのって私くらいなんだよ。ああ、でもこれって即席の封印だから後でちゃんとしたものに変えないといけないかな」

まるで自分の成果を自慢するように彼女は言う。

「まだ生きてるってことか？」

「うん、そう。日下部家は『封術師』の一族だから、術式の殺傷能力は低い。ていうか封術ってね、言わば対象を？ 時の流れのない異空間に閉じ込める？ ってもで滅することはできないの。まあ、説明しなくてもキミならわかるよね？」

つまるところ封印している間はマナの乖離も発生することはない、そういうことだ。

「あとさ、陰陽師って？ 人を守り魔を滅する？ ためにあるじゃない？ だから一つ謝っておきたいことがあるの。ごめんね。私もキミたちと一緒に宝剣強盗と戦いたいんだけど、封術を人間にかけるなんてことは不可能なの。あつ、でも使い魔とか式神とか魔装具の封印なら任せて！ 得意だから！」

「あんだ、本当に何者だ？ あの実力。日下部家の下っ端陰陽師ってわけじゃないだろ？」

紘也は魔術師ではないが、魔術師の知識はある程度持っている。

だから陰陽師の術者が誰しも彼女レベルの力だとは思えない。

「あー、そういえば言っただけじゃなかったかな。じゃ、改めて自己紹介するねー！」

ぼりぼりと頬を掻き、夕亜は一拍置いて、

「この子は日下部夕亜。日下部家の陰陽師で、こんな風だけど歴とした宗主よ」

息を切らして現れた香雅里に台詞を横から奪われた。

「宗主！？ 嘘だろ！？」

流石にそこまで紘也は想像していなかった。

「ほ、本当よ！ キミ、ちよつと失礼じゃない？ ていうか香雅里ちゃんは私の台詞盗らないでよう！ ってあれ？ 香雅里ちゃん？ ワオ！ 本物の香雅里ちゃんだひつさしぶり〜」

「ちよつと夕亜抱きつかないでよ！ 苦しいじゃない！」

「あう。久々に会った親友を突き放すなんて、私は香雅里ちゃんをそんな風に育てた覚えはないわよ！」

「あなたに育てられた覚えなんてないわよ！」

二人の遣り取りは、どことなくウロのそれと似通っていた。あの二人は気が合うかもしれない。

「てか、お前、俺たちの他に友達いたんだな」

「当たり前よ！ 秋幡紘也、あなたは私をなんだと思ってたの？」

私にだつているわよ。友達の一人や二人くらい」

「そんな、香雅里ちゃんに私の知らない友達がいるなんて……浮気？ 浮気なの？」

「そしてそこは黙りなさい！」

ぜーぜーはーはーと、やってきた時よりも息を切らしている香雅里。彼女はこんな役ばかりだなと紘也は少し憐憫の念を抱いた。

「そんなことよりも、ここで戦闘があつたみたいだけど大丈夫なの？」

心配そうに香雅里が問う。紘也は得心がいった。戦いを感知したから香雅里は息を切らしてやってきたのだ。

「まあ、特に誰も怪我はしてないよ」

「そう。それはよかったわ」

ほっと香雅里が安堵の息をついたと思えば、不意に表情を真剣なものにシフトさせる。

「気をつけなさい、秋幡紘也。あなたたちが戦った妖魔は例の宝剣強盗が仕向けたものよ」

「どうしてわかるんだ？」

「遊歩道脇の封印が破壊されていたの。それに宝剣強盗本人にも会ったわ。逃げられてしまったけど……」

忌々しげに香雅里は表情を曇らす。

「とにかく、宝剣強盗がいつなかに仕掛けてくるかわからないわ。遊ぶのはいいけど、警戒だけは怠らないで」

「わかった」

香雅里の忠告に紘也は首肯する。すると、ウエルシュが思い出すように紘也の服を引っ張った。

「あの、マスター。夕亜様の話が本当なら、まだあの幻獣は一匹残っています」

「あっ、そうか。やばいな。孝一たちが襲われるかもしれない。すぐに合流しよう」

ウエルシュがコクリと頷く。『襲われる』が現在進行形、または過去形でないことを祈りつつ、紘也たちは下流の方へ向かおうとした。

と

「ウロボロスビィィィィィィィィィィィィィィィィム！！」

謎の絶叫と共に、遠くの方から天へ向かって一条の光が伸びた。その光線の先端に巨大な蜘蛛のような影があったように思えたが、影も光も幻かなにかだったかのようにすぐに消え去った。

紘也たちは足を止める。

「なんか、大丈夫そうだな」

「はい。あの幻獣の臭いはもうしません」

それから十分後、紘也たちはウロ、孝一、愛沙の三人とキャンプ場で合流したのだった。

S e c t i o n - 1 2 封術師（後書き）

次回の更新は9月29日（木）です。

「『^{せんせい}師匠』と呼ばせてくれ！」

夕刻。皆が和気藹々とバーベキューを楽しんでいる中、突然膝をついた孝一が夕亜にそんなことを言い出した。

「それはもちろん、『師匠』と書いて『せんせい』と読むんだよね？」

「その通り！」

「ワオ！ 私、封術以外で弟子ができたのなんて初めて」

夕亜はウキウキを隠せない笑顔ではしゃいだ。

実は合流した後、昼食がたら夕亜と自己紹介を交わし、渓流釣り大会を仕切り直すことになったのだ。

『なにそれ面白そう！ 私も混ぜて混ぜて！ ねえねえ、いいでしょう？』

と夕亜が駄々を捏ねるように言ってきたため彼女も急遽参加することが決定した。そして嵐のように優勝を掻っ攫っていったから驚きだ。数は同数優勝するはずだった絃也と孝一の三倍、大きさは主級の猛者を打ち取り、珍しさではサンショウウオを釣り上げていた。敵うわけがない。孝一が弟子入り志願する気持ちもわかる。

そして気になる最下位は

「ウロ、ピーマン焼けたぞ」

「絃也くん絃也くん、盛ってくれるのはありがたいんだけど、あたし肉が食べた」

「キャベツとかタマネギもあるぞ。あ、もやし食うか？」

「絃也くん絃也くん、だから肉を」

「スイカも焼けたぞ」

「スイカは焼かないでよ！？」

期待通りウロだった。彼女は一匹も釣っていないどころか、魚に食いついてすらもらえなかったようだ。最初から初心者を名乗って

いればこうなることもなかっただろうに。アホだ。

「かがりくん、紘也くんがイジメるよう」

「だからってなんで私に泣きついて来るのよ!？」

「あつ! それいい! 私も今度からウロちゃんみたいにな」かがり
ん』って呼ぶわね」

「いやよ! 夕亜にまでそんな恥ずかしい愛称で呼ばれたくないわ!」

孝一と溪流釣りについて熱い議論を行っていた夕亜がいつの間にか移動していた。飽きたのだろう。たぶん。

「えー。どうしてウロちゃんはよくて私はダメなのー?」

「だいたいウロボロスにだって許可した覚えはないわよ!」

「そ、そんな、かがりんはかがりんでかがりんなのになんでかがりんで呼んじゃいけないのさかがりん!」

「あーもう! かがりんって呼ばないで! あなたは邪魔だからあつちに行つてなさいよ、しっ! しっ!」

「野良犬扱いつ!?!」

追い払われたウロは涙目で焼きスイカにかぶりつく。彼女の目の前ではウエルシュがスペアリブに舌鼓を打っていた。

「……皆さんとするバーベキューは楽しいです」

「うん。そうだね。この前のカレーパーティーも楽しかったけど、お外するのはまた一味違った楽しさがあるんだよう」

肉や野菜を引つ繰り返しながら愛沙が相槌を打つ。彼女のニッコニコした笑顔は夕暮れの中で光り輝いているようだった。

些か賑やか過ぎるほどに野外晚餐会は続いていく。

「腐れ火竜! その肉あたしに寄越しなさい!」

「嫌です。ウロボロスにはウエルシュの釣った魚をあげます」

「そんな骨と皮と鱗しかないような魚もらっても嬉しくないよつ!」

「うん! 決めた! 私も今夜は香雅里ちゃんたちとテントで寝る!」

「は? なに言ってるのよ、夕亜。もともとギリギリな人数なの

よ。あなたが入るようなスペースなんてないわ」

「大丈夫よ香雅里ちゃん。誰かが男の子のテントへ移動すれば万事解決よ！」

「だ、ダメよそんなの！」

「はいはいはい！ あたし立候補！ 夕亜っちいいこと言うね！」

「……ウエルシユも立候補します」

「却下」

「あうう、紘也くんのいけずう……」

「テントなら予備のがあったぞ。それを組み立てればいいんじゃないか？」

「そっかあ！ じゃあよろしくね、孝一くん」

「え？ いやちよつと師匠、そこはみんなで組み立てた方が「よろしくね」「早……了解」

「安心しろ、孝一。俺も手伝うから」

「サンキユ、紘也。持つべき者は心の友だな」

「えへへ、今夜は一段と楽しくなりそうだよ。さあ、みんなどんどん食べて。ユアちゃんも遠慮しなくていいよ」

「鷺嶋さん、この子が遠慮してるように見えるのなら眼科へ行くことをオススメするわ」

会話の途切れることのない夕食。楽しい時間はあっという間に過ぎるもので、後片づけをする頃には辺りはすっかり暗くなっていた。皆がウロの用意していた花火に興じている中、紘也は香雅里と食器を洗っていた。孝一が作った後片づけ当番のクジ引きに見事当選してしまった二人である。

大量の鼠花火を笑いながら空中に放り投げる夕亜を眺めつつ、紘也は隣の香雅里に聞こえるように言う。

「日下部家の宗主か。やつぱそんな風には見えないよな」

「そうね。あの子が正式に宗主になってからまだ一年も経ってないけど、自覚くらいは持ってほしいわ」

「どうしてまた、日下部はあの年で宗主なんかになったんだ？ 力

があるだけでなれるようなもんじゃないだろ？」

「前の宗主　あの子の父親が亡くなったのよ。あの子、物心つく前に母親も亡くしてるし、たった一人の肉親だった兄も半年前に妖魔との戦いで戦死。だから宗主の座が空席になって、あの子が収まった。日下部家宗家にあの子以上の実力者がいなかったこともやっぱり大きな理由の一つね。それに、あの子は人気もあつたみたいだし」

香雅里の話聞いて紘也は押し黙った。幻獣と駆け落ちした香雅里の兄の話とは違い、こちらは相当にヘビーだ。本人に直接訊かなくてよかつたかもしれない。

「だからこそあの子は無理やりにも明るく振舞ってるんじゃないかしら？　元々あんな感じだったけど、今日会ってみてさらに輪をかけたようだったわ。それにあの子、自分から宗主に立候補したのよ。あの子なりに日下部家を引っ張って行こうとしているのかもね。昔からそういうところはしっかりしてるのよ」

「今日感じからして、けっこう付き合い長いみたいだな」

「ええ。初めて会ったのは五歳の時よ。家が遠いから滅多に会うこともなかったけど、ずっと親友を続けてる。私が失敗して沈んでいた時とか、あの子の明るさに何度助けられたかわからないわ。でも、その関係は永遠には続かない……」

香雅里の言葉は最後まで続かなかった。紘也は怪訝に思つて彼女を見る。その表情は暗く、悲しそうで、寂しそうで、今にも泣き崩れてしまいそうな気持ちに必至に堪えている。そんな印象を受けた。しかし、暗く重くなった空気にはすぐに明るく軽い光が差すのだった。

チリチリと弾けるオレンジ色の線香花火が香雅里の前に差し出される。その儂げな光よりも遙かに明るい笑顔の日下部夕亜がそこにいた。

「香雅里ちゃん、食器洗いなんで後にして一緒に花火しょ？」

他のみんなも紘也たちを呼んでいる。紘也は思わず苦笑した。後

片づけしろと言い出したのはそつちなのに、なんて勝手に都合のいい連中だ。

「夕亜、あなた、平気なの？」

「ん？ なんのこと？ それより見て見て。この線香花火すつごくキュート」

「あ、うん。確かに可愛いわね」

「でしょでしょ」

「なんだろう？」

紘也は二人の遣り取りになんとも言えない違和感を覚えた。香雅里が暗くなつたのは夕亜の過去を紘也が訊いてしまったためだと思つていたけれど、香雅里に「平気？」と問われた夕亜も無理やり笑顔という仮面を被つたように見えた。

二人はなにかを隠している？ いや

恐らく作り笑いではない笑顔の彼女たちだが、その声は微かに震えていた。もちろん、そんな気がするだけで確信があるわけではないが、

なにかを、恐れている？

そのように紘也は感じた。しかし考えて答えが出るようなものではないし、直接問い詰めるのも野暮だ。紘也の勘違いという可能性の方が大きい。

だから、紘也はなにも気づかなかつたことにした。

「よし、俺たちも花火に混ざろうぜ」

「え？ でももうちよつとで終わるわよ？」

「だったら後でもいいだろ。それに今行かないとあいつらは遠慮せず全部使っちゃう」

八本の花火を指の間に挟んで「八刀流・花火ブレード！」とか叫びながら振り回すウロに対し、ウエルシュがロケット花火で応戦している。そんな決してよい子はマネしてはならない光景を目に、香雅里は呆れたように呟く。

「それもそうね」

夕亜が香雅里の手を引く。

「ほらほら、香雅里ちゃん早くう！」

「あっ、ちょっとそんなに慌てなくてもちゃんと行くわよ、夕亜！」
香雅里は困った風に言っているが、その表情は笑顔だった。

紘也は明日の『儀式』が無事に成功することを祈りながら、手早く残りの食器を片づけることにした。

S e c t i o n - 1 3 日下部夕亜(後書き)

次回の更新は10月2日(金)です。

S e c t i o n - 1 4 湯上りカードファイター！ (前書き)

第二章

Section - 14 湯上りカードファイト!

かぼーん。

という擬音語がとてもよく似合う八櫛亭の露天風呂。ゆったりとした空間に小プールほどの岩風呂が広がっており、その向こうには檜風呂もある。もはや滝としか言えない大きな打たせ湯を見ると、意味もなく修行をしてみたい衝動に駆られてしまいそうだ。

やはり温泉は広ければ広い方がいい。この露天風呂は谷に沿った崖の上にあるため、開けた空間からの眺めも昼間ならば絶景だろう（下を覗けば谷底までの距離に青ざめそうになるが）。

「温泉なんていつ以来かな？ 五年は入ってない気がする」

紘也は岩風呂に肩まで浸かり、星の瞬く夜空を見上げながら感慨に耽るように言った。

「オレもしばらくぶりだな。それにしても貸し切りってのはいいもんだ」

のんびりと湯に浸かっている紘也の傍を孝一が背泳ぎで横切って行く。いくら谷自体に一般人の来場を御遠慮しているからと言っても、温泉で泳ぐのは遊び過ぎだ。気持ちにはわからないでもないが、腰に巻いてあるタオルがぼろりとなっても誰も喜ばない。

「なあ、孝一たちも昼間幻獣に襲われたんだろ？ 本当にどこも怪我してないのか？」

「まあな。危ないところだったがウロのおかげで助かった。しかし、なぜあの時彼女は上流から死体のように流れてきたんだ？」

「アホな理由だから気にすんな」

孝一や愛沙の様子から掠り傷一つ負っていないことはわかっていた。それでも確認したことで紘也はより安心することができた。一応ウロには感謝しなくてはいけない。

でもあの蛇の場合、つけ上がってなにを求めてくるかわかったものじゃない。

「絃也くん絃也くん、お背中流しますよ」

風呂上りのコーヒー牛乳でも奢ってやればいいだろうか。

「絃也くん絃也くん、お背中流しますよ」

そうになると、ウエルシュにも買ってやる必要がある。小銭どれだけ持ってきたらだろうか？

「絃也くん絃也くん、聞いてる？ お背中をジュバババガギギーンって流すとウロボロスさんは言ってるんですよ？ ねえ？」

……明日は晴れるかなー？

「そこ絶対どうでもいいこと考えてるよね！？ スルーしちゃいゃん！」

岩風呂を両断する扉の向こう側　つまり女湯にいるはずのウロ
つばい嘆き声が聞こえた気がする。きつと幻聴だろう。

「おいおい絃也、貸し切りなのをいいことに男湯に女を連れ込むんじゃない。頼むからオレの目のやり場に制限をつけなしてくれ」

「連れ込んでねえよ！ こいつが勝手に来てるんじゃないか！」

「絃也くん！ やっぱりあんた気づいてるんじゃないですかっ！」

「チッ」

「なんか舌打ちされたっ!？」

バレてしまったのなら仕方ない。絃也は倦怠感に似た感情のまま彼女の方に視線を向ける。

小タオルを両手持ちして絃也を待ち構えていやがった。『スタンバイOKヘイカモン!』とでも言いたげなウザい表情でこちらを見ている。孝一もいるからなのか、バスタオルで隠すところはきちんと隠していることだけは幸いだった。それでも黄金比的なしなやか且つ凹凸ある体のラインが浮き出っていて目を逸らしたくなるが……。

湧き上がってくる男子としての感情を深呼吸で押し殺し、絃也は努めて平常心を保ったまま口を開く。

「あえて訊く。なぜお前がここにいる？」

「あや？ 絃也くん、意外と落ち着いてるね。普通ならこんな美少

女がお風呂に乱入してきたら顔を真つ赤にしてアワアワするもんじやあないんですか?」

「温泉というイベント地でお前がなにかしらアクションを起こすことは想定済みだ」

「あたし単純だと思われてる!?!」

ガビーン、という文字が頭上に現れそうな表情で叫ぶウロ。温泉では静かにしてもらいたい。他の客に迷惑だ。紘也と孝一しかないなけれど。

「ともかくにも、紘也くんには二つの選択肢を与えます!」

そう言ってからウロは一本目の指を立てる。

「その一、あたしと一緒にくはずほずれずな背中の流しっこをする」
二本目の指が立つ。

「その二、あたしが女湯に帰った後でノゾキをする。もしくはあたしに永遠の愛を誓う」

「選択肢おかしいだろ?!? あとさりげなく三つ目を入れてきたよな今?!?!」

「だって黙って聞いてりや紘也くと孝一くんの会話にはエロさが足りないんだよ! アレですよ! すぐそこに女湯があるんですから、もつとこつろ『今ごろ女湯ではウロボロスたちが生まれたままの姿なんだろうなあハアハア』『よしレッツNONOZOKIだぜ!』的な会話があつてもいいじゃあないですか! あんたらホントに健全なる男子高校生かつ!」

「男子高校生舐めんなよ! そもそも女子の台詞かそれはっ!」

微妙に声を低くして喋ったのは紘也と孝一を真似たつもりなのだろうか? 全然似ていない。

「それはそうと現在紘也くんはゲーム画面風に三つの選択肢を幻視しているはずだよ。さあ、お選びなさい。ウロボスルートを確認させる正解の選択肢を!」

「ああ、あるな。ある。選択肢、ちゃんと見えてるぞ」

?目潰し

?沈める

?崖から突き落とす

一瞬たりとも迷う必要はなかった。

「ウロ、苦しゅうない。近こう寄れ」

寛容な殿様みたいな柔らかい表情で紘也は手招きする。するとウロはピアと宝石箱を開けたような輝かしい笑顔になり、岩風呂へ飛び込んだ。そのまま蕩けそうなニヤニヤ顔で歩み寄ってくる。

「んもう紘也くんではいきなり大胆なんだからあ　孝一くんもいるってのにあんなことやこんなことやそんなことまでやつちゃう気だね。ハッ！　そうか見せつけるんだね！　孝一くんにはあたしと紘也くんが一つになったことの証人になってもらうんですね！　紘也くんって意外と見られて興奮するタイ　」

グサツ！（ウロボロスの両目が刺突される音）

ガシツ！（ウロボロスの頭が鷲掴みされる音）

ザブン！（ウロボロスの顔面が湯船に沈む音）

ブクブク（ウロボロスの口から出る気泡の音）

紘也はウロが完全に動かなくなつたのを見計らい、彼女を岩風呂の端まで引きずると、ポイツと崖から落とす　のは流石に酷過ぎるので女湯に放り捨てた。

ザッブーンと女湯の方から水柱が上がる。「敵襲!？」「あら？　ウロちゃんいないと思ったらあつちに行つたのね」「はわわわ、ウロちゃん大丈夫!？」という女性陣の叫びが男湯にまで聞こえてきた。

紘也は頭を押さえる。

「まったく、あのアホ蛇の相手をしてると非常に疲れる」

「その通りですね、マスター」

声に振り向く。当たり前のように赤髪の少女が湯に浸かっていた。

「……」

「……」

「なぜいる？」

「お背中お流しします」

ポイツ。

あーれー、と棒読みの悲鳴を上げつつ放物線を描いて女湯に落ちるウエルシュ。紘也は、ふう、と一呼吸つくど腕で額を拭った。

「本当にあいつらは、油断も隙もない」

「紘也、お前、段々と鬼畜になつてるな……」

若干引き気味の孝一の呟きが、随分と静かになつた露天風呂に響いた。

「ひーろーやーくーん」

紘也が風呂上りにコーヒー牛乳を飲んでいると、宿に置いてある浴衣に着替えてきたらしいウロが怨めしそうに歩いてきた。彼女の後ろにはウエルシュもいる。

「どうした、ウロ？ そんな幽霊みたいな声出して」

「どうした、じゃないよ！ 酷くない！？ どの世界にヒロインに目潰しして窒息させて放り投げる主人公がいるんですか！ おかげでほら見てよここ、タンコブができたじゃあないですかっ！」

「……マスター、頭を打ちました。痛いです」

ウロとウエルシュは涙目で痛そうに頭を擦っている。タンコブ一つで済んでしまうところが流石は強靱なドラゴン族の幻獣である。もっともウロはとづくに？ 再生？ してしまっているはずなのだが。ところで誰が主人公で誰がヒロインだ。

「まったく紘也くんってばもう、いくらギャグパートだからって常人離れした腕力出しちゃいかんでしょ！」

「なにを言ってるんだお前は？」

放り投げたことを言っているのなら、こいつらの体が中身ないんじゃないかと思えるほど軽いからできたことだ。

「あうう、温泉ラブラブイベント大作戦失敗……」

涙を滂沱として流すウロ。少しやり過ぎたかもしれない。

「まあ、コーヒー牛乳買ってやるから機嫌直せよ」

「直った！ やっぱ温泉とか銭湯と言えば腰に手をあててコーヒー牛乳ですよ」

「ウエルシュはフルーツ牛乳がいいです」

なんとも扱いやすい奴らだ、と紘也は呆れながら自販機に小銭を入れるのだった。

すると

「あなたたち、他にお客さんがいないからって騒ぎ過ぎよ」

たった今温泉から出てきたらしい香雅里が開口一番に刺々しく言うてきた。

「でもそっち楽しそうだったなあ。私も行けばよかった」

残念そうに肩を落とす夕亜。その横で愛沙が苦笑していた。三人とも浴衣姿で、湯上りの火照った肌や乾き切っていない髪が艶めかしさを最大限に醸し出している。普段はなかなか見られないそんな女性たちの姿に、紘也はつい見入ってしまった。

「むむむ。どうやら紘也くんは我々美少女の浴衣姿に見惚れてるみたいだね。『あの薄布の下はノーブラかなデュッヘッ』ってイケない妄想してるね。イエス！ 紘也くんの期待通りウロボロスさんはノーブラですよ」

ピラリとあざとく浴衣を着崩すウロに、紘也は彼女のために買ったコーヒー牛乳の蓋を開けて一気に飲み干した。

「なああああああつ！？ あたしのコーヒー牛乳がああつ！？

温泉の夢がああつ！？」

「ほらウエルシュ、フルーツ牛乳」

「……ありがとうございます、マスター」

「そして完全になかったことにされた!？」

咽び泣くあまり涙の海に沈没するウ口。見ていてウザいので仕方なくもう一本買ってやったらすぐに復活した。本当にこの蛇はどこまでも調子がいい。

と、紘也は香雅里たちが胸の前で腕をクロスさせるようにして距離を置いていることに気づいた。

「秋幡紘也、あなた、そんなことを考えてたの？ ヘンタイね」

「『デュツヘツヘ』って面白い笑い方するわね、キミ。やっぱりヘンタイさんてみんなそうなの？」

「ヒロくん、ヘンタイさん？」

「待って待て。あのアホ蛇の言うことを真に受けるな。見惚れてたことはまあ、事実だけだ」

なんか後ろで「あたしドラゴンだよ！ アホでも蛇でもないよ！とか叫んでいる馬鹿がいるけど丁重に黙殺する。

「やっぱり変な目で私たちを見てたのね！ 破廉恥男！」

「だから違うって！ ていうか、そもそもなんでお前らは浴衣着てるんだよ。寝る場所は宿じゃなくてテントだろ」

「大丈夫。テントに戻る時はちゃんと着替えるよう。今はこっちの方が涼しいのです」

「気をつけて鷺嶋さん。この秋幡ヘンタイは浴衣姿で寝ている私たちを妄想しているわ」

「してねえよ!？ 秋幡ヘンタイって誰だよ!？」

この話題でスルースキルを発揮するほど紘也の精神は頑強ではない。孝一に助けをと思って見てみると、奴はソファアに座って抹茶アイスを食べながら芸人のライブでも観戦しているように紘也たちの遣り取りを眺めていた。こいつ楽しんでやがる。

誤解を解いてもらうのに五分ほどかかってしまった。そうなるからようやく、アイスを食べ終わった孝一が立ち上がる。

「よし、じゃあなにして遊ぼうか」

今日の彼はとにかく遊ぶことしか考えていないようだ。いや、そ

れは普段もか。

ウロが遊びと聞いてさらにテンションを跳ね上げる。

「なにをして？ フツフツフ、愚問だね孝一くん。温泉と言えばア
レしかないじゃあないですか」

「やはりな。どうやらオレとウロは同じ考えに至っているようだ。
そう。温泉で遊びと言えばアレしかない！」

心が通じ合ったかのようにウロと孝一はお互いを見やる。そして
時代劇の悪役みたいにくつくつと笑う二人は、思考も息も完全にシ
ンクロして

「卓きゅ「世界の幻獣TCGです！」……なんだと？」

いなかった。これ以上ないくらいチグハグだった。

孝一は作戦失敗の報告を受けた司令官のような顔でウロを見てい
る。対するウロはそんな孝一などどこ吹く風というように、いつも
の無限空間から大量の紙束をばら撒いた。

世界の幻獣TCG。世界魔術師連盟が制作販売している一般人の
間でも人気絶頂のカードゲームだ。本物の魔術師たちによって制作
されているだけあって、魔術や幻獣の設定はリアリティがあり、イ
ラストも美麗で精緻。これまでカードゲームと言えばトランプくら
いだった紘也や孝一も現在進行形ではまっている代物だ。

が、温泉だからこれという意味がさっぱり理解できない。それは
孝一も同じだろう。カードが湧き水のように溢れて床を侵食してい
く光景に、愛沙は苦笑し、香雅里は言葉を失い、夕亜は興味津々
と瞳を輝かせている。

「フツフツフ、実は最近新弾が発売されました。紘也くんがテスト
勉強に勤しんでいる間にざっと百箱ほど大人買いしてきたんですよ」

よくわからないが、それはもう大人買いではなくセレブ買いだ。
毎回それだけ買っているのだとすると……なるほど、床が埋まるわ
けである。

「なに！？ なぜそれを早く言わないんだ！ くそつ、卓球なんてしている場合じゃない！」

孝一の意味が持つて行かれた。

「いや待て孝一、温泉まで来てカードゲームってどうなんだ？」

「なにを言っているんだ紘也。修学旅行でトランプは当たり前だろう？ 皆で温泉宿、そしてカードゲーム。なにも間違っていない！」

間違いだらけだ！ なんてもう言えない雰囲気には孝一は移行してしまっている。諦めて紘也も参加することにした。実は紘也も新弾とやらが気になってウズウズしていたことは内緒だ。

「今回の新弾は『東アジアエディション』なのですよ。ほらこれ、昼に戦ったジャパニーズ風ジャイアントスパイダー『ツチグモ』。ふむ、2000/2000のバニラだけど低コストだね。あ、バニラってのは『能力なし』って意味です。テスト出ますよ」

と楽しそうに、ウロ。紘也たちと出会うまで相手をしてくれる人が少なかったのか、表情が活き活きとしている。

「というかウロ、お前は百箱もカード買うほどの大金をどこから持つて来たんだ？」

「ウロボロス印のエリクサーは億単位で売れるんですよ」

「売ったのかよ！？ そんなに金持ちならコーヒー牛乳一本くらいで泣くなよ！」

「アレは紘也くんを買ってもらうからこそ価値があるんだよ！」

ウロの金の使い道がどうであれ、エリクサーで一人でも多くの命が助かっているのならばよしとしよう。紘也はポジティブに考えることにした。

「……あの、マスター。世界の幻獣TCG。その、ウェルシュも持っています」

紘也たちがカードを漁り始めると、ウェルシュが決然と言ってきた。少し迷いが見えたのは、彼女が真面目キャラを通そうとしているからだ。はつきり言って、紘也が彼女を真面目と思ったのは最初だけである。

「マジで？ 腐れ火竜もやってたんだ」

コクリとウエルシユは一つ頷き、右の掌に真紅の炎を宿す。どう
いう理屈なのか、それが弾けるのと同時にデッキと思われるカード
の束が出現した。束を両手に持ち直し、『サインください』のポー
ズでウエルシユは紘也に頼む。

「マスター、対戦してください」

「ああ、いいぜ。新弾とやらのカードを見た後にな」

対戦を承諾すると、ウエルシユの唇が微かに綻んだ。その無表情
の中には告白に成功した女の子みみたいな感情があったような気が：
…しないでもない。

「ウロちゃん、可愛い幻獣さんのカードある？」

「あるよあるよ、愛沙ちゃん。『白虎』なんてどう？ レアですよ」

「ネコさんだねえ」

「いや虎だから。ネコ科だけれども」

とりあえずコレクター色の強い愛沙は一枚あれば満足するようだ
った。

はあ、と香雅里の方から溜息が聞こえた。

「付き合いきれないわ。ここが学校だったら全部没収してるところ
よ」

勝手にやってなさい、というように香雅里は背を向ける。逆に夕
亜がカードのプールへと飛び込んできた。

「わあ！ なにこれ！ すごく楽しそう！ 私もやる！ ねえ、
混ぜて混ぜて！」

「ゆ、夕亜はダメよ！ これから明日の段取りの話し合いがあるん
だから」

「えー、ちょっとくらいいいでしょう？ かがりんのケチ」

「か、かがりんって言わないでって言ったでしょ！ ダメなものは
ダメ！」

彼女たちは昼にできなかつた話し合いを行うことになっている。
それが終わるのを待ってから、紘也たちはテントへと帰る予定だ。

「それじゃあ、私たちはしばらく外れるから」
そう断ってから、香雅里は夕亜の首根っこを掴んで引きずるよう
に去っていった。「い〜やくだ〜私もアレやるっ!」という駄々っ
子のような声がしばらく響いていたのは語るまでもない。

その後

「さあ紘也くん、新弾の導入により強化されたあたしの『ウロボロ
スデッキ』と勝負だよ!」

「ウエルシュとの対戦が先な。孝一とやってる」

「なぬ……わかりましたよ。紘也くんは最後っラスボスことですね。さあ
孝一くん、いざ尋常に勝負!」

「ははは、簡単には負けないぜ」

「余裕ぶっこいてられるのも今のうちですよ! 立ち上がれあたし
の分身!」

ウロと孝一が対戦を始めたことを確認し、紘也はウエルシュを見
る。

「じゃ、こっちもやるか」

「はい、マスター。ウエルシュは『ウエルシュ・ドラゴンデッキ』
です」

「うん。聞かなくてもなんとなくわかってた」

結局、ウロとウエルシュはひたすらに弱かった。

S e c t i o n - 1 4 湯上りカードファイト！（後書き）

サブタイトルにするほど対戦してないですね。いえしてますけど対戦シーンは皆無です。

次回の更新は10月6日（木）です。

Section - 15 夜襲

草木も眠る時間とはよく言ったもので、人里離れた溪谷の夜は異様とも思える静寂さを見せていた。

川のせせらぎだけが聞こえる。もつと虫たちが静かながらも心地よい音色を奏でてくれると思っていたが、それも無い。

だからなのか、紘也はエアーマットに寝転んで目を閉じていても一向に眠れそうになかった。今日はいろいろと騒ぎ倒して疲れているはずなのに、自分でも不思議なほど目が冴えている。

同じテントで横になっている孝一はまだ起きているのだろうか？寝息らしき呼吸音も聞こえるし、起こしては悪いので声はかけないでおく。

『気をつけなさい、秋幡紘也。あなたたちが戦った妖魔は例の宝剣強盗が仕向けたものよ』

昼間、ツチグモに襲われた後の香雅里の言葉だ。眠れないとなるとどうしてもなにかを考え込んでしまう。

『とにかく、宝剣強盗がいつなにを仕掛けてくるかわからないわ。遊ぶのはいいけど、警戒だけは怠らないで』

いつ襲ってくるかわからない敵。この？夜？という時間帯は最も警戒しなければならぬだろう。寝込みを襲われてはたまったものではない。特にこちらの主戦力であるウロボロスは一度眠りへとシヤットダウンしてしまうと再起動に時間がかかってしまう。

じゃり。

「!?!」

流水の音に混じった異音を紘也の耳は確かに捉えた。

じゃり。じゃり。じゃり。じゃり。

何者かが河原の砂利を踏み締める音。気配を最小限に、誰も起こ

さぬように、次第に紘也たちのテントへと近づいてくる。

「（紘也、気づいているか？）」

孝一が小声で話しかけてくる。まだ眠ってはいなかったようだ。もしくはあの足音で目を覚ましたのか。忍者のような寝起きのよさを誇る孝一ならば後者もありえそうだ。

「（ああ、誰かがこつちへ来ている）」

紘也もテントの外に漏れないように小声で返す。

じやり。じやり。

「（近い……？）」

「（みたいだな。どうだ紘也、例の宝剣強盗か？）」

紘也と孝一はテントの入口を挟むように移動する。

「（わからない。けど魔力を感じる。というか孝一、危ないからお前は下がってろよ）」

「（それは紘也だって同じだ。お前は魔術とか使えないんだろ）」

紘也は魔術を使えないが、魔力制御の応用で他人の魔力に干渉することができる。うまくやれば襲撃者の魔術を一時的に封じることくらいなら可能だ。しかし、それ以外は孝一の言う通り一般人と変わらない。

「（わかった。侵入してきた瞬間に挟撃しよう）」

孝一と頷きを交わし、紘也は外の気配に集中する。真つ先に紘也たちのテントを狙ってきたということは、敵は紘也が香雅里から宝剣を預かったことを知ったということだ。

だが、紘也は 天叢雲剣 をウロボロスの無限空間に保管した。

そのことを知るのはウロと、温泉に入る前に話しておいた香雅里だけだ。

じやり。……………。

止まった。紘也と孝一は固唾を呑んで息を殺す。

カーテン状の入口が徐々に開いていく。

思っていたよりも細かい片足がテント内に踏み込み

そいつは侵入した。

「ムフフ、紘也くんはどんなプリチィな寝顔してるのかなじゅるり」

「　　ってお前かあッ!?!」

孝一との挟撃のはずが、動いたのは紘也のV字に構えた右手だけだった。

「ぎゃによわあああああああああああああああああああああああッ!?!」

安定の目潰し攻撃にウロは普段通り煩悶する。ついに紘也は暗闇の中でも正確に急所を射抜ける技術を身につけてしまった。

「ははは、警戒損だったな」

ふう、と脱力したように孝一がその場に座り込む。紘也もそうしたいところであるが、その前に夜這を仕掛けてきた愚か者を摘まみ出す作業が残っている。

「さて、一応、どういうつもりだったのか聞いてやる」

弁解のチャンスを与えると、ウロは訥々と自分の行動を説明し始めた。

「いえその、紘也くんのテントから禍々し　　」

「本音を言わなければぶッ刺す」

「渓谷の夜は冷えますからウロボロスさんが添い寝してあげようかと思った次第です」

「なるほどよくわかった。確かに夜は少々寒いな。火星に帰れ」

「行っただこともないよ!?!」

彼女が目覚めている状態で近くにいるのはとりあえず安心だ。安心だが、常時発情期という状態異常にかかっている蛇と一夜過ごす不安を補うことなど到底できやしない。

「なんでもいいからテントに帰れよ。お前がないことに気づいたら愛沙が心配す　　!?!」

ズン、と。

突然、重力が倍化したような力のプレッシャーを紘也は感じ取っ

た。紘也は慌てて外に飛び出し、周囲を見回す。

なんだ？ 魔力が異常に高まっている？

誰の？ と考える余裕はなかった。

「紘也くん！」

「ウロ、孝一を頼む！」

無言で了解したウロが孝一を抱える。困惑する孝一に構わず、紘也たちは地面を蹴ってできるだけ遠くへと飛ぶ。

次の瞬間、天から凄まじい勢いでオレンジ色の輝きが降ってきた。それは紘也たちがさっきまでいたテントを直撃し、爆発する。

「くっ……」

熱風と爆音が圧力となって押し寄せる。足でしっかりと地面を踏み締めていなければ紙切れのように吹き飛ばされていたことだろう。黒炎が立ち昇る。それを目で追うように見上げると、夜空に巨大な鳥のような影を発見した。幻獣だ。しかし、先程感じた魔力はあの幻獣のものではない。

「誰だ！」

紘也は叫ぶが、答えは帰って来ない。

「秋幡紘也！ なんなのこれは？ それにさっきの魔力も」

「うわうわっ！ なになにに火事？」

「マスター、敵襲です。幻獣の臭いがします」

「ヒロくん、コウくん、ウロちゃんがいないよ」

それぞれのテントから香雅里たちが飛び出してくる。愛沙はウロの姿を見つけると安堵したようだが、他の三人は険しい表情でこちらに駆け寄ってくる。

と、再び魔力の高まりを感知する。見ると、上空の巨鳥の上で何者かがなにかを振るった。炎の光を一瞬反射したそれは剣のように思えた。

「みんな危ない！ 飛べ！」

「……ッ!?」「……」

もう一度さっきの火炎が来る　そう思った紘也だったが、予想

は外れた。

下から突き上げてくるような大地の揺れに全員がバランスを崩す。直後、爆発的に地面が隆起し、巨大な岩塊が意志を持っているかのように天を衝いた。

「痛……なっ!？」

起き上がってその光景を目撃した紘也は絶句する。先程までただの河原だった周囲が、分厚い岩の壁で覆われていた。

「くそっ! 閉じ込められた!」

一緒に岩塊の牢に投獄された者はそこで打った頭を押さえているウロだけ。他のみんなはこの壁の外にいる。封じられたのは紘也とウロ。ならば、外にいる香雅里たちが危険だ。

幸い、天井が開いている。

「ウロ、飛ぶぞ! みんなと合流する!」

「あいさ! 了解であります! でもその前に念のため個種結界張っとくね」

幻獣が戦闘時に使う個種結界は、それぞれの幻獣が持つ特性を付加させた結界のことだ。ウロボロスの場合は? 再生? と? 無限? の特性が働く。これによって結界内部で生き物以外の物や自然が破壊されても修復され、外部からの侵入を困難にさせることができる。ちなみに人払いと認識阻害の効果もあるが、他に一般人はいないためあまり意味はない。

結界を張り終えたウロが背に竜の翼を出現させ　る前に、上から黒い影が降ってきた。

「そうはさせない。俺は貴様に用がある」

黒のロングコートを纏い、顔を隠すためかロングマフラーを巻いた男だった。見ているだけで暑苦しい。季節を先取りし過ぎである。だが男の格好などどうでもいい。問題にするべきは、どういうわけか彼の周囲を円運動している三本の剣である。櫛状の刀身を持つ日本刀、剣尖が平らな直刀、そして二重刃の曲刀。三本とも形が全く統一されていない。

「お前が宝剣強盗って奴か」

紘也はたじろぎそうになるのを堪えて敵を凝視した。とんでもない威圧感だ。葛木玄永とも引けを取らない。寧ろ軽薄さが無い分宝剣強盗の方が強く思える。

「貴様と会話をするつもりはない。大人しく 天叢雲剣 を寄こせ。惚けるなよ。貴様が持っていることは承知している」

「なぜ宝剣を狙う。お前の目的はなんだ？」

「言ったはずだ。貴様と会話をするつもりはないと取りつく島もない。冷徹な瞳が鋭い視線だけを放っている。

「や、やばいよ紘也くん！ こ、この人、この人」

「ウロ？」

あのウロがわなわなと震えていた。信じられない。それほどなのか、この男の実力は？

「この人、素で『貴様』って言葉使ってますよ！」

「悪いが宝剣は渡せない。力づくで奪おうとしても無駄だ」

「あ、やっぱリスルーするんだね」

こんな場面でどうして緊張感なくいられるのか紘也には不思議でならない。

「……」

男はギラつく瞳で紘也たちを観察している。やはり彼の周囲には三本の宝剣が惑星のように公転し続けており、隙らしい隙がまるでない。

やがて男は、フン、と鼻息を吹いた。

「なるほど、想像を絶する魔力制御能力だ。それほどの魔力量を、魔術も使わずにある程度まで近づかなければ感知できないほど抑え込んでいるとはな。昼間の様子を見るに、強力な妖魔を二体も引き連れている。連盟の大魔術師にも匹敵する術者のようだ。宝剣を任せるに値する」

どうやらぶつぶつと紘也を分析しているようである。困ったことに激しく買被り過ぎだった。

「会話はしないんじゃないのか？」

「独り言だ。しかし、貴様も倒せないようでは俺の目的は達成できない。ならば、貴様を殺してから宝剣を奪わせてもらう」

円運動する宝剣に変化が起きた。一本が軌道から外れ、地面と平行になるようにピタリと停止する。二重刃の曲刀だった。まるで銃口を向けられているような緊張感。

「吹き飛ばす」

曲刀の刀身に魔力が宿る。それと同じ魔力の高まりを紘也は二度感じている。が、生じる現象はまたも異なった。

ビュオオオオッ！！

曲刀から発せられたのは渦巻く大気の流れ　　竜巻だ。

「ぐっ！！？」

紘也は咄嗟に横へ転がり飛んで回避した。すぐに体勢を立て直したが、竜巻の痕跡を見て驚愕する。

地面が深く抉られていた。アレは単なる竜巻ではない。規模は小さいが威力は凄まじく、そして恐らく裂刃。一度巻き込まれるとミキサーにかけられたように一瞬でミンチと化すだろう。

風気の宝剣　　都牟刈大刀。厄介だ。

「避けたか。流石は彼の大魔術師、秋幡辰久の息子と言ったところだな」

「！？　お前、なぜそれを……」

「フン、素生を調べてないとも思ったか」

男はそう言っているが、完璧に調べ尽くしたわけではないようだ。もしそうなら紘也が魔術を使えないことくらい知悉しているはずだ。あのような分析にはならない。

「次は確実にあてる　　む？」

再び曲刀が竜巻を纏った瞬間、ウロがその刀身を思いつ切り弾いた。

甲高い金属音。彼女が手にしているのは、淡い金色をした、宝石のように透き通った両刃大剣。ウロボロスの鱗から鍛えられた武器

竜鱗の剣 だった。本人はアホみたいな名前で呼んでいるが、持ち主の意思で無限に伸縮し、そして自在に操ることができるチー卜武器である。しかも自己修復のオプションつき。

「……妖魔、ウロボロスか」

忌々しそくに吐き捨てる宝剣強盗に、ウロは自分の身長よりも大きな剣を軽々と肩に担ぐ。

「あなたが紘也くんを殺すなんて百那由^{なゆた}多年早いんですよ！ このウロボロカリバーのサビにしてください！」

S e c t i o n - 1 5 夜襲（後書き）

次回の更新は10月9日（日）です。

その頃、岩塊の牢獄の外。

「愛沙様、大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ。ありがとう、ウエルシュちゃん」

愛沙は体を支えてくれるウエルシュに感謝した。彼女は隆起した岩塊に呑み込まれそうになったところをウエルシュに助けられたのだ。

「ダメ。この壁、どうやっても壊せないわ」

香雅里は悔しげに歯噛みした。この壁の向こうには秋幡紘也とウロボロスがいる。そして先程あの男が中へ降りていくのを見た。ウロボロスの個種結界も発動し、魔力の衝突も感じられる。分厚い壁に遮断されて音は聞こえてこないが、戦闘が始まっていることは確かだ。

「香雅里ちゃん、諦めちゃそこで終わりよ」

「わかってるわ、夕亜」

香雅里は既に 冰迦理 の力で幾度となく岩壁に氷弾をぶつけている。しかし砕けるのは氷弾ばかりで、壁には傷もつけることができない。

「この壁、土気を操る 沓薙剣 の力ね」

香雅里が持つ 冰迦理 とは魔武器としての格が違う。足掻けば足掻くほど力の差を思い知らされるようで無性に腹が立つ。

「天叢雲剣 があれば破れたかもしれないけど」

件の宝剣はウロボロスの無限空間にある。それに 天叢雲剣 を香雅里が所持していたのなら、宝剣強盗は彼らを狙わない。

そこで香雅里は疑問に思う。

「……どうしてバレたのかしら？ 秋幡紘也に宝剣を預けたこと」

日下部家の人間の一部には話してある。まさか、彼らの中に内通者がいたのだろうか？ 宝剣強盗は単独犯ではなかったのか？

「知りたいか？ 答えは簡単だがな」

ドサリと、なにか大きな質量が香雅里の背後に落下した。それも二つ。

「ひゃっ」

鷺嶋愛沙の短い悲鳴。彼女は地面にへたり込み、口を押さえて瞳目している。

その視線の先、香雅里と愛沙の間に二つの物体が乱暴に放置されている。それは

「申し……訳ありません……香雅里様……」

「我々では……力及ばず……」

香雅里たちと共に八櫛谷へ来ていた、葛木の術者の二人だった。

香雅里では拷問しても意味がない。だから宝剣の在り処を知っているだろう彼らがやられた。

「あなたたち……そんな、また、私は……」

守れなかった。

傷つき倒れた部下を前に、香雅里の脳裏にヴァンパイアとの戦いがフラッシュバックする。あの時も自分の無力さと浅はかさのせいで多くの仲間が倒れた。

許さない。

強く熱い感情が香雅里の胸中で渦を巻く。

「我が拷問したわけではないが、随分と強情だったらしいぞ」

低い男性の声は空から。キッ！ と視線で射殺すつもりで香雅里は睨め上げる。全長二メートルに近い三本脚の黒鳥が羽ばたいていた。

「滅してやる！」

「香雅里ちゃん落ち着いて落ち着いて。魔力が乱れてるよ」

夕亜に諫められて香雅里はハツとした。冷静さを欠いては勝てる戦いも勝てない。

黒鳥の嘴が動き、人語を紡ぐ。

「安心しろ。情報を引き出した後に殺すほど我が主は残忍ではない。その者たちが死ぬことはあるまい。放っておかなければ、だがな」

「あなた、ヤタガラスね」

「いかにも」

ヤタガラス。日本神話において、神武東征の際に高皇産靈尊によつて神武天皇の元に遣わされ、熊野国から大和国への道案内を任されたと言われる霊鳥のことだ。太陽の化身ともされており、こうして喋っているということは人語を解するほどの知能もあるようだ。その気になれば『人化』もできるだろう。

向こうから襲ってくる気配はない。ヤタガラスの役割は香雅里たちの足止めと監視だろう。なんにしても邪魔である。

「こいつは私と夕亜で片づけるわ。ウエルシュ・ドラゴン、あなたは秋幡紘也の下へ行きなさい」

「……了解しました」

彼女ならば 拒絶の炎 で壁に穴を穿つことができるかもしれない。それが無理でも空から壁の内部へ侵入できる。上が開いていることは宝剣強盗が侵入したことでわかっているのだ。

「それから鷺嶋さん。あなたは彼らの手当てをお願いできるかしら？」

「ま、任せて」

語気を強く愛沙が言う。

「……まずは目障りな壁を破壊します」

ウエルシュが空中に炎の魔法陣を描く。拒絶の炎 ならばたとえ貫通しても中にいる紘也たちに被害はでない。

ヤタガラスもウエルシュの攻撃には壁も耐えられないと踏んだのだろう、急降下を始めた。

「我が主は取り込み中だ。邪魔をさせるわけにはいかない」

「あなたの相手は私たちよ！」

香雅里は 氷迦理 を一閃し、天に向かって氷刃を放つ。その後

るでは夕亜が護符を用意し、封術の準備をしている。葛木家と日下部家は遙か昔からこのように肩を並べて戦ってきた。今ならどんな妖魔にも負ける気がしない。

氷刃は楽々とかわされた。だがそのロスのおかげでウエルシュが拒絶の炎を放射することに成功する。

真紅の火炎波は分厚い岩壁など障子のごとく簡単に突き破るだろう。途中で邪魔が入らなければ。

「させん！」

ヤタガラスの翼から眩いなにかが無数に射出される。それは太陽のような輝きで形成された羽根だった。赫灼する羽根は豪雨となってウエルシュの炎に集中し、岩壁に届く寸前で飛散させた。

妨害はそれだけでは緩まない。続いてヤタガラスを中心にとても直視できない白光が広がる。

「きやあつ!？」

誰の悲鳴だったかはわからない。一瞬でこの場を支配した光に、香雅里たちは眼球を貫かれたような痛みを襲われ苦悶する。ヤタガラスの個種結界、?陽?の特性。夜が一転して昼間よりも明るくなっている。

視力を奪われた香雅里たちへ更なる追撃がくる。ウエルシュの拒絶の炎を相殺した太陽の羽根だ。掠っただけでも焼けるような痛み、香雅里はどうか急所だけは守り切らねばと身を丸くした。

そして個種結界が解かれ、再び夜の闇が下りる。目が眩み、太陽の羽根によるダメージを受けた香雅里たちはまだ動けない。

「これでしばらく視力は戻るまい。さて」

香雅里たちをほぼ無力化させたことを確認したヤタガラスが岩塊の裏へと回る。

「魔術師でもないのに、なかなか度胸のある人間だ」

そこでは一般人の少年 諫早孝一がロッククライミングの要領

で岩壁を登っていた。

「げっ、バレたか。もう少しだったのに！」

「力のない人間が駆けつけたところでなにが変わるわけでもなからうが、念のため排除させてもらおう」

壁に張りついた状態の孝一に成す術はない。あっさりと蹴り落とされてしまった。

「ぐっ、やばい」

高さは優に校舎の三階分はある。生身の孝一が落死するには充分だった。

しかし孝一が地面と衝突することはなかった。ヤタガラスとは違う羽ばたきの音がした後、彼の体は空中でキャッチされた。

真紅の竜翼を背に生やした少女　ウエルシュ・ドラゴンに。

「お怪我はありませんか、孝一様？」

「あはは、助かったぜウエルシュ。サンキュ」

孝一を地面に下ろしたウエルシュは、竜翼をはためいて再度浮遊する。

「我が陽光を目に浴びて、まさかもう回復するとは」

「もう二度と、ウエルシュにあのような攻撃は効きません」

彼女の掌が真紅の炎を灯す。

「香雅里様にはマスターの下へ向かうように命じられましたが、ウエルシュがヤタガラスを？拒絶？することにします」

赤熱の火炎弾がヤタガラスへと迫る。

S e c t i o n - 1 6 陽の黒鳥（後書き）

次回の更新は10月13日（木）です。

峻烈な戟音が岩壁内に反響していた。

浮遊する三本の宝剣を巧みに操る宝剣強盗に、ウロは大剣一本で切迫している。三本の刃が仕掛けてくる軌道の読めない乱れ突きや薙ぎ払いを、ほとんど直感だけで彼女は回避、または受け流して自分の刃を敵の懐へと強引に捻じ込む。

しかし相手もそれで手傷を負うようなへまはやらかさない。宝剣を握っていないため両手が常にフリーの男は、迫りくる大剣の腹を撫でるように打って逸らす。そのまま足払いをかけ、ウロがつんめったところに正拳突きを叩き込む。

中国拳法よろしく無駄のない拳動。周囲に展開している宝剣だけでも脅威に値するのに、術者自身も体術に秀でている。まるで隙が見当たらない。

「燃える」

後方にぶつ飛んだウロへ向けて櫛状の日本刀が火を吹く。焦熱の火炎放射が大蛇のごとく宙を這い、彼女を丸呑みにした。

「ウロ!？」

紘也は思わず叫んだ。省エネモードの『人化』状態とはいえ、幻獣ウロボロスにここまで張り合える人間が存在するなど想像もしていなかった。

「あちち……んもう！ 服が燃えちゃったじゃあないですか!」

だが、見た目はボロボロでも彼女はノーダメージのようだった。ドラゴン族の幻獣があ程度の度でやられるはずがないと知っていたのに、紘也はどこかほっとした。

「貫け」

男が唱えるように呟く。と、剣尖の平たい直刀が地面に突き刺さった。その瞬間、巨大な岩の槍が地面から飛び出してウロを襲う。「貫けるもんなら貫いてみれば?」

ウロは回避するでもなく槍に向けて突進する。そして両者が衝突する寸前、ウロは大剣を握っていない左手の甲で岩槍を横殴りにした。

派手な破碎音を上げて槍が爆散する。見るとウロの左腕には金色の鱗がびっしりと貼りついていた。竜鱗の鎧 と呼ばれるウロボロスの絶対防御能力だ。

それでも宝剣強盗は動揺を見せない。

「押し潰せ」

二重刃の曲刀が動く。ウロの上空に移動した宝剣から不可視の力が圧しかかる。強力な下降気流はしかし、サイドステップでかわされた。

「斬り裂け。 呑み込め。 焼き尽くせ」

男が腕で空気を薙ぐ。それぞれの宝剣に魔力が籠る。上方から裂風が疾り、下方から岩塊が隆起し、前方から炎弾が飛ぶ。

「あいつ、三本の力を同時に操れるのか」
「ますます底が知れない。これほどの術者なら単独で陰陽師を襲撃して回っていたことも頷ける。」

「無駄無駄無駄あつ！！」

三方から迫る三属性の力に対し、ウロは一度後ろに飛んで 竜鱗の剣 を振るう。伸長した大剣の剣身を鞭のように撓らせ、風を、火を、土をことごとく薙ぎ払った。

「お返し！」

大剣を元の長さに戻したウロは掌に出現させた魔力弾をぶっ放つ。純粹な魔力が凝縮された光を前に男は微動だにしない。代わりに二重刃の曲刀を操作し、風の防御壁を張った状態で間に割り込ませる。パン！ と弾ける音。爆光が岩壁内を蹂躪する。紘也は咄嗟に目を庇った。

「目眩ましのつもりか？ くだらんな」

「そいつあどうか？」

男の真横に回ったウロが大上段から大剣を振り下ろす。確実に男

を捉えると思われた一撃だったが、剣尖の平らな直刀で防がれてしまった。

組み合った状態のまま両者は睨み合う。が、拮抗はしない。ウロと違って男は空いている手がまだ四本あるのと同じなのだ。櫛状の日本刀を操り、ウロの額をロツクオンする。

「終わりだ」

シユツと空気を裂いて櫛状の日本刀が刺突される。それは組み合
って動けないウロの頭部を容赦なく貫いた ように見えた。

櫛状の日本刀の刃は、ウロの額に浮き出た 竜鱗の鎧 を少し傷
つけただけだった。

「思ったより硬いな」

ボワツ！ と刀身から凄まじい勢いで炎が展開される。宝剣強盗
はそれで彼女が後ろへ下がると思ったのだろう。

「ッ!?」

驚愕に目を見開く宝剣強盗。ウロは果敢にも炎幕を突き破ってき
たのだ。

「こんな炎、腐れ火竜のと比べたら冷水と一緒にだね！」

「チツ」

男は散らばっている宝剣を呼び戻しながら素手で大剣を捌こうを
身構える。が

「そう何度も防がれるウロボロスさんじゃありませんよ！」

「なにっ!？」

ウロはいつの間にか 竜鱗の剣 の剣身を伸ばし、無作為に張り
巡らせていた。これではどこから切っ先が狙ってくるか判断できな
い。

流石の宝剣強盗にも少しばかり焦りが見えた。右か、左か、やは
り後ろか。そんな風に死角を警戒している。

だから、意表を突かれた。

「おらああっ!!!」

女子とは思えない勇ましい叫びと共に、ウロの鉄拳が男の顔面を

捉えた。よく見えないけど割と美形だと思われる顔が変な風に歪み、彼は錐揉み状に吹き飛んで岩壁にしたたか打ちつけられた。

「がつ!?!」

吐血する。浮遊していた宝剣たちが乾いた音を立てて地面に転がった。

「さてさて、ここまでのようだね」

ウロに剣先を突きつけられ、男は唸る。

「フン、剣すら囷だったとはな」

どう見てもチエツクメイトだが、男から余裕は消えていないように思えた。まだなにを仕掛けてくるか油断ならない。だけれど、絃也は二人の下へと歩み寄る。

「約束だ。お前の目的を言え」

「絃也くん絃也くん、別にそんな約束とかしてなかった気がするんだけど」

「お前は黙ってるよ!　もしかしたら喋ったかもしれないだろ!」
元から期待の薄かった策略は味方のせいで打ち砕かれてしまった。

「……………」

やはり男はだんまりを決め込む。と思ったら、僅かに彼の唇が動いた。

「大切な物を守るため、俺には力が必要。それだけだ」

「へ?」

不意打ちだった。絃也とウロは絶対に喋らないと確信していたため、男の言葉を理解するために数瞬の硬直時間を必要としてしまった。

その隙を宝剣強盗が見逃すはずがない。

三本の宝剣が息を吹き返したように浮遊し、それぞれの属性攻撃が絃也たちに襲いかかる。

「絃也くん!」

ウロが絃也を抱えて跳躍してくれなければ危うかった。五体をバラバラに切断された上に串刺しにされ、芳ばしく焼き上がるところ

だった。

男が立ち上がり、口元の血を拭う。宝剣は彼の周囲で再び円運動を始める。

仕切り直しか。そう思った直後だった。

ミサイルでも打ち込まれたような爆音が轟き、岩壁の上部が粉碎した。

そこに見えたものは真紅に煌めく炎、それと同じ色の翼を羽ばたかせる少女だった。

「ウエルシュ！」

少々到着が遅いように思えるが、外でも戦闘があつたことは魔力の衝突を感じられたことからわかつていた。相手は恐らく宝剣強盗が連れていた幻獣。存外に手こずっていたようだ。

黒いなにかが落下してくる。地面と激突して呻くそれは、三本脚の巨鳥だった。

「ヤタガラス!？」

どこまでも冷静だった宝剣強盗が初めて明確な動揺を見せた。

「幻獣ヤタガラス。世界の幻獣TCGだと、フィールドに出た瞬間に閻属性の幻獣を一掃するレアカードだね。閻デッキをメタる時にはめっちゃ強なんですよ」

ウロボロスのなんでもカード解説は適当な場所に放り投げておき、紘也は敵の幻獣を注視する。見る限りスタボロだが、どこにも欠損部分は見当たらない。ウエルシュの 拒絶の炎 をまともに受けたわけではないようだ。

「申し訳ない、我が主。やはり竜族相手ではそれほど時間を稼げなかった」

喋れるんだ、と紘也は『人化』もしくは人に近い姿の幻獣以外が人語を口にしたことに少し驚いた。

「仕方ない。一旦退く」

諦めたように男が決断する。逃げる気だ。

「ウロ、ウエルシュ、絶対に逃がすなよ！」

「あつたりまえさ！」

「了解です、マスター」

地上にはウロ、上空にはウェルシュがいる。たとえこの岩壁を消したとしても、今度は香雅里や夕亜が合流することになる。逃げられる穴などない。

「最後の宝剣はまだ貴様に預かっていてもらおう。できるだけ早めに手にしたかったが、貴様ほどの術者だ。在り処を喋ったところで手が届くような場所には置いていないだろう」

正解。ウロボロスの無限空間はウロボロスだけが開くことができる。

「どの道、時が来れば出さなければならないのだ。 やれ、ヤタ

ガラス」

「承知！」

突如、ヤタガラスから目を灼くような白光が発せられた。絏也たちは目が眩んだと同時に突風に襲われ吹き飛ばされる。

巨大な風の渦。これでは上のウェルシュもたぶん吹き飛んでいる。勢いの衰えない風圧に、絏也は動くことができない。

そのままどのくらい経っただろう。風が止み、視力が回復した頃には、宝剣強盗とヤタガラスの姿は影も形もなかった。

S e c t i o n - 1 7 宝剣強盗（後書き）

次回の更新は10月16日（日）です。

翌日。封印の儀式を行うための最終ミーティングに紘也も参加していた。

八櫛亭の大広間には香雅里と夕亜を当然として、日下部家の幹部と思われる面々が揃っていた。厳つい老人から優しそうな若い女性まで老若男女はバラバラだ。紘也と共に同席しているウロとウエルシユも含めれば十名弱の人数が集まっていることになる。

孝一と愛沙は敵にやられた葛木の術者を別室で看病している。ウロボロスのエリクサーが品切れだったのは痛い、命に別状ないとわかると香雅里はすこぶる安堵していた。

厳粛な雰囲気の中、話し合いは滞りなく行われていく。八櫛谷奥の洞窟に正午三十分前までに集合することや、洞窟内にある儀式場の説明、地脈の力を最も得られる位置のことなど、ほとんど確認だけの会議とすら言えない話し合い。

だから紘也は、時刻・場所などの最低限の情報以外は聞き流していた。

『大切な物を守るため、俺には力が必要。それだけだ』

昨夜の宝剣強盗の言葉が脳裏を過る。果たして真実か否か、それはかりを考えていた。

反撃の隙を作るための嘘だとすれば、まんまと嵌められたわけだが……。

己の契約幻獣が傷つき倒れた時に見せた彼の動揺を思い出す。

あれは、仲間のことを本当に大切に思っている顔だった。

話を聞いて想像したほど非情な人間ではないと紘也は思う。あんな顔をする者は、大切ななにかのためならばどのような無茶だってするだろう。紘也だってそうだ。孝一や愛沙や香雅里、もちろんウ

口やウエルシュでも、命の危機が迫り救うために力が必要なのだとしたら……一度捨てた魔術を取り戻すことだつて厭わない。

今度会った時には、ちゃんと会話してもらわないと。

彼の言った理由が真実だとして、もしも紘也たちが協力して解決できる問題なら喜んで力を貸そう。紘也は密かにそう決心した。

「秋幡紘也、聞いているの？」

香雅里に呼ばれて紘也の思考は中断することとなった。

「えーと、なんだっけ？」

「あなたたちを儀式場へ同行できるよう許可を取るために参加させたのに、本人が上の空でどうするのよ」

「キミ、今朝からずううつとぼんやりしてるよね。どこか具合が悪いのなら休んでる？」

夕亜にまで心配をかけてしまったようだ。紘也は気を取り直す。

「悪い。考え事してた」

「まあいいわ。あなたとウロボロスとウエルシュ・ドラゴンの同行は許可してもらったから。それよりも、宝剣強盗が儀式の最中を狙ってくるのは確実と思っただけいいのかしら？」

「ああ、奴も手傷を負っている。それまでは現れないはずだ」

「あたしが一発ぶん殴ったからね」

「ウエルシュも契約幻獣の方にダメージを与えました」

紘也に寄り添う幻獣たちが自らの功績を鼓舞するように発言する。それにしてもいつまで経っても紘也は彼女たちに挟まれるポジションに慣れる気がしない。

「所詮相手は人間とカラス。このウロボロスさんにかかれればチヨチヨイのクルクルポーンですよ。夕亜っちもかがりんも、豪華客船・ウロボロニツク号に乗った気分でどんと任せなさい！」

「……ウエルシアノス号もあります」

なぜ二隻とも沈没しそうな名前なのだろうか。

「ねえねえ、キミたちがいればヤマタノオロチにも勝っちゃったりするんじゃない？」

唐突に夕亜がとんでもないことを言い出した。この場にいる誰もがざわざわと狼狽する。

「夕亜、あなた、なに考えてるつもり」

「だって考えてもみてよ、香雅里ちゃん。倒せるんなら再封印なんてしてなくてもいいじゃない」

人差し指を立ててニツコリ笑う夕亜に、香雅里は溜息をつく。

「どうなの、ウロボロス？」

香雅里の言葉にはどこか夕亜以上の期待が込められていた。

「無敵のウロボロスさんが負けるわけありませんよ　と言いたいけど、ヤマタノオロチは強敵だよ。なにせ世界の幻獣TCGではフィールドにある自分の魔力全てが維持コストになる代わりに、8000/8000の最強の攻守と相手の『魔術カード』を跳ね返す能力がありますからね」

「リアルの話をしるっ！」

紘也はウロの頭を引っ叩いた。

「あうう……。えっとですね、あたし、オロちんとはほとんど互角だったんだよね。だからオロちんより強いヤマタノオロチだと正直勝てるかわかんないかな」

「ウエルシュは会ったこともないのでわかりません」

ヤマタノオロチもカテゴリー的には『ドラゴン』に属する神話級の超強力な幻獣だ。ウロボロスとほぼ互角だという『オロちん』がヤマタノオロチ族の中でどれくらい強いかはわからない。わからないが、ウロとウエルシュがいるからと言って楽に倒せるような相手ではないことは確かだろう。

百パーセント勝てる見込みがないのであれば再度封印する方がいいに決まっている。特に今は幻獣界に送り返すこともできないのだ。封印が解かれれば、必ず昨日のツチグモと同じく人を襲い始めるだろう。

「私だって、できることならそうしたいって思っているわ。でもね、夕亜。たとえばヤマタノオロチを滅することができたとしても、被害

はきつと八櫛谷だけじゃ済まないわ。多くの人が傷つき、死ぬかもしれない」

夕亜を諭す香雅里は、まるで彼女自身にも言い聞かせているようだった。

「ただ。なんなの？ この二人は一体なにを恐れているのだ？」

二人から感じる漠然とした違和感。しかし明確でない以上、絃也は発言を控えるしかない。

「そう。やっぱり私がやらなきゃダメなんだね。 うん！ 任せて。絶対に成功させるから！ だからキミたちが頑張って私を守ってね！」

ビシツと夕亜は元気よく絃也たちを指差した。儀式で行う封術は宗主である彼女が核となるらしい。封術の詳細などは聞かされていないし聞いて理解できるとも思えないが、とにかく儀式の失敗はヤマタノオロチ復活を意味する。

そしてそうなった場合の被害は香雅里の言う通り尋常ではないはずだ。もしかすると彼女たちはこれを恐れているのかもしれない。それほど難しく、集中力の必要な封術だとしたら、宝剣強盗が乱入するだけでも乱れてしまっただろう。

「オウ！ 夕亜っちの頼みとあれば、ウロボロスさん頑張っちゃうよ！」

「……ウエルシュにお任せください」
グツとサムズアップする契約幻獣たちを頼もしく感じながら、絃也は思う。

宝剣強盗の動機が決して悪じゃないとしても、封印の儀式の邪魔だけは絶対にさせない。こっちにだって守るものはある。

心に強く硬く、絃也はそう誓った。

しかし数時間後、その誓いは呆気なく崩れ去る。

S e c t i o n - 1 8 最終ミーティング（後書き）

三章終了です。

次回の更新は10月20日（木）です。

S e c t i o n - 1 9 強まる違和感（前書き）

第四章

Section - 19 強まる違和感

集合時刻が迫っていた。

日下部家の術者たちは既に儀式場へと先行している。宗主である夕亜もミーティング後に紘也たちと別れている。

「というわけだから、孝一と愛沙は今回ばかりは宿で大人しくしてろよ」

「封印の儀式つてのには興味あるんだが……ま、そういう約束だったしな」

「この人たちの看病もしなきゃだしね」

大まかなことを説明して孝一と愛沙には葛木の術者と共に八櫛亭に残ってもらい、香雅里の案内で紘也たちは儀式場がある洞窟を指すことになった。

遊歩道の最奥部からさらに奥。道なき道を歩き続けて一時間、ようやく洞窟の入口がその姿を現した。

「ウロボロス、天叢雲剣を出して。ここからは私が持つわ」

「はいさ。どうぞ、かがりん」

「かがりんって呼ばないで！」

ウロが無限空間から取り出した護符を引っ手繰り、香雅里は洞窟内へと歩を進める。

洞窟は自然にできた鍾乳洞を人工的に舗装しているようだった。

坑道みたいに一定間隔で照明が設置されているため、歩くのに不便さを感じない。

「急ぐわよ、秋幡紘也。夕亜たちはとつくに準備できているはずだから」

「ああ」

歩行速度を上げる香雅里に合わせて紘也も速足になる。その後ろからウロとウエルシュがしっかりとついてきていることを確認してから、紘也は訊いた。

「なあ、葛木、封印の儀式って基本的に日下部家で行うものなんだよな？」

「そうよ」

香雅里は振り向かずには答える。

「だとしたら、なんで儀式の要となる 天叢雲剣 は葛木家にあるんだ？ このヤマタノオロチを一家で封じたことはわかるが、日下部家が所持していればわざわざ葛木家が出向く必要もないだろ」

「封印の儀式には葛木家にも役割があるってことよ」
「役割って？」

後ろを歩くウロが何気なく問うた。すると香雅里は思い耽るような間を置いてから、

「……無駄話は後にしなさい。そろそろ着くわ」

はぐらかすように言ってさらに歩く速度を上げた。そのスピードはもう競歩の域だった。

「怪しい」

「香雅里様はなにかを隠している気がします」

ウロとウエルシュの疑念に紘也も、ああ、と同意した。これまで感じていた違和感の正体がそこにある気がしてならない。

「わっかかりましたあっ！」

といきなりウロが飛び跳ねるがごとく叫んだ。彼女はそのまま名探偵でも気取っているように話し始める。

「封術の軸は夕亜っち。かがりんにもある役割。口外したくない事情。これだけ要素が揃っていれば容易に想像できるんですよ、秋幡 紘也ワトソンくん」

「俺はいつからそんなハーフみたいな名前になった？ で、お前は どう推理したって言うんだ？」

どうせくだらない推理が返ってくるに違いない。

「ずばり！ ここで行われる封術とは性魔術！ かがりんと夕亜っちは儀式場でレズ的な行為をしてその愛の力で封印をぎゃああああ目があああああっ！？」

「お前は思考を全年齢対象に切り替えるっ！」

「……(ぼっ)」

「そしてそこ！ 頬を染めるな！」

なぜこんなところまで来て幻獣たちのアホトークに付き合わねばならないのか。同棲しているうちに段々とスルーできなくなっているのかもしれない。今の紘也はスルースキル初段くらいだろう。どうにかして取り戻さなければ……。

「……………」

そろそろ香雅里からツツコミが飛んでくる頃だと思っただが、彼女は紘也たちの会話など耳に入っていないように先に進んでいる。

これは、本当になにかある。

S e c t i o n - 1 9 強まる違和感（後書き）

すみません、短いので二日連続更新とします。
というわけで、次回の更新は10月21日（金）です。

やがて紘也たちはやたら広い空間へと出た。やけに眩しいと思つて天を仰ぐと、気が遠くなるほど高い天井がぽっかりと開いていた。そこから真夏の太陽光が存分に注ぎ込まれている。だからなのか照明は設置されておらず、地面には草花が不自然なほど生い茂っていた。

小さなドームほどもある空間には日下部家の術者が三十人ばかり待機していた。ミーティングで見た幹部らしき人や八櫛亭の女将など、覚えのある顔も大勢いる。

だが、なによりも目を引くものがここには存在していた。
「なんだ、アレは？」

空間の奥には祭壇のようなものがあつた。でも紘也が驚いたものはそれではない。祭壇の後ろ、タケノコのように地面から生えてくる見上げるほど巨大で透明な物体がそつだ。

馬鹿でかい水晶？ いや違う。

炎天下の中、ほとんど山登り紛いなことをさせられた後に入った洞窟は格別に涼しかった。コンビ二に駆け込んだ時の比じゃなかった。洞窟とはここまで涼しいものなのかと感心したくらいだ。

だがそれは洞窟だからという理由だけではなかった。この空間に入った瞬間、紘也は肌が凍りつきそうなほどの冷気を浴びている。

「オウ！ すつごいでつかい氷。紘也くん見て見て、まるで氷山みたいですよ！」

そう、氷だ。十メートル近くはあるうかという氷の塊だ。ということはこの洞窟は氷室なのだろうか？ それにしては天井に開いた穴が不可解だ。日差しが当たれば氷が溶けてしまう。

「……ウエルシュは寒いのは苦手です」

自分自身を抱きかかえるウエルシュ。あまり表情が動かないので本当に寒いのか判断に困る。

「ん？ なんだ？ 氷の中になんか入ってる……？」

まるで虫入り琥珀みたいに氷塊の中心部になにかが混入している。祭壇の手前まで近づくと、ようやくそれがはっきりと視認できた。

「人？」

だった。白装束を身につけた、二十歳くらいの美しい女性である。目を閉じて祈るように手を組んでおり、どこか神秘的な雰囲気を感じている。

「どうして人が氷の中に？」

「紘也くん紘也くん、あの人なんか夕亜っちに似てない？」

「言われてみれば、瓜二つだな」

顔の作りは夕亜よりも少し大人びて見えるが、黒髪や体型など、あらゆるところがとにかくそっくりだ。氷中の女性が突然紘也の前に現れて『自分は三年後の日下部夕亜だ』とか告げられたら信じてしまいそうである。

「気づいた？ アレ、私の曾お婆ちゃんなの。美人でしょ？」

身内自慢でもするような笑顔で日下部家宗主 日下部夕亜が歩

み寄ってきた。

「は？ 曾お婆ちゃんって……どういうことなんだ？」

動揺する紘也に、しばらく無言だった香雅里がきつめに教える。

「あなたとしたことがわからなかったの？ この氷がヤマタノオロチの封印よ。正確には中の女性が自らの体内に妖魔を封じ、さらに永久氷結させた二重封印ってところかしら」

「そういうことじゃない！」 紘也は感情に任せて怒鳴った。「俺が訊いてるのは、どうして日下部があ的女性と同じ格好をしているのかってことだ！」

夕亜も死人に着せるような白装束を纏っていたのだ。これの意味を、紘也は最悪の方向でしか考えられなかった。

「つまり再封印するのは、日下部、あんたとあ的女性を取り換えるってことなのか？」

「ワオ！ 当たり。キミ冴えてるう」
称賛するように、夕亜。

「キミの言う通り、今日からここは私のお墓になるの。でも自分のお墓がはじめの陰湿な洞窟ってなんか嫌でしょ？ どうせ氷は溶けないんだから、まずは天井を壊り抜いて、それからお花とか植えたの。そしたらほら、こんなにフアンタジーっぽくステキになっただわ」

おかしい。なぜ、彼女は笑っていられるんだ？ この空間に感じた謎は解けたが、そこだけがどうしてもわからない。

「あんた正気か？ 自分で死ぬって言うてるんだぞ？ 笑ってるなんておかしいだろ！ 怖くないのかよ！」

「怖いよ。ただどね、これが私の生まれた時から定められた運命なの」

「運命？」

胡散臭い単語に紘也は眉を曇らせる。

「うん、そうよ。日下部家宗家に生まれる女の子はね、その体にある術式を遺伝して生まれてくるの。ある術式とはもちろん、ヤマタノオロチを封印するための強力な封術のことね。儀式の周期と重なり六代目の『生贄の姫巫女』^{クシナダヒメ}となった私は、幼い時からこの日のためだけに生きてきたってわけ」

『生贄の姫巫女』というのがヤマタノオロチを封印する者の名称らしい。なんだよそれ、と紘也は思った。

「もつと生きたいと思わないのか？ 本当にそんなんでいいのか？」

「いいものにも、このまま生き長らえても意味なんてないわ。この体に刻まれた術式は強力過ぎて、今も私の命を蝕み続けているの。もしも儀式の周期とずれていたとしても、この術式がある限り私は二十歳になれるかどうかもわからない。実質、私のお母さんは十九歳で死んでるわ。封印の儀式に体を使える私は、お母さんのような無駄死にはならない。決して」

語尾を強く発音した夕亜は、一度見た日下部家宗主としての顔だった。彼女はそこで言葉を止め、天真爛漫ではない柔らかな微笑みを浮かべた。

「心配してくれてありがとう。キミは優しいね。みんなと遊んだ時間はとっても楽しかったわ」

「……く」

紘也は奥歯を噛み締めた。常に宿主の命を削るほど強力な術式。そんなものを宿して生まれてきた夕亜の心情を紘也がわかるはずもない。香雅里と夕亜が笑顔の裏で恐れていたものはこれだったのか。考え過ぎかもしれないが、葛木玄永が孝一の提案を呑んだ理由は彼女に最後の一時を与えるためだったのかもしれない。

夕亜は封印の生贄となっても死に、ならなくても死ぬ。生まれた時から余命を宣告されている状態だった。

「これじゃあまるで」

「？呪い？みたいだ、でしょ？」

紘也の言葉の続きを香雅里が引き取った。

「葛木、お前は知ってたんだよな。どうして教えてくれなかったんだ」

「あなたたちに教えたら 天叢雲剣 を出してくれないと思ったのよ。預けたのは私だけど、事実を教えるのはギリギリで。そう夕亜と話し合ったのよ」

だから洞窟の入口で宝剣を回収したのか。確かに今の紘也だとウロに宝剣を出せとは言えない。それはウロも同じだろう。せつかくできた友達が昨日の今日で死んでしまう。そんなこと、許せるはずがない。

「倫理的にはどうなんだよ。人間の生贄なんて禁術もいいところだよ。世界魔術師連盟は黙認しているわ。それほど重要ってことなのよ。理解して」

できるわけない。もしも紘也が魔術師として道を歩んでいたら納得していたかもしれないことを考えると、魔術を捨ててよかったと

心底思う。

「もう一つ、邪魔をされないために教えておくわ。葛木家の役割は『生贄の姫巫女』に課せられた術式を解放すること。これには葛木宗家の女性の血が鍵となるように設定されているわ。そして必要分の力を地脈から得、葛木の血と共に術式に注ぎ込むためのパイプラインが 天叢雲剣 ってわけよ」

淡々とした口調で説明する香雅里。彼女が護符から 天叢雲剣 を取り出した瞬間、地面全体に巨大な魔法陣が出現する。見ると、日下部家の術者たちが千々に散らばり、それぞれの配置で護符を構えつつなにかを唱えていた。

午前十一時五十五分。儀式開始まで残り五分。

香雅里は宝剣を刃が下を向くように持ち替えると、魔法陣の中央に突き刺した。すると宝剣は淡い輝きに包まれる。地脈のエネルギーを吸収しているのだ。

「いい？ 秋幡紘也。あなたたちは宝剣強盗の襲撃にだけ集中するのよ。決して儀式の邪魔はしないで。これから地脈の力を 天叢雲剣 に注ぐわ。それが終了次第、夕亜は祭壇に登り、術式起動のために魔力を高める。そして私の血を 天叢雲剣 に吸わせてから」

これからの段取りを香雅里が紘也に教えるように確認していき、

「 私が、氷中の女性と重なるように夕亜を貫く」

それで封印が一瞬解け、夕亜に妖魔が移動し再封印される。香雅里は覚悟を決めた様子で最後にそう告げた。

「貫くつて、お前……」

彼女は自らの手で親友を刺すというのか。いや彼女の場合、他の誰かに夕亜が刺されるくらいならば自分が、と考えたのだらう。そして恐らく夕亜も、どうせ刺されるなら親友の香雅里に、と望んだのかもしれない。

おかしい！

こんな非人道的な儀式、今すぐにでもぶつ潰してやりたい。しかしそれをすると最悪の幻獣が復活してしまう。夕亜一人の命で済んだはずが、何十人、何百人、もつとたくさんさんの命を危機に晒してしまつ。

どうしようもないのか？ そんなはずないだろう？

なにか方法があるはずだ。紘也は脳が弾け飛んでも構わないくらいのつもりで思考する。

「かがりんはそれでいいんですか？ 夕亜っちは親友じゃあないの？」

その時、ついにウロがやかましい口を開いた。

「……」

香雅里はウロの声には耳を傾けず、ただ黙々と地面に突き刺さつた宝剣を眺めている。

「ウロボロスさんは見損なつたね、かがりん。夕亜っちを犠牲にするくらいなら別の、誰もが助かる方法を探す。それがあたしの知ってるかがりんだよ」

「……」

香雅里は答えない。

「かがりんと夕亜っちは簡単にお互いを見捨てられる関係じゃあない。あたしと紘也くんにはまあ敵わないけど、その絆は決して浅くなんてないよね。だってかがりんが夕亜っちと一緒にいる時、あたしたちには見せたことのない笑顔だった。鋭敏なウロボロスさんはもちろん、鈍感極まりない腐れ火竜だつて気づいてますよ」

「……」

やはり香雅里は答えない。しかしその手が小刻み震えていることに紘也は気がついた。ウロにはいろいろと突っ込んでやりたいこともあるが、ここは便乗しておく。

「葛木、お前は言ったよな。彼女の明るさに何度も助けられたつて月並みな台詞になるが、今度はお前が日下部を救う番じゃないのか

「？」

「ウエルシユは香雅里様が夕亜様を刺すことも、夕亜様が死んでしまふことも望んでいません。あとウエルシユは鈍感ではありませんし腐ってもいません」

無責任だということは自覚している。紘也にはなんの解決の糸口も見つかっていない。たとえなにかを閃いたとしても、紘也が思いつく程度のことならとづくに誰かが実行している。だが、まだ時間はある。ここで儀式を保留にしてもすぐに封印が解けてしまうわけではないはずだ。夕亜だつてすぐに死んでしまふわけじゃない。皆が救われる方法が見つかる可能性は充分にある。

ウロがこれ以上なくらいの、嘘みたいな真剣な表情になる。

「かがりん、もう一度訊くよ。本当にかがりんはそんな結末でいいの？」

「いいわけないでしょっ!!」

我慢の糸が切れてしまったかのように、香雅里は慨然と激昂した。「私だつて散々探したわよ！夕亜が助かる方法を！けどどんな呪師でも夕亜に刻まれた術式を消すことなんてできなかった！

唯一の方法はヤマタノオロチを倒すこと。そうすることで役割を失った術式も連動して消えるわ。けどね、最も弱かったヤマタノオロチでも大魔術師レベルの術者が十人犠牲になつてやっと倒せたらしいのよ！私たちじゃ、無理なの。それこそ」

肩を振るわせる香雅里の痛嘆さからは、彼女がこれまでどれほど苦悩したのか嫌というほど伝わってきた。自分一人が足掻いてもどうしようもない現実。それを彼女は調べれば調べるほど突きつけられたのだらう。

「それこそ『スサノオ』みたいな神話級の術者にでもならないかぎり、私たちにはどうすることもできないのよ!!」

紘也たちに背を向けている香雅里の頬を一滴の涙が撫でる。

まさしく、その瞬間

「だったらなればいい。貴様の言う神話級の術者とやらに」

祭壇の裏から、黒コートにロングマフラーの男が冷然とした様子で現れた。

S e c t i o n - 2 0 生贄の姫巫女（後書き）

次回の更新は10月23日（日）です。

Section - 21 真実と本音

「お、お前は!？」

「宝剣強盗!？」

紘也と香雅里は同時に身構える。誰も気づかなかったのは魔術で気配を消していたからだろうが、一体いつから祭壇の裏に潜んでいたのだ。

と、宝剣強盗に気を取られた紘也たちの前を何者かが駆け抜けた。そいつはそのまま地脈のエネルギーを吸い続けて輝きが絶頂へと達した。天叢雲剣 を奪い取る。

一体誰が、とそいつを視界に入れた紘也は絶句した。

「夕亜!？ どうして!？」

混乱する香雅里。宝剣を奪ったのは白装束を纏った少女。つまり日下部家宗主 日下部夕亜だった。宝剣を引き抜いた夕亜は調子を確かめるためか数度刀身を回し見る。そしてなにかを納得した顔になった彼女は、宝剣を握った腕を大きく振り被り、

「お兄ちゃん!」

驚愕の台詞と共に宝剣強盗へと投擲した。

回転しつつ宙を飛ぶ抜き身の日本刀は、男に直撃する寸前に不自然に速度を落とし、彼の右手に収まる。

夕亜は宝剣強盗を攻撃したのだと考えたが、違う。彼女は宝剣を投げた時になんと言った？ 紘也の聞き間違いでなければ『お兄ちゃん』と口にしていなかったか？

宝剣強盗がすつとマフラーを取る。背後の氷にも負けない冷たい表情がそこにあった。

その瞬間、香雅里があからさまに瞠目する。

「日下部朝彦!？ どうして、あなたは半年前に妖魔との戦闘で死んだって……」

「日下部って はあ!？」

紘也は思わず素っ頓狂な声を発した。先程からの急速過ぎる展開に冷静さが行方不明になっている。とりあえず搜索願を出しても見つかる気がしないから状況を整理してみる。

巷で噂の宝剣強盗は日下部夕亜の死んだはずの兄だった。ダメだ。今の紘也の混沌とした頭ではこれ以上うまく整理整頓できそうにない。

「実はね、香雅里ちゃん。アレ、嘘なの」

戦慄く香雅里に、男の横に並んだ夕亜が無垢な微笑みで告げた。

「どういうこと？ 夕亜、説明して！ これは一体どういうことなの！」

香雅里は気色ばんで叫んだ。ウロやウエルシュに至っては展開についていけず沈黙している。

「そうね。ちゃんと説明して納得してもらわないとダメだよね」

「構わん、夕亜。俺が話す」

話し始めようとする夕亜を制し、宝剣強盗 日下部朝彦が一歩前に出る。

「端的に言おう。半年前、俺は俺自身を死んだことにし、各地の陰陽師から宝剣を奪ってきた。全ては八櫛谷に封じてあるヤマタノオロチを滅し、そして夕亜を救うためだ」

彼の言っていた『大切なもの』とは夕亜だった。そのことにも一驚を喫したが、この状況に動揺しているのはどうも紘也たちだけである。儀式場に集まった日下部家の陰陽師全員が、日下部朝彦の存在を当然とばかりに認識している。要するに、宝剣強盗は日下部朝彦の単独犯ではなく、日下部家全てが周知していた犯行ということだ。

一つ深呼吸をし、香雅里は落ち着きを取り戻す。

「端的過ぎるわ、日下部朝彦。あなたは本当にヤマタノオロチを一人で倒せると思っているの？」

「無論だ」

朝彦は懐から三枚の護符を取り出し、宙に放った。それらは三種

三様の宝剣へと変わると、彼の周囲を一定軌道で回り始めた。さらに右手に握る 天叢雲剣 に指で妙な印を刻んだかと思えば、葛木の宝剣であるそれも他と同様に周回軌道へと乗る。それは 天叢雲剣 も完全に彼の手に落ちたことを意味していた。

「この最大まで地脈から魔力を得た四本の宝剣があれば、俺は神話級の術者と同等かそれ以上の力を手に入れたことになる。だが一人でとは言わん。彼の妖魔を滅ぼすためには日下部家の総力を使わねばならない」

「本当にうまくいくとは思えないわ。それに夕亜、あなたは封印することに賛成じゃなかったの？ どうしてそんな成功するかも怪しい賭けに乗ってるのよ！」

「なにを言っているの、香雅里ちゃん。そんなの決まってるじゃない」

夕亜は真に悪意のない笑みを浮かべ、

「だって私、死にたくないもん」

無邪気な声で、彼女の根本に存在する気持ち曝露した。

その本音は、きつと親友である香雅里にも初めて曝け出したに違いない。香雅里はたじろいでいたが、紘也は心がスツキリするような安心感を抱いた。夕亜も死を恐怖する人間で、犠牲になることが自分の存在価値だと信じているわけではないと知ったからだ。

「俺たちはこれからヤマタノオロチの封印を解くことになるが……邪魔をするなよ、秋幡辰久の息子。真実を知った今の様子からして、貴様は俺たちと同じ想いのはずだ」

朝彦は凍てつくようできて強い意志の炎を宿している瞳で紘也を睨んだ。心のなにもかもを見透かしているような口調だったが、あながち間違っではない。

冷静さが戻ってくる。

自分の友人がこんな儀式で犠牲になるなんて御免だ。ましてや気

持ちを押し殺してまで辛い役目を背負う姿なんて見たくもない。

ならば、答えなど決まっている。

「ああ、そうだな。邪魔はしない」

「ちよつと秋幡紘也！？ あなたは自分の役割を放棄する気！？」

香雅里が血相を変える。が、彼女の言葉には紘也を止める力がない。確かに今朝のミーティングで紘也は儀式の邪魔をさせないと心に誓っていた。しかしそれは儀式の方法を知らなかったからであり、今は状況が一変している。

「ヤマタノオロチには勝てないかもしれない？ 勝てたとしても多くの被害で出るかもしれない？ ふざけるなよ。そんな不確かな予想を恐れてお前が日下部を殺すことになるくらいなら、俺は少しでも希望がある方を選ぶ！」

「うっ……」

香雅里がなにも言えなくなるのを認めると、紘也は後ろにいる自分の契約幻獣たちを見回した。

「でも悲しいかな。選んだところで俺に戦う力なんてない。だからウロ、ウエルシュ、お前たちの力を貸してくれ」

「なあにを今更言ってますか紘也くん。そんなのもつちのろんに決まってるじゃあないですか！ でも流石は紘也くんだね。あたしの好感度は鰻のぼりの鯉のぼりですよ」

「ウエルシュも異存はありません」

彼女たちなら反対などしないと確信していた。紘也は安堵に顔を緩ませ、それから毅然とした様子で日下部朝彦に視線を戻す。

「というわけだ。邪魔はしないが協力はさせてもらうぞ。ヤマタノオロチ討伐のな」

宣告すると、朝彦は静かに目を閉じた。

「……フン、勝手にすればいい」

呟くように言うと、彼はコートを翻して祭壇を登り始める。公転する四本の宝剣が歩行スピードに合わせて移動する。が、その時「だ、ダメよ！ 今ヤマタノオロチの封印を解いちゃダメ！」

大声を上げた香雅里が朝彦を止めんと地面を蹴った。ほとんど反射的に紘也が手首を掴んで制止させなければ、彼女は脇目も振らず朝彦に飛びかかっていただろう。

「待てよ葛木！ お前はまだ日下部を犠牲にするつもりなのかよ！」

「違うわ！」

「？」

そこで初めて紘也は香雅里が別の理由で動いたことを悟った。

「私だって、本当に滅することができのならば諸手を上げて賛成するわ。でも今はダメ。知らないのなら教えてあげる、秋幡紘也。ヤマタノオロチには？ 霊威？ って特性があるのよ。記録によると強大な念力のようなものとあったけど、それだけじゃない。もし個種結界を張られたら、周囲に在る力の弱い生物が？ 霊威？ にあてられて妖魔化してしまうの。生物にはもちろん人間も含まれるわ。私には日下部家の人間の多くがそれに抵抗できるとはとも思えない！」

必死に、それはもう心の底から必死に訴える香雅里。朝彦は足を止め、顔だけこちらを振り返った。

「フン、貴様が懸念することくらいなら全て対策している。妖魔化に関しては、俺が日下部家の者にそうならないよう術式を編んでいる。問題は無い」

「日下部家だけじゃないわ。この八櫛谷には私たち以外の人間もいるのよ」

言われて紘也はハッと気づいた。

「そうか、孝一と愛沙か！」

二人は八櫛亭で紘也たちの帰りを待っている。八櫛亭には香雅里の部下もいるが、負傷していても彼らは葛木の術者だ。？ 霊威？ とやらに堪えることは可能だろう。しかし、孝一と愛沙はなんの力もない一般人なのだ。

「悪い！ 封印解くのを少しだけ待ってくれ。宿にいる一般人を避難させたいんだ」

携帯は圏外だから伝えるにも一度八櫛亭まで戻る必要がある。

「残念だが無理だ」

冷徹な朝彦は即座に切り捨てた。

「奴の個種結界の範囲はこの八櫛谷全域を包む。貴様の連れをその外へ逃がすまで待っている余裕はない。そんなことをすれば宝剣に貯蓄された魔力が抜けてしまっ上に、この日この時刻に高ぶっていた土地の霊気も下がる。再び充填できるほどの力を地脈から得ることができなくなる。そうなっては終わりだ」

「終わらないよ！」

叫んだのはウロだった。彼女ははずかすと紘也よりも前に歩み出ていく。

「終わるわけがない！ あたしが終わらせない！ たとえあんたの剣が全部ナマクラになったとしても、この常にスターの音が鳴り続けるくらい無敵状態なウロボロスさんが百万回？再生？してでも勝利してみせますよ！」

実に頼もしい彼女の言葉だが、日下部朝彦は鼻息を吹いて一蹴する。

「貴様らの事情に付き合うつもりはない。どうしてもその一般人を救いたいなら自分たちだけでなんとかしろ」

「ええ、なんとかしてみせますとも！ だからそのためにまずはあんな力を力ずくでも止める！　　ってことでもいいよね、紘也くん？」

「ああ、そうだな」

サムズアップ&ウイंकでアピールしてくるウロに呆れつつも、その意見には賛成票を投じる紘也だ。こちらの都合など知ったことではないと朝彦は態度で示している。

「さっき邪魔はしないって言ったけど撤回する。今封印を解くことにはどうしても納得できないんだ。文句はないよな？ 勝手にしろと言ったのはあんだだ」

紘也の啖呵に呼応するように、ウロ、ウェルシュ、香雅里が戦闘態勢を取る。

「……やはり、貴様らは俺の障害となるか。ならばこちらも邪魔はさせない！」

「！ 上です、マスター」

鼻の利くウエルシュが真つ先に反応した。紘也がそれを認知する前に彼女は上方に跳躍し、紘也たちを覆うように 守護の炎 を展開する。その刹那、白熱する輝きが雨のように降り注いできた。輝きは鳥の羽根らしき形状に見えた。

条件反射で頭を庇う紘也たちだが、頭上にはウエルシュの 守護の炎 が広がっている。あらゆる敵意を遮断する最強の盾は、隙間なく降り続ける輝く羽根を一切通すことはない。

輝く羽根の雨は数秒で止む。

「よく我の奇襲を防いだ。流石だと賞賛すべきか」

「あいつは、ヤタガラス！」

天井の穴から差し込む太陽光を背に三本脚の怪鳥が翼を羽ばたかせていた。昨夜ウエルシュに手酷くやられたのかと思っていたが、まだ動けたのか。

「マスター、ヤタガラスはウエルシュが？ 拒絶？ します」

「よし、任せた」

ウエルシュは背に赤き翼を生やして宙を舞う。彼女がヤタガラスを抑えている間に日下部朝彦を止めなければならぬ。でなければ孝一と愛沙が危険だ。

「余所見しててもいいけど、私たちが足止めに加わらないと思ったらダメよ」

凜とした声音は夕亜のものだ。彼女はいつの間にか紘也たちの周囲に数多くの護符を半球状に配置していた。

「これは？」

「逆境界よ」と香雅里が冷や汗を垂らしながら、「普通の境界と違って対象を中に閉じ込めるための術式。こと『足止め』に限って言えば封術師は相当に厄介な相手になるわ」

「ふふん、このウロボロスさんを檻に入れようってんですか。残念

だけどね、夕亜っち。そんな小細工はあたしの前じゃあ意味を成さないんだよ！」

ウロが突撃を仕掛ける。どうやって結界を破るのかと思いきや、なんのことはない。単純明快、力技だ。

「らああつ！！」

裂帛の気合いと共に彼女の細腕からは考えられない剛拳が大気を裂く。岩をも砕きそうな右ストレートが結界の境界にあたる見えな壁を打つ。聞き慣れない打撃音が反響し、空気に波紋が発生する。だが

「オオアウチ！？」

奇妙の悲鳴を上げてウロは弾かれた。結界はビクともしていない。尻餅をついたウロは反射した痛撃に右手を押さえ悶えている。

「ごめんね。私の逆結界は今まで破られたことがないの。お兄ちゃんが封印を解くまでそこで大人しくしていてくれると嬉しいなあ」

夕亜は得意顔だった。これはただの結界ではなく、日下部家宗主による逆結界。ウロボロスすら跳ね返す強度は、確かに並の魔術師程度では破ることなどできやしない。

「むう、やるね夕亜っち。絃也くんちょっと待ってて。あと三回くらい殴れば罅が入りそうだから」

「それじゃ遅いんだよ」

けれど、結界だとわかれば絃也は強い。

朝彦は既に踵を返して祭壇を登り始めている。急がなければならぬ。こんな結界に時間を取られているわけにはいかない。

「五秒で破る！」

絃也は結界の見えない壁に触れる。精神を集中させて己の魔力を制御し、結界を構成している魔力に干渉する。その魔力の流れを読み、逆を辿り、供給源を見つけ

そして断つ。

パン！ 絃也から最も近い護符が風船のように弾け飛んだ。

「え？」と夕亜の表情が固まる。だからといって絃也の魔力干渉は

止まらない。

パン！ パン！ パン！ パン！

パン！

パン！ パン！ パン！ パン！

パン！ パン！ パン！ パン！ パン！

パン！

「ええええええええええ！？ う、嘘でしょう？」

次々と連鎖的に破裂していく護符に夕亜は驚愕のあまり目を見開いた。ざわざわと、周囲の術者たちにも動揺が伝播する。

「止まりなさい、日下部朝彦！」

境界が完全に消滅するや否や、香雅里が護符から 天之秘剣・氷迦理 を抜刀して大地を蹴る。疾駆する香雅里に朝彦は足を止める気配を見せない。

と、香雅里の進路上に夕亜が割り込む。

「止まるのは香雅里ちゃんの方！」

「そこをどいて！ 夕亜！」

訴えるも道を開ける気のない夕亜に、香雅里は逆刃に握った 氷迦理 を横薙ぎに一閃する。言っても聞かないなら気絶させるしかないと考えたのだろう。

刃の背が夕亜の胸に食い込もうとしたその瞬間、バチイイ！！

とスパークが発生して香雅里は弾かれたように三メートルほど吹き飛んだ。

夕亜は両手に一枚ずつなにかの護符を指で挟み持っている。あれが特殊な力場を生成して香雅里を弾いたのだ。

「痛っ……」香雅里は身を起こし、「夕亜！ あなたわかつてるの！ ここでヤマタノオロチの封印を解いたら宿にいる二人が妖魔化する危険があるのよ！」

「香雅里ちゃんが孝一さんと愛沙ちゃんを助けたい気持ちはよくわかったわ。でも、私は死にたくない。一人罪を犯してまで力を手に入れたお兄ちゃんの努力を水泡に帰したくない。あの二人には悪い

けど、ここは譲れない」

「そう。なにを言っても無駄なようね。だったら私は本気であなたを排除するわ!」

「覚悟を挫かれた今の香雅里ちゃんに私は殺せない。私も香雅里ちゃんを殺せない。ただ、お兄ちゃんが封印を解くまで時間を稼ぐことはできるわ。ただ、香雅里ちゃん相手だと私も本気にならないといけないよね?」

ずっと夕亜は瞑目する。彼女はたった一秒で精神集中を完了させ、魔力が極限化するまで高めた。

ゆつくりと瞼を持ち上がった時、日下部家宗主としての引き締まった顔がそこにあった。

「本当に残念。香雅里ちゃんは私の味方になってくれると思ってたのに、今は彼らの方が大事なんだね」

「そんなことない。夕亜は私のたった一人の親友と呼べる人。私は夕亜を捨てたんじゃない。みんなが助かる道を選んだの。だから夕亜も絶対に助けて見せる!」

「私もそんな理想に縋れたらよかつたんだけどね」

香雅里は 天之秘剣・冰迦理 を、夕亜は護符を構え、お互いの意地をかけて衝突する。

しかし、戦闘が始まった時点で足止めが目的の夕亜の勝利だった。朝彦は祭壇を登り終えている。今、彼を止められるのは紘也とウロの二人だけ。だから紘也はウロボロスの契約者として彼女に命じる。「ウロ、どうにかして封印解放を阻止しろ!」

「イエッサー! って言いたいんだけど、どうも難しいっぽいよ」
日下部朝彦ばかり注意していた紘也だが、ウロに言われるまでもなくそのことには気づいていた。

「確かにまあ、難しいけどよ」

紘也とウロの周りを、総勢三十人の日下部家の術者が包囲しているのだ。彼らはじりじりと包囲の輪を縮めており、ネズミ一匹抜け出す隙間もない。

「そこをどうにかするのがお前の仕事だろうが」

「なんて無茶振り！？　だけどそれでもやっつてのけるのが一騎当千たるウロボロスさんです！　期待にお応えしましょう！」

　こういう時のウロは頼もしいが、いかんせん時間がない。封印解除にはどのくらいの時間がかかる？　逸る気持ちに心臓を蝕まれるような感覚に苛まれながら、紘也は突破口を見つけるために目を配らせた。

S e c t i o n - 2 1 真実と本音（後書き）

次回の更新は10月27日（木）です。

Section - 22 覚悟の力

宝剣強盗 日下部朝彦は祭壇の最上に屹立していた。

眼前には山嶺のごとく聳える見事な氷の塊。祭壇に立つと、氷中に眠る美しく神秘的な女性と視点の高さが同じになる。

彼女は五代目『生贄の姫巫女』。朝彦と夕亜の曾祖母にあたる人だ。

「曾お婆様、あなたは何十年とこの位置から変わらぬ景色を見下ろしていたのだろう」

曾祖母のことに詳しいわけでもないが、朝彦は御先祖にはこれでも最大限の敬意を払っている。けれど朝彦は各地から宝剣を奪取し日下部家に泥を塗ってしまった。大切な家族を救うためとはいえ、罪を犯した。

「俺はもはや日下部を名乗るつもりはない。だから俺の罪は俺だけのものだ」

夕亜や日下部家の者たちには計画を伝えていたが、皆が自分と同じ罪を負う必要はないし、背負わせない。悪役は一人で充分だ。そして

「ここまでやったからには、退くわけにはいかない」

朝彦は天才だった。術者としての能力は歴代日下部家宗主すら遙かに凌駕している。といってもそれは封術以外の話で、封術の才能は全て夕亜に受け継がれたのではと思えるほどからつきしだった。

日下部家は封術師の一族。封術ができなければ宗家の長男だろうが他がどれほど優れていようが周りから疎まれる。

妹に嫉妬したこともあった。だが、そんな環境を引っ繰り返したのも妹だった。夕亜は皆に朝彦を理解してもらったため、時には説得し時には行動で示した。その結果時間はかかったが日下部家に朝彦の居場所が作られたのだ。

その時に悟った。朝彦が封術以外の才能に恵まれたのは、夕亜を

忌まわしき呪縛から解放放つためだと。

「俺は、なにがなんでも成功させなければならぬ」

しかし邪魔がいる。その邪魔者どもは封印を解くことには賛成したが、たかが二人の一般人のためだけにタイミングをずらせと訴えてきた。今この瞬間のために練ってきた計画を、そんな主張のせいで崩されるわけにはいかない。

背後では日下部家の皆が邪魔者を食い止めてくれている。だが朝彦はそんな彼らの戦闘については気にかけない。防衛に関して封術師と比肩する者はそうはいないからだ。無視することは彼らを信頼している証拠でもある。

静かに、御先祖に語りかけるように朝彦は言葉を紡ぐ。

「曾お婆様、日下部家に伝わる封印の儀はあなたの代で終わりだ」
朝彦はゆっくりとした動作で腕を薙ぐ。すると円運動する四本の宝剣が空中で静止し、四本全てがその切っ先を氷中の女性へと向ける。

「俺は必ず彼の妖魔を滅ぼす。そしてあなたも永久の呪縛から解放しよう。　　行け！」

その言葉を合図に、四本の宝剣が一斉に氷へと突貫した。

ウエルシユはヤタガラスと対峙していた。

黒い鳥翼と赤い竜翼。二つの羽ばたきの音が空洞内に木霊している。真紅の瞳に三本足の怪鳥を捉え、ウエルシユは宣告する。

「ウエルシユには時間がありません。早々に決着をつけます」

六つの炎が、ウエルシユを取り囲むように六つの魔法陣を描いた。それぞれの魔法陣の照準をヤタガラスに合わせ、　拒絶の炎　を一斉放射する。

「むっ！」

素早く反応したヤタガラスは急旋回で火炎流をかわそうとする。

だが飛び回るには空洞内は狭い。全てをかわし切れずに両翼を掠めた。じゅわつと熱したフライパンに水滴を振ったような音を立て、ヤタガラスの翼の一部が焼失する。

「声にならない悲鳴を上げるヤタガラスだが、飛行能力はまだ失われていないようだ。ウエルシュは追撃を仕掛けるために同じ魔法陣を同じ数だけ展開する。というより炎熱光線の魔法陣は六つまでしか同時展開できない。そこはウエルシュの今後の課題だった。理想は数も陣の大きさも倍である。」

「同じ技を何度も食らう我ではない！」
ヤタガラスの全身が白光に包まれる。また目眩ましかと思っただが違う。リング状に収斂していく光は、？陽？の特性が付加した個種結界を発動させたわけではない。

あれがなにかはわからないけれど、ウエルシュは魔法陣の発動を急ぐことにした。しかしそれよりも早く

「！？」
白光が衝撃波と化してウエルシュに押し寄せ、その華奢な体を跳ね飛ばした。

壁に叩きつけられる寸前にウエルシュは翼の羽ばたきでブレーキをかける。即座に 守護の炎 を纏ったことが幸いし衝撃波によるダメージは皆無だった。？拒絶？と？守護？の切り替えの速さには自信があるウエルシュである。

「ふむ、お主にはどうやら二種類の性質の炎があるようだな。そして魔法陣が消えたところを見るに、それらは同時には使用できない。もう敵に悟られてしまった。でもそこだけわかってても対処はできない。ウエルシュは沈黙を守り、肯定も否定もせずに 拒絶の炎を掌に生成する。」

「我の目的は時間稼ぎだ。お主の炎が攻撃と防御に分かれているのなら、防御の方だけ使わせればよい」

ヤタガラスの両翼から夥しい数の 太陽の羽根 が発射される。

ウエルシユは掌の炎を一旦消してもう一度 守護の炎 を身に纏う。ヤタガラスがいくら 太陽の羽根 を連弾しようとも、ウエルシユの？守護？は破られない。それは幾度と攻撃を受けた経験から判断している。

が、敵の狙いはウエルシユに傷をつけることではない。あくまで時間稼ぎ。 守護の炎 で攻撃を防いでいる間は、ウエルシユは反撃に転じられない。

「……止まない」

その証拠に 太陽の羽根 は一呼吸の間も与えることなく射出され続けている。ウエルシユを空中に磔にし、戦闘を膠着させている。 守護の炎 を纏ったまま移動できないわけではないけれど、無数の輝く羽根による圧力は凄まじく、ウエルシユの膂力を持ってしても徐々にしか前に進めない。

「……本気のようにです」

ヤタガラスは全力、いや限界を超えてまでウエルシユを足止めしようとしている。そうでなければこのような攻撃などウエルシユは一瞬で跳ね返していた。

「無論」

ウエルシユの呟きが聞こえたのか、ヤタガラスが嘴を開いた。しかしその声に余裕はなく、喋るだけで命を削っているような労苦があった。

「私の心は、我が主と同一。夕亜殿を確実に救うために、この命を賭している」

「ウエルシユも、マスターも夕亜様を見殺しにするつもりはありません。孝一様と愛沙様を巻き込みたくないだけです。退いてください」

「それはできません。我らにとっては時間との勝負なのだ」

契約幻獣とはいえどうしてそこまでするのか、という愚問をウエルシユは排除した。ヤタガラスもウエルシユと同じ、マスターのことが大好きなのだ。そこにどんな経緯があるかは知らないが、ヤタ

ガラスは絶対に自分の意思を曲げることはないだろう。

「たとえ我が魔力が尽きようともお主はここに留めておく。恨みなければ恨むといい」

ヤタガラスは文字通り命懸けた。このまま 太陽の羽根 を射出し続けていれば、やがて魔力が枯渇しマナの乖離が始まってしまう。その覚悟が伝わってくる。

ならば、ウエルシユも勝負に出るしかない。

「攻撃は最大の防御と言います。ウエルシユはそれを実行しようと思えます」

言うや否や、ウエルシユは身を包んでいた 守護の炎 を解除した。瞬間、無数の輝く羽根がウエルシユの体に突き刺さる。焼けるような痛みには堪えながら、ウエルシユは魔力を練り特大の魔法陣を中空に描画する。

「な、なにをする気だ？」

「ウエルシユの炎はヤタガラスの全てを？拒絶？します」

ヤタガラスを？拒絶？の対象に、

太陽の羽根 を？拒絶？の対象に、

過去に見た？陽？の白光を？拒絶？の対象に、

灰燼すら残さない 拒絶の炎 を、ウエルシユは真紅の魔法陣から撃ち放つ。

Section - 22 覚悟の力（後書き）

お知らせ

この天井裏のウロボロスに続いてMFに投稿した作品が二次選考通過止まりで落選しました。つきましてはVolume - 02終了後に次の公募用作品を書くための連載休止期間に入りたいと思います。決して打ち切るわけではありませんので、見限らず待っていていただけると嬉しいです^^

今回の更新は10月30日（日）です。

Section - 23 愛された兄妹

「ほらほらどうしたんですか？ この程度ですか？ あたしを止めなければどんどんかかってこいやああっ！」

日下部家の術者にあからさまな挑発をぶつけるウロ。彼女の足下には既に五人の術者が突っ伏していた。死んではない。全員うまい具合に気絶させただけだ。

ウロボロスの強さを目の当たりにして他の術者たちの動きが滞る。「なんですか？ ビビってんですか？ まったく、よく躡られたチキン野郎だね。見ていて滑稽だよ」

「煽るな！ 受け身になってどうすんだよ。こいつらは時間稼ぎを狙ってるんだぞ。一点集中で突破しろ！」

「了解であります、大佐！」

本当にこの無限の大蛇はどんな時でも調子がいいな、と危うく目眩を引き起こしそうになりながらも紘也は地面を蹴った彼女の後に続く。

二人を阻止せんと群がってくる封術師たちを、ウロはばったばったと薙ぎ払って突き進む。夕亜ならともかく彼ら程度の封術でウロボロスを封じることなど不可能に近い。だからといって体術で貼りついてこようとも、彼女の腕力なら服についた埃を払うように簡単に引き剥がすことができる。

だがそんなことは向こうも承知の上だ。果敢に挑んできた最初の五人が証明している。こうなるとウロボロスを止める方法は一つだ。祭壇へ到達する直前、がしっと紘也の腕が掴まれる。

やはり、紘也が狙われるようだ。

予想していても事前に察知して回避できるほど紘也の身体能力は一般人離れていない。比べて相手は対人戦が不得手とはいえ経験豊富な魔術師だ。体術で敵うはずもなく紘也は呆気なく組み伏せられてしまう。

「紘也くん!？」

案の定ウロは停止してこちらに振り返った。そして紘也に関節技を決めつつある男性をライダーキックで蹴り飛ばす。

「アホ! 俺に構わずあいつを止める! 放つといっても殺されるわけじゃないんだ!」

立ち上がり叱咤する紘也に、それを補助していたウロは反駁する。「そんな台詞はフィクションの世界だけにしてもらえるかな。あたしは紘也くんのピンチにはどんなことがあるうとも駆けつけると決めるんです」

「だったら俺を守りながらあいつも止める」

「オウ!? 自分からハードルを上げてしまった!？」

自業自得に嘆くウロは軽く黙殺し、紘也は戦況を分析する。

それにしても敵の数が多い。殺すわけにもいかないからウロに大技を使わせることもできない……。

そうこう思案している間にも数人の術者が間合いを詰めてくる。

幹部と思われる老爺と若い女性、それから八櫛亭の女将だった。

「む、紘也くんには指一本触れさせないよ!」

ウロは投擲された封術の護符三枚を高速の手刀で斬り払った後、旋風脚で老爺と女性を蹴り飛ばした。

しかしその隙を突いて女将が紘也に掴みかかってきた。抵抗するも虚しく喉元にナイフを添えられる。

「妖魔ウロボロス、そこから動かないでちょうだい」

「……紘也くん、もつと自分でも護身してくれないと。あたし過労死しちゃう」

殺す気がないとはいえ人質とはいいい作戦だ。ウロボロスをしつかり封じている。敵ながら天晴　と感心している場合ではなかった。当の人質は紘也なのだから。

「なんでだ! なんであんなに必死なんだよ!」

「夕亜様は私たち分家の者にとつても家族同然のお方だからですよ。他に理由が必要ならいくらでも語ってあげられます。当時危機だっ

た八櫛亭を建て直してくれた時のお話でもしましうか？」

「いや、いい。あいつが愛されることはよくわかった」

文庫本三冊くらい密度が濃そうだ。視線を前に向けるとウロが術者二人に拘束されているところだった。

確かに彼女の言う通り、護身も満足にできないようでは大きなことなど言えない。

「俺が足手纏いになったらダメだよな。それこそ滑稽だ」

紘也は女将のナイフを持つ方の腕を掴む。

「な、なにを あっ!？」

突如、女将が白目を剥いて昏倒した。理由は簡単。紘也が魔力干渉をし、彼女の魔力を思いつ切り乱してやったからだ。

ウロを含め、誰もがなにが起こったのかわからず唖然としている。実をいうと、紘也も驚いていた。力の弱い術者なら一時的に動けなくするくらいだと計算していたのだが、まさか失神するとは思ってもいなかったのだ。紘也はまだ自分の力を過小評価していたのだろうか。それとも最近いろいろあったから魔力制御のスキルが向上したのだろうか。

女将には後で謝るとして、なんにしても好機である。

「ウロ！」

「オウ！　なんか今の紘也くんめっちゃかっこよくなかった？　んもう、紘也くんはどこまであたしの好感度を上げれば気が済むん

」

「ふざけるのは百年後にしろ！　今度こそ突破するぞ！」

「あいわかりやした！　もう回りくどいことなんてしないよ！」

拘束していた二人をいともあっさり引き剥がしたウロは、紘也に密着すると恋人にするように自分の腕を紘也の腕に絡め、そのまま高くジャンプする。なんのつもりだと言及したが、紘也がそうする前に彼女は空いた手に魔力の球を生成した。

「はっはっは、全てぶっ飛ばしてあげます」

ラスボスみたく哄笑し、ウロは魔力球を誰もいない地面へと叩き

つけた。瞬間、爆光と衝撃波が日下部家の術者を一人残らず壁際まで吹き飛ばした。

手加減はしていたようで安心する紘也だったが、突然絶叫アトラクションに乗せられたような感覚に着地後も動悸が収まらない。ウロは後でしばき倒そうと心に決める。

一応周囲を見回す。立っている者は紘也とウロを除けば、向こうで互角に渡り合っている香雅里と夕亜だけだ。

「……マスター」

と天から赤い翼の少女　ウエルシュが降下してきた。彼女が戻ってきたということはヤタガラスを倒したのだろう。

「　　つてお前、ボロボロじゃないか。大丈夫か？」

「問題ありません。ウエルシュは頑丈です。元気です」

見た目ほどダメージを負ってないのならなによりだ。紘也は表情を引き締め、祭壇の日下部朝彦を見上げる。

「行くぞ、あいつを止める」

「そうは……させん」

ヤタガラスが消え入りそうな声を出して紘也たちの前に立ち塞がった。翼の一部を失い、体中から血を流し誰が見ても瀕死状態だとわかる。ウエルシュの　拒絶の炎　はチートレベルの破壊力を誇るのだが、形を持って生きているということは直撃だけは凌いだらしい。

「……想像以上にしぶといです」

「あんたが甘いんじゃないの？」

「うるさいです。ウロボロス」

少しばかりむくれるウエルシュ。それはともかく、立っているのもやっとなヤタガラスに紘也は言葉を投げる。

「もうやめろよ。そんな体じゃ足止めなんのできないだろ！」

「我がどうなるうとも、我が主には近づかせん」

その時、ヤタガラスの意思に賛同するように周りから『そうだとだ』と幾多の声が響く。見ると、ウロが吹き飛ばしたはずの日下

部家の術者が皆、よろよろと立ち上がっていた。

「朝彦様の邪魔はさせない!」「夕亜様は私たちが助ける!」「一般人の二人には悪いけど我々は夕亜様の方が大切なんだ!」「夕亜ちゃんは絶対に死なせない!」「朝彦様!早く封印を!」「ここはわしらが絶対に通しはせん!」「二人は私たちの家族なの!」

四方八方から乱れるように言葉が飛び交う。彼らの必死な声を聞いてみると、なんだかこちらが悪者のような気がしてきた。いや向こうが悪だとも言わないけれど。

「どんだけ愛されてるんだよ、あの兄妹は」

あまりの迫力に紘也は少々気圧されてしまった。

日下部夕亜の生み出す力場と 天之秘剣・氷迦理 が激しく衝突する。

「すごいわね、夕亜。みんなあなたのことが大好きみたいよ」

この力場も結界の一種だ。反射効果があるため封術師の防御兼唯一の攻撃術となっている。そして夕亜のそれは最高クラス。香雅里が 氷迦理 の刃で幾重にも斬りつけようと、青白い火花が散るだけで打ち破れる気配がない。

刃が袈裟斬りに振るわれる。力場がそれを受け止め、弾く。すぐさま香雅里は刀を返し、次は魔力を乗せて大上段から叩きつける。

やはり力場に防がれる。が、今回は 氷迦理 の能力を発動させている。狙いは力場から流れる魔力。それを斬り、氷結させて根本である護符を破壊する。

しかし夕亜も手強い。新たな護符を空中に撒き、氷が力場の護符に達する前に何処へと消し去ってしまった。

彼女がその気になれば 氷迦理 も一瞬で封印されてしまうだろう。だから香雅里は細心の注意を払って刃を振るっている。無論、式神を出したところで無駄なこと承知だ。

「私もね、最初はこうなるとは思ってなかったんだよ」

何度目かも知れない打ち合いの後、夕亜が囁くように言った。

「短い人生だつてわかってたから、精一杯、楽しく今日まで生きようとしてた。たくさんいいことをして、少しでも悔いを残さないようにしてた。でもそれは諦めだよな？ 本当はすごく怖いくせに、『自分の死には意味がある、無駄死にじゃない』ってずっと言い聞かせて無理やり納得してきた」

彼女の顔にはいつもの能天気な明るさはなく、悲愴の色に染まっていた。夕亜、と香雅里は思わず親友の名を呟く。 氷迦理 を振るう手が鈍つたが、そこを突いてくるようなことを彼女はしなかった。

代わりに夕亜はどこか儂げに微笑んで言葉を紡ぐ。

「でもね、お兄ちゃんが言ってくれたの。『お前は生きられる。封印の生贄になどさせせん。俺が救つてやる』つて。お兄ちゃんラブの香雅里ちゃんならわかつてくれるよね？ 真面目な顔でそんなこと言われたら、私、嬉しくて涙が止まらなかった」

「私は兄様ラブじゃなくてライクよ！ まあそれは置いて、夕亜の気持ちはわかるわ。私だつて夕亜を助きたい。でも、だからつて一般人を巻き込むことはできない」

「友達だから？」

「そうよ。いえ、たとえそうでなくとも私たちは陰陽師。人を守らなくてどうするのよ！」

諭すように言った、その直後だった。

ピキリ、と。

罅割れの音がした。

数瞬遅れて、あれだけ巨大で厚みのあつた氷塊が粉微塵に砕け散る。宙を舞う氷が日差しを反射し、ダイヤモンドダストみたいな神秘さを演出している。

絶望に似た感覚が香雅里を襲う。

「そんな、もう封印が……」

地面に降ってくる氷の破片が透き通った音を奏でる。氷の中心にいた女性が不自然に浮遊して祭壇上に立ち、四本の宝剣を従える日下部朝彦と対峙する。

間に合わなかった。

ヤマタノオロチの封印が、解けた。

S e c t i o n - 2 3 愛された兄妹（後書き）

次回の更新は11月3日（木）です。

Section - 24 解かれた封印

永久に溶けないらしい氷の破片が、水蒸気になるでもなくすうと消えていく。それは紘也がいつぞやに見た幻獣がマナの乖離を起こした時とよく似ていた。

この場にある全ての視線が今、祭壇上に向けられている。

そこには対照的な男女が屹立している。漆黒のロングコートを羽織る男に、純白の死に装束を纏う女。二人の周囲は薄暗く、まるで一昔前のテレビ画面を思わせるモノクロさがある。

時が止まったかのような静寂。

それを打ち破ったのは祭壇上の黒い方だった。彼はなんの予兆もなく高さ五・六メートルはある祭壇から後ろ向きに飛び降りたのだ。

いや違う。自ら飛び降りたにしては不自然なアーチを描いている。吹き飛ばされた、そう表現した方が合点はいく。

「 都牟刈大刀 ！ 八重垣剣 ！」

空中に身を晒しながらも男 日下部朝彦は自分を中心に周回する四本の宝剣のうち二本を操る。二重刃の曲刀と櫛状の刀身を持つ日本刀だ。前者から突風が、後者からは猛火が放たれ、互いに混ざり合って相乗効果を起こし威力を何倍にも引き上げる。

ドラゴンプレスにも匹敵しそうな業炎が祭壇上の女性を襲う。それは祭壇ごと女性を炎上させ、その灼熱は洞窟の端々にまで行き渡る。

祭壇の近くにいた人々が慌てた様子で避難している。かくいう紘也も割と近くにいたため、焼け爛れそうな熱波をもろに浴びてしまった。耐熱度の高そうなウエルシュがその身を持って盾となり、ウ口が俊足で紘也を炎から遠ざけてくれなければ、逃げ遅れて生ける白骨の戦士に生まれ変わっていたかもしれない。危なかった。

「熱つ……あいついきなりなんて無茶やらかすんだ！」

「ウエルシュはさつきより居心地がいいです」

「むう、さっきの炎も風も昨夜の比じゃなかったよ。地脈とやらの力を得ている証拠だね」

「そんな見てわかる分析いらねえよ！ まさか今の一撃で終了とかいうオチじゃないよな」

できればそうであってほしいと願う紘也だが、現実はそう甘くないことを五秒後に思い知る。

あれだけ燃え盛っていた炎が一瞬で掻き消えた。術者である朝彦が消したのではなく、中から凄まじい力で爆散させられたという感じの消え方だった。

トッ。

トッ。

トッ。

トッ。

煙がかつた祭壇の上から何者かが裸足で階段を下りてくる。言うまでもない、死に装束の女性だ。彼女の纏う白い布には一点の焦げ跡も見当たらない。

女性が一番下、紘也たちと同じ地面に足をつく。億劫そうに開かれた瞼の奥には、人間のものとは思えない血色の瞳が濁った光を灯していた。

《目覚めて早々に面白い歓迎をしてくれるな。人間ども》

どういうわけか声は何重に聞こえた。女性っぽいアルトから変声期前の少年っぽいボーイソプラノまで、紘也の幻聴でなければ声質も多種多様だった。ヤマタノオロチなだけに、恐らく八種類だろう。と、ウロが過剰なくらい戦慄していた。

「え？ 嘘？ この声は、お、お、お、オロチん……」

「はあ！？　じゃあアレお前の知り合いかよ！？」

「オロちんじやない！？」

「それにしても話がおかしくないか？　アレは人間じゃなかったのかよ」

「はいスルーポイントいただきましたあ……くすん」

噉り泣くウロはその辺に放置しといて、紘也は祭壇下にいる女性を注視する。聞いた話のままなら、あの女性は先代『生贄の姫巫女』である夕亜の曾祖母であるはずだ。

「うーん、たぶん曾お婆ちゃんの体にヤマタノオロチが憑依してるんじゃないかな」

いつ現れたのか夕亜が紘也の隣に並んでいた。人差し指で顎を持ち上げる仕草は相変わらず緊張感の欠片もない。宗主モードはどこへ消えたのだ。

「憑依つて、ゴースト系の幻獣でもないのにそんなことできるのかよ」

「なんでこっち見るんですか紘也くん。いくら万能なウロボロスさんでも幽体離脱くらいが関の山だよ」

なんでもやつてのけそうな身食らう蛇が可能とえば可能な気がしたのだ。というか幽体離脱はできるのか。

「憑依とはちよつと違うわ。言ってみればヤマタノオロチは『生贄の姫巫女』の魂で繋がれた状態。元々あの人の中にいて、内側からあの人の体に乗っ取ったつてところかしら」

香雅里がそれらしい説明をする。そのまま彼女は紘也に突き刺すような視線を投げ、

「そんなことよりどうするのよ、秋幡紘也！　まだ個種結界は発動してないみたいだけど、このままじゃ鷺嶋さんたちが妖魔化するわよ！」

必死に冷静さを保とうとしているが、香雅里は相当焦っているようだった。紘也も内心ではいつ？　霊威？　の個種結界が発動するか気がならない。

どうする？ ウロとウエルシュに二人を乗せて全力飛行で離脱させるか？ いや、それこそ二人が死んでしまう。

ウロやウエルシュは素で空を飛んでいるようで実は浮遊魔術を駆使している。浮遊魔術は飛空中に対象者を安定させる効果があるが、それだけだ。人間の堪えられないスピードで飛んだ場合は普通に死ぬ。風圧をもろに受けるため肉体が無事でも窒息は免れない。ウロの背に乗って飛んだことのある紘也だからわかる事実だ。

こうやって思考している間にも時間は流れていく。焦りが蓄積していく。

「結界を張れ。それで一時凌ぎにはなる」

意外な人物から打開案が飛んできた。黒コートを翻す日下部朝彦は、体の調子を見るように人間の手足を動かしているヤマタノオロチから視線を離さずに言う。

「奴がああ器に入っている間は個種結界を張っても八櫛亭までは届かん。どうしてもその一般人を助けたければ、邪魔だ。貴様らは消えろ」

「あん？ 邪魔ってなんですか？ 喧嘩売ってんですか？」

「ちよつと黙ってるいちやもんっけんな昔の不良かお前は！」

這い回る騒音スプリンクラーことウロボロスを強制的に沈黙させ、紘也は朝彦に訊く。

「俺たちがいなくても大丈夫なのか？」

「貴様らの助けなど必要ない。目障りだ。さつさと失せろ」

言い方はキツイが、紘也はそこに彼の優しさを見出した気がした。『俺が引きつけておくからさつさと一般人の下へ行け』と紘也は勝手に脳内補完した。

「主、我も共に戦おう」

「その傷では無理だ、ヤタガラス。貴様は下がっている」

「……御意」

ヤタガラスは自分が足手纏いであることを悟ったように潔く身を引いた。

「今が奴を滅ぼす好機。これ以上貴様らに構うつもりはない」

冷たく言い捨てた刹那、朝彦の姿が消えた。ように見えた。彼は高速で跳躍しヤマタノオロチに接近していた。明らかに昨夜までと動きが違う。神話級の術者とやらになったからだろうか。

四本の宝剣を自在に操り、体術も駆使した日下部朝彦の戦いが始まる。

そちらも気になるが、戦い始めたということはそれだけ個種結界の発動が早まる。紘也は自分のやるべきことを再確認し、次に香雅里と夕亜を交互に見る。

「葛木、日下部、どちらかついてきてくれ。俺は結界なんて張れないから」

ウロたち幻獣の個種結界では個種結界を防げない。ウエルシュの？拒絶？や？守護？でも物理的なものでなければ通してしまう。だから人間の術者が必要だ。

「私はお兄ちゃんここに残るわ。これは私のための戦いなんだから、一人逃げるようなマネはしたくないの」

「じゃあ私が行くわ。夕亜ほど強靱には作れないけど」

やはり香雅里が来ることになった。そうなると次はどうやって戻るかだ。徒歩で帰ろうものなら一時間強かかる。せつかく上に穴があるんだから利用するべきだ、と紘也はウロとウエルシュの方を向く。以心伝心でもしたのか二人とも翼を出して既に準備万端だった。「オウ！　そうと決まればさくつと飛んでいきますよう！　紘也くん紘也くん、あたしに乗って。このウロボロランサット236便に！」

「マスター、ウエルシュに乗ってください。こちらはウエルシュテッド93便です」

だからなぜ二機とも墜落しそんな名前なのだろうか。どうでもいいことだけれど。

《逃がすか。人間》

「　　ッ!？」

八つに重なった声にバツと振り返る。そこには夕亜……ではなく、夕亜にそっくりの女性が幽鬼のように佇んでいた。

「あ、あいつはなにやってんだよ!？」

日下部朝彦の姿を捜す。彼はどこにも見当たらなかった。代わりに妙な土煙が空洞の隅で巻き上がっている。紘也たちが離脱するまで引きつけてくれるのではなかったのか。

《ああ。憎い。憎いぞ。人間。よくも吾を封じてくれたな。吾はただ人間の雌どもを侍らせ『神聖不可侵の所』を築こうとしていただけというに》

「おい、こいつからもアホ臭がするぞ」

どす黒いオーラを放ち髪が八束に分かれゆらゆらとうねっている。物凄い迫力だったが言っていることは要するにハーレムを作るってことだ。そういえば日本神話でも足名椎命と手名椎命の八人の娘を毎年一人ずつ喰らっていたが、とりあえず女好きのレットルを貼ってもいいと思う。

「儀式の生贄や葛木の術式解放者が女性である理由がこれよ。男性だとありえないほど抵抗されるらしいわ」

香雅里が真面目な顔で警戒しながら解説してくれたけど、やはり内容がくだらない。

《殺してくれる。滅ぼしてくれる。吾に屈辱を与えた人類皆喰らってやる。あ。いや。雌は残しておいてやろう。吾に平伏せ》

「もうこいつ引つ叩いてもいいよな!」

どうしても突っ込まざると得なかった紘也に、ヤマタノオロチは血色の瞳をぎよりと向ける。

《ほう。その雄の魔力は実に美味そうだ。だが人間の雄など吾にとって目の毒以外の何物でもない。吾の視界に入るな愚かな雄よ。吾に食われるか。もしくは消えよ》

「なっ!？」

八重の声が凄みを増した途端、女性の周囲に三つの水球が出現した。玉転がしの玉くらい大きなそれが、予備動作も見せずには紘也へ

と殺到してくる。

ウ口たちが悲鳴を上げる。物凄い球速に避けることはおろか防御の姿勢を取ることでもできなかった。三方から押し潰さんと迫る水の球に、紘也は成す術なく呑み込まれる。互いに衝突し弾けて混ざる水の球。半端ない水圧に紘也の一般庶民的肉体が耐えられるはずがない。

そう、誰もが思っただろう。

《む？ 己はなにをした？》

水が地面へ吸い込まれていく中、紘也は変わらぬ姿でそこに立っていた。否、一瞬前と違う箇所が一つある。それは紘也の体を膜のように覆っている温かい真紅の輝きだった。

「これ、ウエルシユの 守護の炎 か」

だがウエルシユ本人がなにかをした様子はない。なにかできるような暇もなかったはずだ。となると

「このアミュレットか」

紘也はポケットに入れていたウエルシユからの『預かり物』を取り出す。守護の炎 で編まれた六芒星は薄ぼんやりと明滅していた。どうやら目に見える形で御利益があったようだ。

「チツ！ 今回ばかりはあんたに感謝するよ、腐れ火竜」

「当然です。マスターを？ 守護？ するのがウエルシユの役目です」
ウ口の舌打ちが非常に気に食わないがそれどころじゃない。ヤマタノオロチの深淵から湧き出るようなどす黒いオーラが三割増しになっている。

紘也を包む 守護の炎 が消える。

《竜族の加護を得ていたか。腹の立つ雄よ。吾は不愉快だ。次こそ逝ね》

ヤマタノオロチが数も大きさも先程の倍の水球を生成した。その刹那、ヤマタノオロチを囲むように四つの塔が地面から聳え上がる。

《ん？》

「砕ける」

唱えるような声がしたかと思うと、岩でできていると思われる塔が爆音と共に崩壊する。全ての瓦礫が内側にいるヤマタノオロチの頭上へと雪崩込み、白装束の女性の姿を、水球もろとも容赦の欠片もなく押し潰す。

「なんだ貴様、まだいたのか」

紘也たちを氷刃のような視線で睨めつけたのは日下部朝彦だった。

「邪魔だ。早く行け」

「悪い」

無駄話をしている場合でもないのだから、紘也はそれだけ言ってウロとウエルシュに駆け寄る。

「紘也くん紘也くん、是非ともあたしに！」

「マスター、ウエルシュに乗ってください」

「秋幡紘也、私がウエルシュ・ドラゴンに乗るわ」

「ああ。悩む時間もない。それでいい」

「イヤツツホオオウ！！ 腐れ火竜さまあ！ やっぱり最終的に紘也くんはあたしを選ぶんですよ！」

「……くすん」

「いいからさっさと離陸しろ！」

「げふっ……あうう、やっぱり背中に乗るんだね」

ウロの背にサーフィンをするみたいで格好で搭乗する紘也。さめざめと泣きながらウロは巨大な鱗を幾重にも合わせたような翼を羽ばたかせ、宙に浮く。香雅里はというと、ウエルシュにおぶさる形で掴まっていた。流石に紘也と同じ乗り方には抵抗があるのかもしれない。

飛び立つ前に、紘也は朝彦に向けて言う。

「いいか、俺たちは絶対に戻るからな！ 死ぬなよ！」

「フン、余計な御世話だ」

朝彦は振り向きもしなかったが、それでいいと紘也は思う。

「行け、ウロ」

「あいさあ！」

ウロに指示を出し、紘也たちは天井の穴から戦線を離脱した。

S e c t i o n - 2 4 解かれた封印（後書き）

少々緊張感に欠けたかな？

次回の更新は11月6日（日）です。

Section - 25 靈妙な威光

瓦礫が吹き飛ぶ。

ヤマタノオロチは五代目『生贄の姫巫女』の体についた汚れを払うと、血色の双眸をさらに血走らせて日下部朝彦を睥睨する。

《この。愚かしい人間の雄が　！？》

ヤマタノオロチが口を開くや否や、朝彦は動いていた。一鼓動の間に懐に忍び込み、シヨウブの葉に似た刃先を持つ刀　　天叢雲劍　で敵の首を切断せんと斬り込む。

ヤマタノオロチは回避しなかった。首を刎ねられる勢いに押されて仰向けに倒れる。

だが、手応えはない。朝彦は即座に後退し、瞬く間も与えず四本の宝剣を展開、敵を包囲する。

沓薙劍　は土気を纏う。

天叢雲劍　は水気を纏う。

八重垣劍　は火気を纏う。

都牟刈大刀　は風気を纏う。

大地が突き上げ、水流が躍り、業火が唸り、裂風が舞う。

そこにはこの世のものとは思えない光景が繰り広げられていた。

周囲にいる誰もが一歩たりとも近づけない。あの中に飛び込んだら最後、人としての形はもちろん、肉片一つ残ることはないだろう。

しかし

爆風。

絶え間なく暴れていたエレメントが一瞬にして虚無の彼方へと吹き消えた。

佇む白い人影。

ヤマタノオロチを討ち取ったと喜びかけた雰囲気は絶望の火が灯る。あれだけの攻撃を受けてもなんともない敵にパニックする者もいる。

僅かに俯き、前髪で目元に影を落としている白装束の女性。底冷えする負のオーラが全身から滲み出ている。

その背後

一人だけ冷静さを保っていた朝彦が黒コートを翻して現れた。従える四本の宝剣を操り、自分の曾祖母である女性の体を滅多斬りにせんと振るう。

四つの刃が女性の白い肌を捉える　直前、不意に朝彦は真横からの衝撃を受けた。

「チッ」

巨大なハンマーを打ちつけられたような衝撃に、朝彦は砲弾と化して吹っ飛ばされる。壁に叩きつけられると同時に受け身を取ってダメージを軽減し、着地後に鋭い眼光でヤマタノオロチを睨む。

「？霊威？か」

奴の力は『靈妙な威光』『優れて不思議な力』という意味通り、正体が掴めない。しかし念力というのは的を射ていると思われる。朝彦が宝剣を操る術式も『念』を重点にしているため、少なくとも性質が近いことはわかる。

《吾の？霊威？は水気を繰る》

怨念を吐き出すようにヤマタノオロチが唱えた。次の瞬間、奴の周囲に大量の水が出現し、大波となって全方位に押し寄せてきた。

洞窟全体が激しく揺さ振られる。朝彦は　天叢雲剣　で水気を逆に乗っ取り安全圏を確保したが、この場にいる味方全員をカバードきるほどその宝剣の扱いに慣れていない。だから早めに奪っておきたかったのだ。

波が引く。どうやら皆無事のように、朝彦の唇が僅かに斜に歪んだ。

「お兄ちゃん、こっちの心配はしなくていいから！」

夕垂だ。傍に集った三十名の術者とヤタガラスを彼女が結界で守っている。彼らにはまだやってもらうことがある。朝彦は目配せだけで妹に指示を送り、彼女も朝彦の意思を受け取って術者たちを洞

窟の出口へと先導していく。

《ああ。忌々しい。吾から逃げられると思うておるとは》
ヤマタノオロチの暗黒のオーラが激しく揺らめく。

《この体は『人化』より消費が少なく便利だったが。所詮は吾を封じていた憎き器。もうよい。貴様ら皆喰らわねば吾の気が収まらない！ うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おっ！！》

ヤマタノオロチが天に向かって咆哮した。魔力が激しく脈動している。奴がなにをする気なのか朝彦はすぐに看破する。

「まずい！ 急げ夕臣！」

慌てて叫んだ直後、五代目『生贄の姫巫女』の姿が歪んだ。淡い霊光がその全身を包み、次第に強さを増していく。

大気がピリピリと張り詰める。重力が反転したかのように小石が天井へと落ちる。

「奴が本来の姿に戻ろうとしている！ こんな洞窟など押し潰されるぞ！」

この日、八櫛谷を震源とする震度六強の地震が観測された。

S e c t i o n - 2 5 靈妙な威光（後書き）

四章終了です。

次回の更新は11月10日（木）です。

S e c t i o n - 2 6 発動された個種結界（前書き）

第五章

「ははは、すげえ。怪獣映画の中に入った気分だぜ」

思ったことをそのまま口に出して落ち着こうとする孝一。地震は収まったようだが、ヤマタノオロチを生で見たことによる心拍数はなかなか平常時まで低下してくれない。

と、その時だった。

トクン。

孝一の体に、異変が起きた。

「しまった！ 個種結界を張られたわ！」

ウエルシュにおぶさつて空を翔る香雅里が叫んだ。紘也たちの背後には見上げるなんてレベルではない巨大な生命体が存在感たつぷりに八つ首をうねらせている。

いつかはこうなると思っていたが、些か早過ぎる。もう少し待ってくれてもいいものを。日下部朝彦はヤマタノオロチが『生贄の姫巫女』の体に入っているうちに片づける気満々だったが、一体なにをやっているのだ。

「葛木、その？ 霊威？ による妖魔化ってのはどのくらいかかるんだ？」

「人それぞれってところよ。風邪のウイルスと同じで抵抗力が違うの。あなたみたいに魔力が無駄に有り余っているような人間なら、制御できなくても妖魔化まではしないとと思う。けれど、あの二人にそれほどの力はないわ」

「そうか。まあ、あの二人がそう簡単に？ 霊威？ とやらの侵されるとも思えないけどな」

二人の抵抗力を信じるしかない。紘也たちは会話できるギリギリのスピードで飛んでいるが、ここからはもっと速度を上げるべきだ

ろう。といつても、人間なんの装備もなければ時速百五十キロメートルを超える前に呼吸ができなくなるらしい。なんで幻獣には速度メーターがついてないのだ。

「ウロ、ウエルシュ、俺たちが死なない程度に速度を上げ」

《見つけたぞ。人間》

ゾワッとした感覚に背筋が凍りつく。

「ビービービー！ ウロボロスレーダーに敵攻撃反応確認！ 絃也くんしっかり掴まっててよ！」

「うわっ！？」

「きゃっ！？」

突然ウロとウエルシュが戦闘機のように旋回したため絃也と香雅里は短く悲鳴を上げてしまった。香雅里はともかく、絃也はウロの背に起立している状態なのだから仕方ないだろう。上下が反転してよく落下しなかったなと浮遊魔術の安定効果に感心した。

そして、ウロたちがそうする必要があったのだと一瞬後に理解する。

今の今まで飛んでいた空間を、レーザー光線のような水流が引き裂いたのだ。水流はそのまま絃也たちの正面にあった山肌へと吸い込まれ

鼓膜が破れそうなほどの轟音を立てて山岳の半分以上を抉り取った。

「……」

「……」

地形が変わるほどの一撃に、絃也はもちろん香雅里すら言葉を失くしている。

「や、やばいだろなんだよ今の！ あんなのくらったら文字通り即死じゃないか！」

正気づいても絃也は喚くしかなかった。

「だから言ったのよ！ あの妖魔は復活させちゃダメだって！」

「そ、それでも日下部をみすみす生贄になんてできるわけないだろ！」

「あいつに皆殺しにされたら結局意味ないわよ！ 今だって夕亜たちが生きてるかどうかもわからないし」

「くっ」

既に紘也もヤマタノオロチに勝てるなんて幻想じゃないかと思いはじめている。このまま孝一と愛沙の下へ辿りついたとしても、あの水流砲で狙い撃ちされたら逃げようがない。

「……マスター、ここはウエルシュが敵を引きつけておきます」

意を決したように、ウエルシュが提言した。

「いや、お前、大丈夫なのか？」

訊くと、ウエルシュはコクリと力強く首肯した。確かに彼女の？ 拒絶？と？ 守護？のチート性能ならなんとかしてくれるかもしれないが、世の中万能なものなんてないことを紘也は知っている。誰かが奴の相手をしなければならぬのなら

「ウロ、お前もウエルシュと行ってくれないか」

戦力は多い方がいいに決まっている。

「紘也くん！？ あたしに腐れ火竜と共闘しろって言うんですか！？」

「そうだ。できるだろ？ お前らなんだかんだで気が合ってるみたいだし」

「じよ、冗談じゃあないですよ！ そんなことするくらいならスライムの海で百六十八時間耐久水泳大会に参加した方がマシだね！」

「なんだその無意味そうな大会？」

「腐れ火竜、あんたも嫌でしょうが！」

「ウエルシュもウロボロスと共闘なんて嫌です。ですがマスターの命令なら我慢できます」

「どうやら、ウエルシュの方が大人だな」

「ウエルシュ、大人です。えへへ」

「ぐぬぬ……ええい！ わかった！ わかりやした！ やりやあいんでしょやりやあ！ その代わり紘也くん、全部終わったらあなたのお願いを一つ聞いてもらうよ！」

「……ずるいです、ウロボロス。ウエルシュもお願い聞いてほしいです」

話している間にもヤマタノオロチがそれぞれの口から時間差で例の水流砲を放ってくる。合計八発。ウロとウエルシュは巧みに回避してくれているが、そうする度に眼前の景色が大変悲惨な状態になっていく。この幻獣たちの『お願い』がまともであるとは到底思えないが、渋っている場合でもない。

「ああ、わかったよ！ 無茶振りでなければなんだってしてやるよ！」

「いよっしゃ言質取ったああつ！ 紘也くん紘也くん、約束破ったらペルルダ千匹飲ませるからね！」

そんな背中に毒針が並ぶ蛇頭蛇尾の四足獣を一匹でも飲んだ日にはどんな奇跡が起きようと跳ね除けて死ぬる。

「そういうことになった。葛木、いいか？」

「お、オーケーよ。私としては、早く地面に足をつきたいから……」
心なしか香雅里はぐったりしていた。顔色も非常によくない。度重なるアクロバット飛行のせいで乗り物酔いならぬウエルシュ酔いを起こしたのかもしれない。

ヤマタノオロチが次の攻撃を溜めている隙に紘也たちは地上に降りる。ここからなら走っても八櫛亭は目と鼻の先だ。

ウロとウエルシュが再び飛び立つのを見送り、紘也と香雅里は道なき道を駆け下りる。

S e c t i o n - 2 6 発動された個種結界（後書き）

次回の更新は11月13日（日）です。

孝一の様子がおかしいことに愛沙は気づいた。

「こ、コウくんどうしたの？ 大丈夫？」

掌で顔を覆うようにして両膝をつく孝一に愛沙は駆け寄ろうとするが、

「来るなああつ！！」

「ひう！？」

えも言わぬ怒号にビクリと愛沙の肩が震えた。彼はどう見ても普通ではない。頭痛を堪えるように呻き、まるで見えないなにかと戦っているみたいだ。

上空を通過するヤマタノオロチの水流砲が現在進行形で八櫛谷の地形を変えているのだが、谷の窪みにある駐車場からでは破壊の爪跡を眺めることはできない。というか、愛沙はそれどころではなかった。どうしていいかわからずオロオロする。

「えっと、えっと……そ、そうだ。お薬持つてくるよう」

八櫛亭に戻ろうとする愛沙だったが、異変が起きているのは孝一だけではないと知る。

蛇がいた。

猪がいた。

野犬がいた。

愛沙たちのいる駐車場を多種雑多な動物たちが取り囲んでいた。ただし、どれもこれも愛沙が知っているような姿形はしていない。蛇なら一つの体に三つの頭があったり、猪ならマンモスみたいに反り上がった太い牙を生やしていたり、野犬なら頭部から鋭く長い一角が突き出ていたり、全てがモンスター然とした姿だった。怪物たちは一様に赤い目をして獲物を狙うハンターのごとく愛沙を見詰めている。

「ふえ？ こ、これみんな幻獣……さん？」

中には普通の動物もいた。しかし、愛沙が一つ瞬きする間にその動物も怪物へと変異してしまう。

「幻獣さんに……なった？」

そうとしか考えられなかった。一体この八櫛谷になにが起こっているのか。全てはあのヤマタノオロチらしき怪物が現れてからこうなった。

そして、最初の異変。

「もしかして、コウくんも？」

彼の苦しみは怪物になる予兆なのではないか。人間も怪物に変わってしまうのではないか。そんな不安を愛沙は覚えた。

逃げないと……。

そうは思っても、怪物に囲まれている恐怖に足が竦んで言うことを聞いてくれない。それに孝一を置いて一人逃げるなんて愛沙にはできなかった。

がるるる！

「ッ!？」

ウサギのように怯える愛沙に、ついに野犬の怪物が痺れを切らして襲いかかってきた。

「ひ、ヒロくん、ウロちゃん」

今どこにいるかもわからない友達に助けを願う。しかしそれは叶わず野犬の怪物は愛沙へと飛びかかる。

もうダメだと目を閉じたその時

きやうん！ と犬らしい悲鳴が聞こえた。

恐る恐る愛沙は目を開ける。そこには、日本刀を構えた黒服の男が二人、愛沙を庇うように立っていた。

確か、愛沙たちがつい先程まで看病していた葛木家の陰陽師の二人である。

「あれ？ え？」

困惑する愛沙に、術者の二人が言う。

「もう大丈夫だ、お嬢ちゃん」

「負傷しているとはいえ、我々は葛木の陰陽剣士。この程度の雑魚妖魔に遅れは取らんよ」

「しかしなんだこの状況は？ まさか儀式が失敗したのか？」

「そうとしか思えんだろ。それと考えるのはこいつらを蹴散らしてからだ」

二人は頷き合うと、堰を切ったように雪崩れ込んでくる怪物たちをとて怪我をしているとは思えない動きで斬り倒していく。

だが、ある程度まで数を減らした時には二人とも体力の限界に近づいていた。

「はあ、はあ、やはり、これは奴の？ 霊威？ か？」

「そうだろうな。お嬢ちゃんはどどういうわけか無事のようにだが、向こうの少年は？ 霊威？ の侵食が始まっている」

二人は今もなお蹲っている孝一を見た。

「あ、あの、コウくんを、コウくんを助けてください！」

愛沙は涙目で縋るように片方の黒服を掴んだ。二人は困ったような表情になり、

「そうしたいところだが、今の我々ではどうしようもないんだ」

「香雅里様か夕亜様なら？ 霊威？ を跳ね返すほどの結界を張れるだぐはっ！？」

愛沙が掴んでいない方の男が、言葉を言い終わる前に突然吹き飛んだ。アスファルトの上を盛大に転がった彼は、駐車場の隅にある木製の柵にぶつかり、動かなくなる。

「コウくん！？」

「お嬢ちゃんは離れているんだ！」

彼を蹴り飛ばしたのはさっきまで苦しそうに呻いていた諫早孝一だった。孝一は姿こそ人間のままだが、その目が怪物たちと同様に赤く染まっている。

「はあっ！！」

残った方の葛木の術者が容赦なく刃を向けて孝一を斬りつける。しかし、それは空振りに終わった。孝一の姿が消えている。彼は愛

沙の目では追い切れない速度でかわしたのだ。

「がはっ!？」

男の背後に回り込んだ孝一は、肘鉄で男の後頭部を強打した。糸が切れたように倒れた葛木の術者をさらに蹴り飛ばし、孝一はその赤眼を愛沙に向ける。

「あ、あ、コウ、くん？」

一歩一歩近づいてくる孝一に愛沙は後ずさる。すぐに木製の柵へと追い込まれてしまった。後ろは急な崖で逃げ場はない。

孝一の手が愛沙に伸びる。
と。

「!？」

危険を察知したかのように孝一が獣じみた動きで大きく跳び退った。入れ替わりに二つの人影が愛沙の前に立つ。それは

「ヒロくん！ カガリちゃん！」

愛沙は希望に満ち満ちた表情で二人の名を呼んだ。

S e c t i o n - 2 7 妖魔化（後書き）

次回の更新は11月17日（木）です。

地球を悪戯に破壊する水流砲の乱射はピタリと止まっていた。

水流砲の機動砲台たる八つ頭の巨蛇に、二人の有翼の少女が相對したからだ。片や緩く波打つペールブルンドの長髪を、片や二又の紅いツインテールを風に靡かせ豪然と構えている。

身食らう蛇とウエルズの赤き竜である。

《どこぞの竜族の雌どもが。何故に陰陽師の味方をする？》

ヤマタノオロチの八つの口が同時に声を発した。

「おやおや？ あんたは色魔じゃあなかつたっけ？ こんな可憐な美少女が目の前にいるってのに欲情しないんですか？」

無駄にセクシーなポーズを取るウロボロスを、ヤマタノオロチは鼻で笑った。

《吾が愛でるは可愛げある人間の雌よ。人の形を成しているだけの爬虫類になど興味はない》

「あんだだって爬虫類じゃあないですかっ！」

「はい、どう見ても蛇です」

《……》

「……」

「……」

《ともかく。陰陽師に味方するようならば容赦はせん。消えよ》

「都合が悪くなったからって強引に戦闘シーンに突入しようとしたよね今！？」

《五月蠅い》

ヤマタノオロチが八の鎌首をもたげた。それぞれの口が開き、水のエネルギーがそこへ集束していく。あの水流砲を撃つ気だ。

「ハン！ そんなことこのウロボロスさんがさせるとでも思ってますか？」

「阻止します」

ウロボロスが光り輝く魔力弾で左側の四つ頭を、ウエルシュが拒絶の炎 による火炎弾で右側の四つ頭をほとんど同時に撃ち抜いた。八つの爆発が起こり、ヤマタノオロチの全ての頭が爆煙に包まれる。

これで頭が消し飛んでくれればよいのだが、その程度の幻獣だったら封印なんてされない。とつくの昔に消滅しているだろう。

次々に爆煙を霧散させて水流砲が飛んでくる。

「むっ!？」

「ウエルシュの？拒絶？が効いていません」

即座に緊急回避。両者ともヤマタノオロチよりも高い位置を飛んでいたことが幸いして、かわした水流砲は青空の彼方へと消えていく。

ウロボロスとウエルシュは回避しながら魔力弾や火炎弾をぶち込んでいるが、的が大きいだけ当たりはすれどやはり効いてはいない。《吾の？霊威？は水気を繰る。水気は至高の槍と成りて蒼穹を衝かん》

健全だったヤマタノオロチの頭部が詠唱を重ねる。次の瞬間、幾本もの水柱が噴き上がった。それらは水竜のごとくうねり、飛翔するウロボロスとウエルシュを狙う。両者は慌てることなく飛燕のように華麗に宙を舞い、水柱のごとくをかわしていく。

《鬱陶しい》

苛立たしげにヤマタノオロチが声を重ねる。

「そんな下手糞な攻撃、腐れ火竜には当たっても俊敏なウロボロスさんには当たりませんよ！」

あかんべいでヤマタノオロチを挑発し魔力弾を叩き込むウロボロスに、ムツとした顔のウエルシュが近寄ってくる。

「ウエルシュも当たってません。あとウエルシュは腐ってません」

「あんたの台詞そればかりだね。流行らせたいんですか？ おつと」

ヤマタノオロチが水柱に加えて水流砲も放ってきたため、二人は

左右に旋回してそれをやり過ぎす。

《全く小賢しい。己らはアレか？ 蠅か？》

「誰が蠅だコラアツ！！ あたしはドラゴンだよ！！ くらえ、飛剣 ウロボロカリバー！！！」

激昂と同時に取り出した 竜鱗の剣 もとい ウロボロカリバー を大半円に振るう。凄まじい勢いで伸長する剣身が生き物のように奔り、ヤマタノオロチの巨体を様々な角度から斬りつける。

「ウエルシュも蠅ではありません。 リジェクトエッジ 拒絶の炎剣」

ウエルシュは右手に 拒絶の炎 による超大剣を生み出し、それを槍投げの要領でヤマタノオロチに投擲する。

「 って待てコラ腐れ火竜！ あんたそんな技名叫ぶキャラじゃあないでしょうが！ あたしのマネしてんじゃあないですよ！」

「む。これはウエルシュがずっと考えていたことだからいいのです。それにしても技名にはずいぶんと悩みました。電子辞書とはすっかり友達です」

「中学生かあんたはっ！」

電子辞書片手に延々と格好よさげな名前を書き連ねている姿がありありと浮かんできた。

《吾を前にしてお遊びとはな。だが。己らの攻撃など吾には届いてないぞ》

ダン！ と不可視の力がウロボロスとウエルシュを殴打した。砲弾の勢いで錐揉み状に吹っ飛んだ両者は、竜翼の膂力を全開になんとかホバリングする。

しかしその直後、足下から激しい水柱が天を串刺しにせんと立ち昇った。今度ばかりは回避する余裕もなく、二人は敢えなく激流の中に呑み込まれてしまった。

《吾の？ 霊威？ は水気を凍てつかせる》

八重の詠唱が轟いた時、二人を呑み込んだ水柱が刹那の内に凍りついた。太陽光を浴びて煌めく氷の塔を、さらに無数の水球が砕き割る。

壮烈な破砕音。

降り注ぐ氷塊に混ざり、竜翼の少女たちが力なく谷底へと落ちていく。

《さて。邪魔者は消した。これで存分に憎き人間どもを狩れるん？》

なにかに気づいたように静止したヤマタノオロチは、八つの顔で自らの体を見回す。そして見つけた。八尾の先端から僅かずつ光の粒子となって消えつつある。

マナの乖離である。

《ふん。目覚めたばかりで暴れ過ぎたか。些か魔力を消耗し過ぎてしまったようだ。補給しなくてはな。幸いここにはアレがある》

ヤマタノオロチの人間狩りは後回しとなった。

S e c t i o n - 2 8 巨大な靈威ある者 (後書き)

次回の更新は11月20日(日)です。

「あれれ？　なんかヤマタノオロチが動かなくなっちゃった」

徐々に南下していた八つ頭の大蛇がどういうわけかその場に鎮座を決め込んだ。

それを、朝彦たち日下部家の術者は見渡しのよい丘の上で眺めていた。洞窟の崩壊で生き埋めになったかと思われた彼らだったが、沓薙剣の土気を操る力と夕亜の結界で身を守りつつここまで辿りついたのだ。

「フン、止まってくれるのならば好都合だ。こちらは滞りなく準備を進められる」

円運動する宝剣の中心にいる朝彦は、冷め切った瞳で絶えず敵を観察している。だが、この丘へわざわざ赴いたのは眺めがいいからという理由だけではない。

「朝彦様、空間跳躍術式の起動が全て完了しました」

分家の青年が報告に来る。そうか、と朝彦はようやくヤマタノオロチから目を離し、皆の方を向く。約三十名の日下部家の術者が整列しており、彼らの向こうにはストーンヘンジに似たサークルが三つ、青白い輝きを持ってその存在感を放っている。

「班分けは打ち合わせ通りだ。俺が用意した空間跳躍術式を用いて各ポイントに移動しろ。ただし間違えるな。その術式は 縮地 を真似て俺が編み出した劣化品。一方通行だ」

了解です！　と一同が応答し、四班に分かれた内の三班がそれぞれのサークル内へ入って消える。この場には朝彦と夕亜とヤタガラス、それと八櫛亭の女将を含んだ三人の術者だけが残った。

劣化版とはいえ空間跳躍術式なんてものを編める朝彦は、連盟の大魔術師にも引けを取らない術者である。そんな朝彦は、彼の妖魔が『生贄の姫巫女』という器に入っている内に倒すつもりなど端かたならなかった。というより、四本の宝剣を得たくらいで滅ぼせるなど

思ってもいない。

だからこそ、朝彦は長い時間をかけてヤマタノオロチを屠るための準備を整えてきた。

「奴を滅ぼすには？ 霊威？ を剥ぎ取る『酒』と、その巨体を貫く『剣』が必要だ」

そのための術式は既にこの八櫛谷という地に組み込んである。地脈のツボを突くように四つの点として展開している。あとは彼の妖魔が一定の位置に来た時、日下部家の術者たちがそれを同時起動させるだけだ。

朝彦は右手を軽く挙げる。すると周囲を公転している四本の宝剣の内、 都牟刈大刀 八重垣剣 沓薙剣 の三本が三方向に切っ先を向けて高く高く上昇する。

「 行け」

朝彦の呟きに呼応し、三本の宝剣は光に包まれると流星のように何処へと飛んで行った。

手元にある 天叢雲剣 を見詰め、朝彦は思う。

「術式の起動鍵として最も適していた剣が、全てヤマタノオロチから出てきた物だとはな。皮肉もいいところだ」

今のところ全て順調に進んでいる。ただ一つ心配なことは、不確定要素が存在することだ。だからそちらの動きも掌握しておかなければならない。

「ウロちゃんとウエルシュちゃん、落っこちちゃったけど大丈夫かしら？」

朝彦は未だ動きを見せないヤマタノオロチを不安げな顔で眺めている妹に言う。

「夕亜、お前は秋幡辰久の息子の下へ行け。奴らに一つやってもらうことがある。本来なら俺が死ぬ覚悟でやろうとしていたことだが、奴らなら俺よりうまくやれるはずだ」

夕亜はしばし逡巡した後、日下部家宗主としての顔で頷いた。

S e c t i o n - 2 9 作戦始動（後書き）

今回は短いので、次回の更新は本日のお昼頃にします。

紘也たちが駆けつけた時、孝一はもはや孝一ではなかった。

ヤマタノオロチと同じ血色に変色した双眸がそれを物語っている。霊威？にあてられ妖魔化した他の動物たちと同様に、無差別に人を襲うだけの存在となってしまうのだ。

そこに黒服を着た葛木の術者二人が転がっている。遠目にだが彼らが孝一に倒されたところを紘也は見ている。転がっていると云えば、そこら中に異形の死骸が点々としている。妖魔（＝幻獣）になったとはいえ元はこちらの世界の生物だから、死んだとしてもマナの乖離は起こらないのだろう。

「結界を張ったわ。これで他の妖魔は入って来られないし、彼もこれ以上妖魔化が進むことはないはずよ」

「そうか。くそつ、俺たちがもう少し早く到着していれば」

結界を張れば孝一が正気に戻るという都合のいい展開を紘也は期待していたが、やはりそんなことはないらしい。孝一の目は赤いままだし、獣のように紘也たちを威嚇している。

「言つとくけど、私の結界はそんなに長くは持たないわよ。持って三十分が限界。それまでに諫早孝一の処分を決めてもらっわ」

「処分、だと？」

香雅里の言葉がこの上なく冷酷に聞こえた。

「俺に孝一を殺す決断をしろつて言うのか？ ふざけんな。俺は絶対に孝一を助けるぞ！」

紘也が明言したところで、香雅里はフツと微笑んだ。

「そう、それでいいわ。見て、諫早孝一はまだ変異していない。ということ彼は今も戦っているのよ。意識はまだ生きている。彼を蝕む？霊威？を排除できればきつと助かるわ」

「どうやって？」

「それはわからないけど、気絶させるのがいいと思う。意識がなけ

れば生物としての対象から外れるかもしれないし」

方法が不安定過ぎる。しかし、それ以外に思いつくこともない。一瞬ウエルシュのアミュレットを押しつければいいのではと考えたが、すぐに廃案になった。あのお守りは契約者にしか効果がない。「わかった。その方向でいこう」

紘也と香雅里は頷き合うつと、正面でこちらを威嚇している孝一に目を向ける。

そこに孝一はいなかった。

「嘘、さっきまでそこに」

「カガリちゃん、後ろ!？」

愛沙の悲鳴に香雅里が反射的に振り向いた瞬間、孝一の掌底が彼女の顎を下から思いつ切り突き上げた。弓反りになって宙を舞った香雅里は、アスファルトの地面にしたたか体を打ちつけてピクピクと痙攣し始める。

紘也が事態を把握するのに数瞬のタイムラグが発生した。

「葛木!？」

彼女に駆け寄ろうとした紘也の前に孝一が瞬時に回り込む。速いっつものじゃない。神話級の術者となった日下部朝彦ほどではないが、一般人としての常識を遥かに逸脱している。

たじろいだ紘也は駆け寄る足を止める。と、その鼻先を孝一の回し蹴りが掠った。紘也はゾツとする。蹴りのモーションがまるで見えなかった。

それでも紘也は果敢にも孝一に掴みかかろうとするが、風のようなバックステップでかわされ触れることもできなかった。

「な、なんなんだ孝一のこの動きは!？」

明らかに尋常ではない。

「よ、妖魔化で、彼の身体能力が底上げされているのよ。たぶん」意識を取り戻した香雅里が起き上がる。彼女は術式で肉体強化を

しているはずなのに、それでも孝一の一撃で昏倒させられていた。妖魔化により人外の強さを得たとして、一体どれだけ身体能力が上がっているのだ。

それに、他の動物たちはさほど強くなっているとは思えない。人間だから特別なのだろうか？ よく人の力の多くは脳によりセーブされていると聞くが

？霊威？がそのリミッターを解除したってことだろうか？

だがなんにしても、このままでは気絶させる云々よりも先にこちらがやられてしまう。

「甘く見ていたわ。どうやらこちらも本気で臨まないといけないみたいね」

香雅里が 天之秘剣・冰迦理 を取り出す。アレで孝一を斬殺するなんてことにはならないと思うが、最悪の場合、香雅里はそれを決断するかもしれない。

香雅里が凶器を握ったことで、孝一は半歩分左足を引いた。青白い反射光を放つ凶刃に動物的本能が畏怖したのかと思いきや、違っ。おもむろに孝一は上着の胸ポケットに指を突っ込んだ。そしてなにかを掴まんで引き抜き、戦闘態勢を取る。彼が握っている物、それは折り畳み式のサバイバルナイフだった。

そのナイフを、孝一は投げた。ナイフは全くぶれることなく空気を引き裂き、香雅里の眉間へと正確に吸い込まれていく。紘也は孝一がダーツで一度も最高得点を外したことがないのを思い出した。

香雅里は 冰迦理 の刃を返してナイフを弾く。だがその一瞬で孝一は移動していた。彼は常識外の跳躍を見せ、弾かれたナイフを空中でキャッチする。

「なっ！？ なんて動きするのよ！？」

驚愕する香雅里に、孝一は着地と同時に足をバネにして飛びかかった。

ガキン！ ナイフと 冰迦理 が打ち合い甲高い金属音が響動する。

しかし競り合いにはならなかった。ただのナイフは衝撃に耐えきれず根元から折損し、文字通り人間離れた孝一の重い一撃に香雅里の得物を持つ腕は大きく開けてしまう。

そこに隙が生じた。否、孝一が隙を作らせた。

「あうっ!？」

孝一の左手が香雅里の首を鷲掴みにした。香雅里の足が地面から僅かに離れる。孝一の指は骨まで食い込まんよと彼女の首を圧迫し続けている。

「あ……が……」

絞り出すような苦痛の悲鳴。やがて彼女の腕がだらりと弛緩し、握っていた 氷迦理 を地面に落してしまう。孝一は獣のような表情のまま、そうすることが当然というように香雅里を絞め続けている。

このままでは、やばい。

「コウくんやめて!! カガリちゃんが死んじゃう!!」

「やめる孝一!!」

紘也は香雅里から孝一を引き離そうと掴みかかったが、腕の一振りでも振り払われてしまう。孝一の物凄い腕力とアスファルトで打ちつけた痛みが体中を駆け巡る。

どうすればいいんだ!

香雅里はまた意識を失ってしまったのか、今まで漏れ聞こえていた悲鳴が途絶えている。

なにか、なにかないのか!

なにもないことがわかり切っているにも関わらず紘也は自分の体を弄る。孝一を気絶させられるようなものでなくても構わない。とにかく孝一の注意をこちらに向けられるなにかが欲しい。

と、ズボンのポケットの中。

これは……。もしかしたらいけるかもしれない。

紘也は決意の光を瞳に宿し、もう一度孝一の下へ走る。

孝一がこちらに気づき、香雅里を掴んでいない方の腕を振り翳す。

紘也は足を止めるどころか、さらに加速する。

「孝一——！」

叫ぶ。

「コウくん——！」

愛沙も必死に友の名を呼ぶ。

その時、孝一の表情が微かに変化した。歯を剥き出した口を閉じ、吊り上がっていた眉根が僅かに下りる。その表情は獣ではなく、人のそれ。

振り被られていた腕がなにかに抵抗されるように小刻みに震えている。香雅里も言っていた。孝一の意識はまだ生きている。まだ完全に妖魔化していないと。紘也たちの声が届いた、そう信じたい。

紘也は動きの鈍った孝一に思いつ切りタツクルをかます。堪らず孝一は香雅里を放し、紘也と絡み合うように地面を転がった。

回転が止まった時、紘也は孝一に馬乗りになっていた。

「ひ、紘……也……」

孝一の口が小さく開いたのを紘也は見逃さなかった。そこから紡がれた擦れそうな言葉を聞き逃さなかった。

「……逃げ……る……オレは……お前……殺して……まう……」

「馬鹿を言うな。孝一らしくない。俺は絶対に逃げないぞ。俺は絶対にお前を」

言いながら、紘也は右手に差し出す。そこに握っていた物を、孝一へと押しつける。

「助けないと気が済まない！」

それは、わさびのチューブだった。

『身につけるだけで悪霊退散、ウロボロス印の浄化結界を術式で込めたタリスマンです』

もはや賭けである。あれがその場限りのネタでなければ、『浄化結界』はきつと意味を成す。この時ばかりは、紘也はウロを神様よ

りも信じることにした。

そして、どうやらそれは功を奏したようだ。

チューブが孝一の体に触れた途端、彼の体がビクンと跳ねた。紘也は振り落とされそうになるのを必死に踏ん張り、依然としてチューブを押しあて続けた。

S e c t i o n - 3 0 靈威の支配（後書き）

次回の更新は11月24日（木）です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7279u/>

天井裏のウロボロス

2011年11月20日16時12分発行